

蔣山万寿寺跡

旧万寿寺跡第6～10次調査

(第1分冊)

都市計画道路庄の原佐野線（元町工区）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2019

大分県立埋蔵文化財センター

序 文

本書は、大分県教育委員会が大分県土木建築部の依頼を受けて実施した都市計画道路庄の原佐野線建設に伴う蔣山万寿寺跡の発掘調査報告書です。

「蔣山万寿寺」は、徳治元年（1306）に豊後国守護大友貞親が筑前国博多の承天寺住持であった直翁智侃を開山に招いて建立した禅宗寺院です。万寿寺は中世の豊後府内で最大規模の敷地を有し、室町時代には十刹に列せられるような、西日本を代表する禅宗寺院のひとつでした。

調査地は国指定史跡「大友氏遺跡」を構成する旧万寿寺跡の境内に該当します。発掘調査の結果、寺院の主要伽藍となるような大規模な建物跡や基壇などは確認できませんでしたが、寺城内の区画に関連する溝や柱穴列などの遺構が発見されました。さらに、大量の瓦や「万寿寺」・「蔣山」・「寮」の刻書土器、「蔣山観音殿」の墨書土器などの出土は、発掘調査地点に大規模な中世寺院が存在したことを考古学的に証明する資料となっています。

また、調査で確認された溝や柱穴列など、寺院の構造に関連する重要な遺構については、道路工法を変更することにより、現地に保存することができました。

本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発の一助として活用されれば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大な御支援と御協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

平成31年3月29日

大分県立埋蔵文化財センター

所 長 江 田 豊

例 言

1. 本書は平成23～27年度に実施した大分県大分市大字大分に所在する蒋山万寿寺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は都市計画道路路住の原佐野線（元町工区）建設に伴い、大分県土木建築部大分駅周辺総合整備事務所及び大分土木事務所の依頼を受けて大分県教育庁埋蔵文化財センターが実施した。
3. 周知の埋蔵文化財包蔵地としての名称は「蒋山万寿寺跡」であるが、調査区の呼称及び調査次数の整合を図るため、大分市教育委員会が使用する「旧万寿寺跡」を採用し、平成23年度調査を第6次調査として開始した。発掘調査期間及び調査担当者は以下のとおりである。
 - ・旧万寿寺跡第6次調査 平成23年6月12日～平成24年1月12日（横澤 慈・吉田 寛）
 - ・旧万寿寺跡第7次調査 平成25年6月3日～平成26年1月10日（吉田 寛）
 - ・旧万寿寺跡第8・9次調査 平成26年5月12日～平成27年2月9日（吉田 寛・宮内克己）
 - ・旧万寿寺跡第10次調査 平成27年6月10日～平成28年3月2日（吉田 寛・宮内克己・坂本嘉弘）
4. 発掘調査の実施にあたり、発掘作業及び記録作成、現場管理等を支援業務として民間調査組織に委託した。発掘調査における実測図の作成及び写真撮影は上記調査員の指示のもと下記の支援業務受託者が行った。
 - ・旧万寿寺跡第6次調査 株式会社九州文化財研究所（越知睦和・稲富陽子・尾ノ上尚平・小田貴志）
 - ・旧万寿寺跡第7～10次調査 株式会社木崎工業（奥村義貴・羽田野裕之・石川哲也・宮吉正明・岩尾美保子・斎藤正彰・柴田 剛・倉増美智代・後藤 恵）
5. 出土品の洗浄、注記、接合、実測、遺物写真撮影、トレース等の整理作業は平成26～29年度に株式会社九州文化財総合研究所に委託した。また、重要資料の写真撮影を平成30年度に写真エンジニアリング株式会社大分営業所に委託した。遺構・遺物図版の作成は各調査担当者が行った。
6. 出土遺物及び調査記録は大分県立埋蔵文化財センター（大分市牧緑町1番61号）で保管している。
7. 本書で使用する方位は座標北で、座標値は日本測地系の数値である。
8. 本書で使用する遺構略号は下記のとおりである。

SB（礎石建物・孤立柱建物）、SK（土坑）、SD（溝）、SE（井戸）、ST（墓）、SP（柱穴）、SA（欄列）、SX（遺物集中ブロック及び性格不明遺構）
9. 本書で使用する中世遺構の時期区分は下記文献に準拠し、以下のとおりとする。

I期（14世紀前半）／II期（14世紀中頃～末）／III期（14世紀末～15世紀前半）／IV期（15世紀中頃～後半）／V期（16世紀前半）／VI期（16世紀後半）／VII期（16世紀末葉）

参考文献：大友館研究会編2017『大友館と府内の研究—「大友家年中作法日記」を読む』、東京堂出版
9. 本書の執筆は第1章・第3章を横澤、第4章・第5章・第7章を吉田、第6章を宮内、第9章を吉田・横澤が行った。第2章は坂本の原稿を基に横澤が補筆修正を行った。また、第8章は稗田優生氏（大分県立歴史博物館）に執筆を依頼した。編集は吉田・横澤が行った。

目 次

(第1分冊)

序文 例言 目次

第1章 調査に至る経緯と経過 (横澤慈)	1
第1節 調査に至る経緯	
第2節 旧万寿寺跡推定域の変更の経緯	
第3節 発掘調査・報告書作成の経過	
第4節 調査組織の構成	
第2章 遺跡の立地と環境 (坂本嘉弘・横澤慈)	13
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第3章 旧万寿寺跡第6次調査 (横澤慈)	15
第1節 調査の経過と概要	
第2節 調査区の遺構と層序	
第3節 近世以降の遺構と遺物	
第4節 中世面上層の遺構	
第5節 中世面下層の遺構	
第4章 旧万寿寺跡第7次調査 (吉田寛)	389
第1節 調査の概要	
第2節 遺構と遺物	

(第2分冊)

第5章 旧万寿寺跡第8次調査 (吉田寛)

- 第1節 調査の概要
- 第2節 遺構と遺物

第6章 旧万寿寺跡第9次調査 (宮内克己)

- 第1節 調査の概要
- 第2節 遺構と遺物

第7章 旧万寿寺跡第10次調査 (吉田寛)

- 第1節 調査の概要
- 第2節 遺構と遺物

第8章 理化学分析・保存処理

- 第1節 旧万寿寺跡第7次調査出土一括出土銭の保存処理 (稗田優生)

第9章 総括 (吉田寛・横澤慈)

遺物一覧表

(第3分冊)

- 写真図版
- 報告書抄録

挿図目次

第 1 - 1 図	庄の所在区域と大分市幹線道路網	1	第 3 - 55 図	06SK141 出土遺物実測図 (1/3)	52
第 1 - 2 図	四指定史跡大友氏遺跡と庄の居住区域の位置	2	第 3 - 56 図	06SK145 実測図 (1/30)	52
第 1 - 3 図	旧万寿寺跡第 6 - 10 次調査区位置 (S-1/2,500)	3	第 3 - 57 図	06SK173 実測図 (1/30)	52
第 1 - 4 図	旧万寿寺跡発掘調査状況	5	第 3 - 58 図	06SK179 出土遺物実測図 (1/3・1/1)	53
第 2 - 1 図	青山万寿寺跡・中比大友町内所跡と周辺の遺跡	14	第 3 - 59 図	06SK186 実測図 (1/30)	54
第 3 - 1 図	旧万寿寺跡第 6 次調査区位置 (1/15,000)	15	第 3 - 60 図	06SK198 出土遺物実測図 (1/3)	54
第 3 - 2 図	旧万寿寺跡第 6 次調査区土層断面図 (1/250)	16	第 3 - 61 図	06SK199 実測図 (1/30)	54
第 3 - 3 図	旧万寿寺跡第 6 次調査区土層断面図 (1/250)	18	第 3 - 62 図	06SK199 出土遺物実測図 (1/3)	55
第 3 - 4 図	旧万寿寺跡第 6 次調査区遺構配置図 (1/層 1/250)	19	第 3 - 63 図	06SK200 実測図 (1/40)	55
第 3 - 5 図	旧万寿寺跡第 6 次調査区遺構配置図 (下層 1/250)	20	第 3 - 64 図	06SK200 出土遺物実測図 (1/3)	55
第 3 - 6 図	旧万寿寺跡第 6 次調査区土層断面図 (1 区南壁 1/50)	25	第 3 - 65 図	06SK202 実測図 (1/60)	56
第 3 - 7 図	旧万寿寺跡第 6 次調査区土層断面図 (1 区東壁 1/50)	26	第 3 - 66 図	06SK202 出土遺物実測図 (1/3)	56
第 3 - 8 図	旧万寿寺跡第 6 次調査区土層断面図 (2 区北壁 1/50)	27	第 3 - 67 図	06SK208 実測図 (1/40)	57
第 3 - 9 図	旧万寿寺跡第 6 次調査区土層断面図 (2 区東壁 1/50)	28	第 3 - 68 図	06SK208 出土遺物実測図① (1/3・1/1)	57
第 3 - 10 図	06SK194 (復元) 出土遺物実測図 (1/3)	29	第 3 - 69 図	06SK208 出土遺物実測図② (1/3)	58
第 3 - 11 図	06SD001 - 030 遺構作跡群実測図 (1/100)	29	第 3 - 70 図	06SK209 実測図 (1/40)	59
第 3 - 12 図	06SD012 - 024 実測図 (1/100)	30	第 3 - 71 図	06SK209 出土遺物実測図① (1/3・1/1)	60
第 3 - 13 図	06SD014 出土遺物実測図 (1/1)	30	第 3 - 72 図	06SK209 出土遺物実測図② (1/4)	61
第 3 - 14 図	06SX021 実測図 (1/30)	31	第 3 - 73 図	06SK217 実測図 (1/30)	62
第 3 - 15 図	06SX021 出土遺物実測図 (1/3)	31	第 3 - 74 図	06SK217 出土遺物実測図 (1/3)	62
第 3 - 16 図	06SX025 実測図 (1/30)	31	第 3 - 75 図	06SK219 実測図 (1/30)	62
第 3 - 17 図	06SX025 出土遺物実測図 (1/3)	32	第 3 - 76 図	06SK219 出土遺物実測図 (1/3)	62
第 3 - 18 図	06SX026 実測図 (1/30)	33	第 3 - 77 図	06SK220・260 実測図 (1/30)	63
第 3 - 19 図	06SX026 出土遺物実測図 (1/3)	34	第 3 - 78 図	06SK220 出土遺物実測図 (1/3)	64
第 3 - 20 図	06SB01 実測図 (1/30)	35	第 3 - 79 図	06SK260 出土遺物実測図 (1/3)	64
第 3 - 21 図	06SX037・SX092 実測図 (1/40)	36	第 3 - 80 図	06SK226 実測図 (1/30)	65
第 3 - 22 図	06SX092 出土遺物実測図 (1/3)	36	第 3 - 81 図	06SK226 出土遺物実測図 (1/3・1/1)	66
第 3 - 23 図	06SK029 実測図 (1/30)	36	第 3 - 82 図	06SK228 実測図 (1/30)	67
第 3 - 24 図	06SK029 出土遺物実測図① (1/3)	37	第 3 - 83 図	06SK228 出土遺物実測図 (1/3・1/1)	67
第 3 - 25 図	06SK029 出土遺物実測図② (1/3)	38	第 3 - 84 図	06SK235 実測図 (1/40)	68
第 3 - 26 図	06SK035 実測図 (1/30)	39	第 3 - 85 図	06SK235 出土遺物実測図 (1/3)	68
第 3 - 27 図	06SK035 出土遺物実測図 (1/3・1/1)	40	第 3 - 86 図	06SK236 実測図 (1/30)	69
第 3 - 28 図	06SK036 実測図 (1/30)	40	第 3 - 87 図	06SK236 出土遺物実測図 (1/3)	69
第 3 - 29 図	06SK039 実測図 (1/30)	41	第 3 - 88 図	06SK243 実測図 (1/30)	69
第 3 - 30 図	06SK039 出土遺物実測図 (1/3)	41	第 3 - 89 図	06SK241 実測図 (1/30)	70
第 3 - 31 図	06SK043 実測図 (1/30)	41	第 3 - 90 図	06SK241 出土遺物実測図 (1/3)	70
第 3 - 32 図	06SK048 実測図 (1/30)	42	第 3 - 91 図	06SK248 実測図 (1/30)	70
第 3 - 33 図	06SK054 実測図 (1/30)	42	第 3 - 92 図	06SK248 出土遺物実測図① (1/3)	71
第 3 - 34 図	06SK054 出土遺物実測図 (1/3)	42	第 3 - 93 図	06SK248 出土遺物実測図② (1/3)	72
第 3 - 35 図	06SK061 実測図 (1/30)	43	第 3 - 94 図	06SK248 出土遺物実測図③ (1/3)	73
第 3 - 36 図	06SK061 出土遺物実測図 (1/3)	43	第 3 - 95 図	06SK249 実測図 (1/30)	74
第 3 - 37 図	06SK075 実測図 (1/20)	43	第 3 - 96 図	06SK249 出土遺物実測図① (1/3)	75
第 3 - 38 図	06SK075 出土遺物実測図 (1/3)	43	第 3 - 97 図	06SK249 出土遺物実測図② (1/4)	75
第 3 - 39 図	06SK076 実測図 (1/30)	44	第 3 - 98 図	06SK252 実測図 (1/30)	76
第 3 - 40 図	06SK076 出土遺物実測図 (1/3)	44	第 3 - 99 図	06SK252 出土遺物実測図 (1/3)	76
第 3 - 41 図	06SK086 実測図 (1/30)	44	第 3 - 100 図	06SK253 実測図 (1/40)	77
第 3 - 42 図	06SK086 出土遺物実測図 (1/3)	45	第 3 - 101 図	06SK253 出土遺物実測図 (1/3)	77
第 3 - 43 図	06SK087 実測図 (1/30)	45	第 3 - 102 図	06SK258 実測図 (1/30)	78
第 3 - 44 図	06SK089 実測図 (1/30)	45	第 3 - 103 図	06SK259 実測図 (1/30)	78
第 3 - 45 図	06SK089 出土遺物実測図 (1/3)	46	第 3 - 104 図	06SK259 出土遺物実測図 (1/3)	78
第 3 - 46 図	06SK110 実測図 (1/30)	47	第 3 - 105 図	06SK264・SK265・SK266 実測図 (1/30)	79
第 3 - 47 図	06SK110 出土遺物実測図 (1/3)	47	第 3 - 106 図	06SK264 出土遺物実測図 (1/3)	79
第 3 - 48 図	06SK126 実測図 (1/30)	47	第 3 - 107 図	06SK267 実測図 (1/40)	80
第 3 - 49 図	06SK126 出土遺物実測図 (1/3)	48	第 3 - 108 図	06SK267 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	80
第 3 - 50 図	06SK133 実測図 (1/30)	49	第 3 - 109 図	06SK268 実測図 (1/30)	81
第 3 - 51 図	06SK133 出土遺物実測図 (1/3・1/1)	49	第 3 - 110 図	06SK268 出土遺物実測図① (1/3・1/2)	82
第 3 - 52 図	06SK140 実測図 (1/30)	50	第 3 - 111 図	06SK268 出土遺物実測図② (1/4)	83
第 3 - 53 図	06SK141・SK142 実測図 (1/40)	51	第 3 - 112 図	06SK269 実測図 (1/30)	83
第 3 - 54 図	06SK141・SK142 土層断面図 (1/30)	51	第 3 - 113 図	06SK269 出土遺物実測図① (1/3)	84

第 3-114 网	06-SK269 出土器物类图② (1/1)	85	第 3-175 网	06-SX100 出土器物类图③ (1/3)	126
第 3-115 网	06-SK274 类图 (1/30)	85	第 3-176 网	06-SX100 出土器物类图② (1/3)	127
第 3-116 网	06-SK281 类图② (1/30)	85	第 3-177 网	06-SX237 类图② (1/5)	128
第 3-117 网	06-SK281 出土器物类图 (1/3)	86	第 3-178 网	06-SX237 出土器物类图 (1/1)	129
第 3-118 网	06-SK299 类图② (1/30)	86	第 3-179 网	06-SX287 类图② (1/30)	130
第 3-119 网	06-SK324 类图② (1/30)	87	第 3-180 网	06-SX287 出土器物类图 (1/3)	131
第 3-120 网	06-SK324 出土器物类图 (1/3)	87	第 3-181 网	06-SX291 类图② (1/30)	132
第 3-121 网	06-SD053 类图② (1/30)	88	第 3-182 网	06-SX291 出土器物类图 (1/3)	133
第 3-122 网	06-SD058 类图② (1/40)	88	第 3-183 网	06-SX309 类图② (1/30)	134
第 3-123 网	06-SD071、072 类图② (1/40)	89	第 3-184 网	06-SX309 出土器物类图② (1/3)	135
第 3-124 网	06-SD072 出土器物类图 (1/2)	89	第 3-185 网	06-SX309 出土器物类图② (1/3)	136
第 3-125 网	06-SD101 类图② (1/30)	90	第 3-186 网	06-SX309 出土器物类图③ (1/3)	137
第 3-126 网	06-SD117 类图② (1/30)	90	第 3-187 网	06-SX310 类图② (1/30)	138
第 3-127 网	06-SD117 出土器物类图 (1/3)	90	第 3-188 网	06-SX310 出土器物类图② (1/2)	139
第 3-128 网	06-SD193 类图② (1/30)	91	第 3-189 网	06-SX310 出土器物类图③ (1/3)	140
第 3-129 网	06-SD195 类图② (1/30)	91	第 3-190 网	06-SX310 出土器物类图④ (1/3、1/1)	141
第 3-130 网	06-SD195 出土器物类图② (1/3)	91	第 3-191 网	06-柱穴透射类图② (1/30)	142
第 3-131 网	06-SD215 类图② (1/30)	92	第 3-192 网	06-柱穴透射类图出土器物类图 (1/2)	142
第 3-132 网	06-SD215 出土器物类图 (1/2)	92	第 3-193 网	06-SB02 类图② (1/40)	143
第 3-133 网	06-SD231 类图② (1/30)	92	第 3-194 网	06-SA01 类图② (1/30)	143
第 3-134 网	06-SD302 类图② (1/60)	93	第 3-195 网	06-SK097 类图② (1/30)	144
第 3-135 网	06-SD302A 出土器物类图 (1/3、1/1)	94	第 3-196 网	06-SK097 出土器物类图② (1/3)	145
第 3-136 网	06-SD302B 出土器物类图① (1/3)	95	第 3-197 网	06-SK097 出土器物类图③ (1/3)	146
第 3-137 网	06-SD302B 出土器物类图② (1/3)	96	第 3-198 网	06-SK097 出土器物类图④ (1/3)	147
第 3-138 网	06-SD302B 出土器物类图③ (1/3)	97	第 3-199 网	06-SK097 出土器物类图⑤ (1/3)	148
第 3-139 网	06-SD302B 出土器物类图④ (1/3)	98	第 3-200 网	06-SK097 出土器物类图⑥ (1/3)	149
第 3-140 网	06-SD302B 出土器物类图⑤ (1/3)	99	第 3-201 网	06-SK097 出土器物类图⑦ (1/3、1/1)	150
第 3-141 网	06-SD302B 出土器物类图⑧ (1/3)	100	第 3-202 网	06-SK097 出土器物类图⑧ (1/3)	151
第 3-142 网	06-SD302B 出土器物类图⑨ (1/2、1/1)	101	第 3-203 网	06-SK097 出土器物类图⑩ (1/3)	152
第 3-143 网	06-SD302B 出土器物类图⑪ (1/2、1/3、1/4)	102	第 3-204 网	06-SK097 出土器物类图⑫ (1/3)	153
第 3-144 网	06-SD302 (A、B、E 型) 出土器物类图② (1/3、1/2、1/1)	103	第 3-205 网	06-SK097 出土器物类图⑬ (1/4)	154
第 3-145 网	06-SE271 类图② (1/40)	104	第 3-206 网	06-SK097 出土器物类图⑭ (1/4)	155
第 3-146 网	06-SE271 出土器物类图① (1/3)	105	第 3-207 网	06-SK097 出土器物类图⑮ (1/4)	156
第 3-147 网	06-SE271 出土器物类图② (1/3、1/1、1/2)	106	第 3-208 网	06-SK097 出土器物类图⑯ (1/4)	157
第 3-148 网	06-ST094 类图② (1/30)	107	第 3-209 网	06-SK097 出土器物类图⑰ (1/4)	158
第 3-149 网	06-ST094 出土器物类图 (1/3)	107	第 3-210 网	06-SK097 出土器物类图⑱ (1/4)	159
第 3-150 网	06-SX031 类图② (1/30)	108	第 3-211 网	06-SK097 出土器物类图⑲ (1/4)	160
第 3-151 网	06-SX032 类图② (1/30)	108	第 3-212 网	06-SK097 出土器物类图⑳ (1/4)	161
第 3-152 网	06-SX032 出土器物类图 (1/4)	109	第 3-213 网	06-SK097 出土器物类图㉑ (1/4)	162
第 3-153 网	06-SX033 类图② (1/30)	110	第 3-214 网	06-SK097 出土器物类图㉒ (1/4)	163
第 3-154 网	06-SX033 出土器物类图 (1/3)	110	第 3-215 网	06-SK097 出土器物类图㉓ (1/4)	164
第 3-155 网	06-SX049 类图② (1/30)	111	第 3-216 网	06-SK097 出土器物类图㉔ (1/4)	165
第 3-156 网	06-SX049 出土器物类图 (1/3、1/1)	112	第 3-217 网	06-SK097 出土器物类图㉕ (1/4)	166
第 3-157 网	06-SX082 类图② (1/30)	113	第 3-218 网	06-SK097 出土器物类图㉖ (1/4)	167
第 3-158 网	06-SX082 出土器物类图 (1/3)	113	第 3-219 网	06-SK097 出土器物类图㉗ (1/4)	168
第 3-159 网	06-SX083 类图② (1/30)	114	第 3-220 网	06-SK097 出土器物类图㉘ (1/4)	169
第 3-160 网	06-SX083 出土器物类图 (1/3)	114	第 3-221 网	06-SK097 出土器物类图㉙ (1/4)	170
第 3-161 网	06-SX084 类图② (1/30)	115	第 3-222 网	06-SK097 出土器物类图㉚ (1/4)	171
第 3-162 网	06-SX084 出土器物类图① (1/3)	115	第 3-223 网	06-SK097 出土器物类图㉛ (1/4)	172
第 3-163 网	06-SX084 出土器物类图② (1/4)	116	第 3-224 网	06-SK097 出土器物类图㉜ (1/4)	173
第 3-164 网	06-SX084 出土器物类图③ (1/4)	117	第 3-225 网	06-SK097 出土器物类图⑤ (1/4)	174
第 3-165 网	06-SX095 类图② (1/40)	118	第 3-226 网	06-SK097 出土器物类图⑥ (1/4)	175
第 3-166 网	06-SX095 出土器物类图 (1/3)	118	第 3-227 网	06-SK097 出土器物类图⑦ (1/4)	176
第 3-167 网	06-SX096 类图② (1/30)	119	第 3-228 网	06-SK097 出土器物类图⑧ (1/4)	177
第 3-168 网	06-SX096 出土器物类图 (1/3)	119	第 3-229 网	06-SK097 出土器物类图⑨ (1/4)	178
第 3-169 网	06-SX100 类图② (1/30)	120	第 3-230 网	06-SK097 出土器物类图⑩ (1/4)	179
第 3-170 网	06-SX100 出土器物类图① (1/3)	121	第 3-231 网	06-SK097 出土器物类图⑪ (1/4)	180
第 3-171 网	06-SX100 出土器物类图② (1/3)	122	第 3-232 网	06-SK097 下層出土器物类图⑫ (1/3)	182
第 3-172 网	06-SX100 出土器物类图③ (1/3)	123	第 3-233 网	06-SK097 下層出土器物类图⑬ (1/3)	183
第 3-173 网	06-SX100 出土器物类图④ (1/4)	124	第 3-234 网	06-SK097 下層出土器物类图⑭ (1/3)	184
第 3-174 网	06-SX100 出土器物类图⑤ (1/3)	125	第 3-235 网	06-SK097 下層出土器物类图⑮ (1/3)	185
			第 3-236 网	06-SK097 下層出土器物类图⑯ (1/4)	186

第 3 - 237 頁	06-SK097 下層出土遺物実測図⑤ (1/4)	187
第 3 - 238 頁	06-SK097 下層出土遺物実測図⑥ (1/4)	188
第 3 - 239 頁	06-SK097 下層出土遺物実測図⑦ (1/4)	189
第 3 - 240 頁	06-SK097 下層出土遺物実測図⑧ (1/4)	190
第 3 - 241 頁	06-SK097 下層出土遺物実測図⑨ (1/4)	191
第 3 - 242 頁	06-SK097 下層出土遺物実測図⑩ (1/4)	192
第 3 - 243 頁	06-SK097 下層出土遺物実測図⑪ (1/4)	193
第 3 - 244 頁	06-SK097 下層出土遺物実測図⑫ (1/4)	194
第 3 - 245 頁	06-SK097 下層出土遺物実測図⑬ (1/4)	195
第 3 - 246 頁	06-SK097 下層出土遺物実測図⑭ (1/4)	196
第 3 - 247 頁	06-SK097 下層出土遺物実測図⑮ (1/4)	197
第 3 - 248 頁	06-SK120 実測図 (1/30)	197
第 3 - 249 頁	06-SK120 出土遺物実測図 (1/3)	197
第 3 - 250 頁	06-SK129 実測図 (1/40)	198
第 3 - 251 頁	06-SK129 出土遺物実測図 (1/3・1/1)	199
第 3 - 252 頁	06-SK131 実測図 (1/120)	201
第 3 - 253 頁	06-SK131 南北土層断面図 (1/50)	202
第 3 - 254 頁	06-SK131 東西土層断面図 (1/50)	203
第 3 - 255 頁	06-SK131 石材料出土状況 (1/50)	204
第 3 - 256 頁	06-SK131 出土遺物実測図① (1/3)	205
第 3 - 257 頁	06-SK131 出土遺物実測図② (1/3)	206
第 3 - 258 頁	06-SK131 出土遺物実測図③ (1/3)	207
第 3 - 259 頁	06-SK131 出土遺物実測図④ (1/3)	208
第 3 - 260 頁	06-SK131 出土遺物実測図⑤ (1/3)	209
第 3 - 261 頁	06-SK131 出土遺物実測図⑥ (1/3)	210
第 3 - 262 頁	06-SK131 出土遺物実測図⑦ (1/3)	211
第 3 - 263 頁	06-SK131 出土遺物実測図⑧ (1/3)	212
第 3 - 264 頁	06-SK131 出土遺物実測図⑨ (1/3)	213
第 3 - 265 頁	06-SK131 出土遺物実測図⑩ (1/3)	214
第 3 - 266 頁	06-SK131 出土遺物実測図⑪ (1/3)	215
第 3 - 267 頁	06-SK131 出土遺物実測図⑫ (1/3)	216
第 3 - 268 頁	06-SK131 出土遺物実測図⑬ (1/3)	217
第 3 - 269 頁	06-SK131 出土遺物実測図⑭ (1/3)	218
第 3 - 270 頁	06-SK131 出土遺物実測図⑮ (1/3)	219
第 3 - 271 頁	06-SK131 出土遺物実測図⑯ (1/3)	220
第 3 - 272 頁	06-SK131 出土遺物実測図⑰ (1/3・1/4・1/2)	221
第 3 - 273 頁	06-SK131 出土遺物実測図⑱ (1/1)	222
第 3 - 274 頁	06-SK131 出土遺物実測図⑲ (1/3)	223
第 3 - 275 頁	06-SK131 出土遺物実測図⑳ (1/3)	224
第 3 - 276 頁	06-SK131 出土遺物実測図㉑ (1/3)	225
第 3 - 277 頁	06-SK131 出土遺物実測図㉒ (1/4)	226
第 3 - 278 頁	06-SK131 出土遺物実測図㉓ (1/4)	227
第 3 - 279 頁	06-SK131 出土遺物実測図㉔ (1/4)	228
第 3 - 280 頁	06-SK131 出土遺物実測図㉕ (1/4)	229
第 3 - 281 頁	06-SK131 出土遺物実測図㉖ (1/4)	230
第 3 - 282 頁	06-SK131 出土遺物実測図㉗ (1/3)	231
第 3 - 283 頁	06-SK131 下層出土遺物実測図① (1/3・1/2)	232
第 3 - 284 頁	06-SK131 下層出土遺物実測図② (1/3)	233
第 3 - 285 頁	06-SK147 実測図 (1/30)	234
第 3 - 286 頁	06-SK164 実測図 (1/30)	234
第 3 - 287 頁	06-SK166 実測図 (1/60)	235
第 3 - 288 頁	06-SK166 出土遺物実測図 (1/3)	235
第 3 - 289 頁	06-SK185 実測図 (1/30)	236
第 3 - 290 頁	06-SK185 出土遺物実測図 (1/3)	236
第 3 - 291 頁	06-SK272 実測図 (1/30)	237
第 3 - 292 頁	06-SK272 出土遺物実測図 (1/3)	237
第 3 - 293 頁	06-SK273 実測図 (1/30)	238
第 3 - 294 頁	06-SK273 出土遺物実測図 (1/3)	239
第 3 - 295 頁	06-SK303 実測図 (1/30)	240
第 3 - 296 頁	06-SK303 出土遺物実測図 (1/3)	240
第 3 - 297 頁	06-SK306 実測図 (1/30)	240
第 3 - 298 頁	06-SK311 実測図 (1/30)	241

第 3 - 299 頁	06-SK313 実測図 (1/30)	242
第 3 - 300 頁	06-SK313 出土遺物実測図① (1/3)	243
第 3 - 301 頁	06-SK313 出土遺物実測図② (1/5)	244
第 3 - 302 頁	06-SK313 出土遺物実測図③ (1/4)	245
第 3 - 303 頁	06-SK313 出土遺物実測図④ (1/3・1/1)	246
第 3 - 304 頁	06-SK314 実測図 (1/30)	246
第 3 - 305 頁	06-SK317 実測図 (1/30)	247
第 3 - 306 頁	06-SK317 出土遺物実測図 (1/1)	247
第 3 - 307 頁	06-SK323 実測図 (1/30)	248
第 3 - 308 頁	06-SK323 出土遺物実測図 (1/1)	248
第 3 - 309 頁	06-SK326 実測図 (1/30)	248
第 3 - 310 頁	06-SK326 出土遺物実測図 (1/1)	249
第 3 - 311 頁	06-SK328 実測図 (1/30)	249
第 3 - 312 頁	06-SK328 実測図 (1/30)	250
第 3 - 313 頁	06-SK333 実測図 (1/30)	250
第 3 - 314 頁	06-SK335 実測図 (1/30)	251
第 3 - 315 頁	06-SK335 出土遺物実測図① (1/3)	252
第 3 - 316 頁	06-SK335 出土遺物実測図② (1/3)	253
第 3 - 317 頁	06-SD090 実測図 (1/100・1/50)	254
第 3 - 318 頁	06-SD090 出土遺物実測図① (1/3)	255
第 3 - 319 頁	06-SD090 出土遺物実測図② (1/3・1/1)	256
第 3 - 320 頁	06-SD093 実測図 (1/60)	257
第 3 - 321 頁	06-SD093 出土遺物実測図 (1/200)	258
第 3 - 322 頁	06-SD093 出土遺物実測図② (1/3)	259
第 3 - 323 頁	06-SD093 出土遺物実測図③ (1/3)	260
第 3 - 324 頁	06-SD106 実測図 (1/60)	261
第 3 - 325 頁	06-SD106 出土遺物実測図 (1/3)	261
第 3 - 326 頁	06-SD130 実測図 (1/30)	262
第 3 - 327 頁	06-SD130 出土遺物実測図 (1/3)	263
第 3 - 328 頁	06-SD165 実測図 (1/60)	264
第 3 - 329 頁	06-SD165 出土遺物実測図 (1/3)	265
第 3 - 330 頁	06-SD184 実測図 (1/50)	266
第 3 - 331 頁	06-SD184 出土遺物実測図 (1/3)	267
第 3 - 332 頁	06-SD221 実測図 (1/120)	268
第 3 - 333 頁	06-SD221 瓦等出土状況 (1/20)	269
第 3 - 334 頁	06-SD221 出土遺物実測図① (1/3)	270
第 3 - 335 頁	06-SD221 出土遺物実測図② (1/3)	271
第 3 - 336 頁	06-SD221 出土遺物実測図③ (1/3)	272
第 3 - 337 頁	06-SD221 出土遺物実測図④ (1/4)	273
第 3 - 338 頁	06-SD221 出土遺物実測図⑤ (1/3)	274
第 3 - 339 頁	06-SD221 出土遺物実測図⑥ (1/3)	275
第 3 - 340 頁	06-SD221 出土遺物実測図⑦ (1/3)	276
第 3 - 341 頁	06-SD221 出土遺物実測図⑧ (1/3)	277
第 3 - 342 頁	06-SD221 出土遺物実測図⑨ (1/3)	278
第 3 - 343 頁	06-SD221 出土遺物実測図⑩ (1/3)	279
第 3 - 344 頁	06-SD221 出土遺物実測図⑪ (1/3)	280
第 3 - 345 頁	06-SD221 出土遺物実測図⑫ (1/3)	281
第 3 - 346 頁	06-SD221 出土遺物実測図⑬ (1/3)	282
第 3 - 347 頁	06-SD221 出土遺物実測図⑭ (1/3)	283
第 3 - 348 頁	06-SD221 出土遺物実測図⑮ (1/3)	284
第 3 - 349 頁	06-SD221 出土遺物実測図⑯ (1/3)	285
第 3 - 350 頁	06-SD221 出土遺物実測図⑰ (1/3)	286
第 3 - 351 頁	06-SD221 出土遺物実測図⑱ (1/3)	287
第 3 - 352 頁	06-SD221 出土遺物実測図⑲ (1/3)	288
第 3 - 353 頁	06-SD221 出土遺物実測図⑳ (1/3)	289
第 3 - 354 頁	06-SD221 出土遺物実測図㉑ (1/3)	290
第 3 - 355 頁	06-SD221 出土遺物実測図㉒ (1/3)	291
第 3 - 356 頁	06-SD221 出土遺物実測図㉓ (1/3)	292
第 3 - 357 頁	06-SD221 出土遺物実測図㉔ (1/3)	294
第 3 - 358 頁	06-SD221 出土遺物実測図㉕ (1/3)	295
第 3 - 359 頁	06-SD221 出土遺物実測図㉖ (1/3)	296
第 3 - 360 頁	06-SD221 出土遺物実測図㉗ (1/4)	297

第 3-361 図	06-SD221 出土遺物実測図① (1/3)	298
第 3-362 図	06-SD221 出土遺物実測図② (1/3)	299
第 3-363 図	06-SD221 出土遺物実測図③ (1/4)	300
第 3-364 図	06-SD221 出土遺物実測図④ (1/4)	301
第 3-365 図	06-SD221 出土遺物実測図⑤ (1/4)	302
第 3-366 図	06-SD221 出土遺物実測図⑥ (1/4)	303
第 3-367 図	06-SD221 出土遺物実測図⑦ (1/4)	304
第 3-368 図	06-SD221 出土遺物実測図⑧ (1/4)	305
第 3-369 図	06-SD221 出土遺物実測図⑨ (1/4)	306
第 3-370 図	06-SD221 出土遺物実測図⑩ (1/4)	307
第 3-371 図	06-SD221 出土遺物実測図⑪ (1/4)	308
第 3-372 図	06-SD221 出土遺物実測図⑫ (1/4)	309
第 3-373 図	06-SD221 出土遺物実測図⑬ (1/4)	310
第 3-374 図	06-SD221 出土遺物実測図⑭ (1/4)	311
第 3-375 図	06-SD221 出土遺物実測図⑮ (1/4)	312
第 3-376 図	06-SD221 出土遺物実測図⑯ (1/4)	313
第 3-377 図	06-SD221 出土遺物実測図⑰ (1/4)	314
第 3-378 図	06-SD221 出土遺物実測図⑱ (1/3)	315
第 3-379 図	06-SD221 出土遺物実測図⑲ (1/2)	316
第 3-380 図	06-SD221 出土遺物実測図⑳ (1/1)	317
第 3-381 図	06-SD221 下原出土遺物実測図 (1/3)	318
第 3-382 図	06-SD282 実測図 (1/50)	319
第 3-383 図	06-SD282 出土遺物実測図 (1/3)	320
第 3-384 図	06-SD288 実測図 (1/30)	321
第 3-385 図	06-SD288 出土遺物実測図① (1/3)	322
第 3-386 図	06-SD288 出土遺物実測図② (1/3)	323
第 3-387 図	06-SD288 出土遺物実測図③ (1/3)	324
第 3-388 図	06-SD288 出土遺物実測図④ (1/3)	325
第 3-389 図	06-SD288 出土遺物実測図⑤ (1/1)	326
第 3-390 図	06-SD288 出土遺物実測図⑥ (1/1)	327
第 3-391 図	06-SD345 実測図 (1/50)	328
第 3-392 図	06-SD345 出土遺物実測図① (1/3)	329
第 3-393 図	06-SD345 出土遺物実測図② (1/3)	330
第 3-394 図	06-SE167 実測図 (1/40)	331
第 3-395 図	06-SE167 出土遺物実測図 (1/3)	331
第 3-396 図	06-SE283 実測図 (1/40)	332
第 3-397 図	06-SE283 出土遺物実測図 (1/3)	333
第 3-398 図	06-SE312 実測図 (1/50)	334
第 3-399 図	06-SE312 出土遺物実測図① (1/3・1/1)	335
第 3-400 図	06-SE312 出土遺物実測図② (1/3)	336
第 3-401 図	06-SE322 実測図 (1/50)	337
第 3-402 図	06-SE322 出土遺物実測図 (1/3)	338
第 3-403 図	06-SE330 実測図 (1/50)	339
第 3-404 図	06-SE330 出土遺物実測図 (1/3)	340
第 3-405 図	06-ST045 実測図 (1/30)	341
第 3-406 図	06-ST045 出土遺物実測図 (1/3)	341
第 3-407 図	06-ST143 実測図 (1/30)	341
第 3-408 図	06-ST143 出土遺物実測図 (1/3)	342
第 3-409 図	06-ST144 実測図 (1/30)	342
第 3-410 図	06-ST144 出土遺物実測図 (1/3)	342
第 3-411 図	06-ST159 実測図 (1/30)	343
第 3-412 図	06-SX134 実測図 (1/30)	344
第 3-413 図	06-SX134 出土遺物実測図① (1/3)	345
第 3-414 図	06-SX134 出土遺物実測図② (1/4)	346
第 3-415 図	06-SX134 出土遺物実測図③ (1/4)	347
第 3-416 図	06-SX300 実測図 (1/5)	348
第 3-417 図	06-SX300 出土遺物実測図 (1/1)	348
第 3-418 図	06-柱穴遺構実測図 (1/30)	349
第 3-419 図	06-柱穴遺構出土遺物実測図 (1/5)	349
第 3-420 図	06-1~3層出土遺物実測図① (1/3・1/1)	351
第 3-421 図	06-1~3層出土遺物実測図② (1/3・1/2・1/1)	352
第 3-422 図	06-4層出土遺物実測図① (1/3)	353

第 3-423 図	06-4層出土遺物実測図② (1/3・1/4)	354
第 3-424 図	06-4層出土遺物実測図③ (1/3)	355
第 3-425 図	06-4層出土遺物実測図④ (1/3)	356
第 3-426 図	06-4層出土遺物実測図⑤ (1/3)	357
第 3-427 図	06-4層出土遺物実測図⑥ (1/3)	358
第 3-428 図	06-4層出土遺物実測図⑦ (1/3)	359
第 3-429 図	06-4層出土遺物実測図⑧ (1/3)	360
第 3-430 図	06-4層出土遺物実測図⑨ (1/3)	361
第 3-431 図	06-4層出土遺物実測図⑩ (1/2・1/1)	362
第 3-432 図	06-4層出土遺物実測図⑪ (1/1)	363
第 3-433 図	06-4層出土遺物実測図⑫ (1/3)	364
第 3-434 図	06-4層出土遺物実測図⑬ (1/3)	365
第 3-435 図	06-4層出土遺物実測図⑭ (1/3)	366
第 3-436 図	06-4層出土遺物実測図⑮ (1/3)	367
第 3-437 図	06-4層出土遺物実測図⑯ (1/3)	368
第 3-438 図	06-4層出土遺物実測図⑰ (1/3)	369
第 3-439 図	06-4層出土遺物実測図⑱ (1/3)	370
第 3-440 図	06-4層出土遺物実測図⑲ (1/1)	371
第 3-441 図	06-4層出土遺物実測図⑳ (1/4)	372
第 3-442 図	06-4層出土遺物実測図㉑ (1/4)	373
第 3-443 図	06-4層出土遺物実測図㉒ (1/4)	374
第 3-444 図	06-4層出土遺物実測図㉓ (1/4)	375
第 3-445 図	06-4層出土遺物実測図㉔ (1/4)	376
第 3-446 図	06-1層出土遺物実測図① (1/4)	377
第 3-447 図	06-1層出土遺物実測図② (1/4)	378
第 3-448 図	06-4層出土遺物実測図④ (1/4)	379
第 3-449 図	06-1層出土遺物実測図⑤ (1/3)	380
第 3-450 図	06-4層出土遺物実測図⑥ (1/3・1/1)	381
第 3-451 図	06-4層出土遺物実測図⑦ (1/1)	382
第 3-452 図	06-5層出土遺物実測図① (1/3・1/2)	383
第 3-453 図	06-5層出土遺物実測図② (1/4)	384
第 3-454 図	06-調査区出土遺物実測図① (1/3)	385
第 3-455 図	06-調査区出土遺物実測図② (1/3・1/2・1/1)	386
第 3-456 図	06-調査区出土遺物実測図③ (1/4)	387
第 3-457 図	06-調査区出土遺物実測図④ (1/4)	388
第 4-1 図	旧万寿寺跡第7次調査の位置 (1/5,000)	389
第 4-2 図	旧万寿寺跡第7次調査遺構配置図 (1/200)	391
第 4-3 図	板瓦の位置とH調査区との関係 (1/300)	392
第 4-4 図	旧万寿寺跡第7次調査土層 (1/80)	393
第 4-5 図	07-SD070・07-SD090 実測図 (1/80、土層間は1/30)	395
第 4-6 図	07-SD070 出土遺物実測図 (1/3、1/4)	396
第 4-7 図	07-SD090 出土遺物実測図① (1/3)	397
第 4-8 図	07-SD090 出土遺物実測図② (1/4、1/3)	398
第 4-9 図	07-SD073 出土遺物実測図 (1/3、1/4)	399
第 4-10 図	07-SD288 実測図 (1/80、1/40)	400
第 4-11 図	07-SD288 土層実測図 (1/40)	401
第 4-12 図	07-SD288 出土遺物実測図① (1/3)	403
第 4-13 図	07-SD288 出土遺物実測図② (1/3)	404
第 4-14 図	07-SD288 出土遺物実測図③ (1/3)	405
第 4-15 図	07-SD288 出土遺物実測図④ (1/3、1/4)	407
第 4-16 図	07-SD288 出土遺物実測図⑤ (1/3、1/4)	407
第 4-17 図	07-SD288 出土遺物実測図⑥ (1/3、1/1)	408
第 4-18 図	07-SD288 出土遺物実測図⑦ (1/1)	409
第 4-19 図	07-SD288 出土遺物実測図⑧ (1/1)	410
第 4-20 図	07-SD288 出土遺物実測図⑨ (1/1)	411
第 4-21 図	07-SD288 出土遺物実測図⑩ (1/1)	412
第 4-22 図	07-SK001 実測図 (1/40)	413
第 4-23 図	07-SK001 出土遺物実測図① (1/3)	414
第 4-24 図	07-SK001 出土遺物実測図② (1/4、1/8)	415
第 4-25 図	07-SK002 実測図 (1/40)	416
第 4-26 図	07-SK002 出土遺物実測図 (1/3、1/4、1/8)	417
第 4-27 図	07-SK003 実測図 (1/40)	418

第4-28回	07-SK003 出土遺物実測図 (1/3, 1/4)	419
第4-29回	07-SK004a 実測図 (1/40)	420
第4-30回	07-SK004 出土遺物実測図 (1/3, 1/4, 1/8)	421
第4-31回	07-SK005 実測図 (1/40)	422
第4-32回	07-SK005 出土遺物実測図 (1/3, 1/4, 1/8)	422
第4-33回	07-SK006 実測図 (1/40)	423
第4-34回	07-SK006 出土遺物実測図 (1/3, 1/4, 1/8)	424
第4-35回	07-SK010 実測図 (1/40)	425
第4-36回	07-SK010 出土遺物実測図 (1/3)	425
第4-37回	07-SK022 実測図 (1/40)	425
第4-38回	07-SK022 出土遺物実測図 (1/3, 1/4)	425
第4-39回	07-SK024 実測図 (1/40)	426
第4-40回	07-SK024 出土遺物実測図 (1/3, 1/4)	427
第4-41回	07-SK034 実測図 (1/40)	428
第4-42回	07-SK034 出土遺物実測図 (1/3)	428
第4-43回	07-SK039 実測図 (1/40)	428
第4-44回	07-SK039 出土遺物実測図 (1/3, 1/4)	429
第4-45回	07-SK042 実測図 (1/40)	430
第4-46回	07-SK042 出土遺物実測図 (1/3, 1/4)	430
第4-47回	07-SK053 出土遺物実測図 (1/4)	431
第4-48回	07-SK056 実測図 (1/40)	431
第4-49回	07-SK056 出土遺物実測図 (1/3, 1/4)	432
第4-50回	07-SK062 実測図 (1/30)	433
第4-51回	07-SK062 出土遺物実測図 (1/3)	433
第4-52回	07-SK064 実測図 (1/40)	434
第4-53回	07-SK064 出土遺物実測図① (1/3)	435
第4-54回	07-SK064 出土遺物実測図② (1/3)	436
第4-55回	07-SK064 出土遺物実測図③ (1/3)	437
第4-56回	07-SK064 出土遺物実測図④ (1/3)	438
第4-57回	07-SK064 出土遺物実測図⑤ (1/3, 1/1)	439
第4-58回	07-SK115 実測図 (1/40)	439
第4-59回	07-SK115 出土遺物実測図 (1/3)	440
第4-60回	07-SX086 実測図 (1/50)	441
第4-61回	07-SX086 出土遺物実測図 (1/3)	441
第4-62回	07-SX087 実測図 (1/50)	442
第4-63回	07-SX087 出土遺物実測図 (1/3, 1/1)	443
第4-64回	07-SX088 出土遺物実測図 (1/3)	444
第4-65回	07-SX107 実測図 (1/50)	445
第4-66回	07-SX107 出土遺物実測図 (1/3)	445
第4-67回	07-SX108 実測図 (1/50)	446
第4-68回	07-SX108 出土遺物実測図 (1/3)	446
第4-69回	07-ST004b 実測図 (1/30)	447
第4-70回	07-ST004b 出土遺物実測図 (1/3)	447
第4-71回	07-ST020 実測図 (1/30)	448
第4-72回	07-ST020 出土遺物実測図 (1/3)	449
第4-73回	07-ST035 実測図 (1/30)	450
第4-74回	07-ST035 出土遺物実測図 (1/3)	450
第4-75回	07-ST045 実測図 (1/30)	451
第4-76回	07-ST045 出土遺物実測図 (1/3, 1/1)	451
第4-77回	07-ST051 実測図 (1/30)	452
第4-78回	07-ST051 出土遺物実測図 (1/3)	452
第4-79回	07-ST076 実測図 (1/30)	453

第4-80回	07-ST076 出土遺物実測図 (1/3)	453
第4-81回	07-ST078 実測図 (1/30)	454
第4-82回	07-ST078 出土遺物実測図 (1/3)	454
第4-83回	07-ST080 実測図 (1/30)	455
第4-84回	07-ST081 実測図 (1/30)	455
第4-85回	07-ST081 出土遺物実測図 (1/3)	456
第4-86回	07-ST082 実測図 (1/30)	456
第4-87回	07-ST082 出土遺物実測図① (1/3)	457
第4-88回	07-ST082 出土遺物実測図② (1/3)	458
第4-89回	07-ST082 出土遺物実測図③ (1/3)	459
第4-90回	07-ST083 実測図 (1/30)	460
第4-91回	07-ST083 出土遺物実測図① (1/3)	460
第4-92回	07-ST083 出土遺物実測図② (1/3)	461
第4-93回	07-ST083 出土遺物実測図③ (1/3)	461
第4-94回	07-ST084 a・07-ST084 b 実測図 (1/30)	462
第4-95回	07-ST084 a 出土遺物実測図 (1/3)	462
第4-96回	07-ST084 b 出土遺物実測図 (1/3)	463
第4-97回	07-ST092 実測図 (1/30)	464
第4-98回	07-ST092 出土遺物実測図 (1/3, 1/1)	464
第4-99回	07-ST108 実測図 (1/30)	465
第4-100回	07-ST108 出土遺物実測図 (1/3)	465
第4-101回	07-ST110 実測図 (1/30)	466
第4-102回	07-ST110 出土遺物実測図① (1/3)	467
第4-103回	07-ST110 出土遺物実測図② (1/3)	468
第4-104回	07-ST110 出土遺物実測図③ (1/3)	469
第4-105回	07-ST110 出土遺物実測図④ (1/3)	470
第4-106回	07-ST110 出土遺物実測図⑤ (1/3)	471
第4-107回	07-ST120 実測図 (1/30)	472
第4-108回	07-ST120 出土遺物実測図① (1/3)	473
第4-109回	07-ST120 出土遺物実測図② (1/3)	474
第4-110回	07-ST120 出土遺物実測図③ (1/3)	475
第4-111回	07-ST125 実測図 (1/30)	476
第4-112回	07-ST125 出土遺物実測図 (1/3)	477
第4-113回	07-ST126 実測図 (1/30)	477
第4-114回	07-SX068 実測図 (1/30)	478
第4-115回	07-SX068 出土遺物実測図 (1/1)	478
第4-116回	07-SX100 実測図 (1/10)	479
第4-117回	07-SX100 出土遺物実測図① (鉄塊1・1/3)	480
第4-118回	07-SX100 出土遺物実測図② (鉄塊1・1/2)	481
第4-119回	07-SX100 出土遺物実測図③ (鉄塊2・1/3)	482
第4-120回	07-SX100 出土遺物実測図④ (鉄塊2・1/2)	483
第4-121回	07-SX100 出土遺物実測図⑤ (鉄塊1のA面、1/1)	484
第4-122回	07-SX100 出土遺物実測図⑥ (鉄塊1のB面、1/1)	485
第4-123回	07-SX100 出土遺物実測図⑦ (鉄塊2のA面、1/1)	486
第4-124回	07-SX100 出土遺物実測図⑧ (鉄塊2のB面、1/1)	487
第4-125回	07-SX100 出土遺物実測図⑨ (1/1)	488
第4-126回	07-SX121 実測図 (1/30)	489
第4-127回	07-SX121 出土遺物実測図 (1/3)	489
第4-128回	07-SX065 出土遺物実測図 (1/3)	490
第4-129回	包含層・整地層出土遺物実測図① (1/3)	491
第4-130回	包含層・整地層出土遺物実測図② (1/3, 1/1)	492

表目次

第1-1表	旧万寿寺跡第6~10次調査一覽	3
第1-2表	中世大友府内町跡調査一覽①	6
第1-3表	中世大友府内町跡調査一覽②	7
第1-4表	中世大友府内町跡調査一覽③	8
第1-5表	旧万寿寺跡調査一覽	8

第3-1表	旧万寿寺跡第6次調査遺構一覽表①	21
第3-2表	旧万寿寺跡第6次調査遺構一覽表②	22
第3-3表	旧万寿寺跡第6次調査遺構一覽表③	23
第4-1表	旧万寿寺跡第7次調査遺構一覽表	390

第2節 旧万寿寺跡推定域の変更の経緯

臨濟宗寺院 万寿寺は徳治元年（1306）に大友氏5第貞親が博多承天寺の直翁智侃を開山に迎え開いた臨濟宗寺院で、山号は寿山である。万寿寺は建武4年（1337）以来、十割のひとつに列せられる屈指の禪宗寺院であったが、記録によれば15～16世紀の間に数度の火災に遭い、天正14年（1586）の島津氏の府内侵攻により、伽藍の主要堂塔は灰燼に帰したとされている。現在の万寿寺は大分市金池町に所在するが、これは寛永8年（1631）に再興されたものである。

寛永8年
(1631)
に再興

万寿寺旧境内については、江戸時代に戦国時代の府内の町割りを描いた「府内古図」と呼ぶ数枚の絵図と、現在の地割や明治時代の地籍図等を基にした町割りの比定が行われ、昭和63年刊行の「大分市史」の付図にそれが示された。この時点では、万寿寺旧境内の推定南限は、庄の原佐野線予定地の北側までであり、庄の原佐野線のルートも、『大分市史』での検討を踏まえて設定された周知の埋蔵文化財包蔵地としての「蔦山万寿寺跡」を避けて計画されたものであった。



第1-2図 国指定史跡大友氏遺跡と庄の原佐野線の位置
(大分市教育委員会2015『史跡大友氏遺跡整備基本計画(第1期)』から引用)

しかし、平成12年から始まった国道10号古国府拡幅事業に伴う発掘調査では、万寿寺旧境内の推定西限部分を南北方向に長く発掘調査を実施した結果、万寿寺に関する考古学的な知見を加えることになった。この一連の発掘調査により、万寿寺の西側を区画する堀を確認することになったが、万寿寺の推定南限に近い場所を発掘した中世大友府内町跡第34次調査では、この西側の堀が東へ屈曲せずさらに南に延びる状況が確認され、万寿寺の範囲が南に拡大することが事実となった。また、中世大友府内町跡第30次調査では、版築状の積土をもつ東西方向の道路遺構を確認し、これが府内古園に描かれた万寿寺南側の東西道路と考えられている。この道路から南側では廃棄土坑をはじめとした夥しい遺構が確認される町原の様相を呈している。したがって、万寿寺の南限は30次調査の東西道路の北側と推定される。この東西道路とその南の町原の状況は中世大友府内町跡第97次調査でも確認されており、上記の蓋然性が高いことが裏付けられている。

万寿寺の範囲
が南に拡大

国指定史跡
に指定

庄の原佐野
線が万寿寺
跡を横断

こうした成果も受け、平成17年3月には万寿寺境内の一部が国指定史跡に指定され、国指定史跡大友氏館跡とあわせて指定名称が大友氏遺跡に変更となった。旧万寿寺地区ではその後も庄の原佐野線部分を除いて条件が整った箇所から順次追加指定がなされている。こうした経緯により、当初は万寿寺跡と避けて計画された庄の原佐野線が、発掘調査の進展によって万寿寺の寺域が拡大することが判明し、結果として庄の原佐野線が万寿寺跡を横断する形となったのである。

第3節 発掘調査・報告書作成の経過

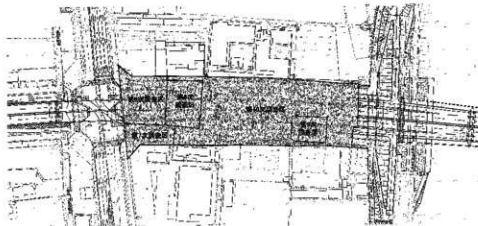
元町工区の発掘調査は、大分県土木建築部大分駅周辺総合整備事務所の依頼を受け、平成23年度から用地条件の整った箇所から順次実施した。平成27年度は県の組織改正により大分駅周辺総合整備事務所が廃止され、事業を引き継いだ大分土木事務所からの依頼を受けて実施した。

旧万寿寺跡については、大分市教育委員会が史跡大友氏遺跡旧万寿寺地区の確認調査として第5次調査までを実施しており、同一遺跡における調査回数の一環を認るため平成23年度の本調査を第6次、以下平成25年度を第7次、平成26年度を第8・9次、平成27年度は第10次調査とし、4箇年で計5次の発掘調査を行った。この間、発掘調査指導者を組織し、学識者の指導・助言を受けて

調査回数
の統一
発掘調査指
導者会

第1-1表 旧万寿寺跡第6～10次調査一覧

調査回数	調査面積	調査期間	発掘指導者会	現地説明会	法定手続等（文化財保護法）		
					本調査発行通知 (法99条第1項)	遺跡文化財発見通知 (法100条第2項)	本調査 終了報告
旧万寿寺跡第6次調査	1,411㎡	H23.6.12～H24.1.12	①H23.8.5 ②H23.11.30	H23.12.4	H23.5.30	H24.1.16 1,160㎡	H24.1.16
旧万寿寺跡第7次調査	632㎡	H25.6.3～H26.1.10	①H25.9.30 ②H25.12.25	H25.10.5	H25.5.21	H26.1.16 1,339㎡	H26.1.14
旧万寿寺跡第8・9次調査	1,669㎡	H26.5.12～H27.2.9	①H26.9.30～10.1 ②H26.12.5	H26.10.4	H26.5.1	H27.2.12 1,023㎡	H27.2.12
旧万寿寺跡第10次調査	7,097.4㎡	H27.6.10～H28.3.2	①H27.9.28～29 ②H28.1.18	H27.12.26	H27.6.5	H28.3.1 1,300㎡	H28.3.2



第1-3図 旧万寿寺跡第6～10次調査区位置 (S=1/2,500)



写真1-1 調査指導者会
(平成23年8月5日)



写真1-2 現地説明会
(平成27年12月26日)



写真1-3 出土品の文化庁指導
(平成27年度)

調査を実施するとともに、大分県と大分市で調査成果の共通認識を図った。平成23～27年度の調査期間・面積等は第1-1表のとおりである。

各調査では重機での表土除去、人力掘削（包含層掘削・遺構検出・遺構発掘）、記録写真撮影、遺構実測、空中写真撮影、実測原因のデジタルトレース図作成、現場管理及び労務管理等は支援業務として一括して民間調査組織に委託した。その一方で調査区の設定や層序確認、遺構の認定、遺構埋土や調査区土層の分層等は埋蔵文化財センター調査員が行い、遺構の性格や遺跡全体の関係を把握しながら受託業者に作業指示を与え、調査員が常駐して全体を指揮監督する体制をとった。支援業務委託における作業班は1班につき調査技師・調査助手各1名、作業員20名を基本とした。

発掘調査の実施にあたっては、これまでの中世大友府内町跡・旧万寿寺跡における発掘調査の座標グリッドとの統一を図るため、旧国土座標（日本海地系）に基づく10m方眼のグリッドを設定した。各グリッドには西からアルファベット、北からアラビア数字を付し、両者を組み合わせるグリッドの呼称とした。

旧国土座標
(日本海地系)

現地説明会

文化財調査
と道路事業
とが連携し
た取組

これら発掘調査の期間中、調査成果を県民に公開するため現地説明会を開催した（第1-1表、写真1-2）。同指定史跡大友氏遺跡を構成する旧万寿寺跡の発掘調査とあって県民の関心も高く、現地説明会には多くの参加者があった。特に平成27年度の現地説明会は県土木建築部との共催で新大分川架橋建設工事の公開も併せて行うなど、文化財調査と道路事業とが連携した取組みとなった。

整理作業

平成23年度から実施した発掘調査の出土品や調査記録類の整理作業は、大分県教育庁埋蔵文化財センターにおいて平成26年度から着手した。平成29年4月1日には県教育委員会の組織改正により教育庁埋蔵文化財センターが県立埋蔵文化財センターとなり、引き続き県立埋蔵文化財センターにおいて整理作業・報告書作成を実施した。

整理作業は年度ごとに旧万寿寺跡を含む当該年度整理実施事業を一括して「埋蔵文化財センターが実施する埋蔵文化財発掘調査に係る整理作業委託」として発注した。業務は基本作業と資料作成業務からなり、埋蔵文化財センター整理作業棟を作業場所として実施した。委託内容は出土遺物の水洗、出土地点の注記、遺物接合・復元、遺物実測・拓本採取、遺物観察基礎データ作成、遺物実測原因のトレース、遺物写真撮影、及び遺物の区分けや収納等諸作業である。作業工程ごとに調査担当者が完了確認を行い、作業精度の確保に努めた。また、平成30年度には旧万寿寺跡第6～10次調査出土品のうち、特に重要なものの写真撮影を委託した。

報告書作成

報告書作成にかかる遺構・遺物実測図版作成作業や原稿執筆、編集作業は調査担当者が整理作業と並行して行い、平成31年1月に原稿を入稿し、3度の校正を経て本書を刊行した。平成31年3月末には本書を刊行し、これを以て本事業を完了した。

第4節 調査組織の構成

調査組織 平成23～30年度の調査組織については以下のとおりである（役職は調査当時）。

- 調査主体 大分県教育委員会
 調査指導者 河原純之（川村学園女子大学教授） ※平成23年度まで
 後藤宗俊（別府大学名誉教授）
 小野正敏（大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事）
 坂井秀弥（奈良大学文学部教授）
 玉井哲雄（元国立歴史民俗博物館教授） ※平成25年度から



第1-4図 旧万寿寺跡発掘調査状況

第1章 調査に至る経緯と経過

第1-2表 中世大友府内町跡調査①

アミは日方寺内の調査

調査次数	調査箇所	調査年度	調査内容	事業名	調査場所	調査書名	報告発行	調査内容
府内町跡1次	大分市赤松	平成5・9年度	4210	区画整理移転事業	赤松小町	大友府内7	平成16年3月	掘削10mの調査
府内町跡2次	大分市赤松	平成5・9年度	2000	区画整理移転事業	横小路町	大友府内7	平成16年3月	
府内町跡3次	大分市赤松	平成9年度	1500	区画整理移転事業	横小路町	大友府内3	平成15年3月	10基の遺構跡の調査
府内町跡4次	大分市赤松	平成10年度	330	マンション建設	上町	大友府内4	平成14年3月	名ヶ小町の南側の一部
府内町跡5次	大分市赤松	平成11・13年度	4300	旧日倉・豊原跡地開発	豊原町	豊原町内1	平成14年3月	掘削跡の土壌
府内町跡6次	大分市赤松	平成11年度	11900	旧日倉・豊原跡地開発	今小橋町・万寿寺		平成17年3月	万寿寺の南側の一部
府内町跡7次	大分市赤松	平成12・13年度	2000	旧日倉・豊原跡地開発	今小橋町	豊原町内3	平成18年3月	第1南北街道・尾倉通
府内町跡8次	大分市赤松	平成12年度	3000	旧日倉・豊原跡地開発	横町・横の南側	豊原町内1	平成17年3月	15世紀の跡・日倉
府内町跡9次	大分市赤松	平成12・13年度	970	国道10号拡幅	横町小路町	豊原町内4-3	平成17年3月	横町小路の南側
府内町跡10次	大分市赤松	平成13・14年度	2000	旧日倉・豊原跡地開発	上町・松内寺	豊原町内5	平成18年3月	キリシタン墓
府内町跡11次	大分市赤松	平成13年度	700	国道10号拡幅	松内寺			尾倉通の西側の南側
府内町跡12次	大分市赤松	平成13年度	700	国道10号拡幅	大友館・坂町・名ヶ小橋町	豊原町内4-1	平成18年3月	大友館の東北側・礎石建物
府内町跡13次	大分市赤松	平成13年度	800	国道10号拡幅	横町	豊原町内3	平成17年3月	ウロコエメディ出土
府内町跡14次	大分市赤松	平成13年度	104	マンション建設	専入町	大友府内6	平成15年3月	井戸
府内町跡15次	大分市赤松	平成13年度	4720	スーパー建設	横町	大友府内3	平成22年3月	
府内町跡16次	大分市赤松	平成13年度	500	旧日倉・豊原跡地開発	上町	豊原町内3	平成18年3月	尾倉通東側の町屋
府内町跡17次	大分市赤松	平成14年度	1697	ポンプ場建設	横町・横町南	大友府内10	平成19年3月	横町の西側・尾倉通跡
府内町跡18次	大分市赤松	平成13年度	450	国道10号拡幅	大友館・横街	豊原町内4-2	平成18年3月	大友館と宮2世大友館
府内町跡18次改	大分市赤松	平成14年度	700	国道10号拡幅	横町	豊原町内4-2	平成18年3月	大友館の東側の町屋
府内町跡19次	大分市赤松	平成13年度	106	四車庫跡 基礎確認	横町			横街跡の南側
府内町跡20次	大分市赤松	平成14年度	2100	国道10号拡幅	万寿寺	豊原町内7	平成19年3月	遺構跡と土壌
府内町跡21次	大分市赤松	平成14年度	700	国道10号拡幅	堀之内	豊原町内2	平成17年3月	横町西側の土
府内町跡22次	大分市赤松	平成14年度	600	国道10号拡幅	横町・横町小路町	豊原町内4-3	平成18年3月	第2南北街道
府内町跡23次	大分市赤松	平成14年度	1823	遊園地建設	万寿寺			
府内町跡24次	大分市赤松	平成14年度	560	国道建設・遊園地建設	万寿寺・赤松小町			万寿寺跡の跡地調査
府内町跡25次	大分市赤松	平成15年度	580	市道拡幅	ノコギリ町	大友府内9	平成19年3月	
府内町跡26次	大分市赤松	平成15年度	2710	市道拡幅	横町	大友府内8	平成19年3月	16世紀代の礎石建物遺構
府内町跡26次改	大分市赤松	平成15年度	180	市道拡幅	上町	大友府内9	平成19年3月	
府内町跡25次改	大分市赤松	平成15年度	80	市道拡幅	上町	大友府内9	平成19年3月	16世紀後半の道路跡地調査
府内町跡25次改	大分市赤松	平成16年度	2700	市道拡幅	横外	大友府内9	平成19年3月	
府内町跡25次改	大分市赤松	平成16年度	300	市道拡幅	上町	大友府内8	平成18年3月	
府内町跡25次改	大分市赤松	平成17年度	1100	市道拡幅	上町	大友府内9	平成19年3月	
府内町跡25次改	大分市赤松	平成17年度	750	市道拡幅	上町	大友府内9	平成19年3月	
府内町跡25次改	大分市赤松	平成17年度	270	市道拡幅	上町	大友府内9	平成19年3月	
府内町跡25次改	大分市赤松	平成18年度	1250	市道拡幅	上町	大友府内9	平成19年3月	
府内町跡26次改	大分市赤松	平成15年度	200	市道拡幅	横町	大友府内12	平成20年3月	
府内町跡26次改	大分市赤松	平成17年度	1500	市道拡幅	横町・デウス堂付近	大友府内8	平成19年3月	
府内町跡26次改	大分市赤松	平成18年度	3500	市道拡幅	横町・デウス堂付近	大友府内12	平成20年3月	
府内町跡27次	大分市赤松	平成16年度	2000	市道拡幅	横町・デウス堂付近	大友府内12	平成20年3月	
府内町跡27次改	大分市赤松	平成17年度	400	市道拡幅	中町	大友府内9	平成19年3月	
府内町跡27次改	大分市赤松	平成17年度	1050	市道拡幅	中町	大友府内9	平成19年3月	
府内町跡27次改	大分市赤松	平成17年度	320	市道拡幅	中町	大友府内9	平成19年3月	
府内町跡27次改	大分市赤松	平成17年度	190	市道拡幅	中町	大友府内9	平成19年3月	
府内町跡27次改	大分市赤松	平成17年度	80	市道拡幅	中町	大友府内9	平成19年3月	
府内町跡27次改	大分市赤松	平成17年度	410	市道拡幅	中町	大友府内9	平成19年3月	
府内町跡27次改	大分市赤松	平成18年度	220	市道拡幅	中町	大友府内12	平成20年3月	
府内町跡27次改	大分市赤松	平成18年度	810	市道拡幅	中町	大友府内12	平成20年3月	
府内町跡28次	大分市赤松	平成15年度	400	国道10号拡幅	横町	豊原町内4-3	平成18年3月	大友館の東側の町屋
府内町跡29次	大分市赤松	平成16年度	1000	国道10号拡幅	万寿寺	豊原町内12	平成21年3月	万寿寺内の瓦葺法
府内町跡30次	大分市赤松	平成15年度	700	国道10号拡幅	横小路町	豊原町内14	平成20年3月	16世紀代の町屋
府内町跡31次	大分市赤松	平成15年度	500	旧大友館発掘	横町	豊原町内5	平成17年3月	遺跡
府内町跡32次	大分市赤松	平成15年度	2370	個人・市道拡幅	中町・デウス堂付近	大友府内6	平成18年3月	
府内町跡33次	大分市赤松	平成15年度	880	国庫補助 範囲確認	府内の南側付近			15・16世紀後半の大連
府内町跡33次改	大分市赤松	平成16年度	4300	個人住宅	横町の南側付近			
府内町跡34次	大分市赤松	平成15年度	700	国道10号拡幅	横町	豊原町内8	平成20年3月	万寿寺南東側の礎石・礎石建物
府内町跡35次	大分市赤松	平成15年度	600	国道10号拡幅	横小路町・万寿寺	豊原町内12	平成21年3月	横町・万寿寺
府内町跡36次	大分市赤松	平成15年度	850	市道拡幅	堀之内・ノコギリ町	豊原町内9	平成20年3月	尾倉跡・戸
府内町跡37次	大分市赤松	平成15年度	370	アパート建設	横町			
府内町跡38次	大分市赤松	平成15年度	2100	アパート建設	横町小路町			
府内町跡39次	大分市赤松	平成15年度	750	アパート建設	中町	大友府内12	平成20年3月	掘削跡小路跡・南北大溝
府内町跡40次	大分市赤松	平成16年度	190	旧日倉・豊原跡地開発	堀之内	豊原町内10	平成21年3月	溝
府内町跡41次	大分市赤松	平成16年度	3400	生垣付住宅	堀之内・ノコギリ町	豊原町内16	平成22年3月	掘削跡の周辺の道路と町屋
府内町跡42次	大分市赤松	平成16年度	400	国道10号拡幅	万寿寺	豊原町内12	平成21年3月	万寿寺跡
府内町跡43次	大分市赤松	平成16年度	400	国道10号拡幅	万寿寺	豊原町内5	平成20年3月	萬壽寺南東側の礎石・礎石建物
府内町跡44次	大分市赤松	平成16年度	290	アパート建設	横町			大友館西側の礎石
府内町跡45次	大分市赤松	平成16年度	250	アパート建設	横町			大友館西側の礎石
府内町跡46次	大分市赤松	平成16年度	500	駐車場建設	横町・コレジエ付近	大友府内12	平成20年3月	
府内町跡47次	大分市赤松	平成16年度	360	市道拡幅	万寿寺			
府内町跡48次	大分市赤松	平成16年度	70	市道拡幅	横小路	豊原町内4-1	平成18年3月	名ヶ小橋
府内町跡49次	大分市赤松	平成16年度	40	下水道用水	横町・横街	豊原町内15	平成22年3月	
府内町跡50次	大分市赤松	平成16年度	10	個人住宅 浄化槽	ノコギリ町・横街			新堀通の西側の道路と敷地
府内町跡51次	大分市赤松	平成17年度	2500	国道10号拡幅	第2南北街道・横町	豊原町内15	平成22年3月	万寿寺西北側・大友館南側
府内町跡52次	大分市赤松	平成17年度	600	国道10号拡幅	第2南北街道・大友館跡	豊原町内13	平成22年3月	第2南北街道・大友館の東側

第1-3表 中世大友府内町跡調査一覧②

A1は旧万壽寺内の調査

調査次数	調査機関	調査年度	経緯	事業名	調査場所	報告書名	報告書発行	調査内容
府内町跡33回	大分市教委	平成17年度	1960	福正国史学館	万壽寺遺構の掘	大友府内13	平成21年3月	地名等の調査
府内町跡51次	大分市教委	平成17年度	79	津和野史学館	北名寺の東			
府内町跡52次	大分県教委	平成17年度	320	住吉町史学館	毎年掘	豊後府内9	平成20年3月	地下蔵?
府内町跡56次	大分市教委	平成17年度	760	高島祐典 福岡建設	御前町			
府内町跡57次	大分市教委	平成17年度	190	市下水道	名小路跡	大友府内13	平成21年3月	
府内町跡58次	大分市教委	平成17年度	210	A7-1建設	御前町			
府内町跡59次	大分市教委	平成17年度	90	市下水道	堀町	大友府内13	平成21年3月	
府内町跡60次	大分市教委	平成17年度	1350	桜ヶ丘歴史博物館	万壽寺遺構の掘	大友府内13	平成21年3月	
府内町跡61次	大分市教委	平成17年度	280	JR大友大塚高架	燈台寺	豊後府内11	平成20年3月	
府内町跡62次	大分市教委	平成17年度	480	豊後駅舎	藤1南北街道			新設跡
府内町跡63次	大分市教委	平成18年度	900	福徳調査	堀内町			
府内町跡64次	大分市教委	平成18年度	1530	A7-1建設	御前町			
府内町跡65次	大分市教委	平成18年度	90	福徳調査	御前町			
府内町跡66次	大分市教委	平成17・18年度	480	福徳調査	御前町・大友館			
府内町跡67次	大分市教委	平成18年度	1000	国道10号拡幅	堀町・御所小路町	豊後府内15	平成22年3月	
府内町跡68次	大分県教委	平成18年度	400	国道10号拡幅	万寿寺	豊後府内12	平成21年3月	
府内町跡69次	大分市教委	平成18年度	1740	JR京浜線	御前町・奥ノ店・ノコギリ町	豊後府内16-2	平成22年3月	新築後・井戸・町屋
府内町跡70次	大分市教委	平成18年度	300	市下水道工事	米造寺			
府内町跡71次	大分市教委	平成18年度	690	JR大友大塚高架	燈台寺	豊後府内17	平成21年3月	
府内町跡72次	大分県教委	平成18年度	3000	国道10号拡幅	地名寺			名小路・地名寺跡
府内町跡73次	大分県教委	平成18年度	3290	福正・北名水幹線	万壽寺遺構の掘	大友府内13	平成21年3月	
府内町跡74次	大分市教委	平成18年度	2650	民間共同住宅建設	大越院の北端	大友府内11	平成21年3月	
府内町跡75次	大分市教委	平成18年度	870	JR京浜線	御前町・奥ノ店	豊後府内16-3	平成22年3月	第2南北街道・一民権跡
府内町跡76次	大分市教委	平成18年度	1000	国道10号拡幅	地名寺			
府内町跡77次	大分市教委	平成19年度	1030	北名京浜線	御前町・ノコギリ町	豊後府内16-4	平成22年3月	御前跡
府内町跡78次	大分市教委	平成19年度	450	国道10号拡幅	藤2南北街道	豊後府内15	平成22年3月	
府内町跡79次	大分市教委	平成19年度	560	国道10号拡幅	藤2南北街道	豊後府内15	平成22年3月	
府内町跡80次	大分市教委	平成19年度	670	国道10号拡幅	地名寺			第2南北街道・地名寺跡
府内町跡81次	大分市教委	平成19年度	400	民間共同住宅建設	中之町付近	大友府内14	平成21年3月	御前跡・井戸
府内町跡82次	大分市教委	平成20年度	610	私人住宅(確認)	名小路町			御前跡
府内町跡83次	大分市教委	平成20年度	5330	突岡(確認調査)	今高町	大友府内15	平成22年3月	藤1南北街道跡
府内町跡83次2	大分市教委	平成20年度	260	民間(高橋建設)	今高町	大友府内15	平成22年3月	藤1南北街道跡の東側部分
府内町跡84次	大分市教委	平成20年度	360	民間(南院開発)	中之町	大友府内16	平成22年3月	
府内町跡85次	大分市教委	平成21年度	380	民間(店舗建設)	中町	市街文書調査棟2010	平成22年12月	倉庫～平交、近世遺構
府内町跡85次1	大分市教委	平成21年度	800	西蔵補助(総務確認)	御前橋	同前調査棟	平成22年3月	土坑・御前・東宮溝
府内町跡86次	大分市教委	平成21年度	1000	国庫補助(総務確認)	御前橋			柱穴遺構
府内町跡86次3	大分市教委	平成21年度	2800	国庫補助(総務確認)	ノコギリ町			井戸・地名土坑
府内町跡86次4	大分市教委	平成21年度	1200	国庫補助(総務確認)	ノコギリ町			井戸・掘立柱礎物
府内町跡86次5	大分市教委	平成21年度	750	国庫補助(総務確認)	ノコギリ町			井戸
府内町跡86次6	大分市教委	平成21年度	9000	国庫補助(総務確認)	御前橋			溝、柱穴内蔵柱礎物
府内町跡86次7	大分市教委	平成21年度	3000	国庫補助(総務確認)	御前橋			柱穴遺構
府内町跡86次8	大分市教委	平成21年度	750	国庫補助(総務確認)	ノコギリ町			
府内町跡86次9	大分市教委	平成21年度	1040	国庫補助(10号拡幅)	万壽寺遺構	大友府内17	平成22年3月	万壽寺遺跡?跡礎
府内町跡88次	大分市教委	平成22年度	2020	国道10号拡幅	地名寺・第2南北街道	豊後府内17	平成25年3月	地名各々の遺跡・第3南北街道
府内町跡89次1	大分市教委	平成22年度	3060	国庫補助(総務確認)	御前橋	国史資料館2009・2010	平成23年3月	井戸・土坑・南北溝・東宮溝・掘立柱礎物
府内町跡89次2	大分市教委	平成22年度	2150	国庫補助(総務確認)	御前橋			
府内町跡89次3	大分市教委	平成22年度	1370	国庫補助(総務確認)	御前橋			
府内町跡89次4	大分市教委	平成22年度	700	国庫補助(総務確認)	御前橋			
府内町跡89次5	大分市教委	平成22年度	1080	国庫補助(総務確認)	御前橋			
府内町跡89次6	大分市教委	平成22年度	3000	国庫補助(総務確認)	御前橋			
府内町跡90次	大分市教委	平成22年度	460	民間開発	ニシ町・辻町	市街文書調査棟2010	平成22年12月	16世紀代の溝、土坑・土器
府内町跡91次	大分県教委	平成22年度	2400	国道10号拡幅	松町・藤2南北街道	豊後府内18	平成25年3月	御前は大友館跡
府内町跡92次	大分県教委	平成22年度	4000	国道10号拡幅	松町・第2南北街道	豊後府内18	平成25年3月	内溝は大友館跡
府内町跡93次	大分県教委	平成24年度	860	国道10号拡幅	松町・藤2南北街道	豊後府内18	平成25年3月	内溝は大友館跡
府内町跡94次	大分市教委	平成22年度	680	私人住宅(確認調査)	横小路町	市街文書調査棟	平成23年12月	井戸・土坑
府内町跡95次	大分県教委	平成23年度	1824	国道10号拡幅	地名寺	豊後府内19	平成25年3月	
府内町跡96次	大分県教委	平成24年度	9070	JR日豊・豊後線高松駅南側	御所小路町・堀内町	豊後府内18	平成27年3月	新築・溝・土坑
府内町跡97次	大分市教委	平成24年度	5800	国庫建設	守小路町・片瀬町	大友府内22	平成28年3月	新築・井戸・伏石・掘立柱礎物
府内町跡98次	大分市教委	平成23年度	1180	民間開発	長岡寺町・藤小路町	市街文書調査棟2012	平成24年3月	土坑・南北溝
府内町跡99次	大分県教委	平成24年度	3850	JR日豊・豊後線高松駅南側	ダイク堂南	豊後府内19	平成27年3月	新築高松溝
府内町跡100次	大分市教委	平成24年度	400	民間開発	南小路町	市街文書調査棟2013	平成25年3月	掘立柱礎物
府内町跡101次	大分市教委	平成25年度	7620	民間開発	守小路町・片瀬町	大友府内22	平成28年3月	大分市側に傾斜する溝
府内町跡102次	大分市教委	平成25年度	185	民間開発	穴打町	市街文書調査棟2014	平成26年3月	近世府内城土蔵・井戸
府内町跡103次	大分市教委	平成25年度	4340	市道中島町町環	真徳寺付近	大友府内18	平成28年3月	掘立柱礎物・井戸・石堀・土坑

第1章 調査に至る経緯と経過

第1-4表 中世大友府内町跡調査一覧③

調査次数	調査機関	調査年度	調査面積 (㎡)	事業名	調査場所	報告書名	報告書発行	調査内容
府内町跡104次	大分市教委	平成26年度	866.7	民間開発	奥之吉	大友府内19	平成26年3月	新築、土坑、石積土坑
府内町跡105次	大分市教委	平成26年度	1967.2	市道中島橋町跡	今在家町、辻之町	大友府内25	平成29年2月	新築、土坑、石積土坑
府内町跡106次	大分市教委	平成26年度	309.6	市道中島橋町跡	今在家町	大友府内25	平成29年2月	新築、掘立柱礎、土坑、遺棄物
府内町跡107次	大分市教委	平成26年度	74.2	民間開発	鶴町	大友府内30	平成27年3月	母戸、遺棄土坑
府内町跡108次	大分市教委	平成26年度	546.9	民間開発	下町	大友府内21	平成27年3月	掘立柱礎、土坑、溝
府内町跡109次	大分市教委	平成26年度	350.0	市道中島橋町跡	南小路町	大友府内21	平成29年2月	新築、母戸、土坑
府内町跡110次	大分市教委	平成26年度	8.3	民間開発	ノコギリ町	市報文調査編報2015	平成28年3月	溝
府内町跡111次	大分市教委	平成27年度	1034.9	市道中島橋町跡	小笠原町	大友府内27	平成30年3月	新築、掘立柱礎、土坑、井戸
府内町跡112次	大分市教委	平成27年度	322.4	民間開発	阪北町	大友府内23	平成28年3月	掘立柱礎、土坑、溝
府内町跡113次	大分市教委	平成27年度	294.2	民間開発	下町	大友府内24	平成28年3月	柱穴、土坑、井戸、溝
府内町跡114次	大分市教委	平成27年度	536.2	市道中島橋町跡	南小路町	大友府内27	平成30年3月	新築、土坑、溝
府内町跡115次	大分市教委	平成27年度	336.3	民間開発	鶴町	市報文調査編報2016	平成29年2月	遺棄土坑
府内町跡116次	大分市教委	平成27年度	318	民間開発	鶴町	市報文調査編報2016	平成29年2月	遺棄土坑
府内町跡117次 - 1区	大分市教委	平成27～28年度	1112.2	市道中島橋町跡	稲荷町、弥生寺	大友府内27	平成30年3月	竪立柱礎、溝、石積土坑
府内町跡117次 - 2区	大分市教委	平成27～28年度	766.6	市道中島橋町跡	稲荷町、南小路町	大友府内27	平成30年3月	竪立柱礎と南小路の交差点
府内町跡118次	大分市教委	平成27年度	10.0	個人住宅(確認調査)	御北町(大笠原町)	市報文調査編報2015	平成29年3月	大友館西側外縁跡
府内町跡119次	大分市教委	平成28年度	21.5	市道中島橋町跡	コレジオ鑑定地南側	市報文調査編報2015	平成28年3月	南北溝、柱穴
府内町跡120次 - 1区	大分市教委	平成28年度	357.3	市道中島橋町跡	小笠原町	大友府内27	平成30年3月	竪立柱礎、掘立柱礎物、かわけ土坑
府内町跡120次 - 2区	大分市教委	平成28年度	178.1	市道中島橋町跡	南小路町	大友府内27	平成30年3月	竪立柱礎、礎石礎物
府内町跡120次 - 3区	大分市教委	平成28年度	623.3	市道中島橋町跡	南小路町	大友府内27	平成30年3月	竪立柱礎、礎石礎物、石積土
府内町跡121次	大分市教委	平成28年度	428.6	市道中島橋町跡	今在家町	大友府内27	平成30年3月	母戸、遺棄土坑、土取り跡
府内町跡122次	大分市教委	平成28年度	375.9	市道中島橋町跡	稲荷町、南小路町	大友府内27	平成30年3月	新築柱礎跡
府内町跡123次	大分市教委	平成29年度	164.3	市道中島橋町跡	今在家町	大友府内27	平成30年3月	母戸、遺棄土坑
府内町跡124次	大分市教委	平成28年度	14.0	民間開発	鶴町、鑑定町跡跡	市報文調査編報2017	平成30年3月	溝状遺構
府内町跡125次	大分市教委	平成28年度	21.7	民間開発	コレジオ鑑定地	大友府内29	平成30年3月	竪立柱礎
府内町跡126次	大分市教委	平成29年度	493.1	民間開発	名々小路町	大友府内28	平成30年3月	掘立柱礎、遺棄土坑、井戸
府内町跡127次	大分市教委	平成28年度	264.5	民間開発	下町	大友府内26	平成30年3月	新築柱礎跡、母戸
府内町跡128次	大分市教委	平成29年度	15.0	民間開発	コレジオ鑑定地	市報文調査編報2018	平成31年3月	溝状遺構
府内町跡129次	大分市教委	平成29年度	135.3	民間開発	コレジオ鑑定地周辺	大友府内29	平成30年3月	掘立柱礎、土坑
府内町跡130次	大分市教委	平成29年度	262.0	公共工事	川内町	大友府内30	平成30年3月	掘立柱礎跡、竪立土坑
府内町跡131次	大分市教委	平成29年度	642.3	民間開発	まじ場外(下河原)	大友府内31	平成30年3月	掘立柱礎と土坑
府内町跡132次	大分市教委	平成29年度	205.2	民間開発	下町	大友府内26	平成30年3月	南北溝、柱穴跡
府内町跡133次	大分市教委	平成29年度	6.7	民間開発	今在家町			新築土坑
府内町跡134次	大分市教委	平成29年度	13.4	民間開発	名々小路町			石積土坑
府内町跡135次	大分市教委	平成29年度	40.0	民間開発	南小路町			大塚土坑、溝
府内町跡136次	大分市教委	平成30年度	14.6	民間開発	南小路町			新築柱礎跡、土坑、礎

第1-5表 旧万寿寺跡調査一覧

調査次数	調査機関	調査年度	調査面積 (㎡)	事業名	調査場所	報告書名	報告書発行	調査内容
旧万寿寺跡1次	大分市教委	平成17年	388.0	民間補助(経団連助)				瓦葺の溝、大型土坑
旧万寿寺跡2次	大分市教委	平成18年	270.0	民間補助(範囲確認)	堀之1町			新築柱礎跡、母戸
旧万寿寺跡3次	大分市教委	平成18年	360.0	民間補助(範囲確認)				掘立柱礎跡、土坑
旧万寿寺跡4次	大分市教委	平成19年	240.0	民間補助(範囲確認)				大塚柱礎跡、遺跡土坑
旧万寿寺跡5次	大分市教委	平成20年	185.0	民間補助(範囲確認)				大塚柱礎跡
旧万寿寺跡6次	大分市教委	平成20年	1411.0	市の委託事業	万寿寺跡跡	報告書(第1巻)	平成31年3月	瓦葺の溝、瓦葺
旧万寿寺跡7次	大分市教委	平成20年	570.0	市の委託事業	万寿寺跡跡	報告書(第2巻)	平成31年3月	瓦葺の溝、掘立柱礎跡
旧万寿寺跡8次	大分市教委	平成26年	1040.0	市の委託事業	万寿寺跡跡	報告書(第3巻)	平成31年3月	掘立柱礎跡、土坑
旧万寿寺跡9次	大分市教委	平成26年	450.0	市の委託事業	万寿寺跡跡	報告書(第4巻)	平成31年3月	柱穴の調査
旧万寿寺跡10次	大分市教委	平成27年	660.4	市の委託事業	万寿寺中央部跡	報告書(第5巻)	平成31年3月	瓦葺の溝、民間溝、井戸、柱穴跡

調査指導

- 佐藤正知(文化庁文化財部記念物課史跡部主任文化財調査官)
- 榎宜田佳男(文化庁文化財部記念物課埋蔵文化財部主任文化財調査官)
- 近江俊秀(文化庁文化財部記念物課埋蔵文化財部主任文化財調査官)
- 原田昌幸(文化庁文化財部第一課考古資料部主任文化財調査官)

横須賀倫達（文化庁文化財第一課考古資料部門文化財調査官）

保存協議・調整 大分県教育庁文化課

若杉正幸（大分県教育庁文化課長）	※平成23年度
佐藤英一（同）	※平成25年度
山口博文（同）	※平成26年度
野尻明敬（同）	※平成27年度
佐藤晃洋（同）	※平成28・29年度、29年度教育庁参事監業務
阿部辰也（同）	※平成30年度
小林昭彦（大分県教育庁文化課文化財班参事（総括））	※平成23年度
野尻明敬（同）	※平成25・26年度
三重野誠（同）	※平成27～30年度、27年度課長補佐（総括）
後藤晃一（大分県教育庁文化課文化財班副主幹）	※平成23年度
横澤 慈（同 主任）	※平成25・26年度
越智淳平（同 主査）	※平成27～29年度、平成27・28年度は同班主幹
山路康弘（同 副主幹）	※平成30年度

調査機関 大分県教育庁埋蔵文化財センター（平成23～28年度）

大分県立埋蔵文化財センター（平成29・30年度）

平成23年度（旧万寿寺跡第6次調査）

調査責任者	山口博文（大分県教育庁埋蔵文化財センター所長）
	坂本嘉弘（同 次長）
調査事務	春山義光（同 管理予算班課長補佐（総括））
	徳脇仁志（同 副主幹）
	福田 文（同 主査）
調査担当	後藤一重（同 大型事業班課長補佐（総括））
	横澤 慈（同 主任・調査担当）
	吉田 寛（同 資料管理班主幹・調査担当）

発掘調査支援業務委託

平成25年度（旧万寿寺跡第7次調査）

調査責任者	宮内克己（大分県教育庁埋蔵文化財センター所長）
	小林昭彦（同 次長兼一般事業班参事（総括））
調査事務	春山義光（同 管理予算班課長補佐（総括））
	椎原由美（同 副主幹）
	山村光広（同 主査）
調査担当	後藤一重（同 大型事業班参事（総括））
	吉田 寛（同 大型事業班主幹・調査担当）

平成26年度（旧万寿寺跡第8・9次調査及び整理作業）

調査責任者	松村洋一（大分県教育庁埋蔵文化財センター所長）
	後藤一重（同 次長兼原事業班参事（総括））

第1章 調査に至る経緯と経過

調査事務	藤田幸三 (同)	管理予算班主幹 (総括)
	椎原由美 (同)	副主幹
	山村光広 (同)	主査
調査担当	吉田 寛 (同)	受託事業班主幹・調査担当)
	宮内克己 (同)	県事業班嘱託・調査担当)
	江田 豊 (同)	資料管理班課長補佐 (総括)・整理作業総括)
	綿貫俊一 (同)	主幹・整理作業委託監理)

平成27年度 (旧万寿寺跡第10次調査及び整理作業)

調査責任者	後藤一重 (大分県教育庁埋蔵文化財センター所長)	
	小柳和宏 (同)	次長兼受託事業班参事 (総括) 兼県事業班参事 (総括)
調査事務	藤田幸三 (同)	管理予算班主幹 (総括) ※平成27年4月まで
	安藤正廣 (同)	管理予算班主幹 (総括) ※平成27年5月から
	椎原由美 (同)	副主幹
	田上 剛 (同)	主査
調査担当	吉田 寛 (同)	受託事業班課長補佐・調査担当)
	宮内克己 (同)	県事業班嘱託・調査担当)
	坂本嘉弘 (同)	受託事業班嘱託)
	江田 豊 (同)	資料管理班課長補佐 (総括)・整理作業総括)
	綿貫俊一 (同)	主幹・整理作業委託監理)
	横澤 慈 (同)	県事業班主査・整理作業担当)

平成28年度 (整理作業)

調査責任者	後藤一重 (大分県教育庁埋蔵文化財センター所長)	
	小柳和宏 (同)	次長兼県事業班参事 (総括)
調査事務	安藤正廣 (同)	管理予算班主幹 (総括)
	田上 剛 (同)	主査
	志賀恵子 (同)	主査
調査担当	吉田 寛 (同)	受託事業班課長補佐・整理担当)
	横澤 慈 (同)	県事業班主査・整理担当)
	宮内克己 (同)	県事業班嘱託・整理担当)
	坂本嘉弘 (同)	受託事業班嘱託・整理担当)
	江田 豊 (同)	資料管理班参事 (総括)・整理作業総括)
	綿貫俊一 (同)	資料管理班課長補佐・整理作業委託監理)

平成29年度 (整理作業)

調査責任者	阿部辰也 (大分県立埋蔵文化財センター所長)	
	江田 豊 (同)	副所長兼調査第一課長)
調査事務	神田 繁 (同)	総務課長)
	石丸一輝 (同)	総務課副主幹)
	切井裕史 (同)	同 主事)
調査担当	吉田 寛 (同)	調査第二課課長補佐・整理担当)

横澤 慈 (同	調査第一課主査・整理担当)
宮内克己 (同	同 嘱託)
坂本嘉弘 (同	調査第二課嘱託)
松本康弘 (同	企画普及課長・整理作業総括)
小林昭彦 (同	企画普及課専門員・整理作業委託監理)

平成30年度 (報告書作成)

調査責任者	江田 豊 (大分県立埋蔵文化財センター所長)	
調査事務	森次正浩 (総務課長)
	石丸一輝 (総務課副主幹) ※平成30年9月まで
	岡本佳子 (主査) ※教育庁教育改革・企画課併任、10月から
	堺井裕史 (主事)
調査担当	友岡信彦 (参事兼調査第一課長)
	吉田 寛 (調査第二課長・報告書作成担当)
	横澤 慈 (調査第一課主査・報告書作成担当)
	宮内克己 (嘱託・報告書作成担当)
	坂本嘉弘 (調査第二課嘱託)

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

大分はその名称が示すように、平野を丘陵や河川が分断した地形をしており、各所に小規模な平野が展開する。この中で、大分川の左岸から西側にかけて広がる小地域は、中世以降今日に至るまで、豊後国・大分県の政治経済の中心地となっている。この地域は東側を大分川が北流し、北側には別府湾が広がり、南側は高崎山系から東に延びる標高約40～30mの上野丘陵が横たわり、西側は高崎山（628m）へと続く標高80mから100mの起伏の激しい丘陵に囲まれている。

霧山万寿寺跡

大分川沿いに形成された自然堤防上

今回調査を行った霧山万寿寺跡及び、史跡大友氏遺跡を構成する大友氏館跡、そしてその周囲に展開する中世都市遺跡である中世大友府内町跡（以下、中世都市府内とする）は、東部の大分川沿いに形成された自然堤防上に位置する。府内古岡に描かれている範囲は、北は現在に比べ西側に大きく曲がっている河口部から、南は上野丘陵の先端部と大分川が接する部分にあたる。現在の標高は河口に近い北部で約4m、上流の南部地域で約6mである。

中世都市府内の北と東側は別府湾と大分川に限られるが、遺跡の南西部から西側は、試掘調査の結果や旧地形の観察から、低湿地の広がりが確認できる。この低湿地は上野丘陵の裾を巡り、北の別府湾方向に伸び、府内古岡に描かれる舟入に続いている。

中世都市府内が立地する自然堤防では、中世遺構検出面の下部に厚い砂層の堆積が確認できる。下部砂層からは縄文時代晩期から古墳時代前期の遺物が、上部からは8世紀頃の遺物が出土しており、この間に2～3m程度堆積し形成されたものと考えられる。

第2節 歴史的環境

大分川左岸地域化が豊後のなかでも政治的に特別な地域として注目されるのは7世紀後半以降である。その代表的な遺跡として、壬申の乱（672年）で大真人皇子（天武天皇）側について活躍した大分君惠尺・稚臣の墓と想定される国指定史跡内宮古墳が挙げられる。また上野丘陵の南側に位置する羽屋井戸遺跡・羽屋園遺跡からは、7世紀後半～8世紀初頭の大規模立柱建物や礎柱の倉庫群が確認されており、「評」段階の遺構と想定されている。

大分君惠尺・稚臣古宮古墳
羽屋井戸遺跡
羽屋園遺跡

龍工堀遺跡

国司館の可能性

岩屋寺石仏
元町石仏

「勝津留島四至」

「高国府」
大友頼泰

大分川沿いに河原市

万寿寺
16世紀中頃から後半に遺棄期

その後設置された豊後国府については、羽屋井戸遺跡・羽屋園遺跡の東側に「古国府」の地名が残るものの、政庁本体は未だ不明である。しかし、上野丘陵東端部で調査された龍工堀遺跡では9世紀から10世紀前半にかけての庇をもつ掘立柱建物や築地層跡、道路状遺構が検出され、その配置から、国司館の可能性が指摘されている。この遺跡の東北部、上野遺跡群では8～9世紀にかけての版築基壇をもつ瓦葺の礎石建物が建てられている。さらに、この丘陵の東端部の南側崖面に岩屋寺石仏、東側崖面に元町石仏が刻まれており、平安時代後期の藤原様式の作風とされる。

11～13世紀代の状況は考古学的には不明な点が多いが、文献からの推量が可能である。「宇佐神領大鏡」には天喜元年（1063）、康平2年（1069）、承保4年（1077）に「勝津留島四至」の名称が登場する。その範囲は上野丘陵東部から北に広がる沖積地にあたり、16世紀に大友館が置かれる場所が含まれる。その中で天喜元年の申文に西の限りとして「高岡府」の地名が登場する。13世紀中頃に守護職として大友頼泰が豊後国に下向した際、「高（隆）国府」の刺讓を強引に求めており、「高国府」「勝津留島」については守護所の場所と関わる重要な問題となっている。さらに、この申文の中に「東限北廻り、二方市河」とあり、すでに大分川沿いに河原市があり、府内古岡に描かれた「府内」の初元的な位置づけがなされている。

14世紀代に入り、徳治元年（1306）に万寿寺が建立されると、この地域での本格的な町づくりが開始される。中世大友府内町跡の発掘調査で確認される遺構はこの時期からで、以降16世紀中頃か

ら後半に最盛期を迎え、17世紀初頭に府内城下町に移転するまで継続する。

この時期の遺跡は、府内周辺でも多く確認されている。大分川の右岸にある下郡遺跡群や津守・片島地区でも16世紀の方形館や方形区割りをもつ遺構が確認されている。独立性の強い守岡丘陵には山城的な存在である守岡遺跡が位置する。一方、上野丘陵には土塁と堀を廻らす上原館があり、その南の古国府地区には町口遺跡がある。西方の高崎山城は大友氏の詰城として知られている。

16世紀後半に隆盛を極めた大友氏も、天正6年(1578)に日向国耳川の合戦で島津氏に大敗を喫すると次第にその勢力を失い、天正14年(1586)には島津氏が府内に侵入する。この時中世都市府内は灰燼に帰したとされ、中世大友府内町跡の発掘調査でもこの時に形成されたと考えられる厚い焼土層が各地で確認できる。万寿寺は16世紀にはすでに衰退していたようであるが、この時に堂舎を残らず失ったとされる。その後大友氏は豊後一國を安堵されるが、文禄2年(1593)に朝鮮出兵の際の失態を咎められ、豊後を除国される。豊後は織入地として豊臣系大名により分割支配されることとなり、府内には福原直高が入封する。福原氏は慶長2年(1597)から新たに府内城の築城を開始し、これに伴い中世以来の町も移転したことで中世都市府内は終焉を迎える。その後、江戸幕府が開かれると、府内には竹中重利、日根野吉明を経て松平忠昭が入り、以後、大給松平氏が治めて幕末に至る。現在の万寿寺は大分市金池町に所在するが、これは寛永年間に再興されたものである。

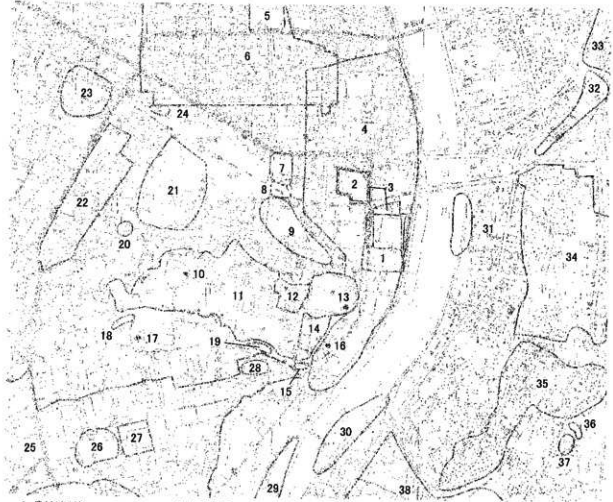
上原館
高崎山城

島津氏が府内に侵入

豊臣系大名により分割支配
府内城の築城

大給松平氏

寛永年間に再興



- | | | | |
|---------------|----------------|--------------|-------------------|
| 1 萬山万寿寺跡 | 11 上野遺跡群 | 21 大運遺跡群 | 31 大分川河川敷4遺跡 |
| 2 大友館跡 | 12 上野館跡 | 22 大運倉庫跡 | 32 伏六分遺跡 |
| 3 大友支遺跡(国史跡) | 13 六郎館遺構 | 23 東田倉庫跡 | 33 伏遺跡 |
| 4 中世大友府内町跡 | 14 竜王館遺跡 | 24 米田倉庫跡 | 34 下郡遺跡群 |
| 5 府内城跡(東・市史跡) | 15 岩屋寺石仏(国史跡) | 25 石原寺遺跡群 | 35 茅田遺跡 |
| 6 府内城跡(南・市史跡) | 16 大分元町石仏(国史跡) | 26 野原館遺跡 | 36 海軍第六砲台古蹟群(市史跡) |
| 7 府内城跡(西・市史跡) | 17 金池館跡(市史跡) | 27 金剛宝戒寺跡 | 37 岩屋遺跡 |
| 8 府内城跡(北・市史跡) | 18 南太平寺横穴墓群 | 28 岩屋寺遺跡 | 38 津守遺跡 |
| 9 金池館跡 | 19 岩屋寺横穴墓群 | 29 大分川河川敷1遺跡 | |
| 10 上野町遺跡 | 20 東大運遺跡 | 30 大分川河川敷3遺跡 | |

第2-1図 萬山万寿寺跡・中世大友府内町跡と周辺の遺跡

第3章 旧万寿寺跡第6次調査

第1節 調査の経過と概要

都市計画道路
庄の原佐野線

1411㎡

元町工区

立体交差構造

本調査の依頼

文化財保護法
第99条第1項

発掘調査の施行
を通知

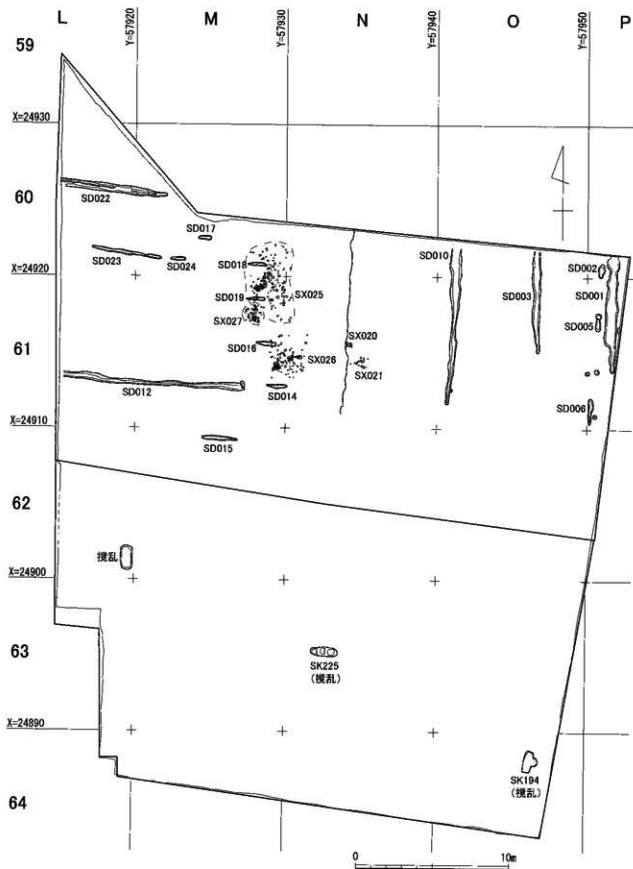
都市計画道路庄の原佐野線(元町工区)に伴う旧万寿寺跡第6次発掘調査は、大分県土木建築部大分駅周辺総合整備事務所の依頼を受けて大分県教育庁埋蔵文化財センターが実施した。調査地点は大分市大字大分4301-1で、発掘調査面積は1411㎡である。都市計画道路庄の原佐野線のうち、起点となる大分市庄の原から国道10号に接続する大分市六坊南町間は平成20年9月に供用を開始している。元町工区はこの国道10号から大分川を渡って対岸の下郡に接続する全長1.2kmの区間で、旧万寿寺跡第6次調査は、この元町工区の起点となる国道10号に接続する地点である(第3-1図)。国道10号との接続は立体交差構造となることから、当該調査区は橋台等構造物の設置が避けられず、従って基本的には調査区全体を完全に掘り上げることとし、記録によって遺跡の保存を図るという方針で調査に着手した。

本調査の依頼は平成23年2月17日付で大分駅周辺総合整備事務所長から県教育庁文化課長へ提出され、関係機関等との協議を経て平成23年2月23日付で本調査依頼の受諾と実施計画、所要経費見積を回答した。平成23年5月30日には県教育庁文化課へ文化財保護法第99条第1項に基づく発掘調査の施行を通知するとともに、大分市教育委員会及び大分中央警察署へ発掘調査の実施の通知と調査への協力を依頼した。

発掘調査の実施にあたり、第1章で述べたように機械掘削・人力掘削・記録作成・現場管理及び



第3-1図 旧万寿寺跡第6次調査の位置 (1/15,000)



第3-2図 旧万寿寺跡第6次調査近世面遺構配置圖 (1/250)

労務管理等の業務は支援業務として民間調査組織に一括して委託することとし、平成23年5月27日に入札を執行した。支援業務では調査面積及び調査期間から作業班を2班編成とし、調査体制は業務を受託した株式会社九州文化財研究所の調査技師2名（越知睦和・稲富陽子）、同調査助手2名（尾ノ上尚平・小田貴志）、発掘作業員1440名を基本とし、2名の埋蔵文化財センター調査員の指揮監督のもとに調査を遂行した。

現地での発掘作業は平成23年6月15日から着手した。排土置き場を確保するため調査区を1区と2区に分け、まずは重機を使用して2区の表土除去を行った。6月24日から作業員を投入しての人力掘削を開始し、包含層掘削及び遺構検出・遺構発掘作業を行った。空中写真撮影は8月4日と9月27日に実施し、9月30日に2区全体の実測作業を終了した。10月3日からは2区の埋戻しと、反転して1区の表土除去を行い、10月7日から1区の人力掘削を開始した。10月25日と12月6日に空中写真撮影を行い、12月9日に人力掘削を完了、12月12日に1区の実測作業を終了した。この間、12月4日に発掘調査成果を一般に公開する現地説明会を開催し、約200人の参加者があった。また、大分市内中学生及び県立高校の職業体験や大分大学インターンシップ、小学校・中学校教諭初任者研修の一環として体験発掘の受入を行った。また、県立芸術文化短期大学及び県立爽風高校の授業の一環として現場見学があった。埋戻しは12月13日から行い、12月15日に一旦埋戻しを完了した。12月19日に大分駅周辺総合整備事務所と埋蔵文化財センターの間で埋戻し状況の確認と協議を行い、事業側からの依頼により調査地内の埋戻し土の整形作業を平成24年1月11・12日に実施した。その完了をもって本調査を終了した。

現地説明会を開催

体験発掘の受入

発掘調査の終了を通知
埋蔵文化財発見通知を提出

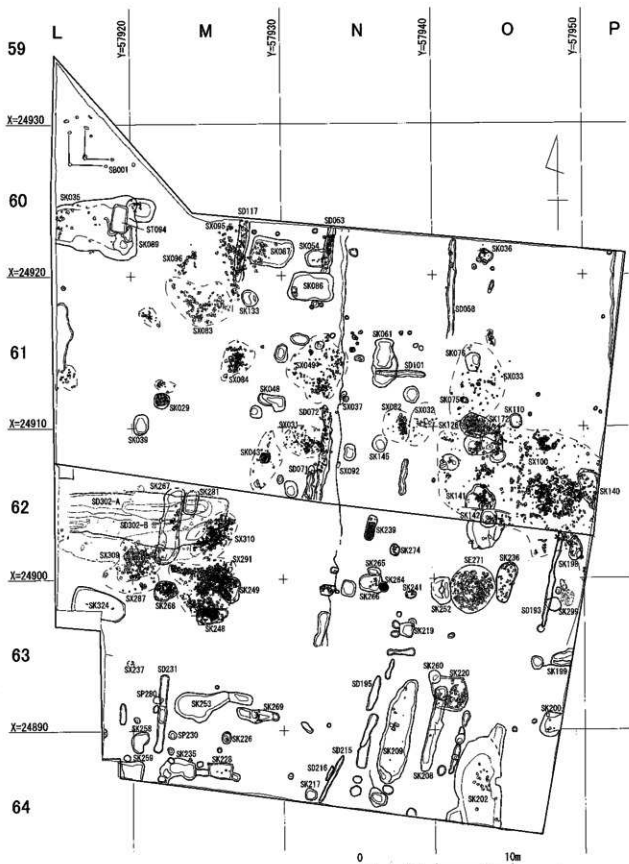
本調査終了をうけ、平成24年1月16日付けで県教育庁文化課へ発掘調査の終了を通知するとともに、大分中央警察署長あて埋蔵文化財発見通知を提出した。平成24年2月24日には支援業務委託の受託者から業務報告書及び調査記録等調査成果品の提出を受け、完了検査をもって支援業務委託を完了した。

上記調査期間中、県土木建築部大分駅周辺総合整備事務所、大分市教育委員会、大分市元町自治会から多大な御協力を頂いた。また、第1章に示す関係者以外に以下の方々の来訪があり、調査への教示・助言を頂いた（所属は調査当時）。

塔鼻光司・坪根伸也・高島 豊・池邊千太郎・塩地潤一・五十川雄也・長 直信（大分市教育委員会）、浦井直幸（中津市教育委員会）、栗田勝弘・高橋信武・田中裕介（大分県教育庁埋蔵文化財センター）、高橋 徹・総貫俊一（大分県立歴史博物館）、鹿毛敏夫（国立新居浜高等専門学校）、堂込秀人（鹿児島県埋蔵文化財センター）、藤木 聡（宮崎県立西都原考古博物館）、木村幾多郎、植島隆二（大分市立城南中学校）、甲斐寿義（大分市立城東中学校）



第3-3図 旧万寿寺跡第6次調査中世面濶配置図 (1/250)



第3-4図 旧万寿寺跡第6次調査遺構配置図(上層 1/250)



第3-5図 旧万寿寺跡第6次調査遺構配置図(下層 1/250)

第3-1表 旧万寿寺跡第6次調査遺構一覧表①

遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁	
06-SD001	S-001	溝	2区	近世以降	耕作痕	28	
06-SD002	S-002	溝	2区	近世以降	耕作痕	28	
06-SD003	S-003	溝	2区	近世以降	耕作痕	28	
06-SD005	S-005	溝	2区	近世以降	耕作痕	28	
06-SD006	S-006	溝	2区	近世以降	耕作痕	28	
06-SD010	S-010	溝	2区	近世以降	耕作痕	28	
06-SD012	S-012	溝	2区	近世以降	耕作痕	28	
06-SD013	S-013	溝	2区	近世以降	耕作痕	28	
06-SD014	S-014	溝	2区	近世以降	耕作痕	28	
06-SD015	S-015	溝	2区	近世以降	耕作痕	28	
06-SD016	S-016	溝	2区	近世以降	耕作痕	28	
06-SD017	S-017	溝	2区	近世以降	耕作痕	28	
06-SD018	S-018	溝	2区	近世以降	耕作痕	28	
06-SD019	S-019	溝	2区	近世以降	耕作痕	28	
06-SX021	S-021	遺物集中	2区	N61	近世物類?	31	
06-SD022	S-022	溝	2区	近世以降	耕作痕	28	
06-SD023	S-023	溝	2区	近世以降	耕作痕	28	
06-SD024	S-024	溝	2区	近世以降	耕作痕	28	
06-SX025	S-025	遺物集中	2区	M60・N60・M61・N61	近世物類?	32	
06-SX026	S-026	遺物集中	2区	M61・N61	近世物類?	33	
06-SX029	S-029	土坑	2区	M61	Ⅲ期(16世紀末葉)	火災処埋土坑	38
06-SX031	S-031	礫石	2区	N62	Ⅲ期(16世紀後葉)以降		115
06-SX032	S-032	遺物集中	2区	N61・N62	Ⅲ期(14世紀末～15世紀前半)以降	地形の平瓦2点	115
06-SX033	S-033	遺物集中	2区	O61	V期(16世紀前半)以降		115
06-SX035	S-035	土坑	2区	L60・M60	Ⅲ期(16世紀末葉)		39
06-SX036	S-036	土坑	2区	O60	不明		41
06-SX037	S-037	礫石状石材	2区	N61	V期(16世紀前半)?		36
06-SX039	S-039	土坑	2区	M61・M62	Ⅲ期(16世紀後葉)以降		41
06-SX043	S-043	土坑	2区	M62	Ⅲ期(16世紀後葉)以降	溝尻岩と石灰の玉砂利	41
06-ST045	S-045	土坑墓	2区	L61	Ⅲ期(14世紀中頃～末)		339
06-SX048	S-048	土坑	2区	M61・N61	Ⅲ期(16世紀末葉)か		42
06-SX049	S-049	遺物集中	2区	N61	Ⅲ期(16世紀後葉)以降		118
06-SP051	S-051	ピット	2区	N61			141
06-SD053	S-053	溝	2区	N60	Ⅳ～Ⅴ期(15世紀中頃～16世紀前半)		89
06-SX054	S-054	土坑	2区	N60	Ⅳ期(15世紀中頃～後半)	大内系白色土磨器皿	43
06-SD058	S-058	溝	2区	O60・O61	不明		89
06-SP060	S-060	ピット	2区	N61			141
06-SX061	S-061	土坑	2区	N61	Ⅱ～Ⅲ期(14世紀中頃～15世紀前半)		45
06-SP069	S-069	ピット	2区	N61			140
06-SD071	S-071	溝	2区	N62	Ⅲ期(16世紀後葉)以降		90
06-SD072	S-072	溝	2区	N61・N62	Ⅲ期(16世紀後葉)以降		90
06-SX075	S-075	土坑	2区	O61	Ⅳ期(15世紀中頃～後半)		46
06-SX076	S-076	土坑	2区	O61	Ⅲ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀後半)		47
06-SX082	S-082	礫石	2区	N61・N62	Ⅲ期(14世紀末～15世紀前半)以降		119
06-SX083	S-083	遺物集中	2区	M61	Ⅳ～Ⅴ期(15世紀中頃～16世紀前半)		119
06-SX084	S-084	遺物集中	2区	M61	Ⅲ期(16世紀後葉)		124
06-SX086	S-086	土坑	2区	N60・N61	Ⅳ～Ⅴ期(15世紀中頃～16世紀前半)		48
06-SX087	S-087	土坑	2区	M60・N60	Ⅳ～Ⅴ期(15世紀中頃～16世紀前半)		49
06-SX089	S-089	土坑	2区	L60・M60	I～Ⅲ期(14世紀)	土師器類	49
06-SD090	S-090	溝	1・2区	L59～L・M64	Ⅲ期(14世紀末～15世紀前半)	07-SD090に続く	253
06-SX092	S-092	礫石状石材	2区	N62	V期(16世紀前半)?		36
06-SD093	S-093	溝	2区	M61・62～O61・62	Ⅲ期(14世紀末～15世紀前半)	06-SD130と同一か?	258
06-ST094	S-094	土坑墓	2区	L60	Ⅲ期(16世紀後葉)	伸張祭の上築基	113
06-SX095	S-095	礫石	2区	M60・M61	V期(16世紀前半)以降		127
06-SX096	S-096	礫石	2区	M60	Ⅳ～Ⅴ期(15世紀中頃～16世紀前半)		128
06-SX097	S-097	土坑	2区	M60・M61	Ⅲ期(15世紀中頃～後半)	瓦の廃棄土坑、焼熱した瓦を含む	150
06-SX100	S-100	遺物集中	1・2区	O62・P62	Ⅲ期(16世紀末葉)	瓦溜り、鬼瓦・礫土等出土	128

第3章 旧万寿寺跡第6次調査

第3-2表 旧万寿寺跡第6次調査遺構一覧表②

遺構番号	回遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁	
06-SD101	S-101	溝	2区	N61	Ⅱ～Ⅲ期 (14世紀中頃～15世紀前半)		90
06-SD106	S-106	溝	2区	N60・N61	Ⅰ～Ⅱ期 (14世紀)		261
06-SK110	S-110	土坑	2区	O61・O62	Ⅳ期 (15世紀中頃～後半)		90
06-SD117	S-117	溝	2区	M60・M61	Ⅳ～Ⅴ期 (15世紀中頃～16世紀前半)		52
06-SK120	S-120	七坑	2区	O61	不明		197
06-SB002	S-122	掘立柱建物	2区	O60	Ⅳ期 (15世紀中頃～後半) 以前		143
06-SK128	S-128	土坑	2区	O61・O62	Ⅳ期 (15世紀中頃～後半)		50
06-SA001	S-127	横列	2区	N61	Ⅰ～Ⅱ期 (14世紀)?		145
06-SA001	S-128	横列	2区	N61	Ⅰ～Ⅱ期 (14世紀)?		145
06-SK129	S-129	土坑	2区	O61	Ⅱ期 (14世紀中頃～末)		199
06-SD130	S-130	溝	2区	L61	Ⅲ期 (14世紀末～15世紀前半)	06-SD093と同か?	263
06-SK131	S-131	土坑	1・2区	L・M61～M・N63	Ⅴ期 (16世紀前半)	大内廟堂土坑、義兵岩切石多数	200
06-SK133	S-133	土坑	2区	M61	Ⅴ期 (16世紀後半) 以降		52
06-SK134	S-134	遺物集中	2区	M61	Ⅳ期 (15世紀中頃～後半)		342
06-SP136	S-136	下層ビット	2区	O61			343
06-SA001	S-139	横列	2区	N61	Ⅰ～Ⅱ期 (14世紀)?		145
06-SK140	S-140	土坑	2区	O62・P62	Ⅴ期 (16世紀後半)		53
06-SK141	S-141	土坑	2区	O62	Ⅴ期 (16世紀末頃)		94
06-SK142	S-142	土坑	2区	O62	Ⅴ期 (16世紀末頃)		54
06-ST143	S-143	土坑墓?	2区	L61	Ⅰ～Ⅲ期 (14世紀)		360
06-ST144	S-144	土坑墓?	2区	L61	Ⅰ～Ⅱ期 (14世紀)	奈良火鉢	341
06-SK145	S-145	土坑	2区	N62			55
06-SK147	S-147	土坑	1区	O61・O62	Ⅳ期 (15世紀中頃～後半以降)		234
06-SA001	S-148	ビット	2区	N61	Ⅰ～Ⅱ期 (14世紀)?		145
06-SP152	S-152	ビット	2区	N61			343
06-SB002	S-153	掘立柱建物	2区	N60	Ⅳ期 (15世紀中頃～後半) 以前		143
06-ST159	S-159	土坑墓?	2区	L61	Ⅰ～Ⅱ期 (14世紀)		341
06-SP161	S-161	下層ビット	2区	N61			343
06-SB002	S-162	掘立柱建物	2区	O60	Ⅳ期 (15世紀中頃～後半) 以前		143
06-SK164	S-164	土坑	2区	O61	Ⅲ期 (14世紀末～15世紀前半) 以降		235
06-SD165	S-165	溝	2区	O60・O61・P61	Ⅰ期 (14世紀前半)		265
06-SK166	S-166	土坑	1・2区	O62・O63	Ⅲ期 (14世紀末～15世紀前半) 以前		236
06-SB167	S-167	井戸	2区	O62・P62	Ⅳ期 (15世紀中頃～後半) 以前?		325
06-SP169	S-169	下層ビット	2区	O62			343
06-SA001	S-171	横列	2区	N61	Ⅰ～Ⅱ期 (14世紀)?		145
06-SK173	S-173	土坑	2区	O62	Ⅳ期 (15世紀中頃～後半)		55
06-SD184	S-184	溝状遺構	2区	M60・M61	Ⅲ期 (15世紀前半)		267
06-SK185	S-185	土坑	2区	N62	Ⅴ期 (16世紀後半)		236
06-SD193	S-193	溝	1区	O62・O63	近世以降	耕作痕か	94
06-SK194	S-194	竪柱遺構	1区	O64	近現代	竪柱残	26
06-SD196	S-196	溝	1区	N63	近世以降	耕作痕か	94
06-SK198	S-198	土坑	1区	O62	Ⅴ期 (16世紀末頃)		61
06-SK199	S-199	土坑	1区	O63	Ⅲ期 (16世紀末頃)		61
06-SK200	S-200	土坑	1区	O63・O64	Ⅱ期 (14世紀中頃～末)		63
06-SK202	S-202	土坑	1区	O64	Ⅲ期 (14世紀中頃～末)		63
06-SK208	S-208	土坑	1区	N・O63～N・O64	近世以降	耕作痕か	65
06-SK209	S-209	土坑	1区	N63・N64	近世以降	耕作痕か	66
06-SD215	S-215	溝	1区	N64	近世以降	耕作痕か	98
06-SD216	S-216	溝	1区	N64	近世以降	耕作痕か	98
06-SK217	S-217	土坑	1区	N64	不明		141
06-SP218	S-218	ビット	1区	N64			67
06-SK219	S-219	土坑	1区	N63	不明		141
06-SK220	S-220	土坑	1区	N63・O63	Ⅳ～Ⅴ期 (15世紀中頃～16世紀前半)		67
06-SD221	S-221	溝	1区	L63～O63	Ⅳ期 (15世紀中頃～後半)	大内系白色土層露出	267
06-SK226	S-226	土坑	1区	M64	Ⅲ期 (15世紀中頃～後半) 以降		69
06-SK228	S-228	土坑	1区	M64	Ⅰ期 (14世紀前半)		70
06-SP230	S-230	上層ビット	1区	M64			141

第3-3表 旧万寿寺跡第6次調査遺構一覧表①

遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
06-SD231	S-231	溝	1区	M63・M64	V期(15世紀中頃～後半)以降	102
06-SK235	S-235	土坑	1区	M64	II期(14世紀中頃～末)以降	72
06-SK236	S-236	土坑	1区	O62・O63	IV期(15世紀中頃～後半)	74
06-SX237	S-237	銭貨集中	1区	L63	IV期(15世紀中頃～後半)以降	銭貨13点の集中
06-SK239	S-239	土坑	1区	N62	III期(14世紀末～15世紀前半)以降	74
06-SP240	S-240	ピット	1区	N63		141
06-SK241	S-241	土坑	1区	N63	VI期(16世紀後半)	祭祀土坑
06-SK248	S-248	土坑	1区	M63	III期(15世紀末)	火災処理土坑
06-SK249	S-249	土坑	1区	M62・M63	III期(15世紀末)	火災処理土坑
06-SK252	S-252	土坑	1区	O62・N63・O63	V期(16世紀前半)以降	80
06-SK253	S-253	土坑	1区	M63	V期(16世紀前半)以降	80
06-SP256	S-256	ピット	1区	M63		141
06-SK258	S-258	土坑	1区	L64・M64	III期(14世紀末～15世紀前半)以降	80
06-SK259	S-259	土坑	1区	L64・M64	III期(14世紀末～15世紀前半)以降	81
06-SK260	S-260	土坑	1区	N63・O63	IV～V期(15世紀中頃～16世紀前半)	68
06-SK264	S-264	土坑	1区	N63	IV期(15世紀中頃～後半)以降か?	81
06-SK265	S-265	土坑	1区	N62	IV期(15世紀中頃～後半)以降か?	81
06-SK266	S-266	土坑	1区	N62・N63	IV期(15世紀中頃～後半)以降か?	81
06-SK267	S-267	土坑	1区	M62	V期(16世紀末)	
06-SK268	S-268	土坑	1区	M63	III期(15世紀末)	火災処理土坑
06-SK269	S-269	土坑	1区	M63	IV期(15世紀中頃～後半)	86
06-SE271	S-271	井戸	1区	O62・O63	III期(15世紀中頃～後半)以降	111
06-SK272	S-272	土坑	1区	N64	I期(14世紀前半)	236
06-SK273	S-273	土坑	1区	N64	I～II期(14世紀前半～末)	237
06-SK274	S-274	土坑	1区	N62	III期(14世紀末～15世紀前半)以降	86
06-SK284	S-284	土坑	1区	M62	V期(16世紀末)	87
06-SD282	S-282	溝	1区	N62・O62	I～II期(14世紀)	297
06-SE283	S-283	井戸	1区	N62	占代?	327
06-SP286	S-286	土層ピット	1区	O63		141
06-SX287	S-287	遺物集中	1区	L・M62～L・M63	III期(16世紀末)	貨幣系足環
06-SF288	S-288	溝	1区	M・N63～M・N64	III期(14世紀末～15世紀前半)	07-SD288に続く
06-SX291	S-291	遺物集中	1区	M62・M63	V期(16世紀末)	火災処理遺構
06-SK299	S-299	土坑	1区	O63	V期(16世紀前半)以降	87
06-SX300	S-300	銭貨集中	1区	N64	—	銭貨5点の集中
06-SD302A	S-302A	溝	1区	L62・M62	VI～VII期(16世紀後半～末)	102
06-SD302B	S-302B	溝	1区	L62・M62	VI期(16世紀後半)	102
06-SK303	S-303	土坑	1区	M63・M64	IV期(15世紀中頃～後半)以前	古代の遺構か?
06-SK306	S-306	土坑	1区	N64	不明	238
06-SX309	S-309	遺物集中	1区	L62・M62	VI～VII期(16世紀後半～末)	137
06-SX310	S-310	遺物集中	1区	M62	VI～VII期(16世紀後半～末)	貨幣系土師器の多量発見
06-SK311	S-311	土坑	1区	O62・O63	IV期(15世紀中頃～後半)以降	240
06-SF312	S-312	井戸	1区	N・O62～N・O63	IV期(15世紀中頃～後半)	327
06-SK313	S-313	土坑	1区	O63	III期(14世紀末～15世紀前半)	鬼瓦
06-SK314	S-314	土坑	1区	N64	III期(14世紀末～15世紀前半)以前	242
06-SK317	S-317	土坑	1区	N63	I～IV期(14～15世紀)	243
06-SE322	S-322	井戸	1区	O62・O63	IV期(15世紀中頃～後半)	土坑と重なる
06-SK323	S-323	土坑	1区	O63	III～IV期(14世紀末～15世紀後半)	247
06-SK324	S-324	土坑	1区	L63	III期(14世紀末～15世紀前半)以降	88
06-SK326	S-326	土坑	1区	M64	III期(14世紀中頃～末)以前	247
06-SK328	S-328	土坑	1区	O62・P62	III～IV期(14世紀末～16世紀後半)	248
06-SK329	S-329	土坑	1区	O63	III期(14世紀中頃～末)	248
06-SE330	S-330	井戸	1区	N63・O63	古代(9世紀後半～10世紀前半)	古代の「石資料」
06-SK333	S-333	土坑	1区	O64	I期(14世紀前半)以前	239
06-SK335	S-335	土坑	1区	O64	古代(9世紀)	緑釉陶器、黒色土師、靑土器
06-SP338	S-338	柱穴	1区	O63	古代か	343
06-SD345	S-345	溝	1区	L62・L63・M63	III期(14世紀末～15世紀前半)	320
06-SD301	-	礎石建物	2区	L60・M60	VI～VII期(16世紀後半～末)	「万寿寺西之監帳」に關係?

第2節 調査区の遺構と層序

第3-2~3-5図は旧万寿寺跡第6次調査の遺構配置図である。遺構は大きく近世以降のものと中世のものに分けられる。中世の遺構は後述する第4層を除去した時点で検出できたものと、その下部の4'層や5層を掘り下げる過程で確認したもの、地山面で検出したものがあり、そのすべてを示したものが第3-3図である。包含層の掘り下げ中に確認できるものもあるためすべてを同一の面として捉えることは難しいが、ここでは遺構の前後関係や出土遺物から想定される年代を基に、便宜上、中世面の上層遺構(第3-4図)と下層遺構(第3-5図)に大別して報告する。また、調査区には旧国土地標(日本測地系)に基づく10m方眼の調査グリッドを設定した。このグリッドは中世大友府内町跡で共通して設定しているもので、旧万寿寺跡第6次調査区におけるグリッドは東西方向にL~Pのアルファベット、南北方向に59~64のアラビア数字を配し、両者を組み合わせてグリッドの呼称とした。

次に旧万寿寺跡第6次調査の層序を第3-6~3-9図に示す。

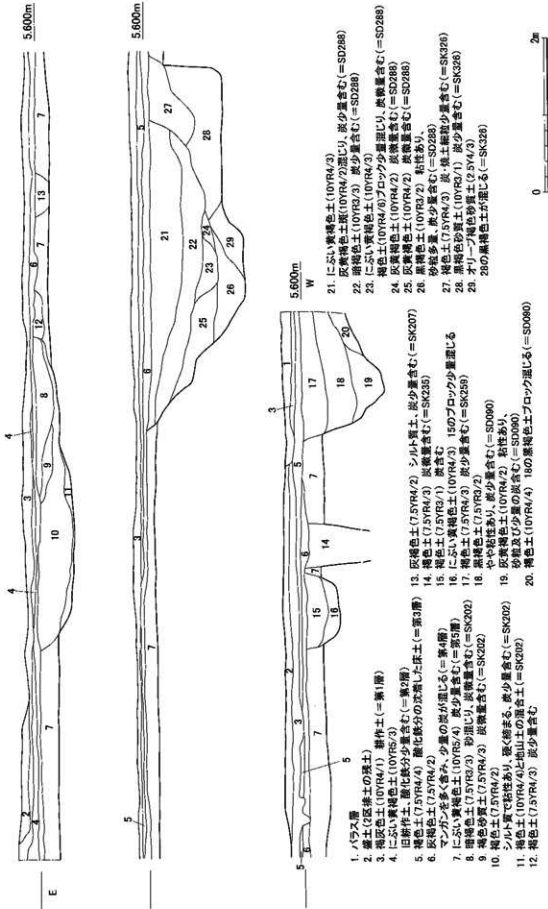
第1層は褐色の耕作土で、上部は耕起されて脆い。第2層はにぶい黄褐色の旧耕作土で、少量の酸化鉄分を含む。第3層は褐色の床土層である。酸化鉄分の沈着が著しく、全体に硬く締まる。近世の遺物を包含し、この層の下面で近世以降の耕作溝等の遺構を検出した。第4層は灰褐色土で、マンガンを多く含み、少量の炭が混じる。中世~近世初頭の遺物を包含する。層厚は10~20cmである。また、調査区の西側では下部にマンガンを多く含む暗褐色土が認められる。灰褐色土と同質であり、漸次的に色調が変化するため4層として扱った。第4'層は調査区西半部を中心に、最大で約60cmと比較的厚く堆積する。暗褐色の砂質土で炭を含む。中世の遺物を多く含む整地層である。第5層はにぶい黄褐色土で、少量の炭を含む。層厚は10cm程度で薄く、古代から中世の遺物を包含するが、その量は多くはない。中世の遺構がいくつも重複して掘り込まれる場所では堆積が失われほとんど見られない。基盤層は硬く締まる褐色砂質土である。部分的に第5層との間にシルト質の褐色土の堆積が認められるが、基盤への漸位層と考えられる。中世の遺構は第4層の下面から基盤層上面の間で検出される。

以上が基本となる層序である。東西方向では調査区の東部、N60グリッドの中央付近からO60グリッドの中央付近まで、南北方向ではN60・O60グリッドからN64・O64グリッドまでは比較的基盤が安定し、土層の堆積も薄い。対して調査区の西側、M60・N60グリッドからM63・N63グリッド、O61グリッド東半からO63グリッドにかけては複雑な堆積が認められる。これはこの範囲に大型の土坑06-SK097や06-SK131、溝状遺構、井戸などが複雑に掘り込まれるため地盤が不安定であることと無関係ではなく、これら遺構の埋没後にできた窪地を整地するために、遺物や礫とともに土を入れて埋めたためと考えられる。これらの場所で遺物集中ブロックが多くみられるのはそのためである。

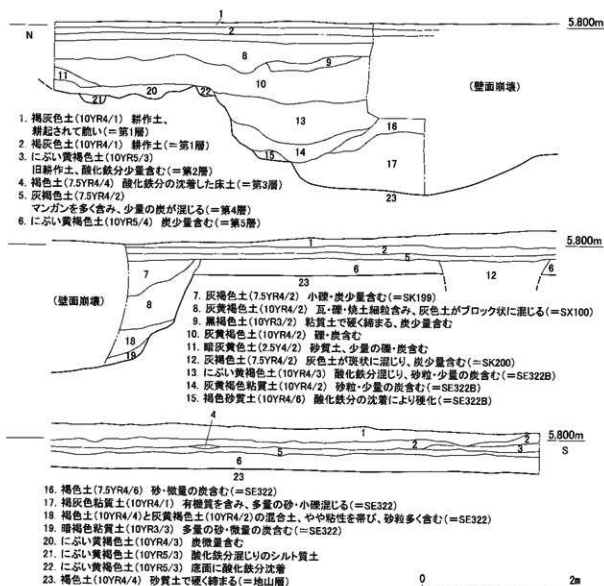
旧国土地標
(日本測地系)

近世以降の
耕作溝
中世~近世
初頭の遺物
を包含

整地層
古代から中世
の遺物を包含



第3-6図 旧万寿寺跡第6次調査区土層断面図(1区南壁 1/50)



第3-7図 旧万寿寺跡第6次調査区土層断面図(1区東壁 1/50)

第3節 近世以降の遺構と遺物

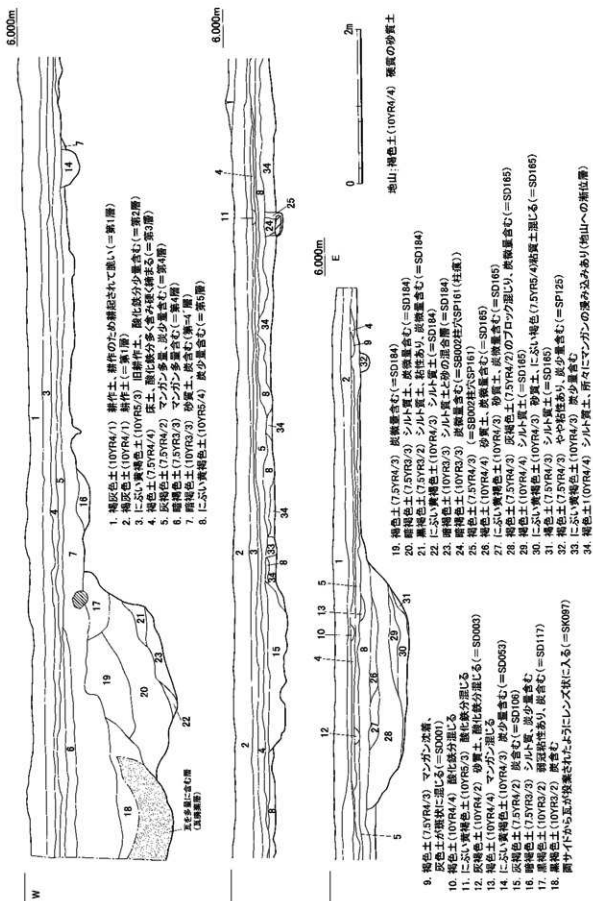
近世以降の耕作層
小規模な遺物集中ブロック
近世初頭の遺物を含む

旧万寿寺跡第6次調査で最初に確認される遺構は、第4層の上面で検出された近世以降の耕作層と考えられるものである。また、一部で小規模な遺物集中ブロックが確認された。第4層は唐津や初期伊万里など近世初頭の遺物を含むことから、これら遺構は確実に近世以降のものであるが、遺構の詳細な年代は明らかにできない。また、電柱に伴う攪乱も3基確認された。ここから出土した遺物についてもここで扱う。

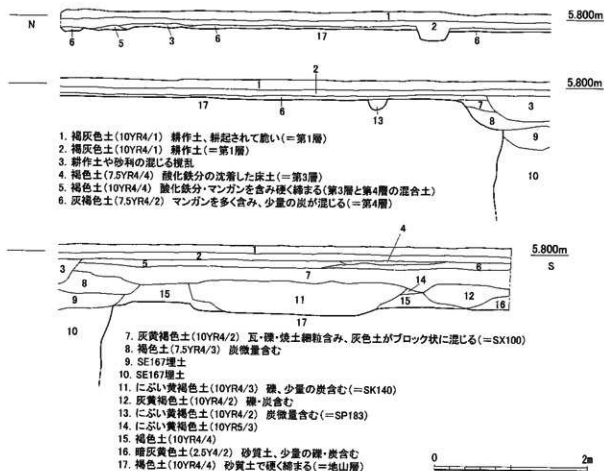
06-SK194 (攪乱) 出土遺物 (第3-10図)

06-SK194は1区のO64グリッドで検出した電柱の攪乱で、古代から中世の遺物が出土した。1は底部に高台の付く土師器碗である。内外面は横位の粗いミガキを施す。2は内面を撫して黒色に仕上げた黒色土器A類碗である。内外面ともに粗いミガキが認められる。これらは古代の遺物である。3は東播系須恵器甕の肩部付近の破片である。外面には方向を変えて付けられた綾杉文ふうのタケキ目がみられる。

東播系須恵器
器表



第3-8図 旧万寿寺跡第6次調査区土層断面図(2区北壁 1/50)



第3-9図 旧万寿寺跡第6次調査区土層断面図(2区東壁 1/50)

06-SD001 ~ 010 (第3-11図)

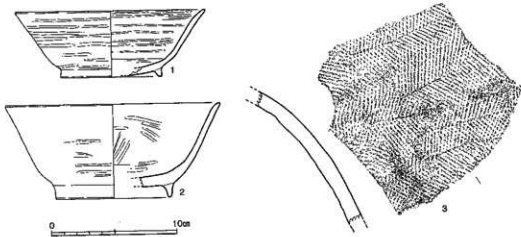
耕作溝群

2区(N60・61からP60・61グリッドで検出した耕作溝群である。いずれも南北方向に延びるもので、残りの良いSD001・SD003・SD010は北側調査区外に続く。これらの溝で長さ約7~11m、幅約0.6~0.8mを測る。深さはいずれも5~10cm程度と浅い。埋土はSD001が灰色土の塊状に混じる褐色土(7.5YR4/3)、SD002はマンガ細粒を含む灰褐色砂質土(7.5YR4/2)、SD003・SD005・SD006・SD010は酸化鉄分の混じる灰黄褐色砂質土(10YR4/2)で、SD006は微量の炭を含む。遺物の出土はほとんどなく、図示できるものはない。

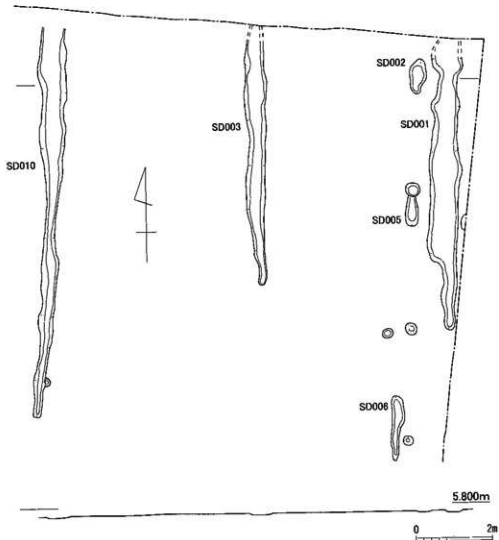
06-SD012 ~ SD024 (第3-12図)

耕作溝群

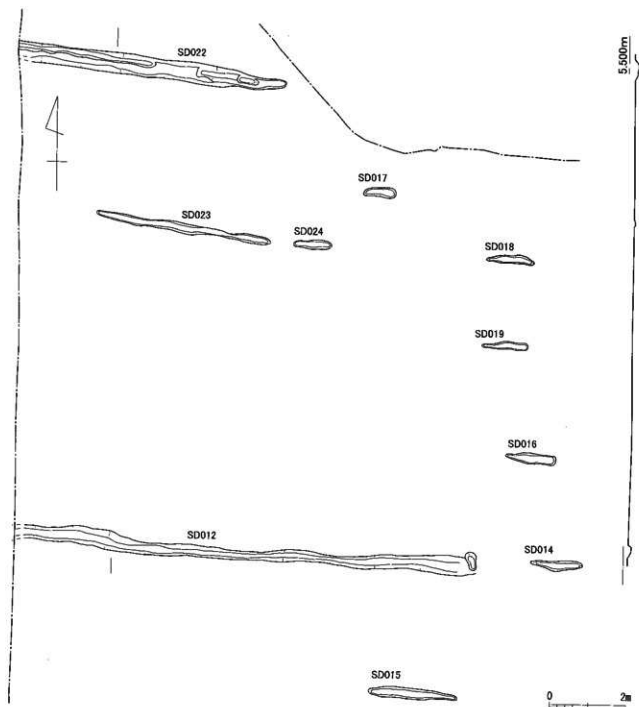
2区(L60グリッドからM62グリッドにかけて検出した耕作溝群である。前述のSD001~SD010が南北方向であるのに対し、SD012~SD024は東西方向をとる。両者の間で南北方向に段状の落ち込みが見られ、これを境として方向を異にしている可能性もある。SD012・SD022は残りがよく、西側調査区外に続く。長さはSD012が12.6m以上、SD022は7.4m以上、幅は約0.3~0.6mを測る。SD022は北半部が一段深くっており、溝が重複していた可能性もある。SD014~SD019・SD024は削平のためか長さ約0.9~2.4m、幅約0.2~0.3mと小規模である。SD023は長さ約4.7mで、幅は約0.15~0.2mと狭い。深さはいずれも数cm~10cm程度と浅いが、SD022は上記のためか約0.15mと他に比べやや深い。埋土はSD012が焼土細粒及び炭を含む暗褐色土(7.5YR3/3)、SD014



第3-10図 06-SK194 (擾乱) 出土遺物実測図 (1/3)



第3-11図 06-SD001～010近世耕作溝群実測図 (1/100)



第3-12図 06-SD012～024実測図 (1/100)

～SD019は酸化鉄分を含む灰黄褐色砂質土 (10YR4/2)、SD022はマンガン細粒及び少量の炭を含む灰褐色土 (7.5YR4/2)、SD023・SD024はやや砂質の褐灰色土 (7.5YR4/1) で、SD023は酸化鉄分及びマンガン細粒を含む。遺物の出土は極めて少なく、SD014から銭貨の小破片が出土した以外は図示できるものがない。



第3-13図 06-SD014出土遺物実測図 (1/1)

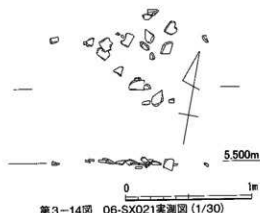
06-SD014出土遺物 (第3-13図)

1は銭貨の破片で、下部に配された行書体の「通」字が判読できる。銭種は不明である。

06-SX021 (第3-14図)

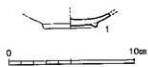
遺物集中国所

2区のN60グリッドで検出した礎及び瓦等の遺物集中箇所である。遺物等の分布範囲は東西約1.28m、南北約0.78mで、検出高は約5.5mを測る。こうした遺物集中としては最上部で確認できる遺構で、遺構を構成する遺物はこれより下位で確認される同種の遺構よりも小振りである。こうした点から、近世以降の耕作に際して耕起された遺物等をまとめたものとも考えられる。

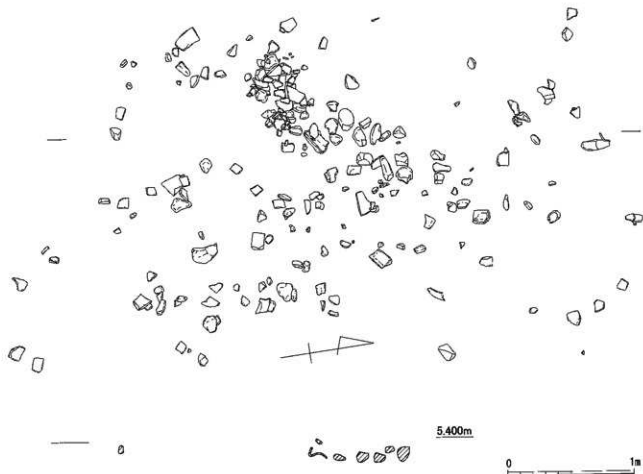


06-SX021出土遺物 (第3-15図)

1は底面に高台を貼り付けた土師器椀である。高台の断面形状は逆台形状を呈する。



第3-15図 06-SX021出土遺物実測図 (1/3)

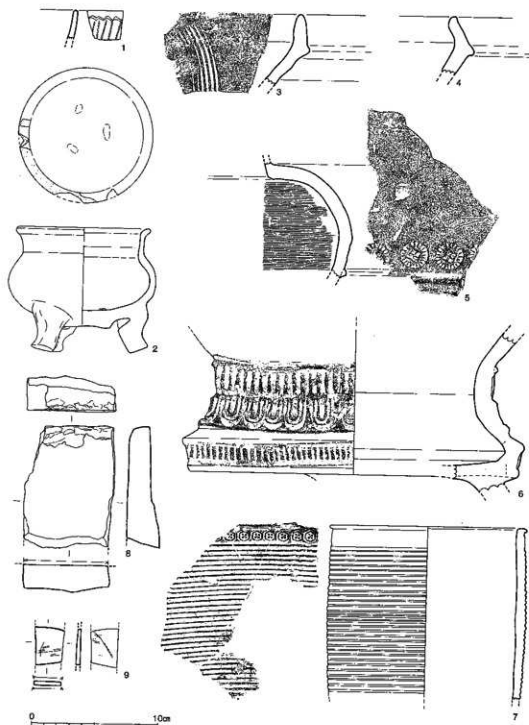


第3-16図 06-SX025実測図 (1/30)

06-SX025 (第3-16図)

遺物集中ブ
ロック

2区のM60・N60・M61・N61グリッドで検出した礫及び瓦・土器類等の遺物集中ブロックである。遺物や礫は東西約2.75m、南北約5.0mの範囲で分布し、検出高は約5.4～5.5mである。一部では遺物が密集する状況が見られた。遺物の中世の瓦や陶磁器、土器類、石製品等が出土しており、中にはSX025より下位にあるSK087やSK131、SD302との遺構間接合が認められるものもあった。こうした状況から、下部の遺構に包含された遺物が後世に掘り起こされて形成された遺構と判断される。遺構の年代は近世初頭の遺物を含む第4層の上位で検出されることから、近世初頭以降に形成されたものと判断する。



第3-17図 06-SX025出土遺物実測図 (1/3)

06-SX025出土遺物 (第3-17図)

細線描遺物文

1・2は青磁である。1は碗の細片で、外面に細線描蓮弁文を施す。2は香炉で、SX025の他にSK087・SK131・SD302Bから出土した破片との接合が確認できる。丸く膨らむ胴部から頸部が短く立ち、口縁部は外反する。底部には3つの脚を貼り付ける。見込みには3箇所の目痕が認められる。3・4は備前焼の摺鉢で、口縁部が上方に延び端部は丸くおさめる。5〜7は瓦質土器である。5は釜又は風炉で、胴部に凸帯を配し、その上位にスタンプ文を施す。6は華瓶で、底部上位に蓮弁文を配する。底部には脚が付く。7は火鉢で、外面に多条の沈線、口縁下に六角形のスタンプ文を施す。8・9は砥石である。

06-SX026 (第3-18図)

遺物集中ブロック

2区のM61・N61グリッドで検出された、礫や瓦・土器類等の遺物集中ブロックである。遺物等の分布範囲は東西約28m、南北約33mで、検出高は約5.4〜5.45mを測る。遺物は青磁、土師器、瓦質土器、瓦等中世のものが出土したが、SX025と同様に第4層の上部で検出できることから、近世初頭以降の遺構と判断される。

06-SX026出土遺物 (第3-19図)

細線描遺物文

1・2は青磁碗である。1は外面に細線描蓮弁文を施す。3〜7は瓦質土器である。3は風炉

で、上部が蓮弧状となる風門をもつ。外面は全体に粗いミガキを施す。4〜6は火鉢である。4・5は口縁下の凸帯間に菊花文スタンプを施す。6のスタンプ文は花形文である。7は脚部で外面に3条の線刻を施す。8は焼土塊である。高熱により何らかのものが溶着したものであるが、原形を留めていない。万寿寺の火災により生じたものであろう。9は埴である。10は軒平瓦で、瓦当中央に配された蓮華文が残る。

焼土塊

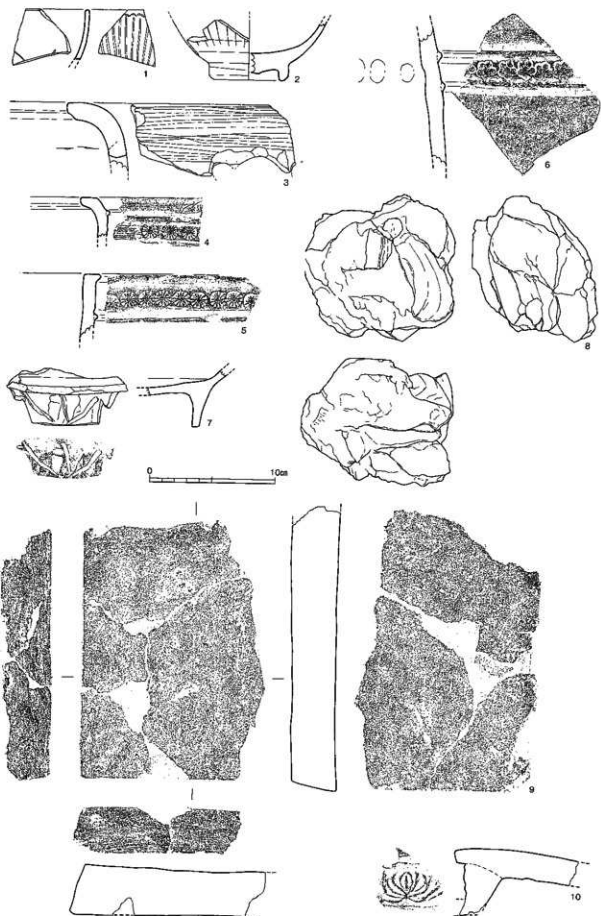
万寿寺の火災

額貼付技法

瓦当は額貼付技法により作り出す。



第3-18図 06-SX026実測図 (1/30)



第3-19図 06-SX026出土遺物実測図 (1/3)

第4節 中世面上層の遺構

中世の遺構は第4層を除去した時点で検出できたものと、その下部の4'層や5層を掘り下げる過程で確認したもの、地山面で検出したものがある(第3-4図)。包含層の掘り下げ中に確認できるものもあるためすべてを同一の面として捉えることは難しいが、ここでは遺構の前後関係や出土遺物から想定される年代を基に、便宜上、中世面上層と下層に大別して報告する。

中世遺構の上層で検出したものとして、礎石建物および礎石の可能性のある石材、土坑、溝、井戸、墓、遺物集中ブロックがある。以下、遺構ごとに報告する。

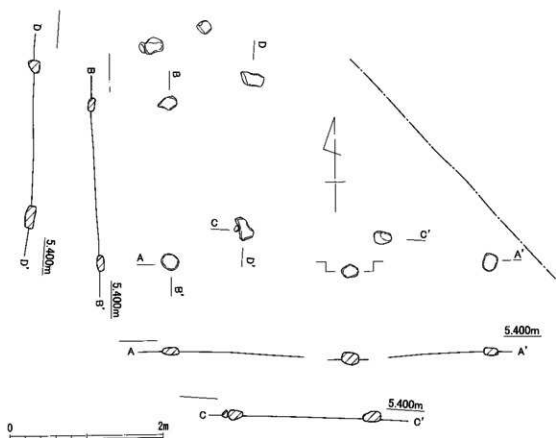
1. 礎石建物

06-SB001 (第3-20図)

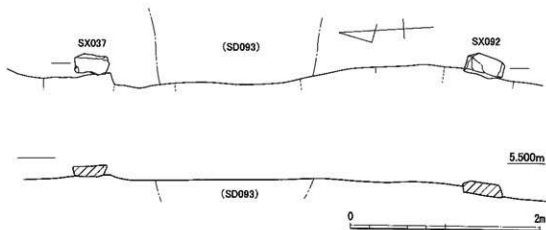
礎石建物

2区の北東部、L60・M60グリッドで礎石状の平坦面を持つ、25~30cm大の石材7点が同じようなレベルで検出されたもので、礎石建物の可能性がある。礎石の並びとしては2つあり、外側のものは東西2間×南北1間分、内側のものは東西・南北方向とも1間分を確認できるが、調査範囲が狭く全体の規模は明らかにできない。建物2棟の重複か、あるいは両側に庇を持つ構造が考えられるが、後者の場合は礎石の位置が揃わないこと、軸線が一致しないことから前者の可能性が高い。従って、外側のものをSB001A、内側のものをSB001Bとして区別する。

SB001Aの礎石間の距離は、南北が約2.1m、東西方向は真ん中の礎石の位置が軸線から少し南にずれるが、西から約2.4m、1.9mを測る。南北を基軸とした場合の軸線はほぼ真北にとる。SB001Bでは、南北約2m、東西約1.8mである。南北を基軸とした場合の軸線はN4°-E、東西方向ではN94°-Eとなり、SB001Aよりもやや東に振れる。検出高さ約5.15~5.25mである。SB001A・Bとも遺物の出土はなく、遺構の時期は明らかにできない。ただし、15世紀代に比定される溝SD090



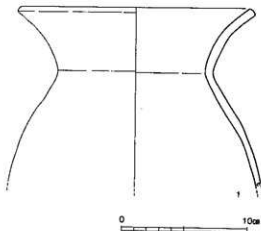
第3-20図 06-SB001実測図(1/50)



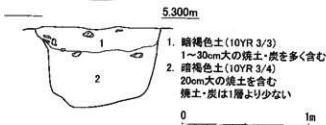
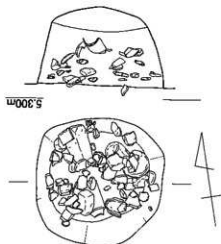
第3-21図 06-SX037・SX092実測図(1/40)

埋込後に構築されていること、中世遺構面の上部付近で検出したこと、そして国道10号を挟んだ反対側の調査区である中世大友府内町跡第34・43次調査区から、万寿寺西限の堀を埋め立てた後に建てられた複数の礎石建物を確認¹⁾していることを勘案すると、これと関連する建物である可能性が考えられよう。中世大友府内町跡第34・43次調査の礎石建物は上記の状況から、天正9年(1581)の万寿寺炎上後に柴田礼能のもとで開発された「万寿寺築地之内并西之屋敷」との関連で捉えられている²⁾。それと関連する施設であれば、この建物は「万寿寺築地之内并西之屋敷」の範囲を考える上でも重要である。以上の点から、Ⅵ期(16世紀末葉)に位置付ける。

「万寿寺築地之内并西之屋敷」



第3-22図 06-SX092出土遺物実測図(1/3)



1. 暗褐色土(10YR 3/3)
1~30cm大の焼土・炭を多く含む
2. 暗褐色土(10YR 3/4)
20cm大の焼土を含む
焼土・炭は1層より少ない

第3-23図 06-SK029実測図(1/30)

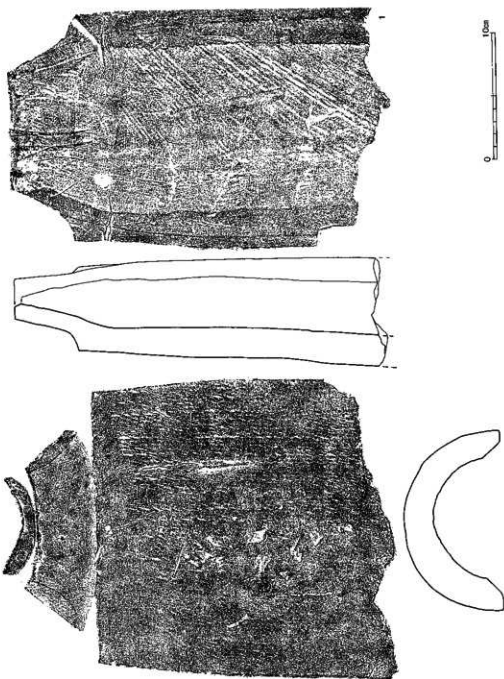
06-SX037・SX092(第3-21図)

2区のN60~N62グリッド中央付近で確認された段状の落ち込み跡で検出された2点の礎石状石材である。SX037はN61グリッド、SX092はN62グリッドで検出した。石材はともに溶結凝灰岩で、直方体状に整形されている。SX037は長さ0.47m、短辺0.20m、厚さ0.12m、検出標高は5.43mを測る。SX092は長さ0.42m、短辺

礎石状石材

溶結凝灰岩

注1) 坂本嘉弘・友岡徳彦2008『豊後内8』大分県教育庁歴史文化財センター調査報告書第23集、大分県教育庁歴史文化財センター
 注2) 坂本嘉弘2008『豊後内8』大分県教育庁歴史文化財センター調査報告書第23集、大分県教育庁歴史文化財センター



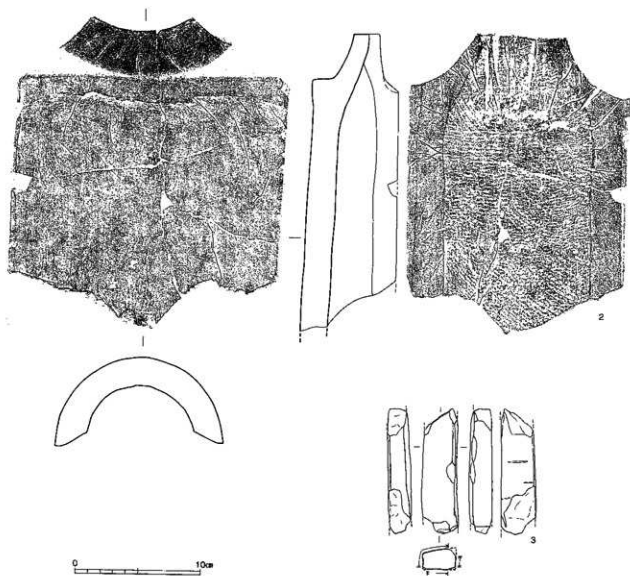
第3-24図 06-SK029出土遺物実測図①(1/3)

0.22m、厚さ0.17m、検出標高5.31mを測る。両者の間は中心間で約4.20mであり、両者が同一の建物であればもう1石あるべきだが確認できなかった。また、これより東側でも礎石状石材は認められなかった。後述するSK131ではこうした溶結凝灰岩を直方体状に加工した石材が東側から投棄されたような状態で出土しており、これらが建物であればこの時に廃絶し部材が一齐に廃棄された可能性がある。ただし、SK131で出土した石材はSX037やSX092よりは一回り大きいものが目立つ。あるいは両者の間にはなんらかの区画溝と思われるSD093が位置しており、これと関連するなら両者は別の建物を構成する可能性もある。時期比定のできる遺物の出土がないため詳細は不明だが、使用された石材が溶結凝灰岩であることを重視すると上記のSK131との関連が十分に考えられ、V期(16世紀前半)に廃絶した建物の可能性を考えた。

石材が東側から投棄

区画溝

別の建物を構成する可能性
16世紀前半に廃絶した建物の可能性



第3-25図 06-SK029出土遺物実測図② (1/3)

06-SX092出土遺物 (第3-22図)

1はSX092検出作業時に出土した弥生土器壺である。

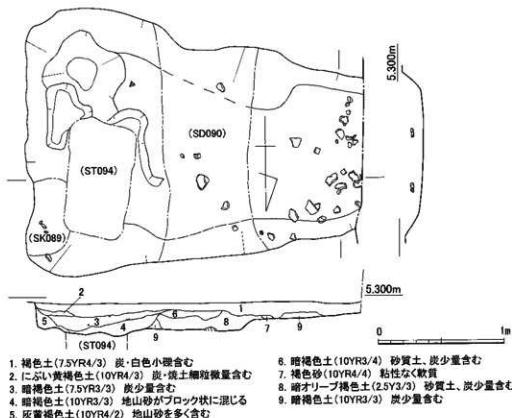
2. 土坑

06-SK029 (第3-23図)

焼土や炭の
濃密な分布

2区のM61グリッドで検出した土坑である。検出面で焼土や炭の濃密な分布が認められたため、周囲との土壌の違いは明瞭である。平面形状は隅丸方形から略円形を呈し、長辺・短片とも1.0m、深さ0.53mを測る。埋土は焼土・炭を含む暗褐色土で、焼土・炭の混入度合いや焼土塊の大きさから2層に分層できる。上層は焼土・炭とも多量に含み、焼土塊も30cm程度の大振りのものを含むのに対し、下層では焼土・炭ともに上層より少なく、焼土塊も20cm程度とやや小振りとなる。遺物は瓦を中心に出土しており、瓦には被熱により赤変したものも認められる。遺構の性格としては火災で生じた瓦礫を処分した廃棄土坑、すなわち火災処理土坑である。遺構の時期を特定できる遺物に乏しいが、16世紀前半の大型土坑SK131の埋没後に構築されることから、VI期 (16世紀後半) 以降

被熱により
赤変
火災処理土坑



1. 褐色土(7.5YR4/3) 炭・白色小礫含む
2. にがい黄褐色土(10YR4/3) 炭・焼土細粒微量含む
3. 暗褐色土(7.5YR3/3) 炭少量含む
4. 暗褐色土(10YR3/3) 地山砂がブロック状に混じる
5. 灰黄褐色土(10YR4/2) 地山砂を多く含む
6. 暗褐色土(10YR3/4) 砂質土、炭少量含む
7. 褐色砂(10YR4/4) 粘りなく軟質
8. 礫オーブ褐色土(2.5Y3/3) 砂質土、炭少量含む
9. 暗褐色土(10YR3/3) 炭少量含む

第3-26図 06-SK035素測図(1/30)

であることは確実である。こうした焼土を多量に含む土坑は中世大友府内町跡にあっては天正14年の島津氏の府内侵攻に伴う火災処理土坑と捉えられるが、レベルとしては中世の最上面で検出した遺構であり、このSK029もその可能性が高い。従って、Ⅷ期(16世紀末葉)に位置づけたい。

島津氏の府内侵攻

06-SK029出土遺物(第3-24・3-25図)

第3-24図1・第3-25図2は九瓦である。どちらも凹面には布目痕とコビキ痕が認められる。

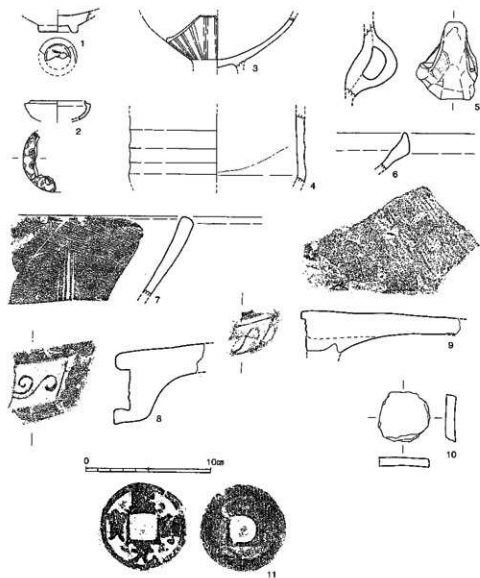
二次焼成

1の凸面には縄目タタキ痕が残り、凸面玉縁部から凹面にかけて二次焼成により赤変している。3は砥石である。

06-SK035(第3-26図)

2区のL60・M60グリッドで検出した土坑である。平面形状は隅丸方形気味で、東端部に比べ西側の幅が狭い。西幅が調査区外に続いたため全体の規模は明らかにできないが、検出範囲で東西5.33m以上、南北は東端部で4.25m、西側で2.40m、深さ約0.4mを測る。遺構規模から、西接する中世大友府内町跡第29次調査の土坑SK083と同一遺構である可能性がある。埋土は9層に分層でき、下層は数度の掘り返しを読み取ることができる。最初に土坑中央に掘り込み(第6・8層)があり、次いで東西両側に最初の掘り込みを切る土層(1~5/7~9)が認められる。最終的には全体に最上層の褐色土が被覆している。遺物は土坑の西側で比較的まとまって出土している。この土坑を完掘した時点で、東端部側面底で長方形の掘り込みを持つ土坑墓ST094を検出した。両者の関係はまずST094が構築され、それをSK035が切っている。土層観察結果もその所見を裏付ける。また、北東端部は土坑SK089が切っている。遺構の年代は、16世紀後葉のST094を切ることから、Ⅷ期(16世紀末葉)に位置づけられる。

土坑墓ST094

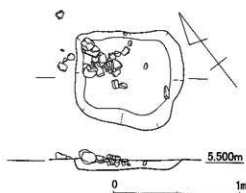


第3-27図 O6-SK035出土遺物実測図 (1/3・1/1)

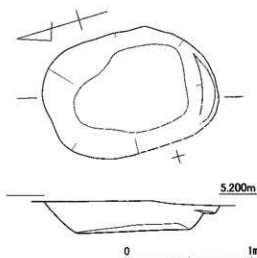
06-SK035出土遺物 (第3-27図)

1・2は白磁である。1は碗で、高台内に朱墨による文字が残るが判読できない。2は合子の身で、外面には花卉状の型押し文がみられる。3・4は青磁である。3は碗で、外面に粗い蓮弁文を施す。4は筒形の香炉であろう。5は土師器の把手付甕で古代のもの。6は東播系須恵器の捏鉢である。7は瓦質土器の摺鉢で、内面に摺目を施す。8・9は軒平瓦で、瓦当に唐草文を配する。10は加工円盤で、瓦質土器火鉢の破片の周縁を研磨して円形に仕上げている。11は北宋の熙寧元寶(1068年初鑄)である。

高台内に朱墨による文字



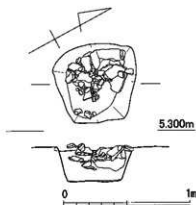
第3-28図 O6-SK036実測図 (1/30)



第3-29図 06-SK039実測図(1/30)



第3-30図 06-SK039出土遺物実測図(1/3)



第3-31図 06-SK043実測図(1/30)

06-SK036 (第3-28図)

2区のO60グリッドで検出した浅い掘り込みの土坑である。平面形状は隅丸方形を呈し、長辺0.88m、短辺0.78m、深さ0.10mを測る。埋土は暗褐色砂質土(10YR3/3)の単一層で、酸化鉄分及び微量の炭を含む。土坑の北端部から鏝や遺物がまがまって出土した。遺構の年代を特定できる遺物の出土はなく、時期は不明である。

SK039 (第3-29図)

2区のM61・M62グリッドで検出した土坑である。平面形状は楕円形で、長辺1.41m、短辺0.97m、深さ0.25mを測る。土坑の南側にはテラス状の段がつく。埋土は灰褐色土(7.5YR4/2)の単一層で、マンガン細粒及び微量の炭を含む。遺物は古代の土器等が出土したが量は少ない。遺構の時期を特定できる遺物が無いが、16世紀前葉のSK131埋没後に構築された遺構であることから、VI期(16世紀後葉)以降に帰属することは確実である。埋土が第4層に近似することから、近世初頭まで下る可能性も考えられる。

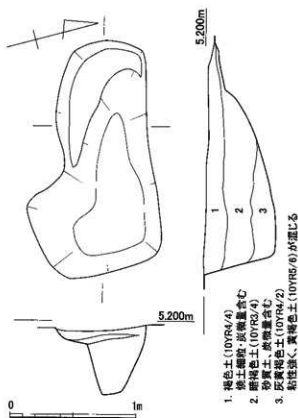
06-SK039出土遺物 (第3-30図)

1は内面を黒色に仕上げた黒色土器A類碗で、内面にはミガキを密に施す。

06-SK043 (第3-31図)

2区のM62グリッドで検出した土坑である。平面形状はやや東辺が広い隅丸形状を呈し、長辺0.63m、短辺0.62m、深さ0.27mを測る。埋土は砂質のにぶい黄褐色土(10YR4/3)で、にぶい黄褐色土のブロックと少量の炭が混じる。土坑内からは多量の凝灰岩片と石英質の玉砂利が出土したが、土器等の遺物はほとんど含まない。不要な凝灰岩片を処分した廃棄土坑と考えられる。遺構の

多量の凝灰
岩片と石英
質の玉砂利



第3-32図 O6-SK048実測図 (1/30)



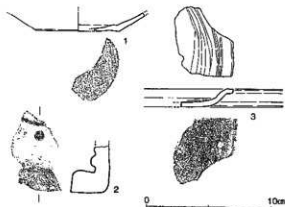
第3-33図 O6-SK054実測図 (1/30)

詳細な年代は明らかにできないが、16世紀前葉の土坑SK131埋没後に構築された遺構であることから、VI期(16世紀後葉)以降に帰属することは確実である。

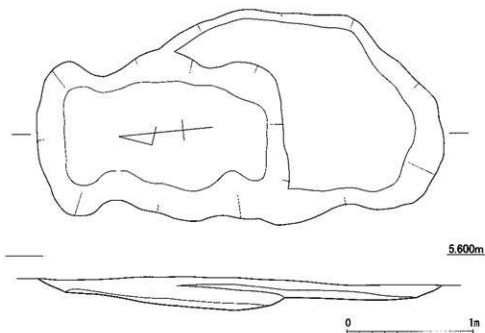
O6-SK048 (第3-32図)

2区のM61・N61区で検出した土坑である。平面形状は不整形で、長辺1.80m、短辺1.04m、深さ0.54mを測る。土坑西側の掘り込みは浅いが、中心から東部にかけては一段深く掘り込んでいる。

埋土は3層に分層でき、2・3層が土坑の深い部分の埋土、1層が浅い部分の埋土にそれぞれ対応する。1層には焼土の細粒や微量の炭を含む。図示できるような遺物の出土がなく、遺構の詳細な年代は明らかにできないが、16世紀前葉の土坑SK131埋没後に構築された遺構であることから、VI期(16世紀後葉)以降に帰属することは確実である。埋土に焼土を含むことから、島津氏の府内侵攻に伴う火災との関連も想定でき、VI期(16世紀末葉)の可能性を考えたい。



第3-34図 O6-SK054出土遺物実測図 (1/3)



第3-35図 06-SK061実測図 (1/30)

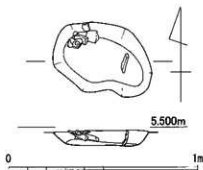


第3-36図 06-SK061出土遺物実測図 (1/3)

06-SK054 (第3-33図)

2区のN60グリッドで検出した土坑である。平面形状はやや丸みのある長方形で、東端部はSD053に上部を切られている。遺構の規模は長辺1.50m、短辺1.28m、深さ0.26mを測る。埋土は砂質土で4層に分層できる。1層は灰黄褐色土で土坑全体を被覆する。2層は褐色土、3層は暗褐色土、4層はにぶい黄褐色土で、2・3層は少量の炭を含む。遺物は土坑の中位から上位にかけて散発的に出土した。大内系白色土師器皿が出土しており、IV期(15世紀中頃～15世紀後葉)に比定する。

大内系白色土師器皿



第3-37図 06-SK075実測図 (1/20)

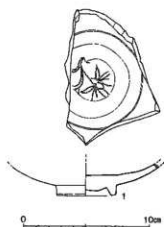
06-SK054出土遺物 (第3-34図)

1は白色胎土で薄手の特徴的な土師器皿で、底面に回転糸切り痕が残る。この手の皿は山口県の大内氏館跡から出土している。2は軒丸瓦の細片で、珠文と巴文の尾部が確認できる。3は土師器坏で、内面に粗いヘラミガキを施す。器形・調整から古代のものである。

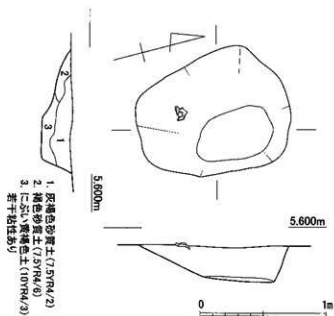
大内氏館跡から出土



第3-38図 06-SK075出土遺物実測図 (1/3)

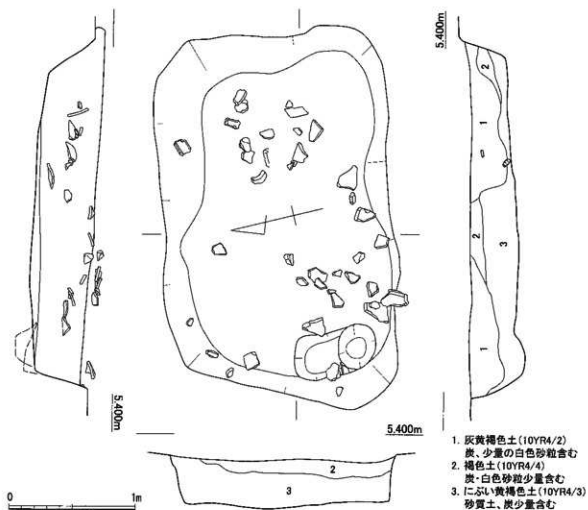


第3-40図 O6-SK076出土遺物実測図 (1/3)



1. 灰褐色砂質土 (75YR4/2)
2. 褐色砂質土 (7.5YR4/6)
3. にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
若干粘性あり

第3-39図 O6-SK076実測図 (1/30)



1. 灰黄褐色土 (10YR4/2)
炭、少量の白色砂粒含む
2. 褐色土 (10YR4/4)
炭・白色砂粒少量含む
3. にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
砂質土、炭少量含む

第3-41図 O6-SK086実測図 (1/30)

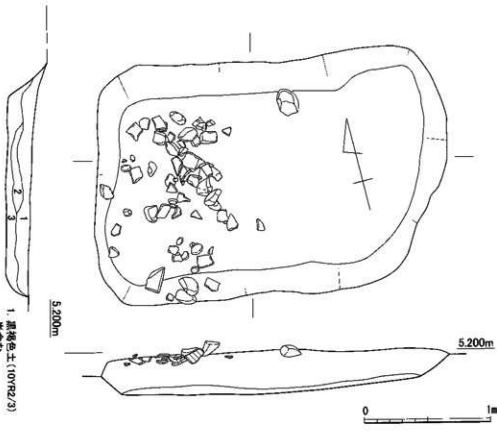


第3-42図 06-SK086出土遺物実測図(1/3)

06-SK061 (第3-35図)

2区のN61グリッドで検出した土坑である。平面形状は丸みのある長方形で、東部が丸く膨らむ。遺構の規模は長辺3.24m、短辺1.68m、深さ0.26mを測る。堀土はやや砂質の暗褐色土(10YR3/3)で、少量の炭を含む。内部は南半部が皿状の浅い掘り込みで、北半部は一段深く掘り込む。完了した時点で南半部の底面で溝06-SD101を検出した。また、溝06-SD106とも切り合い関係があり、これらを整理するとSD106→SD101→SK061の順に構築されている。遺構の年代を決定する遺物に乏しいが、吉備系土師器碗の出土からまず14世紀前半が考えられる。先述の遺構の切り合い関係も考慮すると、SD106からも14世紀代の土師器小皿が出土しており、それよりは後出することになる。詳細時期不明のSD101の時間幅も考慮すると、14世紀前半よりは下ったⅡ期(14世紀中頃～末葉)ないしはⅢ期(14世紀末～15世紀前半)と考えたい。

吉備系土師器碗



第3-43図 06-SK087実測図(1/30)

- 1. 暗褐色土(10YR2/3) 底層む
- 2. 暗褐色土(10YR3/3) やや砂質
- 3. 濃い暗褐色土(10YR4/3) 砂質土、炭屑の底層む

06-SK061出土遺物 (第3-36図)

茶入

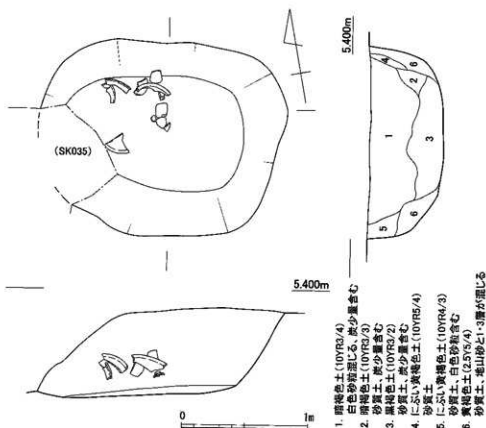
1は施釉陶器の茶入である。2は貼付高台を持つ吉備系土師器の椀で、高台は低い。

06-SK075 (第3-37図)

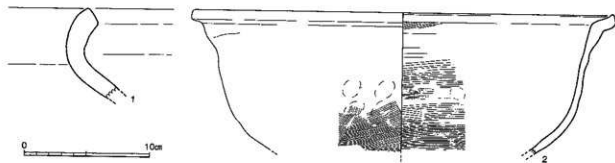
2区のO61グリッドで検出した小規模な土坑である。平面形状はやや歪な楕円形状で、長辺0.60m、短辺0.38m、深さ0.09mを測る。埋土にはおい黄褐色(10YR4/3)の砂質土で、微量の炭を含む。遺物や礫は土坑の北西部でやまとまって出土している。15世紀後葉に比定される土師器杯が出土しており、本遺構の年代はIV期(15世紀中頃～後半)に位置づける。

06-SK075出土遺物 (第3-38図)

1は土師器杯で、底部から口縁部が直線的に開く。底面には回転系切り痕が残る。



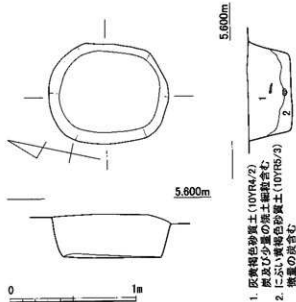
第3-44図 06-SK089実測図 (1/30)



第3-45図 06-SK089出土遺物実測図 (1/3)

06-SK076 (第3-39図)

2区のO61グリッドで検出した土坑である。平面形状は楕円形状を呈し、長辺1.23m、短辺0.98m、深さ0.29mを測る。内部の掘り込みは北辺・東辺は急であるのに対し、南辺・西辺の角度は緩やかである。埋土は3層に分層でき、2・3層に対して1層が掘り込み状況が読み取れることから、掘り返しがあったと推定される。遺物は遺構検出面付近で15世紀代に比定される青磁碗の底部片が出土している。この点から、本遺構の年代はⅢ期(14世紀末～15世紀前半)以降に位置づけられるが、青磁碗の出土位置が遺構上部であるため、これが遺構の正確な年代を反映しているとは考えにくい。従って少し幅を持たせてⅢ期～Ⅳ期(15世紀中頃～15世紀後半)と考えたい。



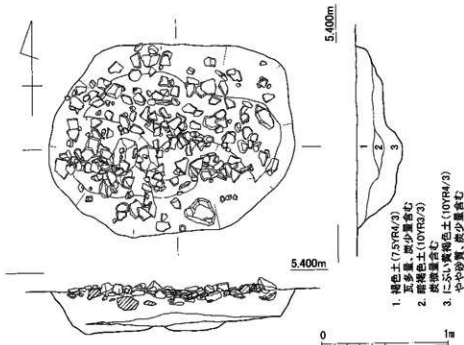
第3-46図 06-SK110実測図 (1/30)

06-SK076出土遺物 (第3-40図)

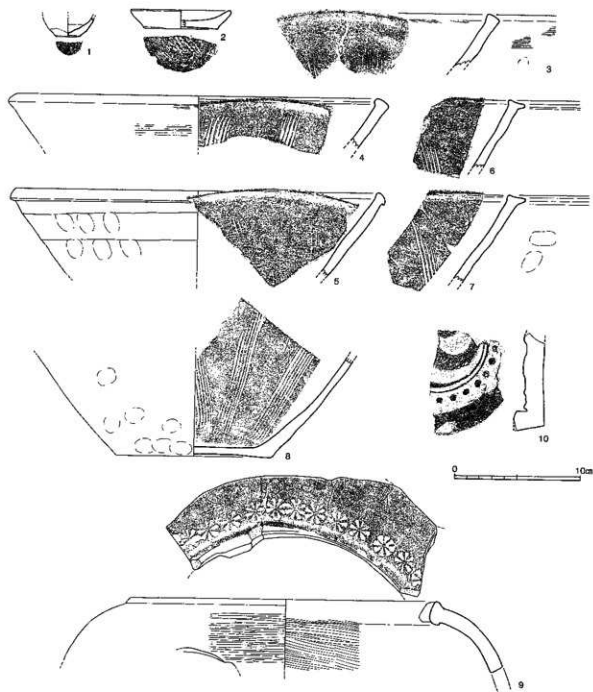
1は青磁碗である。見込み部は蛇の目状の釉剥ぎを施し、中央に草花文を配する。



第3-47図 06-SK110出土遺物実測図 (1/3)



第3-48図 06-SK126実測図 (1/30)



第3-49図 06-SK126出土遺物実測図 (1/3)

06-SK086 (第3-41図)

2区のN60・N61グリッドで検出した土坑である。溝06-SD053と切り合い関係にあり、06-SK086が06-SD053を切っている。土坑の平面形状は隅丸長方形で、長辺3.05m、短辺1.89m、深さは最大で0.53mを測る。埴土は3層に分層でき、1層は上坑の東西両側に分かれて認められる。遺物や礫が土坑の中心部を挟んで東西両側である程度のまとまりをもって出土しており、1層はこれら礫や遺物の廃棄に伴う掘り込みと考えられる。土坑の底面はほぼ平坦であるが、南西端部で2基の掘り込みが見られる。遺構の性格は廃棄土坑と考えられる。遺構の年代を推定できる遺物に乏しいが、遺構の切り合い関係から推定すると、SK086に切られる溝SD053はⅣ期(15世紀中頃～15世紀後葉)

廃棄土坑

の土坑SK054を切ることから、SK054→SD053→SK086の順となり、少なくともⅣ期以降であることは間違いない。従ってⅣ期～Ⅴ期（16世紀前半）に位置づける。

06-SK086出土遺物（第3-42図）

1は瓦質土器の火鉢で、口縁下に菊花状のスタンプ文を施す。2は砥石で、6面全てにおいて使用の擦痕が認められる。

06-SK087（第3-43図）

2区のM60・N60グリッドで検出した土坑である。平面形状は隅丸長方形で、長辺2.78m、短辺1.88m、深さ約0.3mを測る。埴土は3層に分層でき、1層は炭を含む黒褐色土、2層はやや砂質の暗褐色土、3層は砂質のぶい黄褐色土で微量の炭を含む。掘り込みは皿状を呈し、壁面の立ち上がりは緩やかである。遺物や礫は土坑西半部の検出面近くでまとまって出土しており、廃棄土坑と考えられる。遺構の年代を推定できる遺物がないが、同じく廃棄土坑であるSK086とは遺構の規模や形態が似ており、ほぼ同時期に形成されたものではないかと考えられる。以上の点からⅣ期～Ⅴ期（15世紀中頃～16世紀前半）に位置づける。

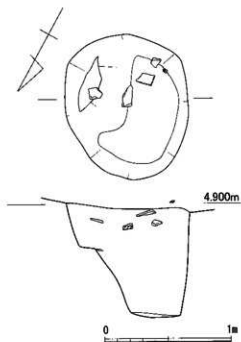
廃棄土坑

06-SK089（第3-44図）

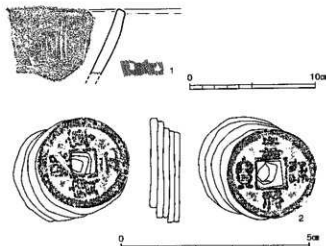
2区のL60・M60グリッドで検出した土坑である。平面形状は隅丸方形から楕円形状を呈し、西側の一端を06-SK035に切られている。遺構の規模は長辺1.93m、短辺1.54m、深さ0.68mを測る。

土層は6層に分層でき、4～6層の堆積後に1～3層が大きく掘り込む状況が窺える。土坑の底面は平坦で、両端ともに底部からの立ち上がりは丸みをもつ。特筆すべき点として、土坑の中位から下位にかけて土師器鍋1個体分が出土している。遺構の年代比定が難しいが、伴出した備前焼の口縁部が玉縁状にならない13世紀頃のものである。土師器鍋の形態も14世紀代に収まるものと考えられ、Ⅰ～Ⅱ期（14世紀前半～末）と判断したい。

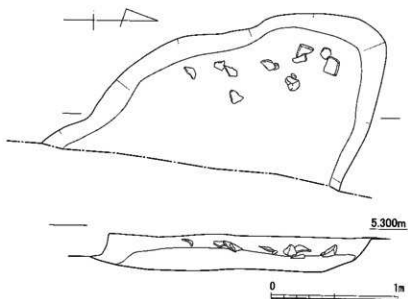
土師器鍋1
個体分が出
土



第3-50図 06-SK133実測図（1/30）



第3-51図 06-SK133出土遺物実測図（1/3・1/1）



第3-52図 O6-SK140実測図 (1/30)

O6-SK089出土遺物 (第3-45図)

1は僧前焼窯である。外反する口縁の立ち上がりは短く、端部は丸くおさめる。2は土師器の鍋である。口縁は外反し、端部は上方に短く縮み出す。

O6-SK110 (第3-46図)

2区のO61・62グリッドで検出した土坑である。平面形状は方形気味の楕円形で、長辺0.97m、短辺0.78m、深さ0.35mを測る。埋土は2層に分層でき、上層は炭及び少量の焼土細粒を含む灰黄褐色砂質土、下層は微量の炭を含むふい黄褐色砂質土である。遺物は土師器小皿等が出土したが、量は少ない。遺構の年代は出土した土師器小皿が小型化している点から、IV期(15世紀中頃～後半)に位置付ける。

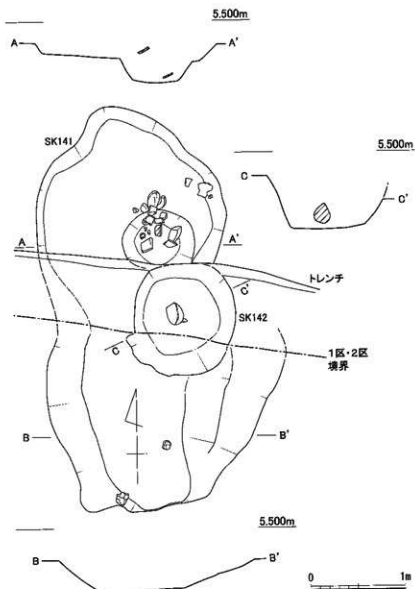
O6-SK110出土遺物 (第3-47図)

1は土師器小皿である。底部から外に短く開く器形で、口径は7.4cmと小型化している。底面には回転糸切り痕が残る。内外面とも煤が付着しており、灯明皿として使用されたものである。

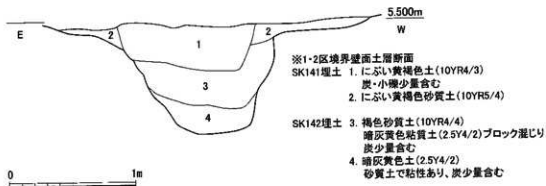
O6-SK126 (第3-48図)

2区O61・62グリッドで検出した土坑である。溝SD093と重複関係にあり、SK126がSD093を切っている。平面形状は楕円形状で、長辺1.97m、短辺1.53m、深さ0.34mを測る。埋土は3層に分層できるが、大きくは上層の褐色土と、下層のふい黄褐色土に分けられる。上層からは鏝とともに多量の瓦や遺物が出土しており、廃棄土坑と考えられる。底面は南側が一段深く掘り込まれる。遺構の年代を把握できる遺物に乏しいが、溝SD093を切っていること、そして16世紀前半にまで下る遺物が見られないことから、IV期(15世紀中頃～15世紀後半)に位置付ける。

廃棄土坑



第3-53図 06-SK141・SK142実測図 (1/40)

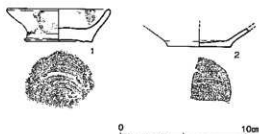


第3-54図 06-SK141・SK142土層断面図 (1/30)

茶入

06-SK126出土遺物 (第3-49図)

1は中国産の施釉陶器で、茶入の底部である。底面には回転糸切り痕が残る。2は土師器の小皿である。3～8は瓦質土器の摺鉢である。口縁部形状にはバリエーションがあり、端部が内側に張り出すもの(3・4)、下端部が張り出し玉縁状となるもの(5)、外側に大きく延びるもの(6・7)に分けられる。8は底部で、内面に7条1単位の摺目を施す。9は瓦質土器の風炉で、口縁下にスタンプ文を施す。10は軒丸瓦で、中央に左巻きの巴文を配し、周囲に珠文を施す。

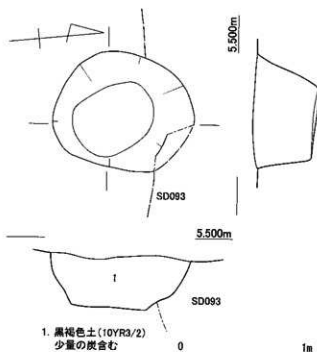


第3-55図 06-SK141出土遺物実測図(1/3)

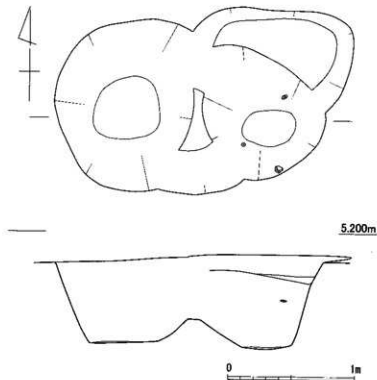
風炉

06-SK133 (第3-50図)

2区のM61グリッドで検出した土坑である。平面形状は卵形を呈し、長辺1.15m、短辺1.02m、深さ0.86mを測る。内部の掘り込みは西側がほぼ直であるのに対し、東側はやや角度が緩く、ステップ状の段が付く。遺物は土坑の上位から散在して出土しており、検出面付近からは5点が固着した銅銭が出土した。遺構の時期を示す遺物に乏しいが、16世紀前半の土坑06-SK131の埋没後に構築された遺構であることから、Ⅵ期(16世紀後半)以降に位置付けられる。



第3-56図 06-SK145実測図(1/30)



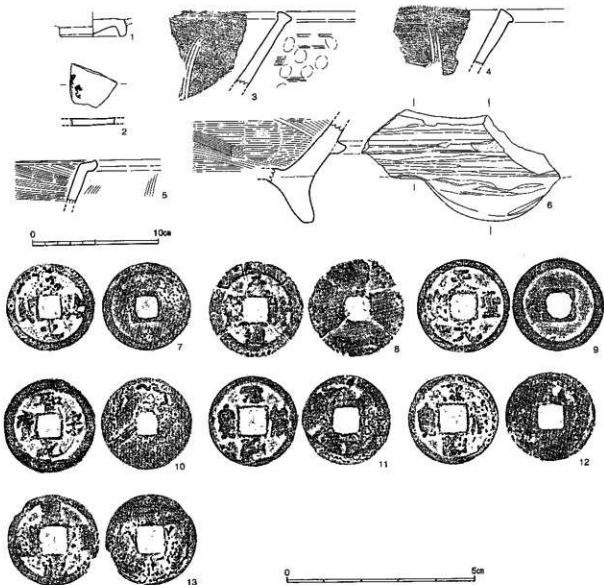
第3-57図 06-SK173実測図(1/30)

06-SK133出土遺物 (第3-51図)

1は瓦質土器摺鉢である。内面に6条1単位の摺目が残るが、下部は使用により磨滅している。2は銅銭5枚が鑄着したもので、両端2点の銭種が判明する。いずれも北宋銭で、ひとつは熙寧元寶(1068年初鑄)、もうひとつは嘉祐通寶(1056年初鑄)である。

06-SK140 (第3-52図)

2区のO62・P62グリッドで検出した土坑である。06-SX100の堆積層を除去した段階で確認したもので、東側が調査区外に続いたため全体の形状及び規模は明らかにできないが、検出範囲で東西1.35m以上、南北2.40m、深さ0.28mを測る。埋土はにぶい黄褐色土(10YR4/3)で、礫及び少量の炭を含む。掘り込みは皿状を呈し、底面からの立ち上がりは丸みをもつ。遺物や礫は土坑の中心から上位にかけてまばらに出土したが、図示できるものはない。06-SX100より下位に位置し、かつ土坑内部から京都系土器の細片が出土していることから、Ⅵ期(16世紀後半)に位置付ける。



第3-58図 06-SK133出土遺物実測図(1/3・1/1)

06-SK141・SK142 (第3-53・3-54図)

1区と2区の境目、O62グリッドで検出した2基の重複した土坑である。第3-54図に示す土層断面に示すとおり、06-SK141がSK142を切っている。また、SK141は16世紀後半の瓦溜り06-SX100や溝06-SD093を切っていることが分かる。

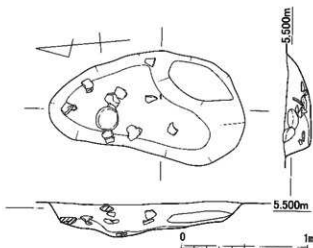
SK141は南北に細長く延び、長辺4.30m、短辺2.02m、深さ0.41mを測る。1区では東側壁面の傾斜がなだらかで、上端の掘り込みプランがやや東に広がる様子が見られたが、先に調査をした2区南端部では当該箇所に土層観察用のトレンチを設けたため、その読きは押さえられない。また、土坑の南端は井戸SE312と重複するため、終端部は不明瞭であった。埋土は2層あり、ともにぶい黄褐色砂質土で、中央部を礫や炭を含む上層が上坑状に掘り込んでいる。土坑の掘り込みは皿状を呈する。

底面には1箇所で略円形の土坑の掘り込みが確認

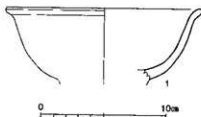
第3-60図 06-SK198出土遺物実測図(1/3)

き、これが先の土層断面と対応するものである。遺物や礫はこの土坑周辺からまとまって出土した。SK142は略円形を呈し、直径1.23m、深さ0.57mを測る。埋土は2層に分層でき、上層は暗灰黄色土が混じった褐色土、下層は暗灰黄色砂質土で粘性を帯びる。土坑の中央から25cm程度の大きさの礫が出土した。

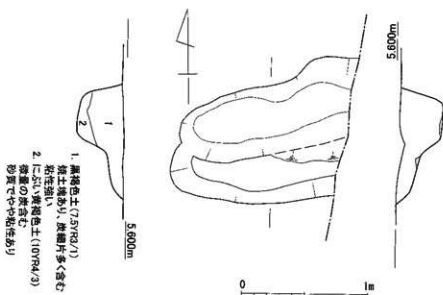
土坑の規模の割に、これら2基の土坑からの遺物の出土は少ない。遺構の年代は、SK141は



第3-59図 06-SK198実測図(1/30)



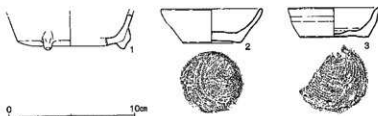
第3-60図 06-SK198出土遺物実測図(1/3)



第3-61図 06-SK199実測図(1/30)

1. 黄褐色土(7SVR2/1)
埋土あり、炭屑片多々含む
粘性強い
2. ぶい黄褐色土(10VPR/2)
礫の混在む
砂質でやや粘性あり

SX100を切ることから
Ⅶ期（16世紀末葉）、
SK141に切られる
SK142はⅥ期（16世紀
後半）～Ⅶ期（16世紀
末葉）と判断する。



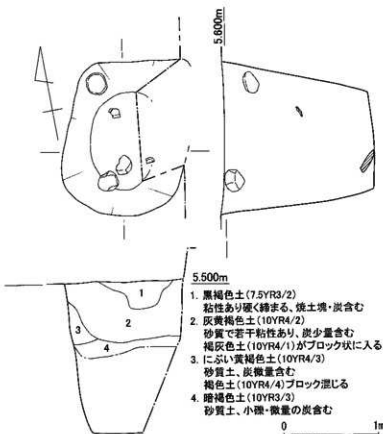
第3-62図 06-SK199出土遺物実測図 (1/3)

06-SK141出土遺物 (第3-55図)

1・2は在地の土師
器である。1は小型の
坏で、内外面に煤が付
着することから灯明皿
と判る。2は皿で口縁
部を欠失する。

06-SK145 (第3- 56図)

2区のN62グリッド
で検出した土坑であ
る。SD093と重複す
るが、SK145がSD093
を切っている。平面形
状は楕円形で、長さ1.13
m、短辺0.92m、深さ
0.51mを測る。埋土は
黒褐色土で、少量の炭
を含む。図示できるよ
うな遺物は出土してい
ないため詳細な時期は

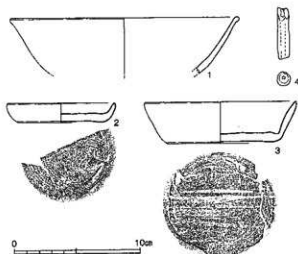


第3-63図 06-SK200実測図 (1/40)

明らかにできないが、SD093を切るこ
とから少なくともⅣ期以降の遺構であ
る。

06-SK173 (第3-57図)

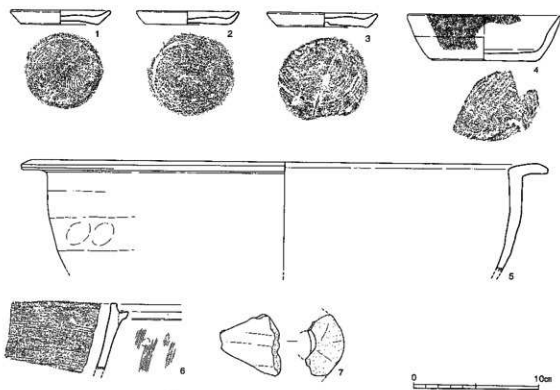
2区のO62グリッドで検出した土
坑である。06-SD093と重複するが、
SK173がSD093を切っている。また、
この土坑のやや上位にSK126がある。
従って、SD093→SK173→SK126の構
築順に整理できる。平面形状は不整形
で、かつ土坑内部は中央部底面がやや



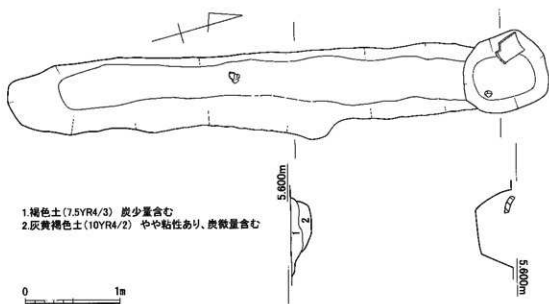
第3-64図 06-SK200出土遺物実測図 (1/3)



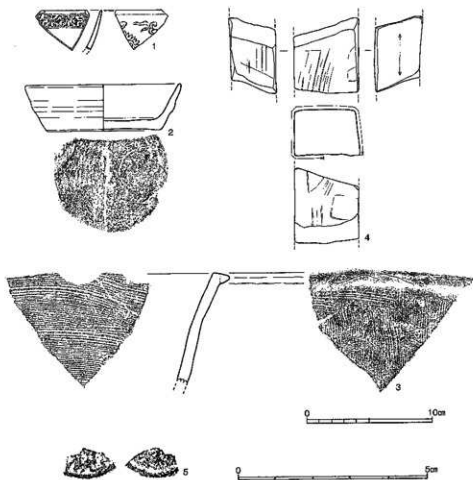
第3-65図 O6-SK202実測図 (1/60)



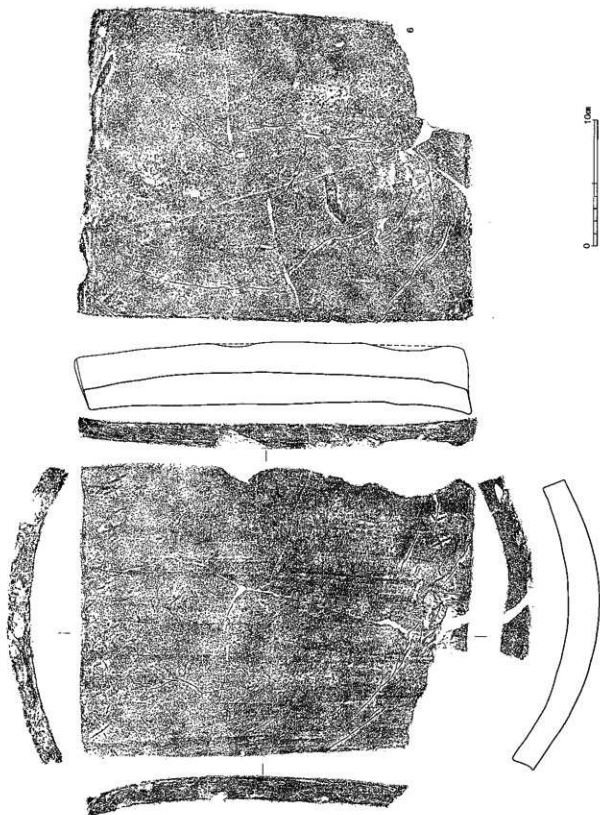
第3-66図 O6-SK202出土遺物実測図 (1/3)



第3-67図 06-SK208実測図 (1/40)



第3-68図 06-SK208出土遺物実測図① (1/3・1/1)



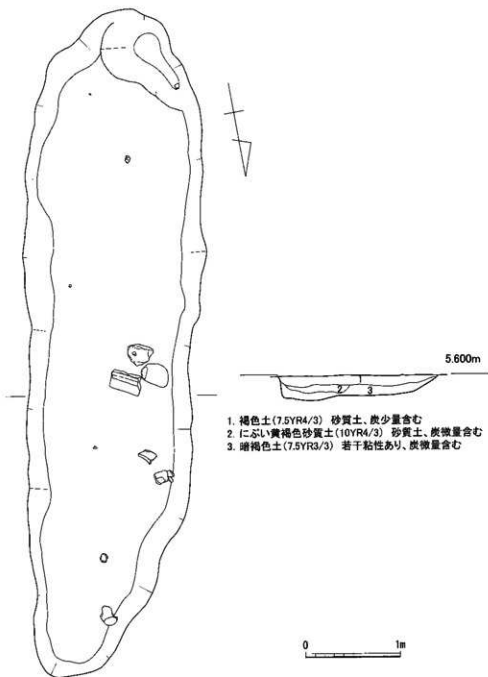
第3-69図 06-SK208出土遺物実測図② (1/3)

高く、東西両側に深く掘り込むことから、本来は2～3基の土坑が重複していたと考えられる。遺構の規模は長辺2.16m、短辺1.35m、深さは東部で0.75m、西部で0.65mを測る。東側の土坑は北半部にテラス状の段が付く。埋土はやや砂質で炭を含む黒褐色土(10YR3/2)の単一層で、土層から遺構の切り合いを確認できなかった。遺物は青磁、土師器、瓦質土器、銭貨等があり、特に銭貨の出土が目立つ。銭貨は東側土坑の中位から上位にかけて複数点が出土した。遺構の年代はSD093より新しいIV期(15世紀中頃から後半)に位置付ける。

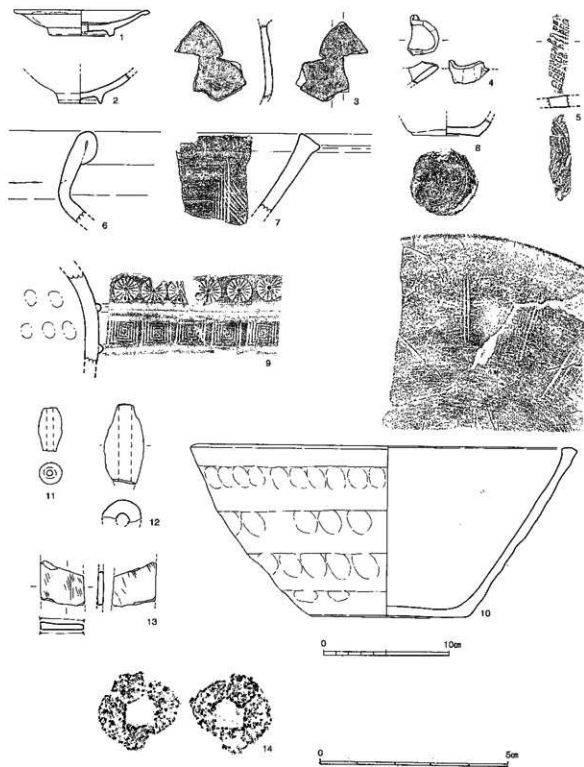
06-SK173出土遺物(第3-58図)

墨書と
思われる
銭貨跡

1は青磁碗の底部である。2は土師器杯の底部で、見込みに墨書と思われる痕跡が認められるが、文字は判読できない。3～6は瓦質土器で、3・4は摺鉢、5は鍋、6は脚付きの火鉢又は風

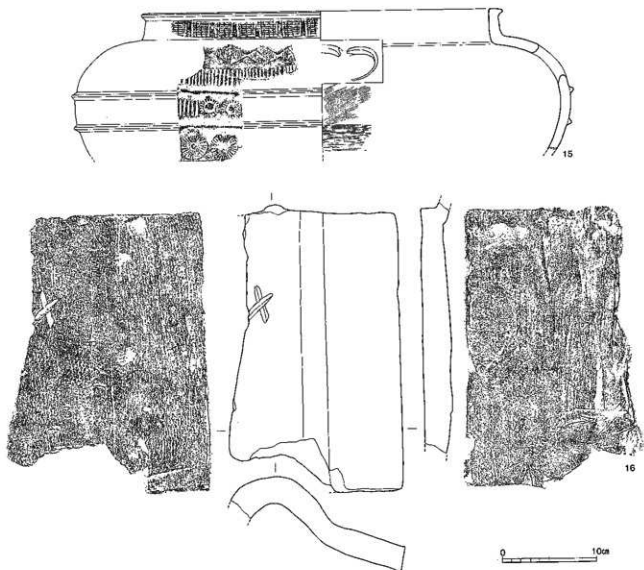


第3-70図 06-SK209実測図(1/40)



第3-71図 06-SK209出土遺物実測図①(1/3・1/1)

炉の底部である。7～13は銭貨で、4点の銭種が判読できる。7は北宋の淳化元寶(990年初鑄)、8は北宋の天禧通寶(1017年初鑄)、9は北宋の天聖元寶(1023年初鑄)、10は北宋の聖宋元寶(1101年初鑄)である。11は元□通寶と判読でき、可能性としては北宋の元豊通寶(1078年初鑄)か元祐通寶(1086年初鑄)のいずれかであろう。12・13は銭文が磨滅や錆により不鮮明で判読できず、銭種は不明である。



第3-72図 O6-SK209出土遺物実測図②(1/4)

O6-SK198 (第3-59図)

1区のO62グリッドで検出した土坑である。平面形状はやや歪な卵形を呈し、長辺1.57m、短辺0.83m、深さ0.26mを測る。埋土は炭を含む黒褐色土(7.5YR3/2)で、粘性は強い。内部の掘り込みは東側が緩やかであるのに対し、西側壁面はやや角度が立つ。土坑の南東側には段が付く。遺物や礫は土坑の北半部、遺構の深い部分からややまとまって出土しているが、図示できるものは少ない。遺構の年代はO6-SX100を切ることからⅦ期(16世紀末葉)である。

O6-SK198出土遺物 (第3-60図)

1は青磁碗である。内外面とも無文で、口縁部は外反する。15世紀代のものである。

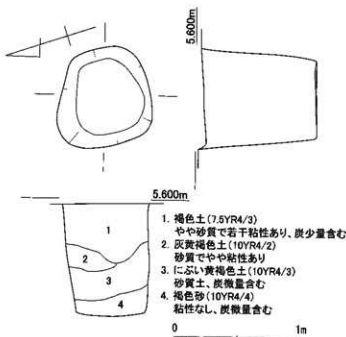
O6-SK199 (第3-61図)

1区のO63グリッドで検出した土坑である。東側が調査区外に流くため全体の形状及び規模は明らかにできないが、検出した範囲で東西1.34m以上、南北1.10m、深さ0.35mを測る。埋土は2層

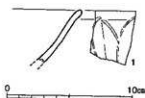
に分層でき、上層は粘性の強い黒褐色土、下層は砂質でやや粘性の強いにぶい黄褐色土である。内部は二段掘りになっており、南側にテラス状の段が付く。遺物は青磁や15世紀後半の土師器小坏等が出土したが、06-SX100を切ることからⅤ期(16世紀末葉)に位置付ける。

06-SK199出土遺物 (第3-62図)

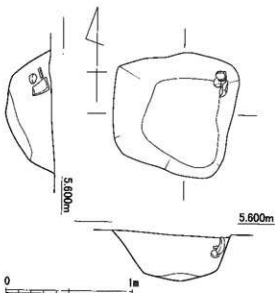
1は青磁香炉で、底部に3足の短い脚が付く。2・3は在地形の土師器小型坏である。2は口縁部が直線的に開き、逆台形状の器形を呈する。3は口縁部の下位で軽く屈曲し、口縁部は外反気味におさめらる。いずれも底面に回転糸切り痕が認められる。



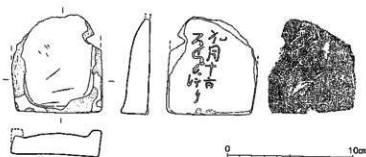
第3-73図 06-SK217実測図 (1/30)



第3-74図 06-SK217出土遺物実測図 (1/3)



第3-75図 06-SK219実測図 (1/30)



第3-76図 06-SK219出土遺物実測図 (1/3)

06-SK200 (第3-63図)

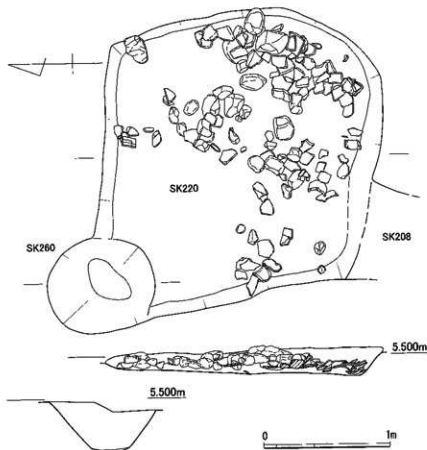
1区のO63・O64グリッドで検出した、5層上面から掘り込む土坑ある。平面形状は隅丸方形で、東側は調査区外に続く。長辺1.63m、短辺1.28m以上、深さ1.60mを測る。土坑底面は平坦で、底面から壁面が直に立ち上がる。埋土は4層に分層でき、いずれも炭を含む他、1層には焼土細粒も混じる。土坑からは数点の礫が散発的に出土した他、遺物は白磁や土師器、土錘等が出土した。14世紀代の土師器が出土しており、遺構の年代はⅡ期(14世紀中頃～14世紀末)と推定する。

06-SK200出土遺物 (第3-64図)

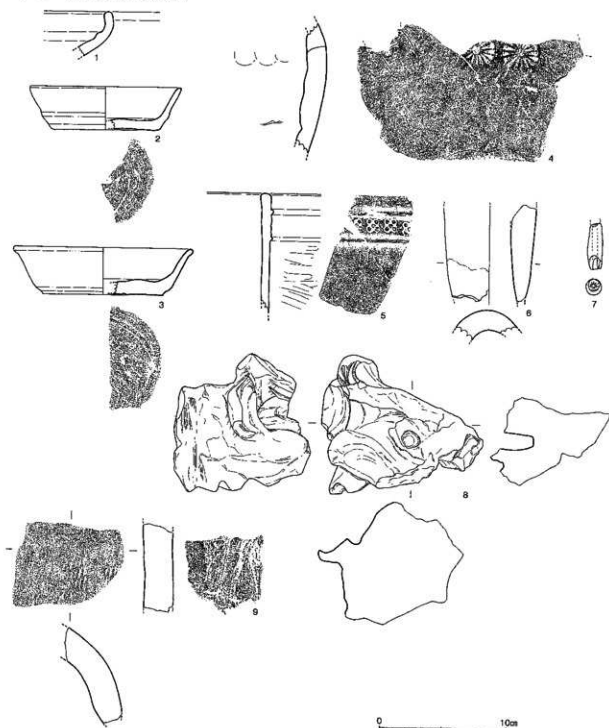
1は白磁碗である。内外面とも無文で、口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。2は在地の土師器小皿である。口縁部の立ち上がりは丸く、内湾気味におさめる。3は在地の土師器坏である。口縁部は直線的に開き、口縁下部の器壁は厚みを持つ。4は土師質焼成の管状土錘である。

06-SK202 (第3-65図)

1区の南東端、O63・O64グリッドで検出した土坑である。最初に第5層上面で検出した時点では細長い溝状の形状であったが、掘り下げるうちに遺構が広がる事が分かったため、最終的には幅が倍近くに拡大した。南側が調査区外に続くために全体の規模は明らかにできないが、検出した範囲で東西3.65m、南北6.70m以上、深さ0.48mを測る。埋土は4層に分層できる。遺物は土師器が出土しており、遺構の年代はⅡ期(14世紀中頃～14世紀末)に比定する。



第3-77図 06-SK220・260実測図(1/30)



第3-78図 O6-SK220出土物実測図 (1/3)

O6-SK202出土遺物 (第3-66図)

1～3は在地の土師器小皿である。いずれも器高は低く、口縁部は短く外に開く。4は在地の土師器杯で、底部から口縁部にかけて直線的に開き、器壁は胴部中位に厚みをもつ。内外面とも煤の付着が認められる。5は土師器の鍋である。胴部は丸く、口縁部は大きく外に折れる。6は土師器鍋で、口縁下に髷部を貼り付ける。7は甕羽口の破片である。



第3-79図 O6-SK260出土遺物実測図 (1/3)

06-SK208 (第3-67図)

1区のN63・64、O63・64グリッドで検出した土坑である。形状は細長い溝状を呈し、北端部には小さい土坑状の掘り込みを伴う。長さ5.74m、幅0.95m、深さ約0.2mを測る。遺構の北側は06-SK220、06-SD221と重複しており、SK208がこれらの遺構を切っている。埋土は2層に分層でき、上層は少量の炭を含む褐色土、下層は微量の炭を含む灰黄褐色土で、やや粘性を帯びる。遺物は青花や土師器、瓦、石製品、銭貨片等が出土した。この周囲では同様の土坑や短い溝状遺構が複数確認 (SK208・SK209、SD195・SD196・SD197・SD203・SD204・SD214が該当) されており、一樣に耕作土に由来すると思われる灰色〜ぶい黄褐色系の埋土を持っている。同様の遺構は旧万寿寺跡第6次調査区と西接する中世大友府内町跡第29次調査区でも確認されており、ここでは連続する溝状遺構群として道路状遺構の下部構造としての波板状圧痕の可能性も指摘されている³⁾。報告では埋土の状況が不明だが、旧万寿寺跡第6次調査区では他に道路状遺構とすべきものではなく、SK208等遺構群も土壌が硬化したような状況が見られないなど、道路とは考え難い。1区の中世遺構面の最上部で検出され、かつ耕作土に似た埋土をもつ状況から推察すると、むしろ近世以降の耕作に伴う遺構の可能性が考えられる。

中世大友府内町跡第29次調査区
波板状圧痕

近世以降の耕作に伴う遺構の可能性

06-SK208出土遺物 (第3-68・3-69図)

1は景德鎮窯の青花碗である。器壁は薄く、内面口縁下に四方禪文、外面には細線彫りの文様を施す。2は在地の土師器坏で、底面に回転糸切り痕が残る。3は土師器の鍋で、口縁外端部は玉縁状に肥厚する。内外面ともハケ調整を密に施す。4は瓦石である。5は銭貨の細片で、銭の字が判読できる。北宋の大観通寶 (1107年初鑄) であろうか。6はほぼ完成形の平瓦である。凹面の両端近くに連続する「×」状の文様が認められる。

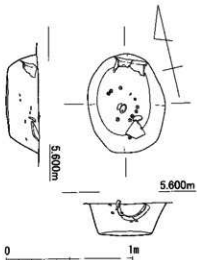
連続する「×」状の文様

06-SK209 (第3-70図)

1区のN63・N64グリッドで検出した土坑である。平面形状は幅広い溝状を呈し、長さ7.12m、幅1.96m、深さ0.25m前後を測る。埋土は3層に分層でき、1層は褐色砂質土、2層はぶい黄褐色砂質土、3層は若干粘性を帯びる暗褐色土である。遺物は陶磁器、土師器、瓦質土器、瓦、土製品、石製品、銭貨等が出土した。中世の遺物が出土するが、06-SK208同様に近世以降の耕作に伴う遺構の可能性がある。

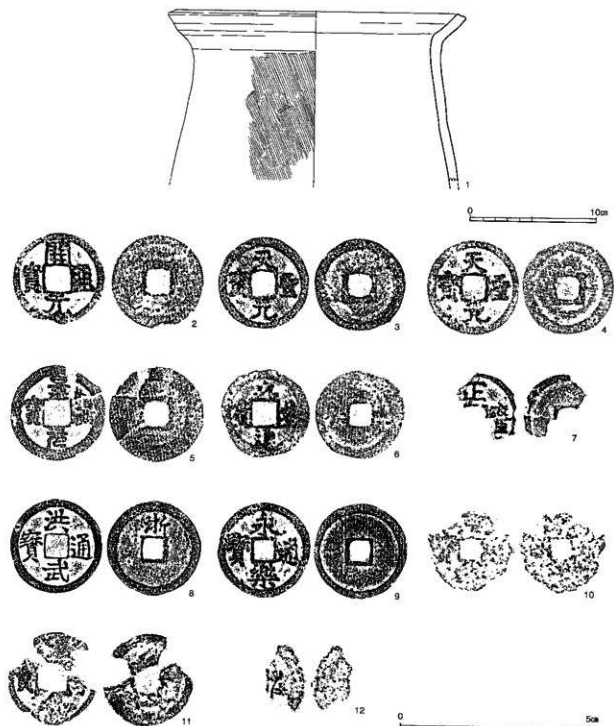
06-SK209出土遺物 (第3-71・3-72図)

1は白磁皿である。口縁部は外反し、見込み及び外面の口縁下からはほぼ全面を釉割ぎする。2は無文の青磁碗である。3は磁甕窯の甕であろう。内外面ともに緑色の釉薬を施す。4は瀬戸窯の片口鉢で、片口部の破片である。5は瀬戸美濃窯の卍皿である。6は備前焼の甕で、口縁部を折り返して玉縁状につくる。7は備前焼の摺鉢で、口縁部の断面形は三角形状を呈し、内面の摺目末端部が交差する。8は在地の土師器坏で、底面に回転糸切り痕が残る。9は瓦質土器で、凸帯面に方形スタンプ文、凸帯区画の上位に



第3-80図 06-SK226実測図 (1/30)

註3) 道路状遺構に比定する根拠として、溝状遺構が規則的に並ぶこと、そしてその端部が揃っているような状況が認められることが挙げられている。
 執筆年：2009『中世大友府内町跡第29次調査区』『桑原府内12』大分県教育庁学術文化財センター調査報告第41集、大分県教育庁学術文化財センター



第3-81図 06-SK226出土遺物実測図 (1/3・1/1)

菊花文のスタンプを施す。10は瓦質土器の指頸で、口縁部は丸く肥厚する。外面には整形の指頸圧痕が顕著に残る。内面には摺目を施すが、使用により磨滅している。11・12は土師質焼成の管状土錘である。13は砥石で、上下両面に擦痕が残る。14は銭貨であるが、銭種は不明である。15は瓦質土器の風炉である。肩部には上部が連弧状となる風文を配する。スタンプ文は多様で、口縁下に方形枠内に格子目状文、肩部には菱形文と連子状文、胴部凸帯間には中心が突出する菊花文と連子状文、凸帯下に菊花文を施す。16は雁振瓦である。凹面には布目痕、凸面には縄目タタキが認められ、凸面に「×」字状の線刻がみられる。

06-SK217 (第3-73図)

1区のN64グリッドで検出した土坑である。平面形状は隅丸方形形状を呈し、東西・南北ともに0.77m、深さ0.95mを測る。内部の壁はほぼ直に掘り込まれ、底面は平坦である。埋土は4層に細分でき、上位堆積層は粘性を帯びるのに対し下部堆積層は粘性に乏しい。内部から青磁碗の小破片が出土したが、遺物の出土量は少ない。そのため遺構の年代推定は困難である。

06-SK217出土遺物 (第3-74図)

1は青磁碗である。外面に簡潔な文を施す。

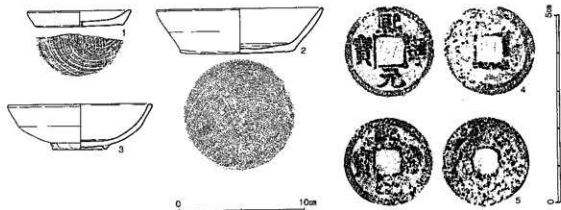
06-SK219 (第3-75図)

1区のN63グリッドで検出した土坑である。平面形状は隅丸方形形状を呈し、東西・南北とも0.98m、深さ0.37mを測る。埋土は砂礫混じりの褐色土(7.5YR4/3)で、少量のマンガン細粒と微量の炭を含み、粘性は弱い。内部の掘り込みは丸みもち、底面も中央がやや窪む。遺物は土坑の北東端付近で固まって出土した。特筆されるものとして底面に刻書を持つ土製硯が出土している。中世の遺構ではあるが、遺構の詳細な年代を示す遺物に乏しく時期は明らかにできない。

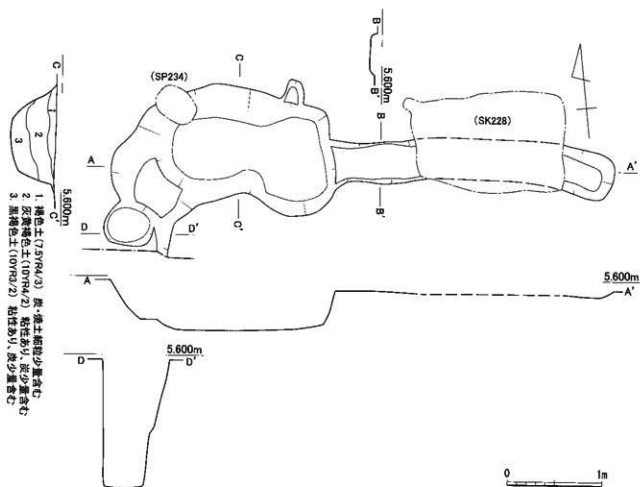
底面に刻書を持つ土製硯



第3-82図 06-SK228実測図(1/30)



第3-83図 06-SK228出土遺物実測図(1/3・1/1)

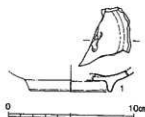


第3-84図 O6-SK235実測図 (1/40)

06-SK219出土遺物 (第3-76図)

「九月十二日」の刻字

1は土製硯である。全体の3分の2が残るが、「海」部分から上端部を欠失する。底面には二行にわたる刻字があり、1行目は「九月十二日」の刻字が判読できるが、2行目は崩れた字のため判読できない⁶⁾。人名の可能性もあるが、詳細は不明である。



第3-85図 O6-SK235出土遺物実測図 (1/3)

06-SK220・SK260 (第3-77図)

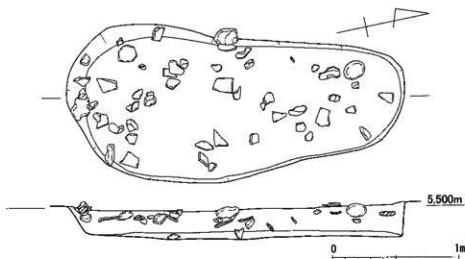
1区のM63・N63グリッドで検出した土坑である。SK220はSD221を切って構築しており、南西側は06-SK208に切られている。またSK260はSK220の北西端部に位置する小規模な土坑で、SK220を切っている。古い方から構築順を整理すると、SD221→SK220→SK260→SK208となる。

SK220は隅丸方形の平面形状をした土坑で、長辺2.32m、短辺2.23m、深さ0.23mを測る。埋土は褐色土(7.5YR4/3)で、白色砂粒と少量の炭を含む単一層である。内部の掘り込みは皿状を呈し、多量の遺物や礫が出土したが、北西部からの出土は少ない。遺構の性格は廃棄土坑と考えられる。

SK260の平面形状は略円形で、長径0.85m、短径0.76m、深さ0.38mを測る。埋土にはぶい黄褐色土(10YR4/3)で、少量の炭を含む。

これら遺構の年代はIV期に埋没したと考えられる溝D221を切ることからIV～V期(15世紀後半～16世紀前半)の間に位置付けられる。

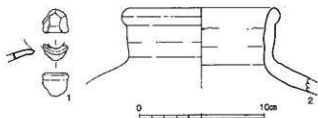
注6) 刻字の判読には榎井成昭氏(關東古墳大分県立歴史博物館、現大分県立先史資料館)の御協力を得、種々御指示いただいた。



第3-86図 06-SK236実測図 (1/30)

06-SK220出土遺物(第3-78図)

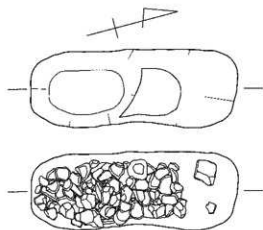
1は備前焼の鉢である。口縁部は内湾し、端部は丸くおさめる。2・3は在地の土師器坏で、底面に回転糸切り痕が残る。3は口縁部が外反し、端部は丸い。4・5は瓦質土器である。4は風炉で、肩部に風門を配し、菊花状のスタンプ文を施す。5は深鉢形の火鉢で、口縁下の凸帯間にサイコロの5の目状のスタンプ文を施す。6は罐羽口で、先端部は被熱している。7は土師質施成の管状土錘である。8は鬼瓦で、顔の左上半部の破片である。眉と左目、耳、鼻、口唇上部が表現されている。9は丸瓦で、内面に布目板と九州型の吊紐痕、凸面に縄目タキ痕が残る。



第3-87図 06-SK236出土遺物実測図 (1/3)

鬼瓦

九州型の吊紐痕



06-SK260出土遺物(第3-79図)

1は在地の土師器小坏である。口縁部にわずかに煤が付着しており、灯明皿として使用されたものと判断される。底面には回転糸切り痕が残る。



第3-88図 06-SK243実測図 (1/30)

06-SK226 (第3-80図)

1区のM64グリッドで検出した土坑である。平面形状は略楕円形を呈し、長径0.79m、短径0.62m、深さ0.25mを測る。畑土は褐色土(7.5YR4/3)で、少量の炭を含む。遺物は土坑の北端部で口縁部の約2分の1が残る古代の土師器甕と、土坑中央付近を中心に11点の銭貨が出土した。銭貨には明の永楽通寶を含むことから、IV期(15世紀中頃～後半)以降の遺構と判断する。

11点の銭貨が出土

06-SK226出土遺物 (第3-81図)

1は土師器甕である。胴部がやや膨らむ下膨れ形の器形と思われ、頸部から口縁部は外に開く。外面に斜位のハケ目調整を施す。いわゆる企救型甕で、8世紀代に比定されよう。2～12は銭貨である。1は唐の開元通寶(621年初鑄)である。3～6は北宋銭で、3・4は天聖元寶(1023年初鑄)、5は景祐元寶(1034年初鑄)、6は元寶通寶(1078年初鑄)である。7は2字を欠くが「正盛」が判読でき、金の正盛元寶(1157年初鑄)と判断できる。8は明の洪武通寶(1368年初鑄)である。背面上部に「浙」字があることから、浙江省杭州で鑄造されたものと判る。9は明の永樂通寶(1408年初鑄)である。10・11は「寶」字以外は判読できない。12は1字だけが残るが、銭文が不鮮明で銭種は不明である。

企救型甕

金の正盛元寶
洪武通寶
浙江省杭州
で鑄造

06-SK228 (第3-82図)

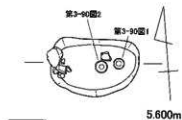
1区のM64グリッドで検出した土坑である。平面形状は隅丸長方形で、長辺1.55m、短辺1.06m、深さ0.32mを測る。溝状の土坑06-SK235と重複するが、土層断面からSD235がSK228を切っていることが確認できる。埋土は灰褐色土で、少量の炭を含む。遺物は土坑の検出面近くから土師器小皿が、中位から吉備系土師器碗、底面から逆位の状態で土師器坏が出土した。遺構の年代は吉備系土師器碗の出土からI期(14世紀前半)に位置づける。

吉備系土師器碗

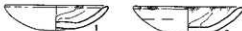
06-SK228出土遺物 (第3-83図)

1は在地の土師器小皿である。口縁部は短く、底面には回転糸切り痕が残る。2は在地の土師器坏で、口縁部は直線的に外に開き、底面には回転糸切り痕が残る。3は高台付きの吉備系土師器碗である。4・5は銭貨で、いずれも北宋の熙寧元寶(1068年初鑄)である。

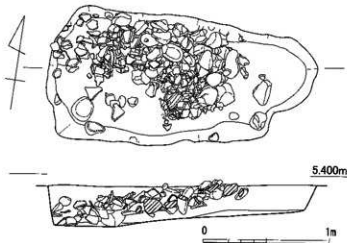
吉備系土師器碗



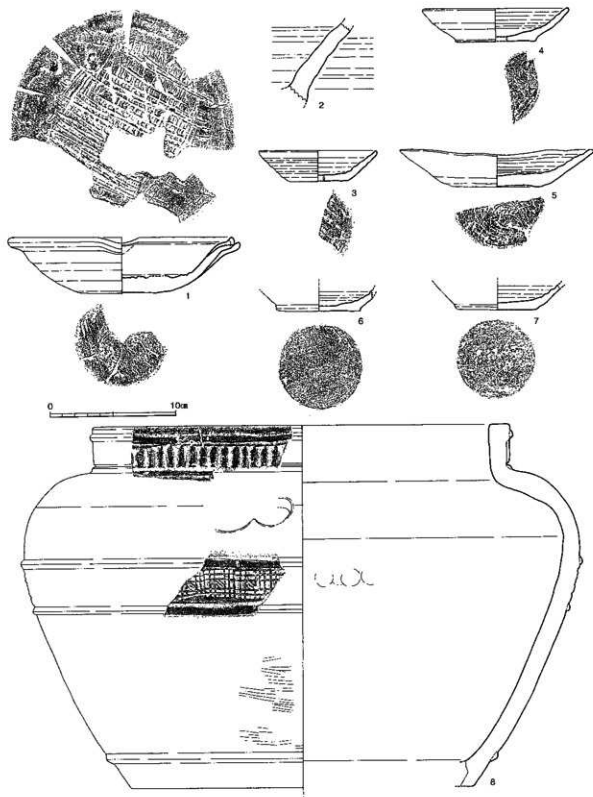
第3-89図 06-SK241実測図(1/30)



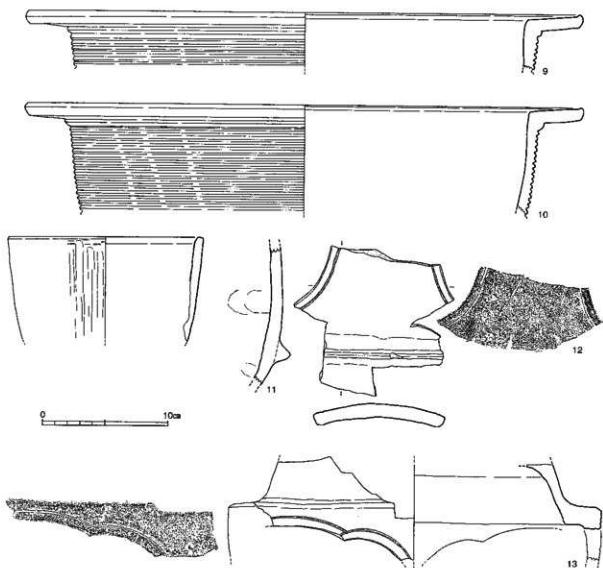
第3-90図 06-SK241出土遺物実測図(1/3)



第3-91図 06-SK248実測図(1/30)



第3-92図 06-SK248出土遺物実測図① (1/3)



第3-93図 06-SK248出土遺物実測図①(1/3)

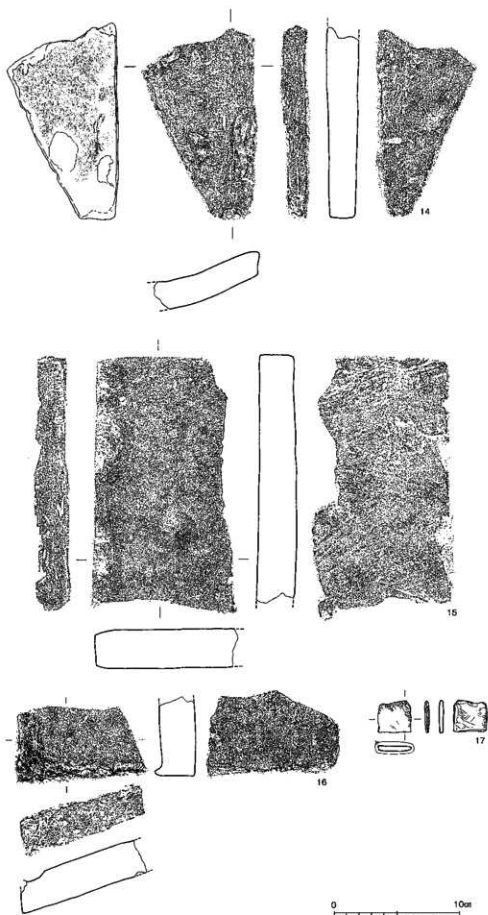
06-SK235 (第3-84図)

1区のM64グリッドで検出した土坑である。平面形状は不整形で、西半部の土坑状の部分と東半部の溝状の部分からなる。そのため溝と2基の土坑が重複したものと思われるが、その区別ができなかった。土坑状部分では北辺の一部は06-SP234に切られ、溝状部分の東半部は土坑06-SK228を切っている。長辺5.39m、短辺1.22m、溝状部分では幅0.40～0.50mを測る。深さは一様ではなく、溝状部分では約0.1mと浅いのに対し、土坑部分ではC-C'断面で約0.5m、D-D'断面では1.38mと深い。埋土は3層に分層され、上層では焼土を含む。遺構の規模に対し遺物の出土は少なく、年代を推定できる遺物に乏しい。しかし切り合いからSK228よりは後出することは確実で、二期(14世紀中頃から後半)以降としかいえない。

06-SK235出土遺物 (第3-85図)

双魚文

1は青磁碗である。見込みに魚形の型押し文があり、対向する魚をあしらった双魚文を施したものである。



第3-94図 06-SK248出土遺物実測図①(1/3)

06-SK236 (第3-86図)

1区のO62・O63グリッドで検出した土坑である。平面形状は長楕円形を呈し、長辺270m、短辺123m、深さ0.28mを測る。埋土は灰褐色土(7.5YR4/2)の単一層で、灰色味が強い砂質土である。土坑底面はほぼ平坦で、掘り込みは南辺が緩やかであるのに対し、北辺の掘り込み角度は急で、壁がほぼ直に立ち上がる。土坑のほぼ全域から礫や瓦、土器類が散在して出土しており、廃棄土坑と考えられる。15世紀代に比定される備前焼壺が出土しているが、Ⅳ期(15世紀中頃～後半)と考えられる井戸SE312の埋没後に構築された遺構であること、確実にⅤ期(16世紀前半)に位置づけられる遺物が認められないことから、Ⅳ期でもSE312埋没後すぐに構築されたものと考えたい。

廃棄土坑

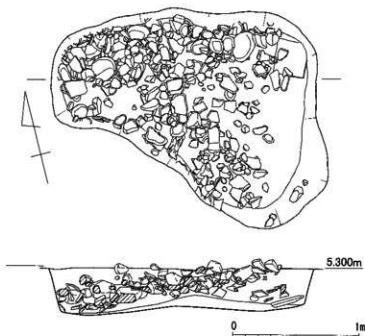
06-SK236出土遺物 (第3-87図)

1は瀬戸美濃窯の片口鉢で、片口部の破片である。2は備前焼の壺で、口縁部は玉縁状に肥厚する。

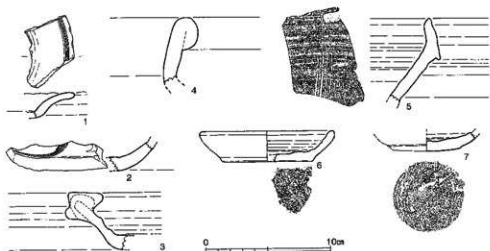
06-SK239 (第3-88図)

1区のN62グリッドで検出した土坑である。平面形状は南北に長い楕円形状を呈し、長辺1.65m、短辺0.61m、深さ0.37mを測る。土坑内の北半部は浅い皿状の掘り込みを呈し、南半部は一段深く掘り込んでいる。埋土は灰褐色砂質土(7.5YR5/2)で、少量の炭を含む。土坑の検出面から中位にかけて多量の礫が出土しており、廃棄土坑と考えられる。図示できる遺物の出土がなく、詳細な時期は明らかにできないが、14世紀代の溝06-SD282よりは新しい。Ⅲ期(14世紀末～15世紀前半)以降と考えられる。

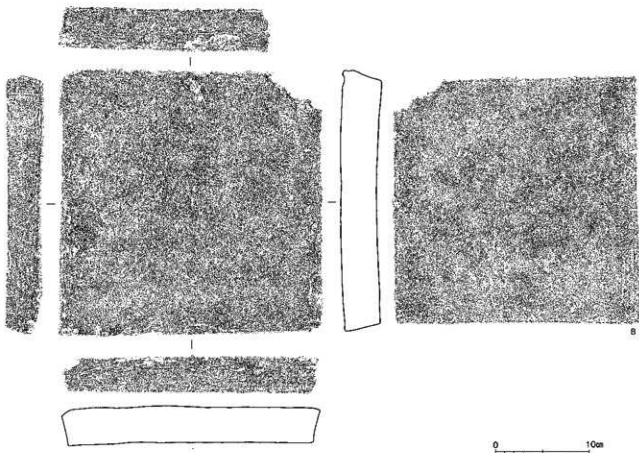
廃棄土坑



第3-95図 06-SK249実測図 (1/30)



第3-96図 06-SK249出土遺物実測図① (1/3)



第3-97図 06-SK249出土遺物実測図② (1/4)

06-SK241 (第3-89図)

1区のN63グリッドで検出した土坑である。平面形状は丸みを持つ隅丸長方形から楕円形状で、長辺0.70m、短辺0.46m、深さ0.06mを測る。埋土にはぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)で、微量の炭を含む。土坑の西端部から礫がまとまって出土した他、土坑の東半部では2点の完形の京都系土師器皿が底面に正位置で並べられた状態で出土しており、何らかの祭祀行為が行われたものと考えられる。遺構の年代は京都系土師器皿の出土からⅥ期(16世紀後半)である。

正位置で並べられた状態で出土祭祀行為

06-SK241出土遺物(第3-90図)

完形の京都系土師器皿

1・2は土坑底部に並べられた状態で出土した完形の京都系土師器皿である。いずれも底部から口縁部にかけて丸く立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。2点とも端部には煤の付着が認められる。



第3-98図 06-SK252実測図(1/30)

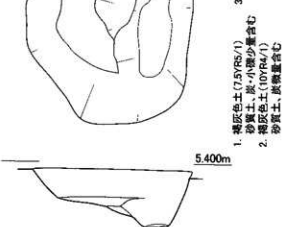
06-SK248(第3-91図)

火災処理土坑

1区のM63グリッドで検出した土坑である。平面形状は隅丸長方形状を呈するが、東辺がやや張り出す。長辺210m、短辺105m、深さ0.31mを測る。埋土は黒褐色土(7.5YR3/2)で、焼土・炭を含み、やや粘性を帯びる。内部からは多量の礫とともに瓦や土器類、墜土、焼土塊等が出土しており、火災処理土坑と考えられる。壁土の中には表面に白色の漆喰面を持つものがあり、白漆喰の建物が存在したことがわかる。遺物はV期(16世紀前半)に特徴的な在地のロクロ目土師器皿が出土しているが、この土坑の下位でVI期(16世紀後半)の06-SX291を確認していることから、VII期以降の遺構である。焼土を含むことから天正14年(1586)の鳥津氏の府内侵攻に伴う火災処理土坑の可能性もあり、VII期(16世紀末葉)に位置づける。

白漆喰の建物が存在

鳥津氏の府内侵攻に伴う火災処理土坑



第3-99図 06-SK252出土遺物実測図(1/3)

06-SK248出土遺物(第3-92図~第3-94図)

1は瀬戸美濃窯の卸皿である。口縁部的一端が片口となるもので、見込みに格子目状の卸目を密に施し、底面には回転糸切り痕が残る。

コンテナ容器

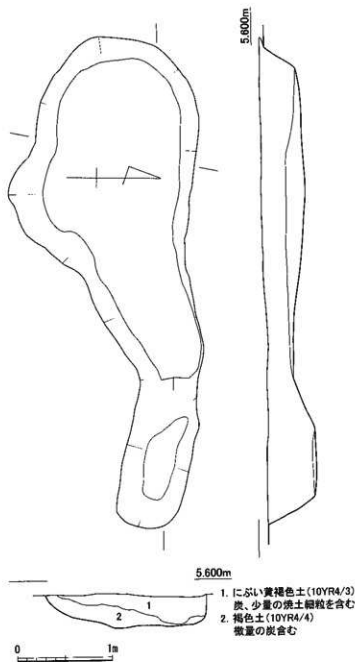
SK248の他、SK131上層及び包含層出土の破片と接合が認められた。2は施軸陶器の壺で、底部付近の破片である。内外面とも成形・調整による器面の凹凸が顕著に残る。06-SK249・06-SX291から同一個体片が出土している。産地不明だが中国南部産の可能性が考えられ、コンテナ容器として用いられたものであろう。3~7は内面にロクロ成形による多条の沈線が特徴的な在地の皿である。いずれも底面に回転糸切り痕が残る。4と7には二次焼成による変色が認められる。8は瓦質

二次焼成による変色

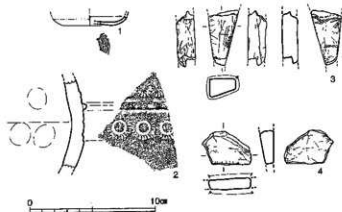
土器の風炉である。肩部が張った変形の器形を呈し、肩部には下部が連弧状となる風文を配する。口縁から頸部の凸帯間には連子状文、胴部凸帯間には方形のスタンプ文を施す。9・10は瓦質土器の火鉢で、同一個体の可能性が高い。口縁部が大きく外に折れ、胴部外面には多条の半隆起線状の横走線文を施す。9は06-SK268・06-SX291出土の破片と、10は06-SK249出土の破片とそれぞれ接合する。11は瓦質土器の鉢であろうか。外面に粗い縦位のミガキを施す。12・13は同一個体の瓦質土器であるが器種不明のもの。12は山形口縁となる破片で頂部を欠失する。口縁に沿って1条の細沈線を施し、口縁の山形基部近くに横位の凸帯を貼り付ける。13は脚付きの底部で、底部から脚部が段状に開く。脚部は連弧状を呈し、口縁部同様に端部に沿って1条の細沈線を施す。器形から花瓶の可能性も考えられるが、類例を知らない。14～16は瓦類である。14は赤彩を施した平瓦で、凹面に赤彩が認められる。15は磚、16は雁振瓦である。17は専手の砥石で、3面に擦痕が認められる。

半隆起線状の横走線文

赤彩を施した平瓦



第3-100図 06-SK253実測図 (1/40)

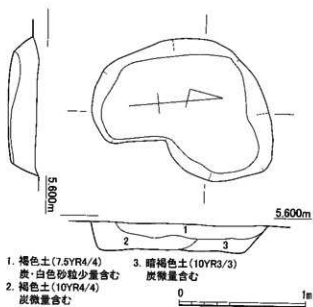


第3-101図 06-SK253出土遺物実測図 (1/3)

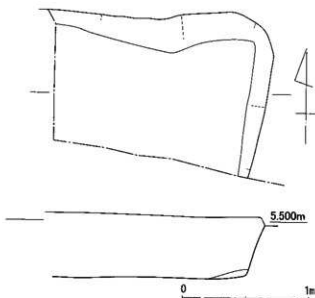
06-SK249 (第3-95図)

1区のM62・M63グリッドで検出した土坑で、先述の06-SK248とは近接している。平面形状は各頂点が丸みを持つ三角形形状を呈し、長辺2.39m、短辺1.48m、深さ0.38mを測る。埋土はやや粘性のある黒褐色土(75YR3/2)で、焼土・炭を含む。内部からは多量の礫とともに瓦や土器類、焼土塊等が出土しており、火災処理土坑と考えられる。06-SK248とは縄土が同じで、出土遺物も接合関係が認められることから、両者は同じ火災に伴う廃棄土坑の可能性が高い。従って遺構の時期は06-SK248と同じ遅期(16世紀末案)に位置づける。

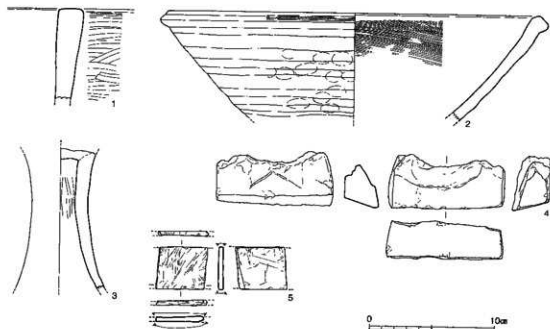
火災処理土坑



第3-102図 06-SK258実測図(1/30)



第3-103図 06-SK259実測図(1/30)

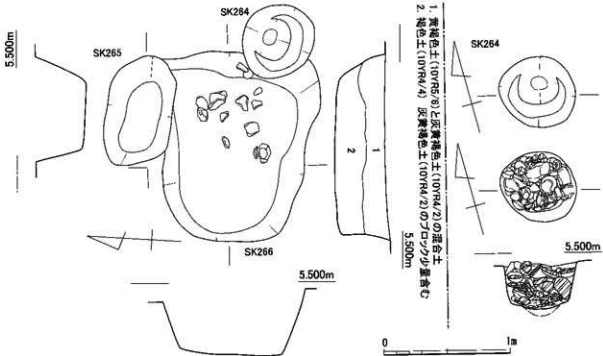


第3-104図 06-SK259出土遺物実測図(1/3)

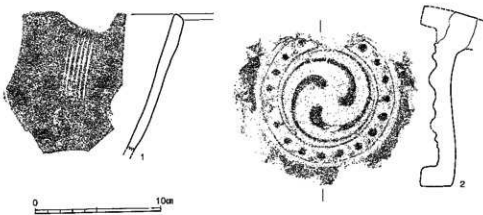
06-SK249出土遺物 (第3-96・3-97図)

中国南部産の
コンテナ容器

1は青磁の椀花皿である。2は青磁碗で、内面に刷毛目文を施す。3は施釉陶器の壺で、口縁部は内外面ともに肥厚させ、口縁端部は平坦な面をもつ。外面には凹線が顕著にみられる。06-SK248と06-SX291から同一個体と考えられる破片が出土しており、中国南部産のコンテナ容器と考えられる。4は備前焼の甕で、口縁部を折り返して玉縁状に作る。5は備前焼の摺鉢で、内傾する口縁部が上方にのびる。6・7は在地の土師器皿で、内面にロクロ整形による多条の沈線がみられる。いずれも底面には回転斬切り痕が残る。8は埴で、一端をわずかに欠くがほぼ半形である。



第3-105図 06-SK264・SK265・SK266実測図 (1/30)



第3-106図 06-SK264出土遺物実測図 (1/3)

06-SK252 (第3-98図)

1区のO62・N63・O63グリッドで検出した土坑である。平面形状は隅丸長方形から楕円形状を呈し、長辺1.80m、短辺1.33m、深さ0.45mを測る。埋土は3層に分層でき、1層は炭・小礫を含む褐色砂質土、2層は微量の炭を含む褐色土、3層は砂と粘土がマーブル状に混じる灰黄褐色土である。土坑の底面はほぼ平坦で、東側にかけて一段深く掘り込んでいる。遺物は瓦の他に図示できるものがないが、IV期(15世紀中頃～後半)に比定される06-SE312の埋没後に構築された遺構であることから、V期(16世紀前半)以降と判断する。

06-SK252出土遺物 (第3-99図)

1は平瓦である。凹面上部から凸面側に向けて穿つ釘穴をもつ。

06-SK253 (第3-100図)

1区のM63グリッドで検出した土坑である。06-SD221と06-SD288と重複するが、06-SK253がこれらの遺構を切っている。平面形状は不整形で、東端部は土坑状に一段深く掘り込まれる。遺構の規模は長辺5.23m、短辺1.96m、深さ0.53mを測る。埋土は2層で、上層は炭及び少量の焼土細粒を含むいぶい黄褐色土、下層は微量の炭を含む褐色土である。遺物の出土は少なく、年代比定の決め手を欠くが、IV期(15世紀中頃～後半)に比定される06-SD221を切ることから、V期(16世紀前半)以降に位置づける。

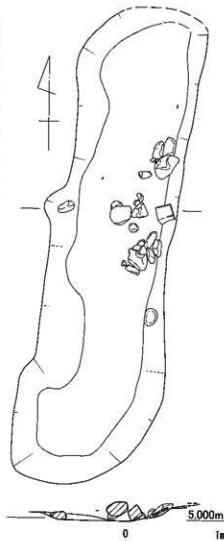
06-SK253出土遺物 (第3-101図)

陶器茶入

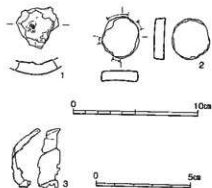
1は陶器茶入の底部である。平底で同部の立ち上がりは丸い。底面には回転糸切り痕が残る。2は瓦質土器の火鉢又は風炉で、凸帯の上下にスタンプ文を施す。3・4は砥石である。

06-SK258 (第3-102図)

1区のL64・M64グリッドで検出した土坑である。長辺1.51m、短辺1.12m、深さ0.23mを測る。埋土は炭を含む褐色土ないし暗褐色土で、色調及び土質から3層に分層できる。1層には白色砂粒が混じる。図示できる遺物の出土がなく遺構の詳細な時期は明らかでないが、06-SD090の埋没後に構築された遺構であることから、III期(14世紀末～15世紀前半)以降のものである。



第3-107図 06-SK267実測図(1/40)



第3-108図 06-SK267出土遺物実測図(1/3・1/2)

06-SK259 (第3-103図)

1区の南西端、L64・M64グリッドで検出した土坑である。西側及び南側が調査区外に続くため全体の形状や規模は明らかにできないが、検出範囲では北東端部が丸みを持つ方形を呈する。遺構の規模は東西1.60m以上、南北1.30m以上、深さ0.35mを測る。06-SD090とは重複しており、06-SK259が06-SD090を切っている。06-SD090を切ることからⅢ期(14世紀末～15世紀前半)以降に位置づけられる。

06-SK259出土遺物 (第3-104図)

赤間石

赤間硯の未
成品

1・2は瓦質土器である。1は火鉢で、外面に粗いミガキを施す。2は控鉢で、内面は横位のハケ調整、外面には成形時の指頭圧痕が残る。3は土師器の高坏脚部で、脚部が高い形状から古代のものであろう。4・5は石製品である。4は輝緑凝灰岩、いわゆる赤間石を素材とし、備辺の3辺に鋸挽きによる切断痕が見られる。赤間硯の未成品である。5は砥石である。

06-SK264・06-SK265・06-SK266 (第3-105図)

廃棄土坑

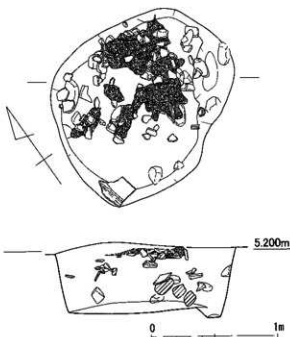
1区のN62・N63グリッドで検出した3基の土坑で、06-SK266を06-SK264・06-SK265が切っている。06-SK264は円形の小さな土坑で、長辺0.62m、短辺0.56m、深さ0.43mを測る。埋土は暗褐色砂質土(10YR3/3)で、少量の炭を含む。内部には多量の糠や瓦等を充填しており、廃棄土坑と考えられる。06-SK265は楕円形の土坑で、長辺0.90m、短辺0.50m、深さ0.43mを測る。埋土は灰褐色土(7.5YR4/2)で、微量の炭を含む。06-SK266は隅丸方形の土坑で、長辺1.50m、短辺1.12m、深さ0.51mを測る。埋土は2層あり、主に下層から糠や遺物が出土している。これら遺構の年代を示す遺物に乏しいが、Ⅳ期(15世紀中頃から後半)以降であろうか。

06-SK264出土遺物 (第3-106)

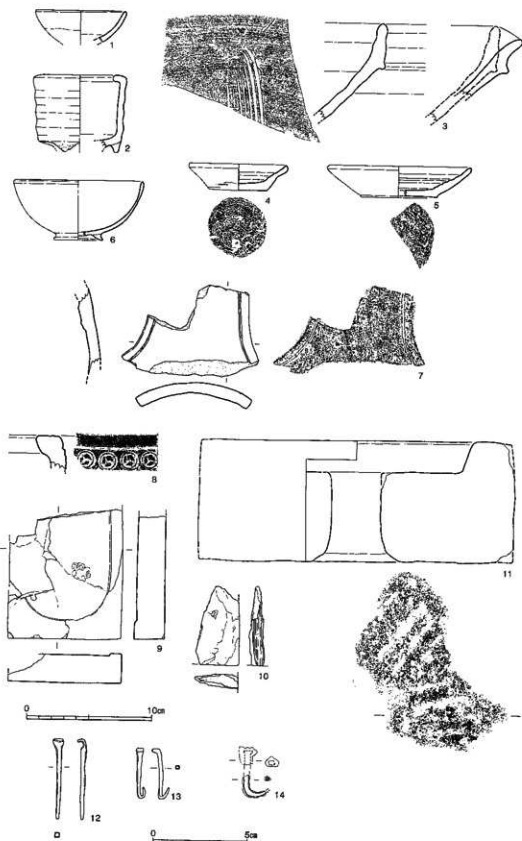
1は瓦質土器の摺鉢である。内面には6条1単位の摺目を施すが、下部は使用により摩滅している。2は軒丸瓦である。瓦当中心に右巻きの巴文と、その周囲に珠文を施す。

06-SK267 (第3-107図)

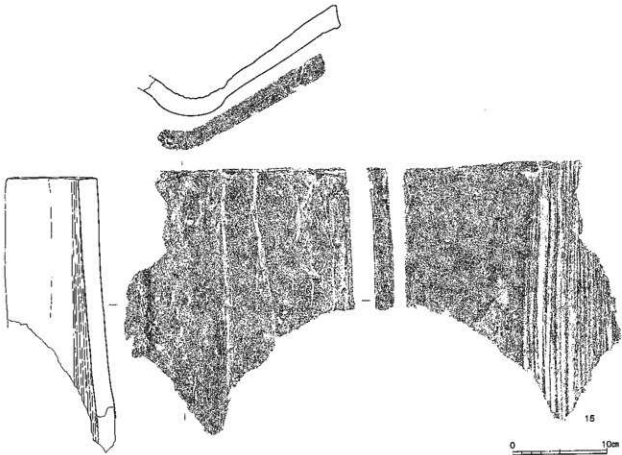
1区のM62グリッドで検出した土坑である。位置的には溝06-SD302と重複するが、検出面では直接の切り合い関係にはなく、それよりも上位に位置している。形状は南北に細長い溝状を呈し、北端部は2区との境界にかかるため全体を確認できていないが、2区で確認されないためほぼ境界線上で収束すると思われる。長辺5.02m以上、短辺1.53m、深さ0.26mを測る。埋土は黒褐色土(7.5YR3/2)で、少量の炭を含む。遺構の年代を示す遺物に乏しいが、06-SD302埋没後に構築された遺構であることから、Ⅴ期(16世紀末)に位置づける。



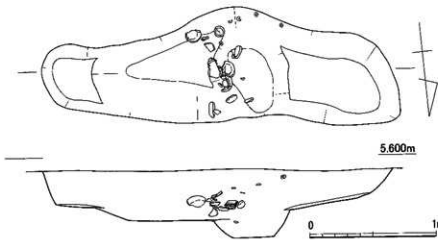
第3-109図 06-SK268実測図(1/30)



第3-110図 06-SK268出土遺物実測図①(1/3・1/2)



第3-111図 O6-SK268出土遺物実測図② (1/4)



第3-112図 O6-SK269実測図 (1/30)

06-SK267出土遺物 (第3-108図)

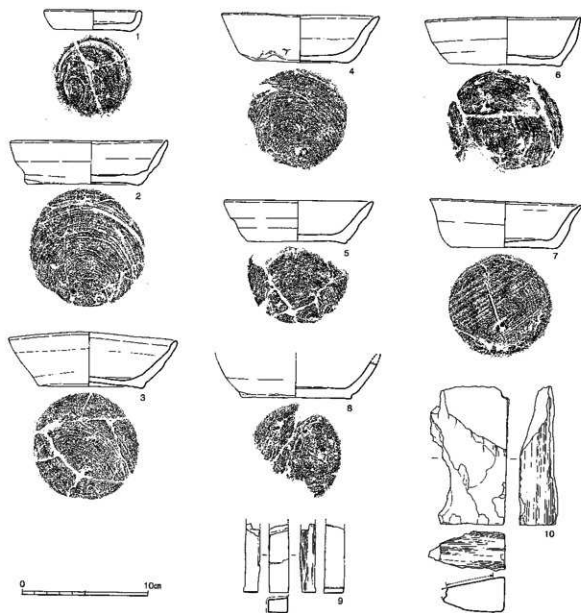
埴塼

1は埴塼の底部である。内面に金属を溶解した付着物がみられる。2は瓦質土器の破片の周囲を研磨した加工円盤である。3は銅製品で、薄い板状の銅を素材とする。

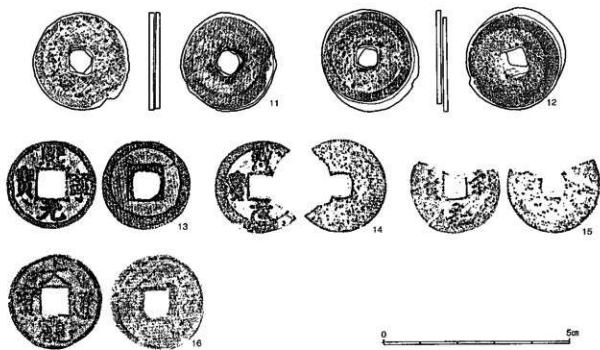
06-SK268 (第3-109図)

1区のM63グリッドで検出した土坑である。06-SK248・06-SK249と近接し、その距離は約1.8～2.0mの位置にある。平面形状はやや歪な卵形を呈し、長辺1.62m、短辺1.33m、深さ0.56mを測る。遺構の東端部は一部が深く掘り込まれる。埋土は灰褐色土(7.5YR4/2)で、焼土及び炭を含む。特に焼土は検出面から遺構上位にかけて濃密な分布が認められた。礫の他、陶磁器や土器類、瓦、石製品、金属製品、表面に漆喰を施した壁土等が出土した。また、遺物には二次焼成を受けたものも見受けられる。そのため、本遺構は火災処理土坑と判断される。出土遺物には06-SK248と接合関係があるものも認められることから、本土坑の時期は06-SK248・06-SK249と同時期と考えられる。従って、Ⅴ期(16世紀末葉)に位置付ける。

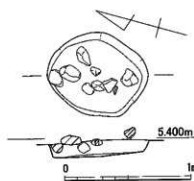
漆喰を施した壁土
火災処理土坑



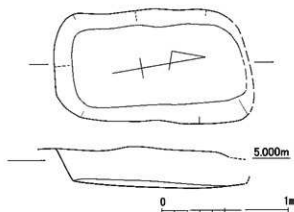
第3-113図 06-SK269出土遺物実測図①(1/3)



第3-114図 06-SK269出土遺物実測図② (1/1)



第3-115図 06-SK274実測図 (1/30)



第3-116図 06-SK281実測図 (1/30)

06-SK268出土遺物 (第3-110・3-111図)

1は白磁の小碗である。外面胴下半と見込みは露胎となる。2は青磁香炉で、底部には3つの短い脚が付く。3は備前焼摺鉢である。口縁部は断面三角形を呈し、端部が上方にのびる。4・5は在地の土師器皿で、内面にロクロ整形による多条の沈線が巡る。4は二次焼成を受けている。6は在地の瓦質土器で、高台付きの椀である。器面全体をケズリで調整する。一部に黒色に焼した痕跡が残るが、二次焼成により全体が赤変している。7は器種不明の瓦質土器で、06-SK248から同一個体と思われる破片が出土している。8は瓦質土器の火鉢で、口縁部の沈線下にスタンプ文を施す。9は赤陶石製の硯で、「海」部を欠く。10も赤陶石で、硯の製品ないし未成品の破片であろう。11は凝灰岩製の茶臼上臼である。表面及び破損面にかけて被熱した痕跡が見られる。下面には摺目を施すが、分面数は明らかにできない。12~14は鉄製品である。12は斧で、匙状となる上端部を折り曲げる。13は釣針状を呈するもので、吊手金具であろう。14は鉄釘である。15は雁振瓦で、二次焼成により全体的に赤変している。

二次焼成により
全体が赤変

赤陶石製の硯

斧

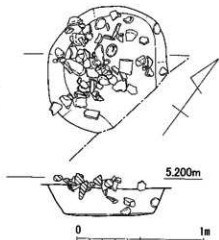
吊手金具



第3-117図 06-SK281出土遺物実測図 (1/3)

06-SK269 (第3-112図)

1区のM63グリッドで検出した土坑である。06-SD288と重複しており、06-SK269が06-SD288を切っている。平面形状は東西に細長い溝状を呈し、長辺2.86m、短辺0.87m、深さ0.57mを測る。埋土は褐色土(10YR4/4)で、少量の炭を含む。土坑の中央が一段深く掘り込まれ、その部分を中心に在地の土師器坏や銭貨等がまとまって出土した。出土地点が一段深い点と、出土している土器が06-SD288と差がないことから、これらの遺物は本来06-SD288に由来する可能性もある。遺構の年代は06-SD288より後出するⅣ期(15世紀中頃から後半)に比定する。



第3-118図 06-SK299実測図 (1/30)

06-SK269出土遺物 (第3-113・3-114図)

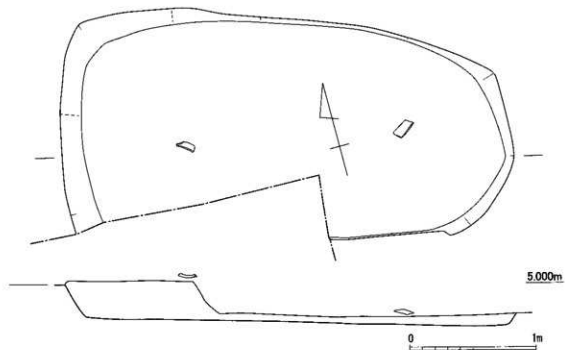
1～8は在地の土師器である。1は小皿で、底部から口縁部が丸みを持って短く立ち上がる。2～8は坏で、口縁部のやや下方の器壁が膨らむⅡ期(14世紀中頃～末)のもの(2・6)や、口縁部が外反し、端部が先尖り気味になるⅢ期(14世紀末から15世紀前半)のもの(7)がある。いずれも底面には回転糸切り痕が残る。9・10は石製品である。9は赤間硯であるが、硯の破片を砥石に転用したものと思われ、3面を平滑に研磨し、1面には鋸挽きの擦痕が残る。10は硯の未成品と思われるものである。石材は黒色の頁岩質で、対馬産の可能性がある。2辺に鋸挽きの擦痕が残る、上面は平滑である。11～16は銭貨である。11・12は2枚が鑄着するが、いずれも正面側が接合するため鏡種は明らかにできない。13～16は北宋銭である。13・14は熙寧元寶(1068年初鑄)、15は上部を欠くが聖宗元寶(1101年初鑄)、16は大觀通寶(1107年初鑄)である。

硯の破片を
砥石に転用

対馬産の可
能性

06-SK274 (第3-115図)

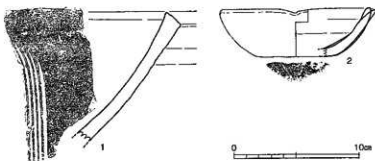
1区のN62グリッドで検出した土坑である。溝06-SD282と重複しており、06-SK274が06-SD282を切っている。平面形状は楕円形を呈し、長径0.80m、短径0.65m、深さ0.13mを測る。埋土は褐色土(10YR4/4)で、微量の炭を含む。土坑内からは10～20cm大の9点の礫が出土しており、廃棄土坑と考えられる。図示できるような遺物の出土がなく、遺構の詳細な年代は明らかにできないが、溝06-SD282を切ることから、Ⅲ期以降の遺構である。



第3-119図 06-SK324実測図 (1/30)

06-SK281 (第3-116図)

1区のM62グリッドで検出した土坑で、土坑06-SK267と近接している。06-SK267と同様に溝06-SD302より上位で検出している。北端部は2区との



第3-120図 06-SK324出土遺物実測図 (1/3)

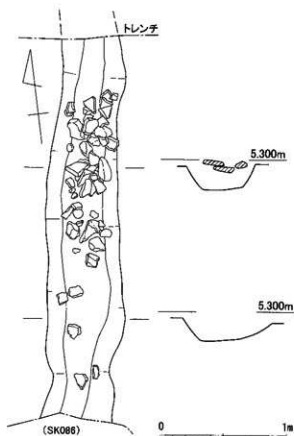
境界上に位置するため全体を確認できていないが、2区では確認されないためほぼ境界線上で収束すると思われる。平面形状は隅丸長方形で、長辺1.50m以上、短辺0.90m、深さ0.33mを測る。埋土は灰褐色土(7.5YR4/2)で、微量の炭を含み、にぶい黄褐色土(10YR4/3)のブロックが混じる。遺構の年代を示す遺物に乏しいが、06-SD302埋没後に構築された遺構であることから、Ⅵ期(16世紀末)に位置づける。

06-SK281出土遺物 (第3-117図)

1は瓦質土器の摺鉢である。口縁の一端が片口となり、内外面ともに横位のハケ目調整を施す。

06-SK299 (第3-118図)

1区のO63グリッドで検出した土坑である。東端部は調査区東壁沿いに設定した土層確認用のサブトレンチにより失われる。平面形状は円形で、長径1.06m、短径0.84m以上、深さ0.21mを測る。埋土はにぶい黄褐色土(10YR4/3)で、焼土細粒及び微量の炭を含む。土坑からは多量の礫が出土しており、廃棄土坑と考えられる。図示できる遺物の出土がなく、遺構の詳細な年代は明らかで



第3-121図 06-SD053実測図 (1/30)

きないが、同じ場所に井戸06-SE322があり、それよりも上位に位置することから、V期（16世紀前半）以降であることは間違いない。焼土を含むことから、VII期（16世紀末）まで下る可能性もある。

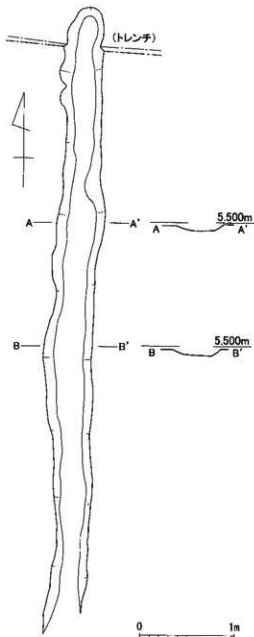
06-SK324 (第3-119図)

1区のL63グリッドで検出した土坑である。南西端部が調査区外に続くが、平面形状は楕

丸長方形を呈し、長さ3.61m、短辺1.71m以上、深さ0.30mを測る東半部は溝06-SD090と重複するためプランの見極めが難しく、本来の検出面よりもかなり掘り下げてようやく確定できたため、本来の規模はもう少し大きい。両者の重複関係は、06-SK324が06-SD090を切っている。遺物の出土は少ないが、遺構検出面から中世Ⅲ期に属年される備前焼摺鉢が出土している。遺構の年代は06-SD090より新しい、Ⅲ期（14世紀末～15世紀前半）以降に比定される。

06-SK324出土遺物 (第3-120図)

1は備前焼の摺鉢である。口縁部の形状から中世Ⅲa期に属年されるもので、14世紀後半に位置づけられる。2は在地の土師器坏である。口縁部的一端に片口を持つもので、底部から体部の立ち上がりは丸みを持つ。底面には回転糸切り痕が残る。

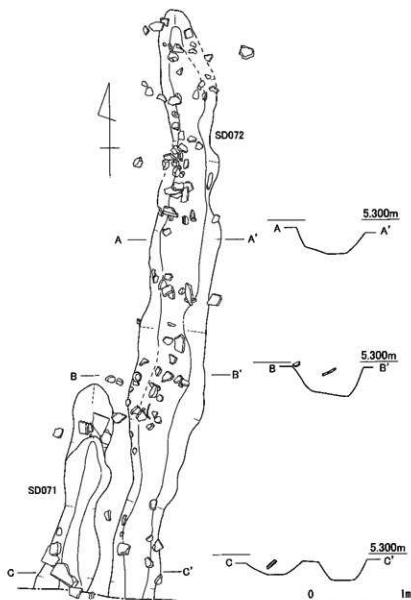


第3-122図 06-SD058実測図 (1/40)

3. 溝

06-SD053 (第3-121図)

2区のN60グリッドで検出した溝である。06-SK054・06-SK086と重複しており、06-SK054を切って、南端部は06-SK086に切られている。また、北側は調査区外に続くため、全体の規模は明らかにできない。検出範囲で長さ3.06m以上、幅0.45～0.61m、深さ0.20mを測る。掘土はにぶい黄褐色土(10YR4/3)で、少量の炭を含む。溝内部から1箇所、環の集中箇所が認められる。図示できる遺物がなく、遺構の詳細な年代

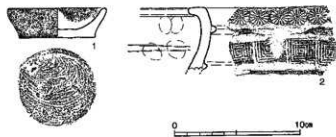


第3-123図 06-SD071・072実測図(1/40)

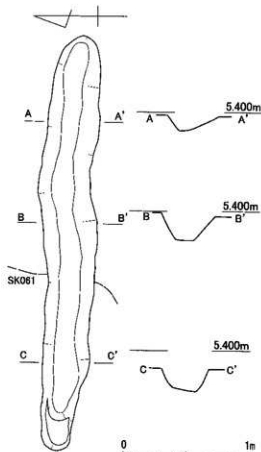
は明かにできないが、IV期(15世紀中頃～後半)の土坑06-SK054よりは新しく、06-SK086を含めて確実にV期(16世紀前半)に位置づけられる遺物が出土していないことから、IV期～V期の中で押さえておく。

06-SD058 (第3-122図)

2区のO60・O61グリッドの第5層上面で検出した溝である。南端部の取込箇所は削平のため不明瞭であるが、長さ6.66m、幅0.32～0.52m、深さ0.05mを測る。掘土はやや砂質の灰褐色土(7.5YR4/2)で、酸化鉄分が混じり、少量の炭を



第3-124図 06-SD072出土遺物実測図(1/3)



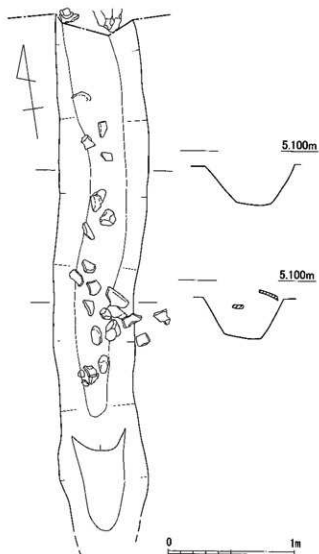
第3-125図 06-SD101実測図 (1/30)

含む。図示できる遺物の出土がなく
遺構の年代は明かにできない。

06-SD071・06-SD072 (第3-123図)

2区のN61・N62グリッドで検出した溝である。いずれも南北方向に延びるもので、2条が近接して、平行するように存在する。どちらも南端部は1区との境に位置しており終端部を確認できていないが、1区で検出できなかったことからほぼ1区との境界で収束するものと思われる。位置的には06-SK131と重複するが、どちらも06-SK131の埋土を切り込んでいる。

06-SD071は短い溝で、長さ2.21m以上、幅0.33～0.53m、深さ0.15mを測る。埋土は灰黄褐色土(10YR4/2)で、少量の炭を含む。溝の南北両端部付近から礫や遺物が出土している。06-SD072は06-SD071のすぐ東に位置する溝で、長さ6.24m以上、短辺0.42～0.81m、深さ0.30mを測る。埋土は黒褐色砂質土(7.5YR3/2)で、灰色土と炭が混じる。06-SD071と同様に溝の各所で遺物や礫がまとめて出土する部分が認められた。これら遺構の詳細な年代は不明だが、V期(16世紀前半)の遺構06-SK131に切り込むことからVI期(16世紀後半)以降に位置づけられる。



第3-126図 06-SD117実測図 (1/30)



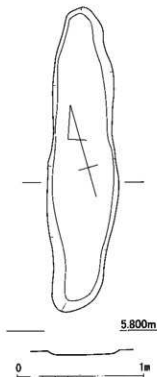
第3-127図 06-SD117出土遺物実測図 (1/3)

06-SD072出土遺物 (第3-124図)

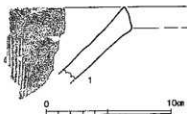
1は在地の土師器小皿である。外面及び内面の口縁部から胴部上位にかけて煤の付着が認められる。2は瓦質土器の火鉢で、外面口縁下に菊花状、凸帯間に雷文状のスタンプ文を施す。

06-SD101 (第3-125図)

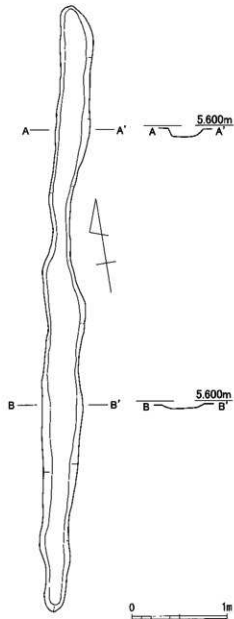
2区のN61グリッドで検出した溝である。東西方向に延びるもので、西半部は土坑06-SK061完掘後の底面で検出した。溝の規模は長さ3.29m、幅0.23～0.43m、深さ0.20mを測る。埋土は灰褐色土(7.5YR4/2)で、微量の炭を含む。遺物の出土は少なく、遺構の年代を明かにできるものはない。しかし、重複する06-SK061は溝06-SD106も切ることから、06-SD101は06-SD106と06-SK061の間に位置づけることが可能である。06-SD106からは14世紀代の土師器小皿が、06-SK061からは吉備系土師器碗がそれぞれ出土しており、遺構の前後関係から06-SK061はⅡ～Ⅲ期(14世紀中頃から15世紀前半)、06-SD106はⅠ～Ⅱ期(14世紀前半～14世紀末)と考えられる。06-SD101はⅡ～Ⅲ期で、Ⅱ期に近い時期を考えたい。



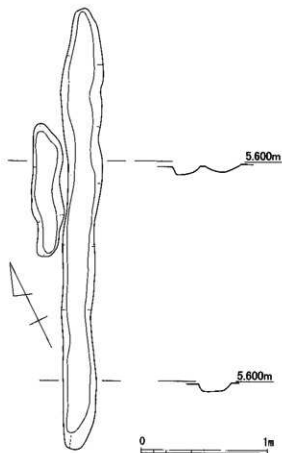
第3-129図 06-SD195実測図 (1/30)



第3-130図 06-SD195出土遺物実測図 (1/3)



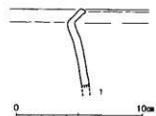
第3-128図 06-SD193実測図 (1/30)



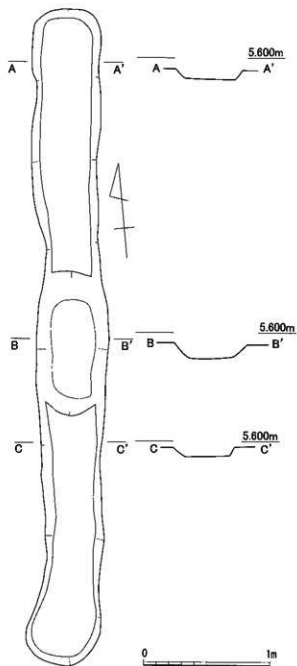
第3-131図 06-SD215実測図 (1/30)

06-SD117 (第3-126図)

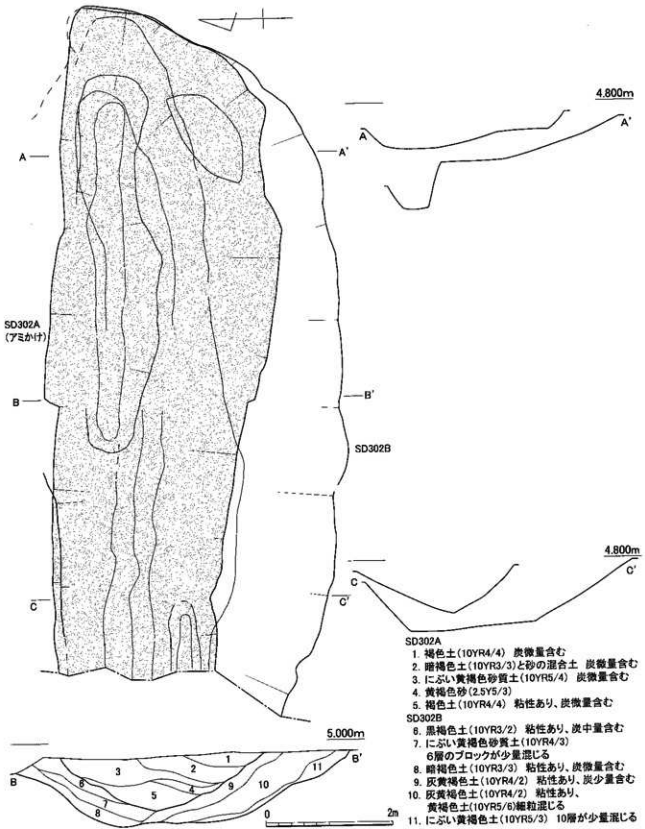
2区のM60・M61グリッドで検出した溝である。瓦等の廃棄土坑である06-SK097を切っており、またこの溝の下部で溝06-SD184を確認している。06-SD117の北側は調査区外に続き、南端部は削平のためか終端部が不明瞭であった。遺構の規模は検出した範囲で長さ4.10m以上、幅0.55～0.72m、深さ0.52mを測る。埋土は黒褐色土(10YR3/2)で、炭を含み、若干粘性を帯びる。溝内からは鏝や遺物が比較的まとまって出土しているが、図示できるものは少ない。遺構の時期は06-SK097がⅣ期(15世紀中頃～後半)に位置づけられることから、それよりも新しいⅣ期の後半からⅤ期(15世紀末頃～16世紀前半)である。



第3-132図 06-SD215出土遺物実測図 (1/3)



第3-133図 06-SD231実測図 (1/30)



第3-134図 06-SD302実測図(1/60)

06-SD117出土遺物 (第3-127図)

1は白磁皿である。外面の体部下半は露胎となる。

06-SD193 (第3-128)

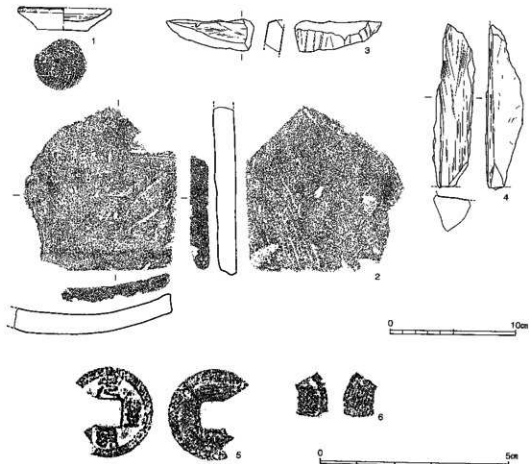
1区のO62・O63グリッドで検出した溝である。南北方向にのびるが、溝の主軸はN-10.6°-Eで、真北からやや東に触れる。溝の中央付近がやや細く括れており、規模は長さ6.41m、幅0.17～0.43m、深さ0.09mを測る。埋土はやや砂質のにぶい黄褐色土(10YR5/3)で、酸化鉄分を含む。図示できるような遺物の出土はないが、中世面の最上面で検出でき、かつ埋土が耕作土に近似することから、近世以降の耕作に伴う溝である可能性が高い。同様に近世以降と考えられる土坑06-SK208や06-SK209、溝06-SD195・06-SD196・06-SD197・06-SD203・06-SD214等と主軸方向がほぼ一致することもその証左となろう。

近世以降の
耕作に伴う
溝

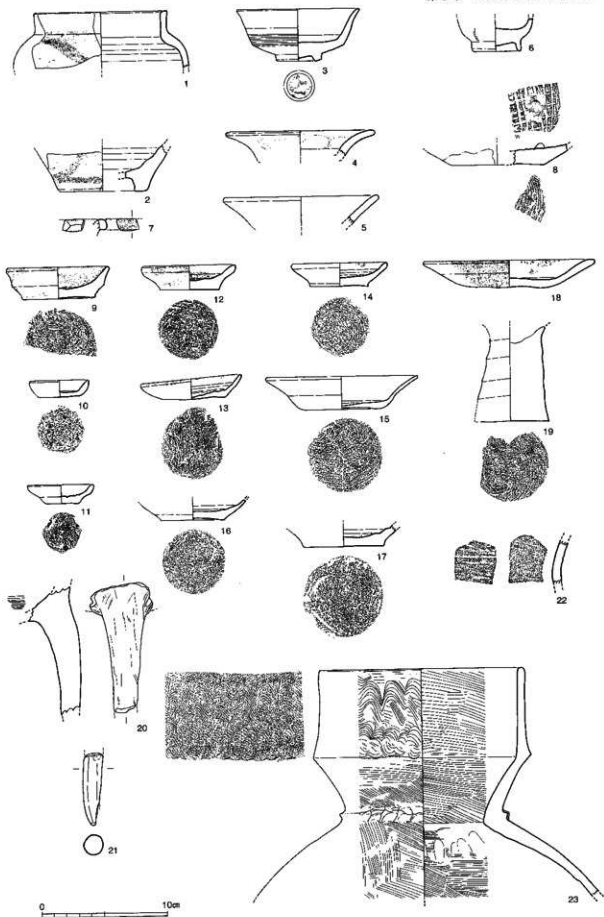
06-SD195 (第3-129図)

1区のN63グリッドで検出した小型の溝状遺構である。主軸はN-18.5°-Eでやや東に触れるもので、長さ2.42m、幅0.53m、深さ約0.05mを測る。埋土はにぶい黄褐色土(10YR5/4)で、酸化鉄分を含み全体に硬く締まる。遺物は14世紀後半の備前焼指鉢が出土しているが、埋土の状況から近世以降の耕作溝と考えられる。

近世以降の
耕作溝



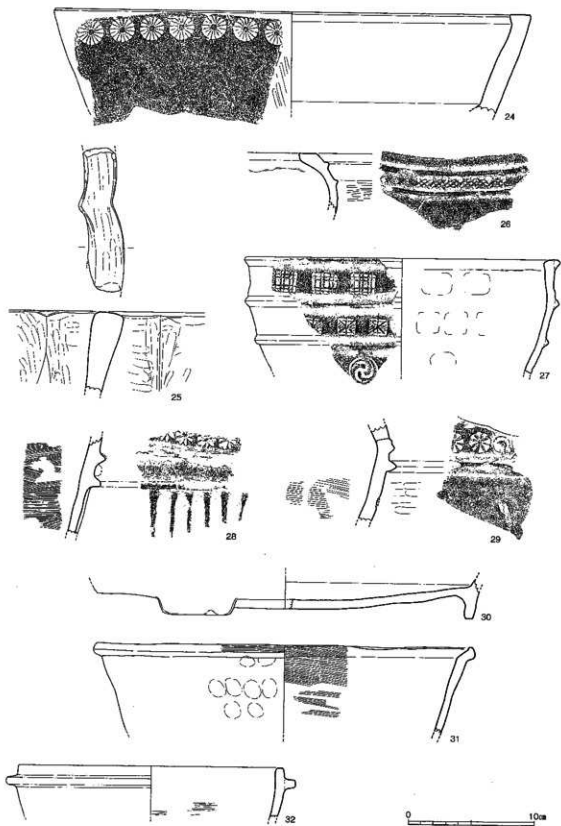
第3-135図 06-SD302A出土遺物実測図(1/3・1/1)



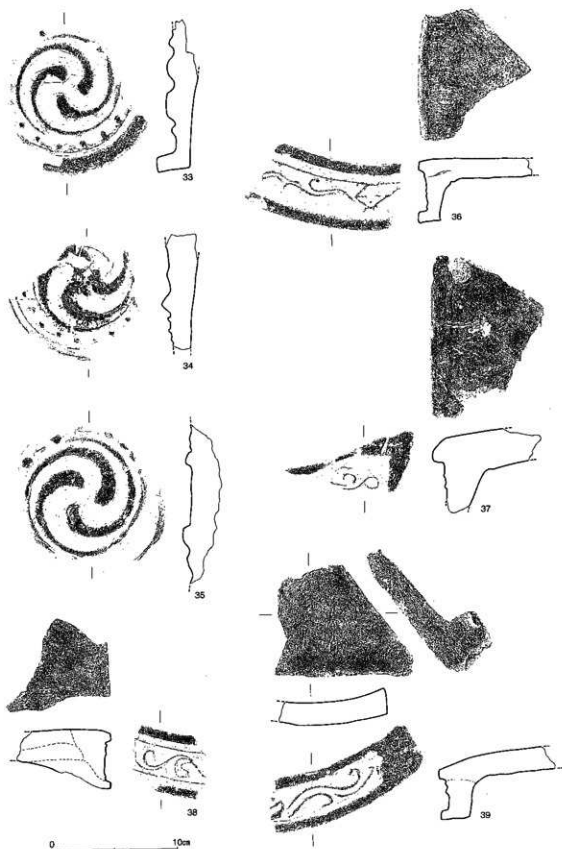
第3-136図 06-SD302B出土遺物実測図① (1/3)

06-SD195出土遺物 (第3-130図)

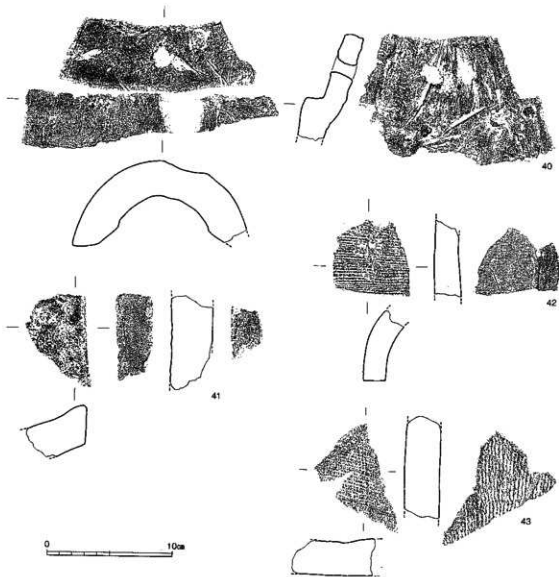
1は備前焼の摺鉢である。口縁部の形状から中世Ⅲa期に編年されるもので、14世紀後半に位置づけられる。



第3-137図 06-SD302B出土遺物実測図② (1/3)



第3-138図 06-SD302B出土物実測図③ (1/3)



第3-139図 06-SD302B出土遺物実測図④ (1/3)

06-SD215 (第3-131図)

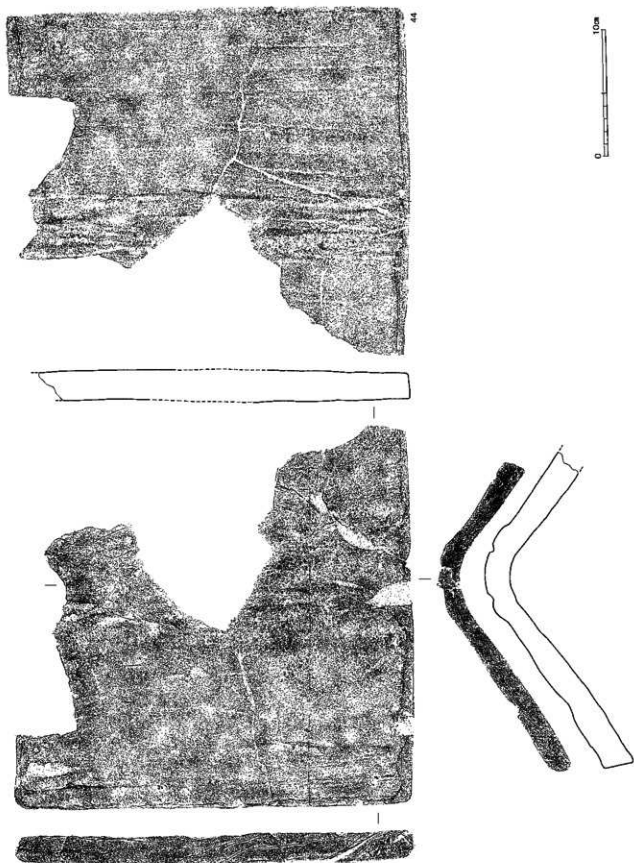
1区のN64グリッドで検出した溝である。北東から南西方向にかけてのびるもので、規模は長さ3.51m、幅0.22～0.32m、深さ0.06m、主軸の角度はN-27°-Eを測る。埋土はやや砂質のにおい褐色土(7.5YR5/3)で、灰色土が混じる。遺物は土師器甕が出土しているが、埋土の状況等から近世以降の耕作溝と考えられる。なお、1区における近世耕作遺構については、この06-SD215が先述の06-SD193や06-SD195・06-SD197・06-SD203・06-SD214、06-SD208・06-SK209に対して主軸が東に振れること、そして06-SD215と主軸角に近い06-SD196が06-SD214を切っていることから、少なくとも2時期の耕作遺構が存在すると考えられる。

近世以降の耕作溝

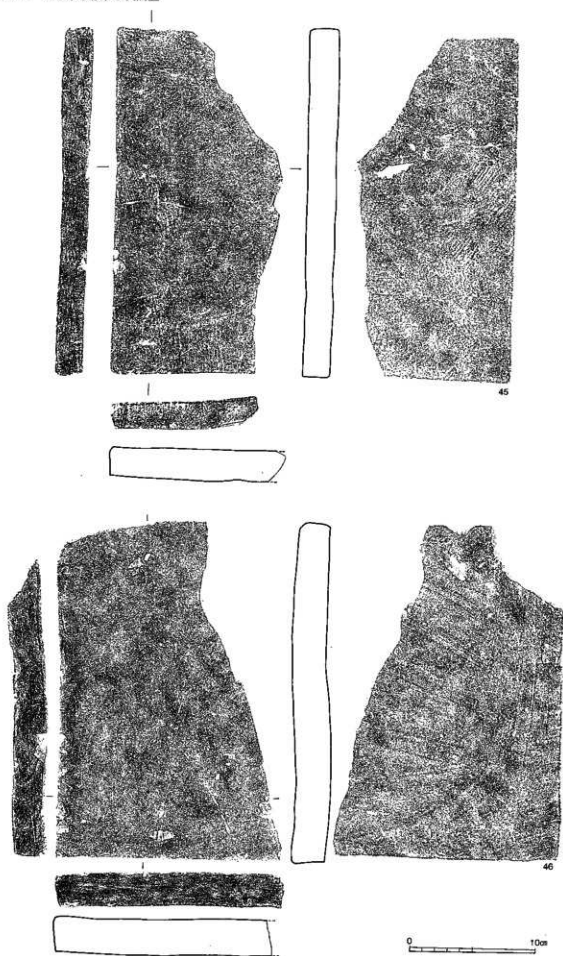
2時期の耕作遺構が存在

06-SD215出土遺物 (第3-132図)

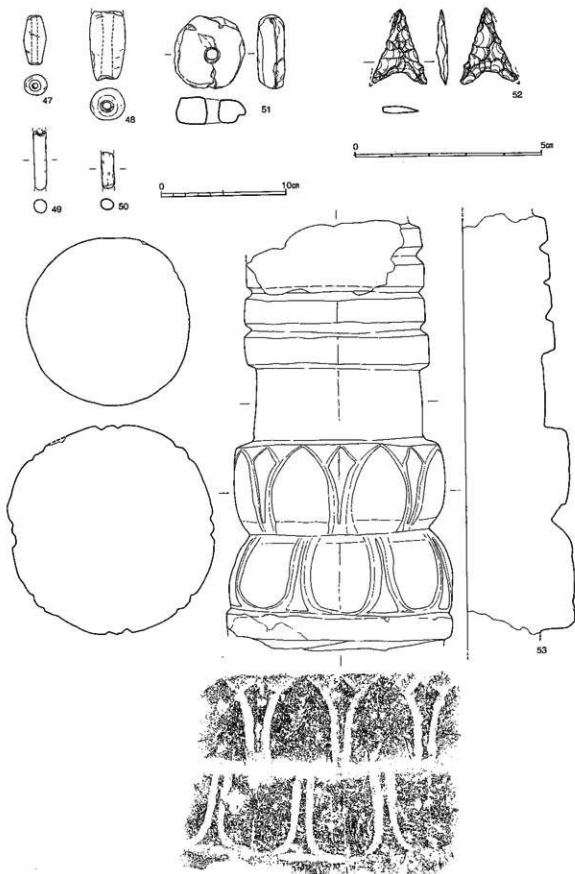
1は土師器甕である。胴部の張りは弱く下膨れの器形を呈すると思われるもので、古代のものである。細片のため口径の復元はできない。



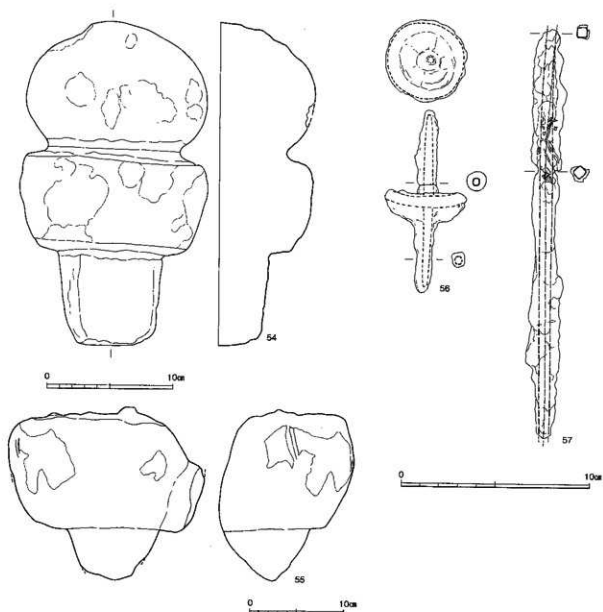
第3-140図 06-SD302B出土遺物実測図③ (1/3)



第3-141図 06-SD302B出土遺物実測図①(1/3)



第3-142図 06-SD302B出土遺物実測図⑦ (1/3・1/1)



第3-143図 06-SD302B出土遺物実測図⑧(1/2・1/3・1/4)

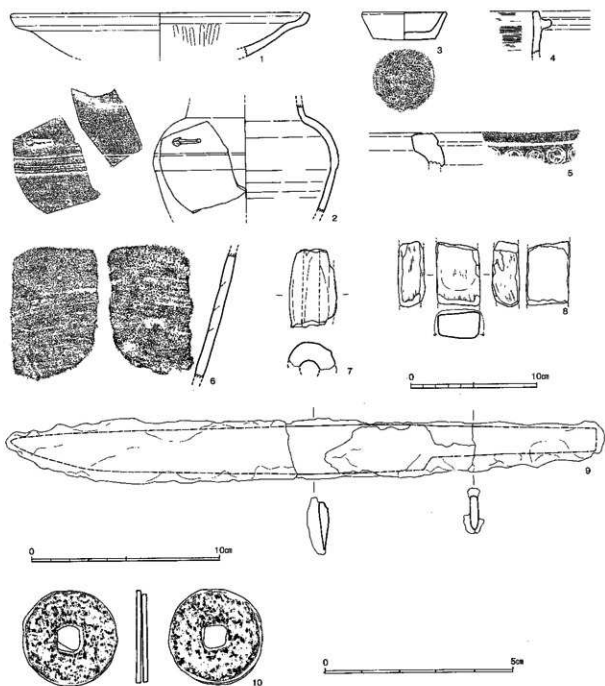
06-SD231 (第3-133図)

1区のM63・M64グリッドで検出した溝である。南北方向に延びるもので、溝の北端部では06-SD221を切っている。遺構の規模は長さ5.21m、幅0.42～0.58m、深さは最大で0.12mを測る。溝の北半部と南半部は深さが約0.07～0.08mであるのに対し、溝の中央部分はやや深く掘り込んでいる。埋土はやや砂質の褐色土(7.5YR4/3)で、微量の炭を含む。遺構の時期を示す遺物の出土はないが、V期(15世紀中頃から後半)の溝06-SD221を切ることから、それ以降のものである。

06-SD302 (第3-134図)

1区のL62・M62グリッドで検出した溝で、西側は調査区外に続く。西接する中世大友府内町跡第29次調査区の溝SD041・SD060・SD051・SD055と同一の遺構である。中世大友府内町跡第29次調査区ではこれら4条の溝が複雑に切り合った状況が認められ³⁾、今調査区の06-SD302では06-SD302Aと06-SD302Bの2つの溝の切り合いとして把握することができた。両者の切り合いは土層断面図に

註3) 佐藤英一2009「中世大友府内町跡第29次調査区」『豊後府内12』大分県教育庁歴史文化財センター調査報告書第44巻、大分県教育庁歴史文化財センター



第3-144図 06-SD302 (A・B一括) 出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/1)

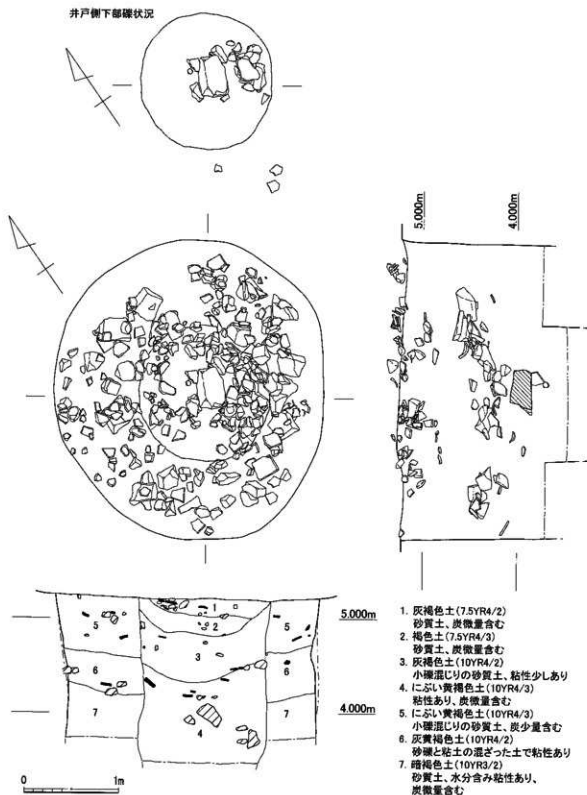
遺物の含有
量の差

も示すとおり土色及び土質の違いと、遺物の含有量の差から区別が可能である。06-SD302Aからは遺物がほとんど出土しないのに対し、06-SD302Bからは多量の遺物が出土している。

06-SD302Aは褐色から黄褐色を呈する埋土からなり、06-SD302Bを切って構築する。長さ5.30m以上、幅1.25～1.72m、深さ約0.4～0.5mを測る。一方、06-SD302Bは暗褐色から黒褐色系の埋土が主体で、長さ5.20m以上、幅は北辺の一端が2区との境界にかかるため全体を確認できないが2.40m以上、深さ約0.7mを測る。遺構の時期は中世大友府内町跡第29次調査では出土する遺物が15世紀後半と16世紀末葉の大きく2時期に分けられることから、SD041・SD050が15世紀後半葉、SD051・SD055を16世紀末葉に位置付けているが、06-SD302Aからは16世紀前半の在地の土師器皿が、06-SD302Bからは15世紀代の在地土師器環とともに16世紀後半の京都系土師器が出土してい

京都系土師
器が出土

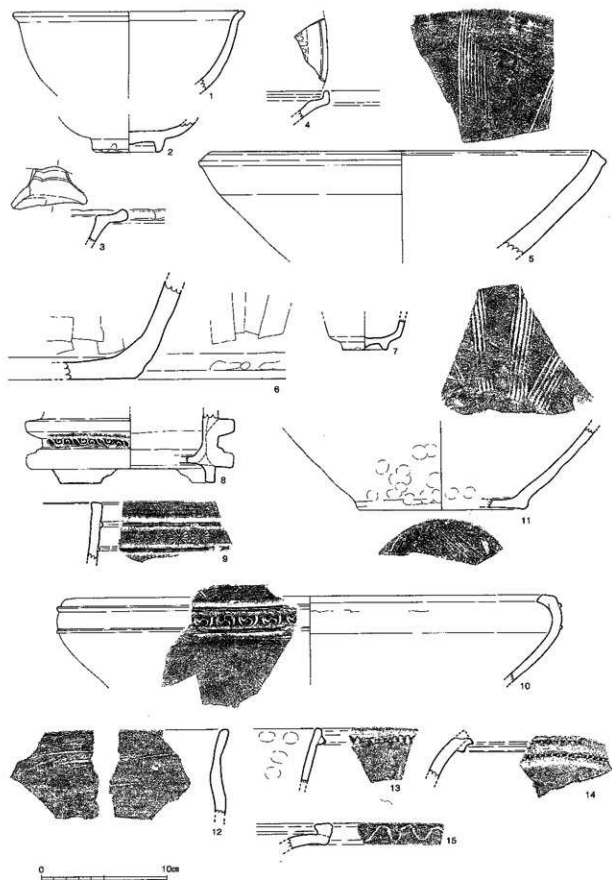
第3章 旧万寿寺跡第6次調査



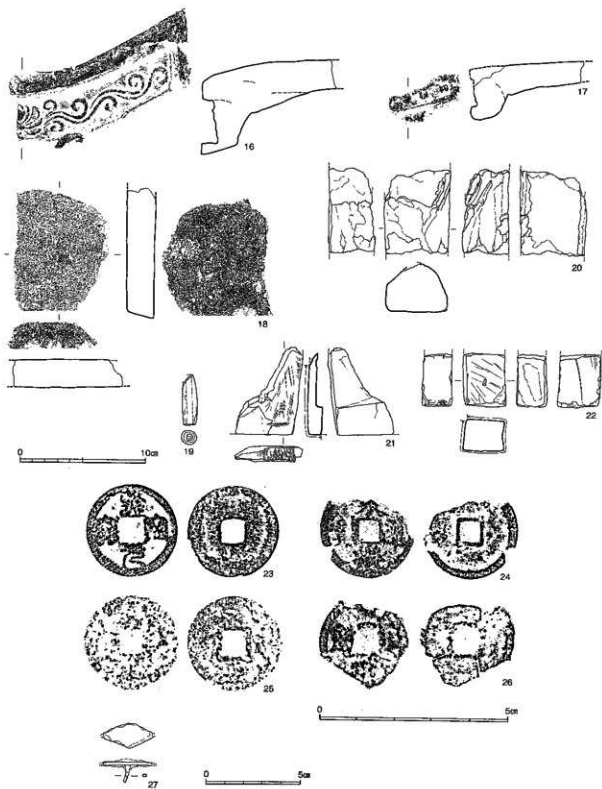
第3-145図 06-SE271実測図(1/40)

万寿寺内における何らかの区画施設

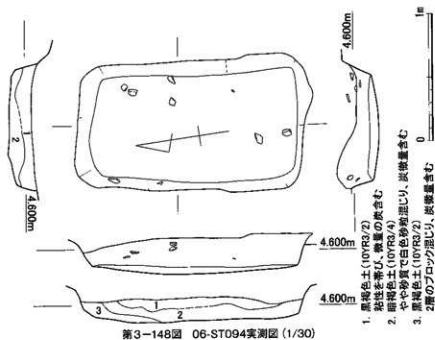
る。そのため06-SD302BはⅥ期(16世紀後葉)、SD302AはⅥ～Ⅶ期(16世紀後葉～末葉)に位置付けられる。遺構の機能は溝の規模からすると、万寿寺内における何らかの区画施設である可能性が高く、どちらも東端部の位置が同じであることから、時期の違いによる空間利用のあり方に差はないものと考えられる。



第3-146図 06-SE271出土遺物実測図①(1/3)



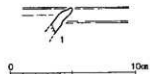
第3-147図 O6-SE271出土遺物実測図②(1/3・1/1・1/2)



第3-148図 06-ST094実測図 (1/30)

06-SD302A出土遺物 (第3-135図)

1は内面にロクロ成形による多条の沈線が特徴的な在地の土師器皿で、口縁部に煤が付着することから灯明皿として使用されたものである。底面には回転糸切り痕が残る。2は平瓦である。3は滑石製の石鍋の破片である。4は赤間石の破片で、側面に鉛挽きによる擦痕が残る。硯の加工に伴うものであろう。5・6は銭貨である。5は北宋の元豊通寶 (1078年初鋳)、6は小破片で銭文も磨滅により判読できない。



第3-149図 06-ST094出土遺物実測図 (1/3)

06-SD302B出土遺物 (第3-136～3-143図)

1・2は磁州産産の鉄鉢壺で、同一個体と考えられる。3は白磁の小坏で、高台内に墨書及び朱墨書による「関」の字が判読できる。4・5は青磁皿で、4は内外面ともに細線描きによる文様を施す。6は青磁の小碗であろうか。7は磁窯産産の盤で、口縁部を折り返す。内外面には緑色の釉薬を施す。8は瀬戸美濃産の御皿で、見込みに格子目状の御目、底面には回転糸切り痕が残る。9は在地の土師器坏である。胴部の中位で屈曲する器形で、内外面には煤が付着する。10～12は土師器小皿で、11は内面にロクロ成形による沈線が残る。13～17は内面にロクロ成形による多条の沈線が特徴的な皿である。15は薄手で、底部からの立ち上がり部分にだけ沈線が認められる。18は京都系土師器皿で、内外面に煤が付着する。19は土師器の燭台である。坏部を欠くが脚部は高く延び、底面には回転糸切り痕が残る。20・21は土師器の脚付き鍋である。22は縄文土器で、外面に横位の粗い条痕を施す。23は土師器の複合口縁壺である。口縁部外面には2段の櫛描波状文を施し、頸部凸帯は上下から指頭による刻みを加える。古墳時代初頭頃の所産である。

24～32は瓦質土器である。24は浅鉢形の火鉢で、外面口縁下に菊花状スタンプ文を施す。25は口縁部が輪花状になる火鉢である。内外面ともにヘラマガキを密に施す。26・27は火鉢で、26は凸帯間に菊花と斜格子状のスタンプ文、27は口縁下に方形枠内に格子目文、凸帯間に方形枠内に「米」字状、凸帯下に三つ巴文のスタンプ文を施す。28・29は風炉で、29は凸帯上に風文を穿つ。30は火鉢の底部で、方形の短い脚が付く。31は鍋、32は口縁下に鋤が付く羽釜である。

磁州産産の
鉄鉢壺
「関」の字

土師器の燭台

第3章 旧万寿寺跡第6次調査

33～46は瓦である。33～35は軒丸瓦で、いずれも瓦当の中心に右巻きの巴文を配し、その周囲に珠文を施す。36～39は軒平瓦である。瓦当部の作出技法は36が顎貼付技法であるのに対し、38は粘土を下方に折り曲げ、凹面側に粘土を充填する折り曲げ技法と思われる¹⁶⁾。39は側辺を斜めに切断した切隅瓦である。40は丸瓦の玉縁部で、円形の釘穴を穿つ。41は平瓦の細片であるが、二次焼成により全体に焼け彫れが見られる。42・43は古代の瓦である。42は丸瓦で、42は凸面に掻き籠状工具による調整痕、凹面に布目痕が残る。43は丸瓦で、凹面に布目痕、凸面に縄目タタキの痕跡が残る。44は雁振瓦、45・46は埴である。

宝塔ないし宝
蓋印塔の相輪
組合せ式五
輪塔

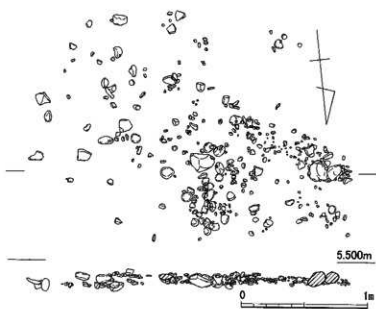
47～50は土鍾で、47・48は管状土鍾、49・50は両端に穿孔をもつ棒状土鍾である。51～55は石製品である。51は軽石製の有孔円盤で、中心に円形の穿孔を加える。52は炬島産黒曜石を素材とする凹基式打製石鏃である。53は宝塔ないし宝蓋印塔の相輪で、基部には蓮弁を刻む反花と蓮花を配する。中輪線上には割付の線刻が残る。54・55は組合せ式五輪塔の空風輪である。55は風輪にわずかに線刻が見られることから、蓮弁を刻むものと思われる。56・57は鉄製品で、56は紡錘車ないし鳩台とされるもの、57は鉄釘である。

産地不明の
焼締陶器壺

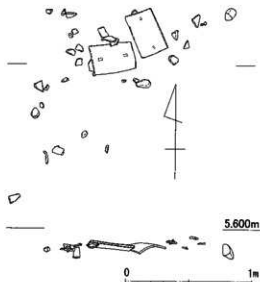
06-SD302出土遺物 (第3-144図)

第3-144図に示すものは06-SD302A・Bの切り合いを確認するために設定したトレンチから出土したものなど、両者を区別せずに06-SD302一括として取り上げたものである。1は青磁の盤で、内面にスリット状の削ぎ文を施す。2は産地不明の焼締陶器壺である。肩部には沈線と削り出しにより幅広の段を持つ。3は在地の土師器小皿で、底面に回転糸切り痕が残る。4は瓦質土器の羽釜で、外面口縁下に鈿を貼り付ける。5は瓦質土器の火鉢で、外面の口縁下に1条の沈線とスタンプ文を施す。6は内外面に粗い条痕を施す縄文土器の深鉢で、全体に磨滅している。7は土師質焼成の管状土鍾、8は砥石、9は鉄刀である。10は銅銭2枚が銜着するが、錢様は明らかにできない。

鉄刀



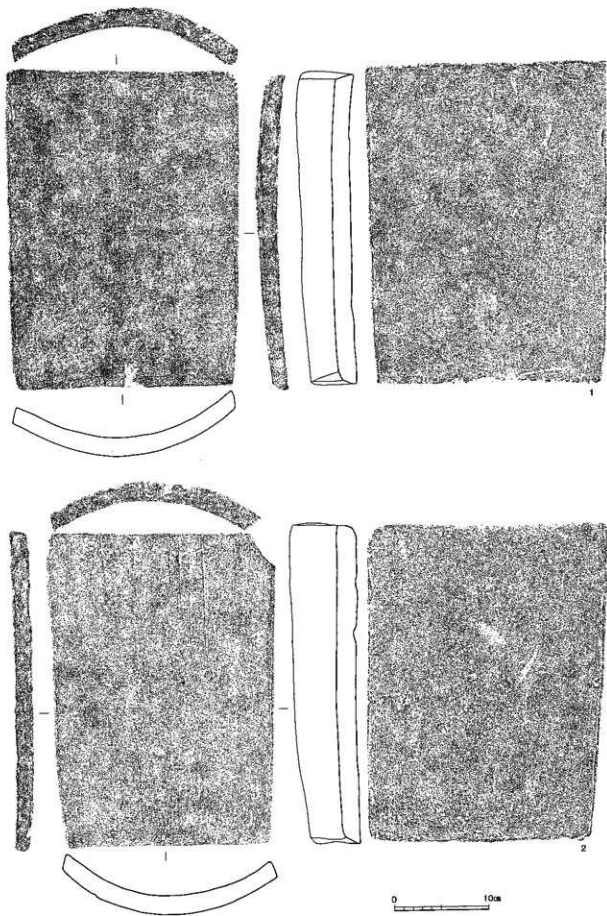
第3-150図 06-SX031実測図 (1/30)



第3-151図 06-SX032実測図 (1/30)

註6) 瓦当部の技法は以下の文献による。

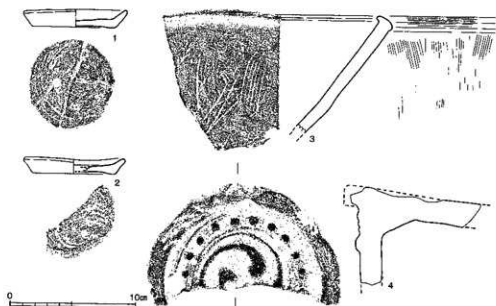
山崎信二2000『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第99号、奈良国立文化財研究所



第3-152図 06-SX032出土遺物実測図 (1/4)



第3-153図 O6-SX033実測図 (1/30)



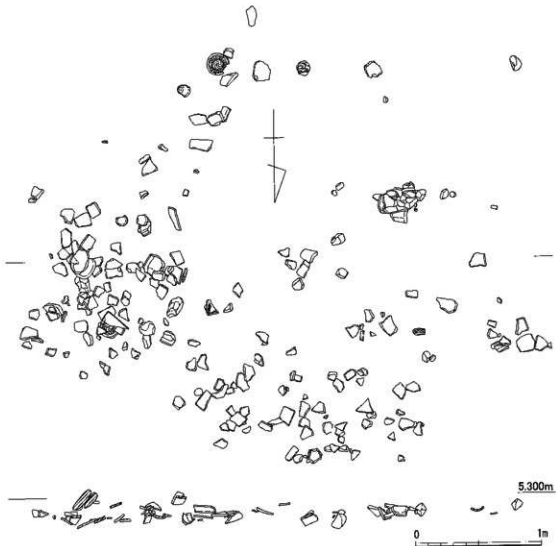
第3-154図 O6-SX033出土物実測図 (1/3)

4. 井戸

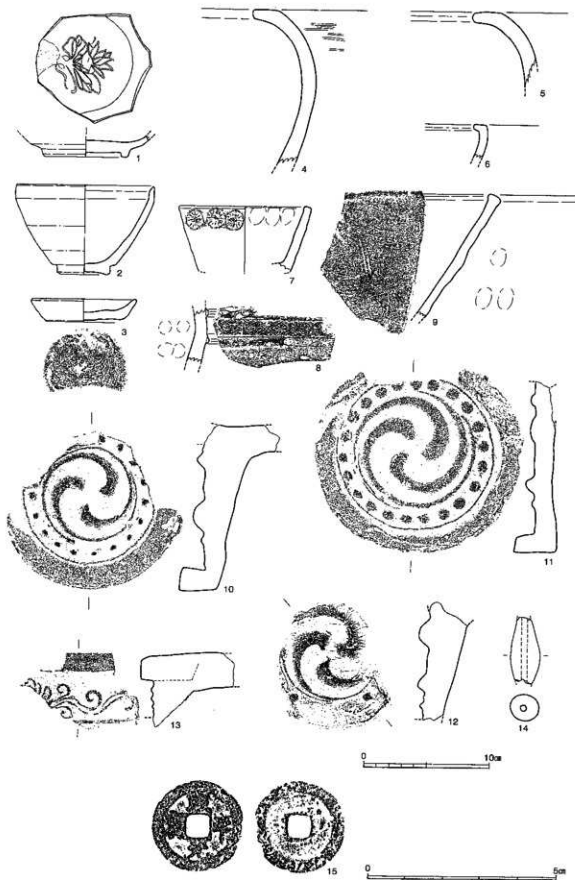
06-SE271 (第3-145図)

1区のO62・O63グリッドで検出した井戸である。平面形状は円形で、検出面での規模は東西2.89m、南北3.18mを測る。このSE271の周囲に一回り大きい井戸SE312の掘り込みが確認できるが、SE271はSE312埋没後に掘られたものである。SE271の掘形のほぼ中央には東西1.38m、南北1.43mの円形の井筒の掘り込みプランが確認できる。井筒内からは、標高約4mで0.4m×0.3m大の大振りの石材が出土しており、井戸を封じた際の痕跡であろう。井戸内部は約1.8m掘り下げたが、周囲の土壌が軟弱で崩壊の危険があったことから掘削を中断せざるを得ず、井戸の底は確認できていない。井戸内からは瓦や土器の他、加工した凝灰岩の碎片が多数出土している。中世大友府内町跡では、阿蘇溶結凝灰岩の切石を1段に6枚組み合わせ、それを数段積み上げて井戸側とするものがいくらか見られる。SE271でも井戸側は抜き取られているが、これらの凝灰岩碎片が凝灰岩の井戸側を抜き取った際に、不要な石材を破砕して井戸に廃棄した可能性も考えられる。こうした凝灰岩を井戸側とした井戸は16世紀後半に特徴的に認められるものである。

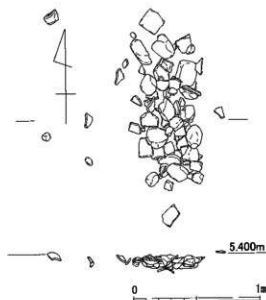
SE271の出土遺物は万寿寺創建期に位置づけられる14世紀前半の瓦がある一方、1408年初跡の



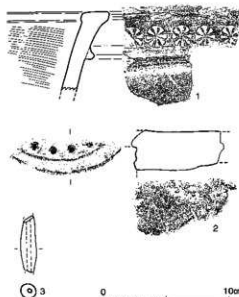
第3-155図 06-SX049実測図 (1/30)



第3-156図 06-SX049出土遺物実測図 (1/3・1/1)



第3-157図 06-SX082実測図 (1/30)



第3-158図 06-SX082出土遺物実測図 (1/3)

永楽通寶や15世紀代の青磁碗等年代幅があり、時期比定は難しい。先述のSE312が15世紀後半に比定されることから、15世紀後半以降であることは確実である。双頭窯手流雲文をもつ瓦質土器を重視すれば16世紀後半に位置づけられようが、当該期に普遍的に出土する京都系土師器やロクロ目土師器皿が認められないことから、積極的に16世紀代に比定することは躊躇する。ここでは15世紀後半以降としておく。

06-SE271出土遺物 (第3-146・3-147図)

1・2は青磁碗である。1は内外面ともに無文で、口縁部は外反する。3・4は青磁の盤である。3は口縁部が輪花形となる。5は備前焼の摺鉢で、内面に10条1単位の摺目を施す。6は焼締陶器の甕の底部片で、内外面とも板状工具によるナデ調整を施す。7は施釉陶器の香炉であろう。8～11は瓦質土器である。8は香炉の底部で、外面に2条の分厚い凸帯を配し、その間に双頭窯手文を施す。底面には3箇所脚が付く。9は深鉢形、10は浅鉢形の火鉢で、ともに凸帯区画内にスタンプ文を施す。11は摺鉢で、内面下半の摺目は使用により磨滅している。12は縄文土器の深鉢で、内外面に粗い条痕を施す。13・14は弥生土器で、口縁部に刻み目凸帯を施す下城式の甕である。15は弥生土器の複合口縁壺で、外面に波状文を施す。16・17は軒平瓦である。16は瓦当面に蓮華磨草文を施し、瓦当部の成形は額貼付技法による。17は連珠文を施す。18は埴である。19は鬼瓦の一部と思われるもので、断面形状は背面側が平坦であるのに対し腹面側は丸みをもつ。顔部の背面側に取り付ける把手と思われる。20は土師質焼成の管状土錘である。21は硯の破片、22は砥石である。23～26は銭貨で、23は北宋の熙寧元寶(1068年初鑄)、24は明の水東通寶(1408年初鑄)である。25は鋳のため銭文が判読できない。26は「寶」字以外は判読できず、ともに銭種は不明である。27は銅製の鉤り金具で、頭部は菱形、釘部断面は方形を呈する。

双頭窯手文

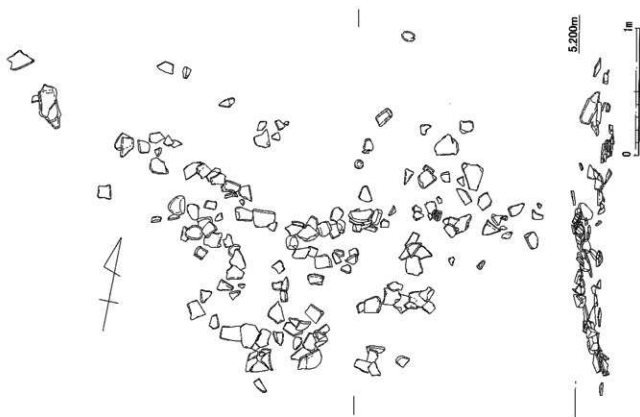
蓮華磨草文
鬼瓦

水東通寶

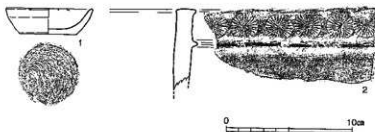
5. 土坑墓

06-ST094 (第3-148図)

2区のL60グリッドで検出した土坑墓と考えられる遺構である。06-SK035発掘後の底面で長方形のプランを確認したもので、上部は06-SK035によって大きく切られている。平面形状は隅丸長方



第3-159図 06-SX083実測図 (1/30)



第3-160図 06-SX083出土遺物実測図 (1/3)

形で、長辺1.84m、短辺1.08m、深さ0.19mを測る。埋土は黒褐色土ないし暗褐色土で、3層に分層できる。遺物の出土は少なく、京都系土師器や、銅銭、鉄釘も出土したがいずれも細片である。遺構の時期は検出面ではあるが京都系土師器が出土したことから、VI期（16世紀後半）に位置付ける。本遺構を土坑墓とする推定が正しいとした場合、遺構の規模からすると中世後期に一般的な横隊屈葬ないし仰臥屈葬ではなく、伸展葬の可能性が高い。こうした伸展葬の墓は、中世大友府内町跡第10次調査のⅡ区北調査区で確認されたイエズス会府内教会付墓墓地で確認されている¹⁷⁾。そして、その中の伸展葬墓である4号墓ST150や8号墓ST149等と遺構の規模も近い。そして明確な副葬品がない点も共通する。以上の点から、キリシタン墓の可能性¹⁸⁾がある遺構である。

伸展葬の可能性
イエズス会府内教会付墓墓地
キリシタン墓の可能性

06-ST094出土遺物 (第3-149図)

1は京都系土師器皿である。検出面付近から出土した細片であり、06-SK035からの混入の可能性も完全に排除できないが、本遺構の年代を比定できる唯一の資料である。

註17) 田中裕介・後藤晃一2007『豊後府内6 大分県教育庁歴史文化財センター-鶴岡南6番第15棟、大分県教育庁歴史文化財センター-群像』キリシタン墓については田中裕介氏（昭和大学教授）から調査報告を得た。

6. 集石・遺物集中ブロック

06-SX031 (第3-150図)

石英質の玉砂利

2区のN62グリッドで検出した集石遺構である。10～20cm大の礫が散在する中に、数cmの石英質の玉砂利が比較的高い密度で分布している。分布範囲は長辺約2.60m、短辺約1.60mで、検出高は約5.40～5.45mである。周囲を精査したが、掘り込みは確認できない。遺構の時期を示す遺物の出土はないが、Ⅴ期(16世紀前半)の土坑06-SK131埋没後の遺構であることから、Ⅵ期(16世紀後半)以降に位置付けられる。

06-SX032 (第3-151図)

2点の完形の平瓦

2区のN61・N62グリッドで検出した遺物集中ブロックである。2点の完形の平瓦を中心に、長辺2.36m、短辺約1.0mの範囲に礫や遺物がまがまがって出土している。周囲に掘り込みは確認できない。遺構の詳細な年代は明らかにできないが、溝06-SD093埋没後の遺構であるためⅢ期(14世紀末～15世紀前半)以降に位置付けられる。

06-SX032出土遺物(第3-152図)

成形台の痕跡

1・2は平瓦である。完形で、いずれも凸面の2箇所に成形台の痕跡と思われる長方形の小突起が見られる。

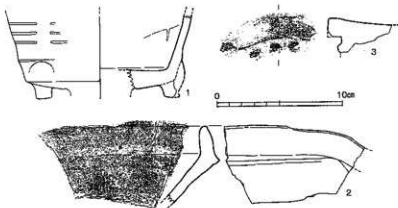
06-SX033 (第3-153図)

2区のO61グリッドで検出した遺物集中ブロックである。東西3.44m、南北4.00mの範囲に礫や瓦等の遺物が散漫に分布しており、検出標高は約5.50～5.60mを測る。周囲に掘り込みは確認できない。遺物は14世紀代の上飾器小皿

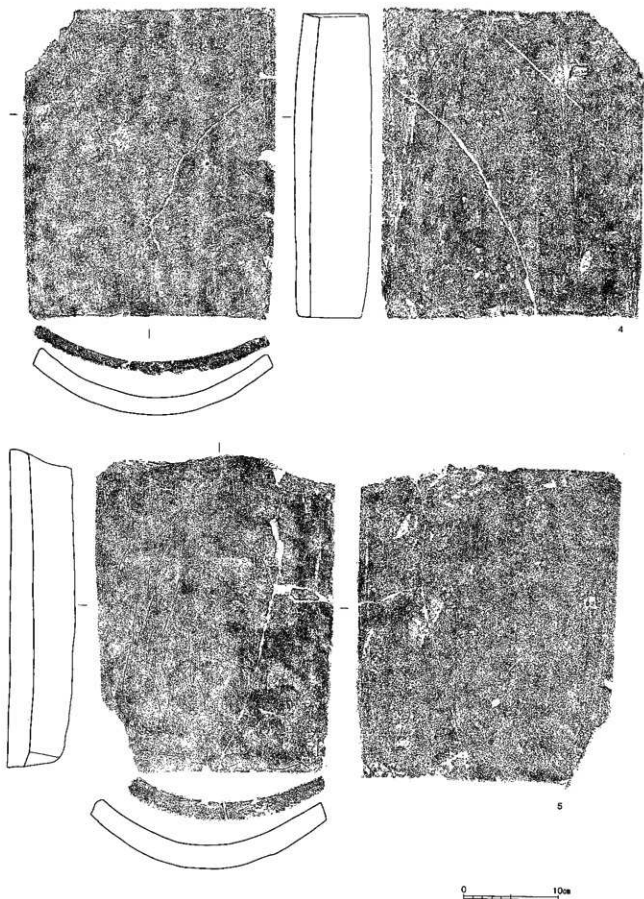
が出土しているが、Ⅳ期(15世紀中頃～15世紀後半)に比定される土坑06-SK126より上位に位置することから、Ⅴ期(16世紀前半)以降の遺構である。



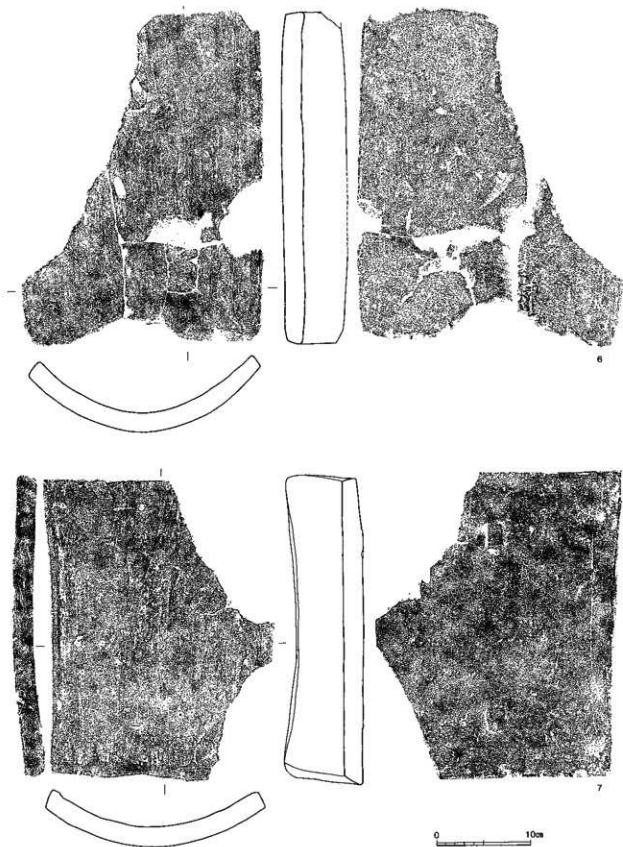
第3-161図 06-SX084実測図(1/30)



第3-162図 06-SX084出土遺物実測図①(1/3)



第3-163図 06-SX084出土遺物実測図② (1/4)



第3-164図 06-SX084出土遺物実測図③(1/4)

06-SX033出土遺物 (第3-154図)

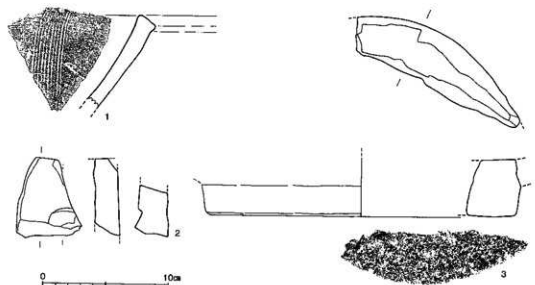
1・2は土師器小皿である。底部から口縁部が短く外に開く器形で、底面には回転糸切り痕が残る。3は瓦質土器の摺鉢である。内面に6条1単位の摺目を施すが、使用により摩滅している。4は軒丸瓦である。瓦当の中央に右巻きの巴文と、その周囲に珠文を施す。

06-SX049 (第3-155図)

2区のN61グリッドで検出した遺物集中ブロックである。東西3.60m、南北4.24mの範囲に礫や瓦、土器・陶磁器類がまぎらって出土しており、検出標高は東側で約5.40m、西側では約5.20mを測り、東側から西側にかけて傾斜するような堆積を示す。周囲を精査したが、掘り込みは確認できない。V期(16世紀前半)の土坑06-SK131埋没後の遺構であり、VI期(16世紀後半)以降に比定される。



第3-165図 06-SX095実測図 (1/40)



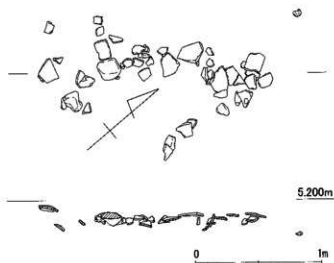
第3-166図 06-SX095出土遺物実測図 (1/3)

06-SX049出土遺物 (第3-156図)

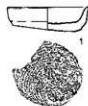
中国産天目碗

1は青磁碗で、見込みに印花文を施す。2は中国産天目碗である。口縁部は短く上方に折れ、端部は先尖り気味におさめる。3は土師器小皿で、底面に回転糸切り痕が残る。4～9は瓦質土器である。4～6は火鉢で、外面は無文である。7は小型の鉢で、口縁直下に菊花状スタンプ文を施す。8は火鉢の胴部で、凸帯間に菱形のスタンプ文を施す。9は摺鉢で、内面は使用により摩滅が著しい。

指目がわずかに確認できる。10～12は軒丸瓦で、瓦当中央に右巻きの巴文と、その周囲に珠文を配する。13は蓮華唐草文を施す軒平瓦で、瓦当の貼付は顎貼付技法である。14は土師質焼成の管状土鍾で、中位が膨らむ。15は北宋の咸平元寶(998年初鑄)である。



第3-167図 06-SX096実測図(1/30)



第3-168図 06-SX096出土遺物実測図(1/3)

06-SX082 (第3-157図)

2区のN61・N62グリッド、06-SX032の西側で検

出した集石である。東西0.70m、南北1.46mの範囲に礫や瓦等が密集しており、その周囲に数点の礫等が点在する。検出標高は約5.40mを測る。周囲に掘り込みは確認できない。遺構の年代を示す遺物に乏しいが、清06-SD093埋没後の遺構であるためⅢ期(14世紀末～15世紀前半)以降に位置付けられる。

06-SX082出土遺物 (第3-158図)

1は瓦質土器の埴炉であろう。口縁部は外に開き、端部は肥厚する。外面には菊花文のスタンプを施す。2は軒丸瓦で、珠文がわずかに確認できる。3は土師質焼成の管状土鍾である。

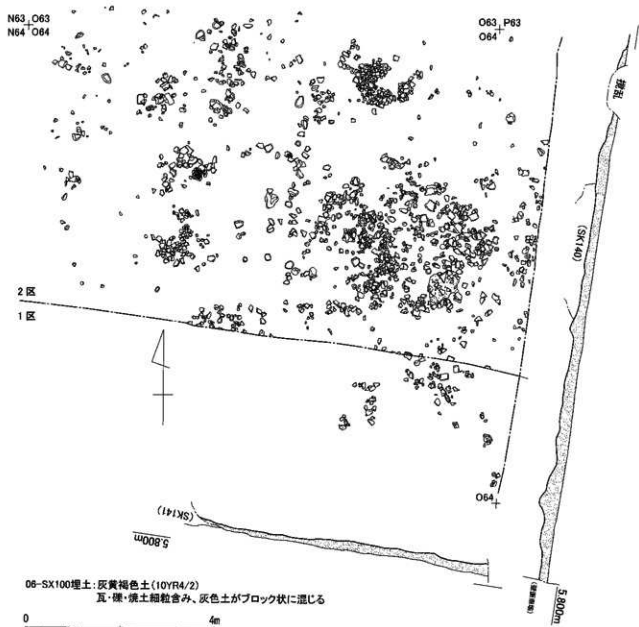
06-SX083 (第3-159図)

2区のM61グリッドで検出した遺物集中ブロックで、06-SK097に近接した位置にある。東西約4.30m、南北約2.90mの範囲に礫や瓦、土器等がややまとまって出土している。遺物等の検出高は約5.00～5.20mで、北から南にかけてやや傾斜して堆積する。周囲を精査したが、掘り込みは確認できない。図示できる遺物に乏しいが、06-SK097埋没後に形成された遺構であり、Ⅳ～Ⅴ期(15世紀中頃～16世紀前半)に位置づける。

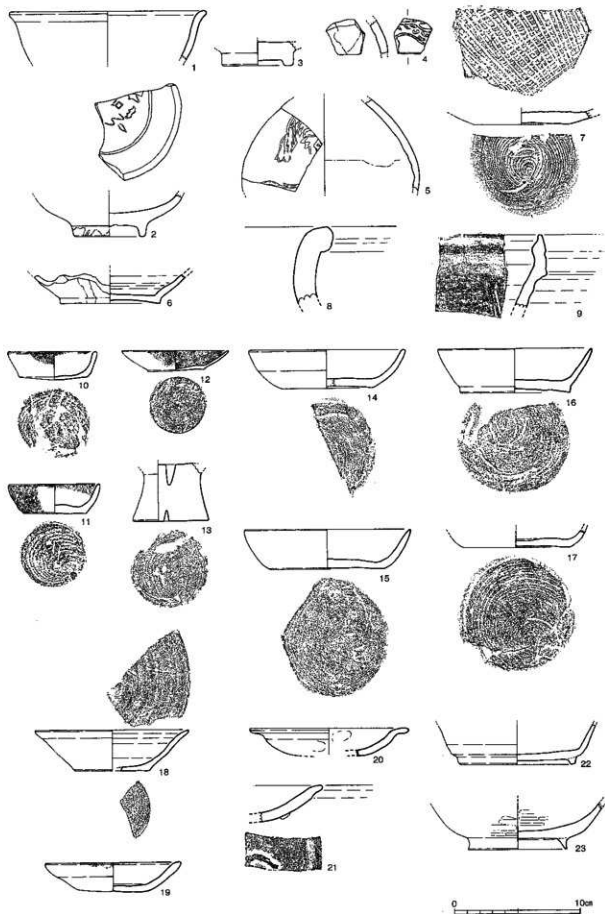
06-SX083出土遺物 (第3-160図)

1は土師器小皿である。器形から15世紀後葉に位置づけられよう。2は瓦質土器の火鉢で、外面凸帯間に菊花スタンプ文を施す。

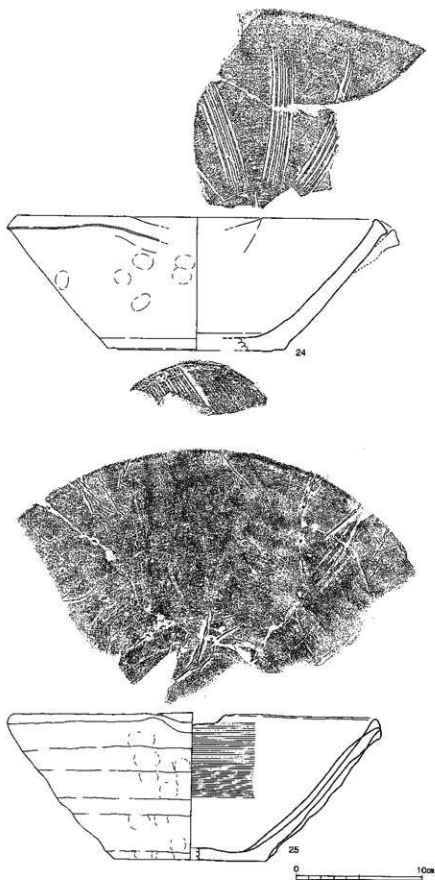
第3章 旧万寿寺跡第6次調査



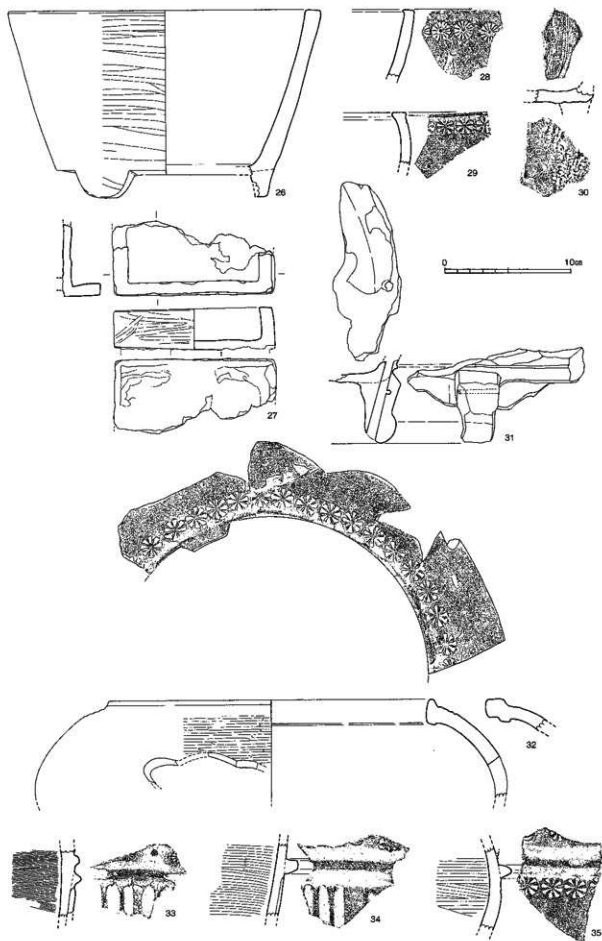
第3-169回 06-SX100実測図 (1/80)



第3-170図 06-SX100出土遺物実測図①(1/3)



第3-171図 06-SX100出土遺物実測図②(1/3)



第3-172図 06-SX100出土遺物実測図③ (1/3)

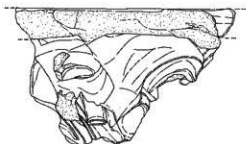
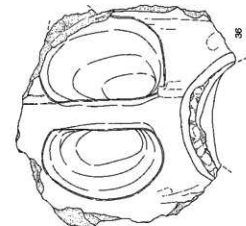
06-SX084 (第3-161図)

2区のM61グリッドで検出した遺物集中ブロックである。東西約240m、南北約2.00mの範囲で

瓦や礫が集中して出土した。周囲を精査したが、掘り込みは確認できない。特に西側ではほぼ完形ないし大破片の平瓦3点が凸面を上にして並べられた状態で出土し、さらにその下からも平瓦の大破片2点が重ねられたような状態で出土した。その他、15世紀後半の備前焼摺鉢や青磁等が出土している。06-SK131棟 没後の遺構であることから、Ⅴ期 (16世紀後葉)に位置づける。

平瓦3点

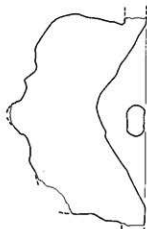
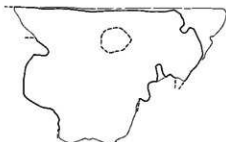
並べられた状態で出土



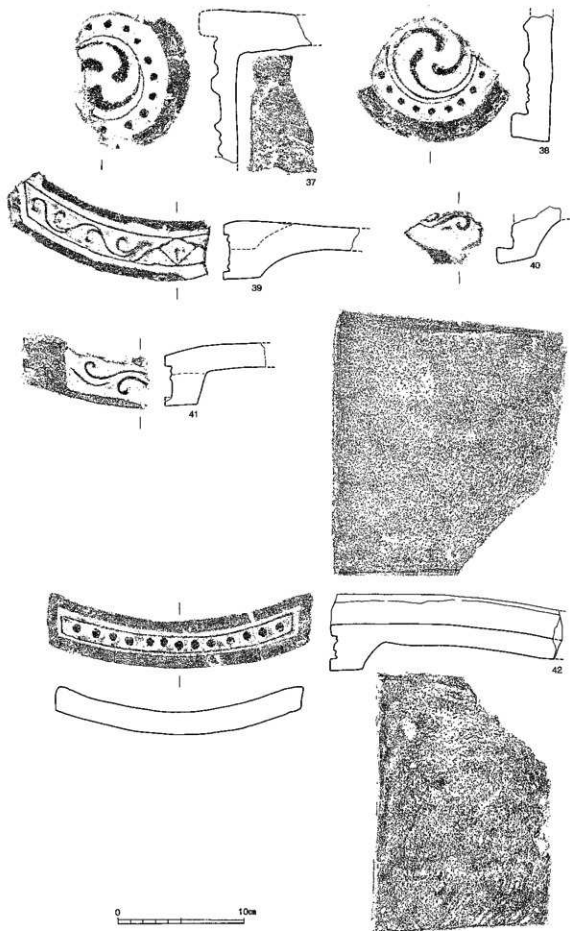
06-SX084出土遺物 (第3-162~3-164図)

1は青磁香炉である。底面には短い脚が付く。2は備前焼の摺鉢である。口縁部が上方に長くのびる形状から、15世紀後半に比定できる。3は軒丸瓦で、珠文を施す。4~7は平瓦である。6・7は凸面の2箇所成形台の痕跡と思われる長方形の小突起が認められる。

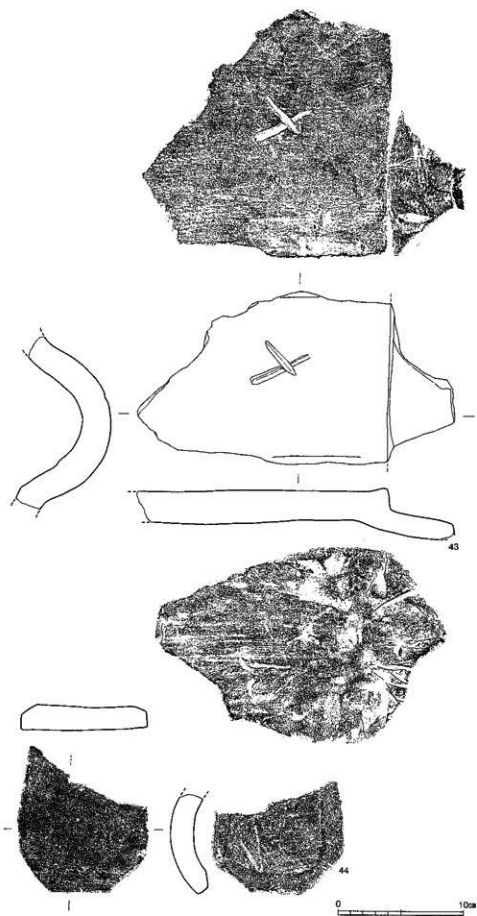
成形台の痕跡



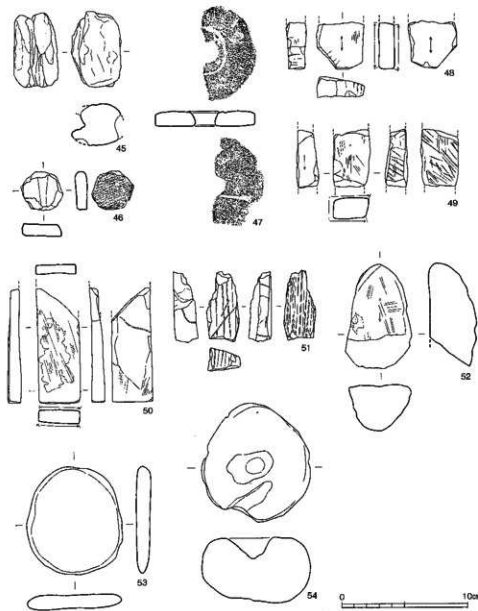
第3-173図 06-SX100出土遺物実測図③(1/4)



第3-174図 06-SX100出土遺物実測図⑤ (1/3)



第3-175図 06-SX100出土遺物実測図① (1/3)



第3-176図 06-SX100出土遺物実測図⑦(1/3)

06-SX095 (第3-165図)

1区のM60・M61グリッドで検出した礫・遺物集中ブロックで、上坑06-SK097に近接し、06-SD117の上位に位置している。東西約2.30m、南北約4.10mの細長い範囲に礫や瓦等がまとまって出土している。検出高は約5.15～5.20mを測る。周囲を精査したが、掘り込みは確認できない。図示できる遺物に乏しいが、IV期(15世紀中頃～後半)の土坑06-SK097、IV～V期(15世紀中頃～16世紀前半)の溝06-SD117より新しいV期(16世紀前半)以降に位置づけられる。

06-SX095出土遺物 (第3-166図)

1は備前焼摺鉢である。口縁部が矩形を呈するもので、中世3a期(14世紀末)に位置づけられる。2は硯である。3は茶臼の下臼で、白部と受部を欠く。

06-SX096 (第3-167図)

2区のM60グリッドで検出した礫及び瓦等の集中ブロックである。06-SK097と重複する位置にあるが、06-SK096の方が上位に位置しており、06-SK097埋没後の遺構と分かる。礫等の分布範囲は長辺約1.90m、短辺1.15mで、検出高は約5.15mを測る。周囲に掘り込みは確認できない。遺構の時期を示す遺物に乏しいが、06-SK097より新しいことから、IV～V期(15世紀中頃～16世紀前半)に位置づける。

06-SX096出土遺物 (第3-168図)

1は土師器小皿である。口径が6.4cmと小振りであり、15世紀後半のものと考えられる。

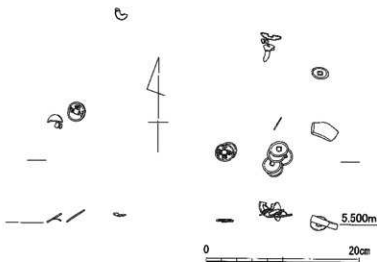
06-SX100 (第3-169図)

O62・P62グリッドで検出した瓦溜りで、1区と2区にまたがって分布する。特に2区での遺物等の分布が顕著であるのに対し、1区の出土は比較的散漫である。分布範囲は東西約1050m以上、南北約950mで、東側は調査区外に続く。土層断面図に示すように、4層の下に位置し、灰色土がブロック状に混じる灰黄褐色土(10YR4/2)中に多量の瓦や土器、礫が混ざり込んでいる。この場所には溝06-SD093や井戸06-SE167、土坑06-SK166等比較的大型の遺構が掘られており、こうした遺構が埋没した後にできた窪地に土や不要な瓦礫を入れて整地したものと考えられる。遺物は瓦や土器類が出土した他、特筆すべきものとして鬼瓦の出土が挙げられる。また、焼土や炭とともに壁土のまとまった出土が見られる(第3分冊図版25)。壁土はスサを混入し、全体に厚みがあることから土蔵等に使用された可能性があり、色調も灰色がかっていることから蒸し焼き状態にあったとの指摘もある⁹⁾。遺構の年代はⅦ期(16世紀末葉)に比定する。

鬼瓦の出土
壁土のまと
まった出土
土蔵等に使
用された可
能性

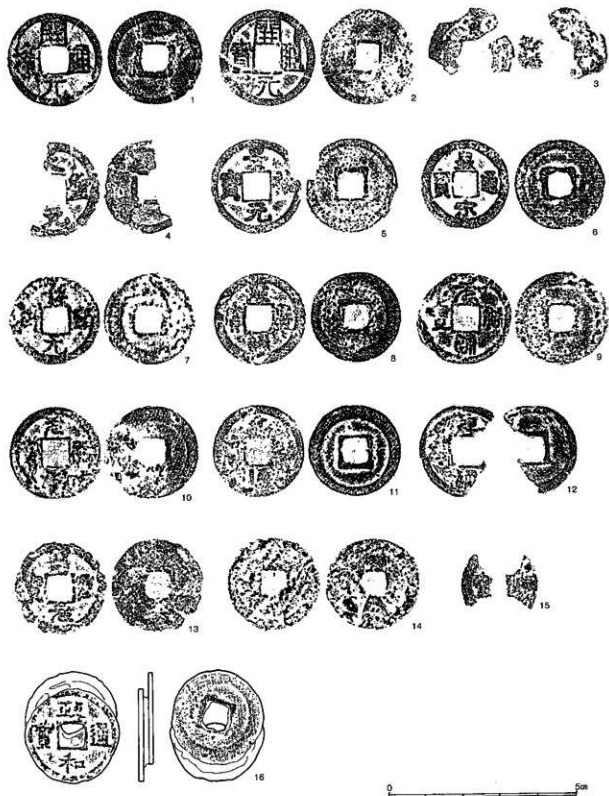
06-SX100出土遺物 (第3-170～第3-176図)

1～3は青磁碗である。1は内外面とも無文で、口縁部が外反する。2は見込みに印花文を施す。4・5は青磁の瓶で、同一個体と考えられる。胴部内面は露胎で、外面肩部には竜のような陰刻文を施す。6は産地不明焼締陶器の鉢である。7は瀬戸美濃窯の卸皿で、見込みに格子状の卸目、底面には回転糸切り痕がみられる。8は備前焼の甕で、口縁部を折り返して玉縁状につくる。9は



第3-177図 06-SX237実測図(1/5)

脚注) 壁土については平成23年8月5日に開催した調査指導者会で各調査指導者から教示を得た。



第3-178図 06-SX237出土遺物実測図 (1/1)

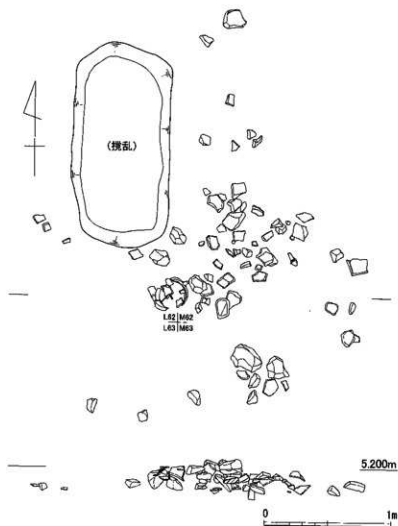
大内系土師器小皿

京都系土師器皿

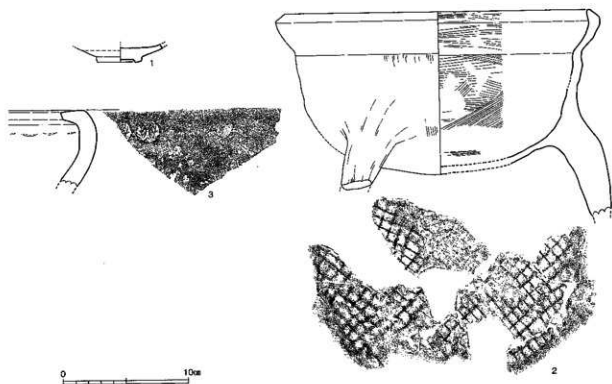
備前焼の摺鉢である。口縁部は「く」字状を呈し、L1縁部内面にも段がつく形状から16世紀後葉に位置づけられる。10・11は在地の土師器小皿で、内外面ともに煤が付着する。12は白色胎土で薄手が特徴の大内系土師器小皿で、内面はほぼ全面に煤が付着する。13は土師器の燗台で、見込みと底面にそれぞれ穿孔が認められる。14～17は在地の土師器杯で、いずれも底面に回転糸切り痕が残る。18はロクロ整形による多条の沈線が特徴的な土師器皿であるが、器高が深く杯状を呈する。19～21は京都系土師器皿である。21は底面に紐状の粘土が付着する。22は須恵器の高台付き杯、23は内外面にヘラミガキを施す高台付きの椀で、どちらも古代の遺物である。24～35は瓦質土器である。24・25は摺鉢で、25は使用により内面の摺目の摩滅が著しい。26～31は火鉢である。27は方形の火鉢で、底面には脚の貼り付け痕がみられる。30は底面の脚部接合部に獅歯状工具による刺突を施す。31は脚部で、脚部を縦断・横断する穿孔が認められる。32～35は風炉である。31は口縁が内湾し、肩部に上部が連弧状となる風文を配する。06-SK173から出土の破片と接合が認められる。33・34は凸帯上位にスタンプ文、凸帯下に連子文を施す。35は凸帯の上下にスタンプ文を施す。

鬼瓦

36は鬼瓦である。眉・目・耳・鼻・口を立体的に造形し、顔面には部分的に赤彩を施した痕跡が残る。両目は穿孔を加えて中空状となり、眉は線刻で表現する。口には格子状の刻みを施して上下の歯を表現し、両端部には牙と思われる粘土材を充填する。頭部は背面側を刳り把手を接合する。



第3-179図 06-SX287実測図 (1/30)



第3-180図 06-SX287出土遺物実測図(1/3)

37・38は軒九瓦で、瓦当中央に右巻きの巴文と、その周囲に珠文を施す。巴文の尾部はそれぞれが繋がり團扇状となる。39～42は軒平瓦である。39は扇形の中心飾りの横に唐草文を施し、周囲には区画線を配する。41は唐草文の末端が途切れている。42は区画線内に連珠文を施す。珠文数は13である。43は雁振瓦で、上部に「×」状の鏤刻を施す。凹面には布目痕、凸面には縄目タキが残る。44は面戸瓦である。

「×」状の
鏤刻
面戸瓦

45～47は土製品である。45は土錘で、側面周囲に溝を持つ。46は加工円盤で、ハケ目をもつ土師器の破片の周囲を磨き円形に成形する。47は有孔円板で穿孔の周囲に沈線を施し、背面にも1条の沈線がみられる。48～54は石製品で、48～50は砥石である。51は赤間石で、側面に鋸挽きの擦痕が残る。砥加工に伴う廃材であろう。52は軽石で、上面をフラットに切断している。上面に擦痕がみられ、平滑になっていることから砥石であろう。53は略円形の扁平な結晶片岩である。54は白色がかった凝灰岩で、上部に凹みをもつ。

赤間石
軽石

06-SX237 (第3-177図)

銭貨集中ブ
ロック

1区のL63グリッドで検出した銭貨集中ブロックである。東西0.38m、南北0.50mの範囲に17点の銭貨がまとまりをもって出土したため、遺構として扱った。検出高は5.50m～5.53mである。銭貨は北宋銭が主体で、唐の開元通寶も含む。遺構の直接の年代は明かにできないが、IV期(15世紀中頃から後半)の溝06-SD221の埋没後の遺構であることから、IV期以降に位置づけられる。

06-SX237出土遺物 (第3-178図)

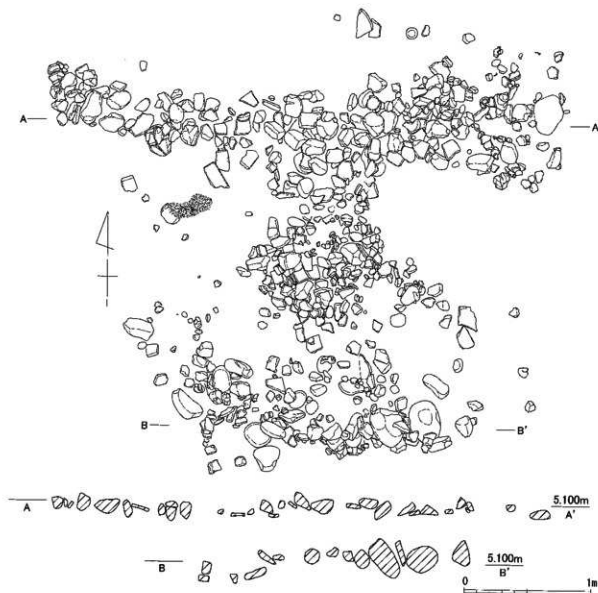
1・2は唐の開元通寶(621年初鑄)である。3～11は北宋銭で、3は銭文が不鮮明だが淳化元寶(990年初鑄)と判読できる。4は約半分を欠くが天聖元寶(1023年初鑄)と判断される。5は景祐元寶(1034年初鑄)、6は皇宋通寶(1038年初鑄)、7は熙寧元寶(1068年初鑄)、8は元豊通

寶(1078年初鑄)、9～11は元祐通寶(1086年初鑄)である。12は1字を欠くが元□通寶と判読でき、元豊通寶か元祐通寶のどちらかである可能性が高い。13は□□元寶と読めるが2字が不鮮明で錢種を明らかにできない。14は鏽のため錢種は不明である。15は小片で「寶」字以外を欠く。16は2点が固着したもので、1点は北宋の政和通寶(1111年初鑄)である。

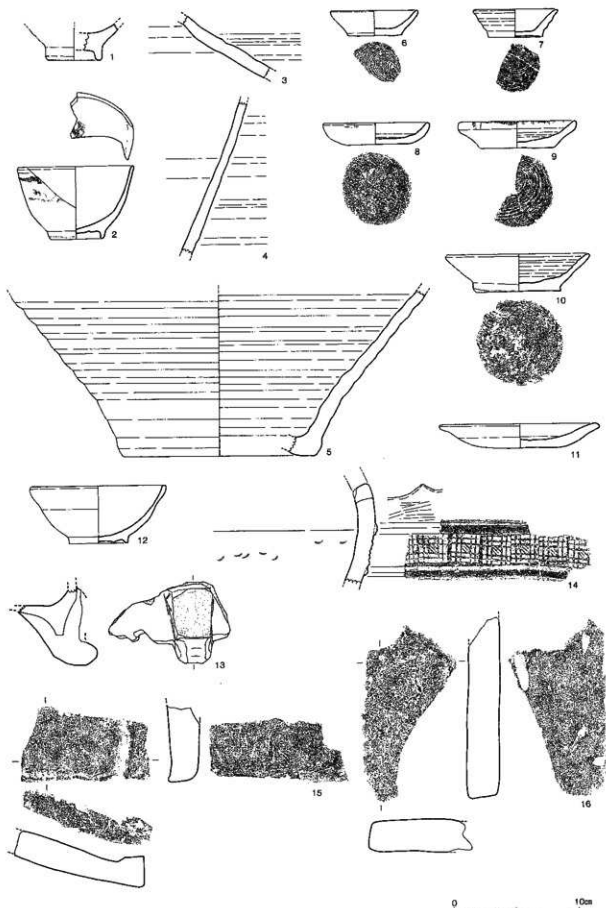
06-SX287 (第3-179図)

1区のL62・L63・M62・M63グリッドで検出した遺物集中ブロックである。位置的には一部が06-SX309と重複するが、06-SX309よりも上位で検出している。東西約3.55m、南北約4.35mの範囲から礫や遺物がまぎらって分布し、グリッド杭の北側からは土師器の足跡が伏せた状態で出土した。遺構周囲を精査したが、掘り込みは確認できない。遺構の年代は06-SX309より新しく、Ⅶ期(16世紀末案)に位置づけられる。

土師器の足跡が伏せた状態で出土



第3-181図 06-SX291実測図(1/30)



第3-182図 06-SX291出土遺物実測図 (1/3)

06-SX287出土遺物 (第3-180図)

防長系御付鍋

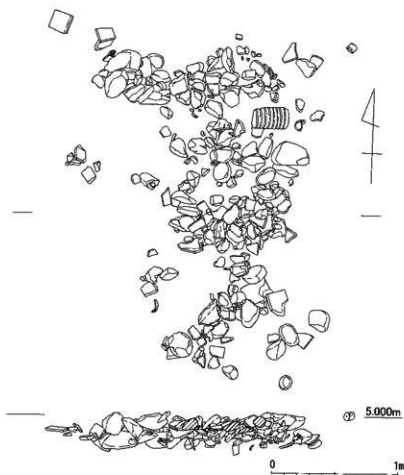
1は白磁皿であり。2は土師器の土鍋で、胴部に3つの脚がつく防長系御付鍋である。内外面ともハケ調整を施し、底面にはタキキ目が残る。3は瓦質土器の火鉢で、口縁部下にスタンプ文を施す。

06-SX291 (第3-181図)

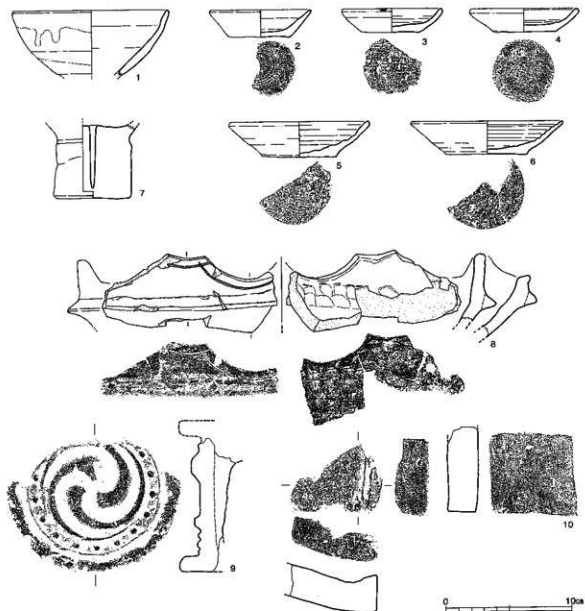
1区のM62・M63グリッドで検出した集石である。土坑06-SK249と一部重複する位置にあるが、06-SK249完掘後に検出している。東西4.14m、南北3.69mの範囲に礫や遺物が集中しており、特に北側は東西方向に礫が密集している。中央部はやや括れ、南側は少し東西に開く形状を呈する。中央部ではやや小振りの礫が多い。周囲を精査したが、掘り込みは確認できなかった。南西端部を中心に壁土がまとまって出土しており、中には白色の漆喰面を持つ壁土ものもある。また、二次焼成を受けた遺物や炭化物が多く、中には炭化した粕の出土も認められた (第3分冊図版26)。加えて、遺物には06-SK248や06-SK249、06-SK131と接合関係が認められるものもある。06-SK248・06-SK249は火災処理土坑と考えられるもので、本遺構もそれらと同じ火災処理に伴う遺構の可能性が高い。大型の廃棄土坑06-SK131の窪地を埋めるためにまず不要な瓦礫を廃棄し、その後に06-SK249が構築されたものと考えられる。以上の点からⅦ期 (16世紀末葉) に位置づける。

漆喰面を持つ壁土
炭化した粕

火災処理に伴う遺構



第3-183図 06-SX309実測図 (1/30)



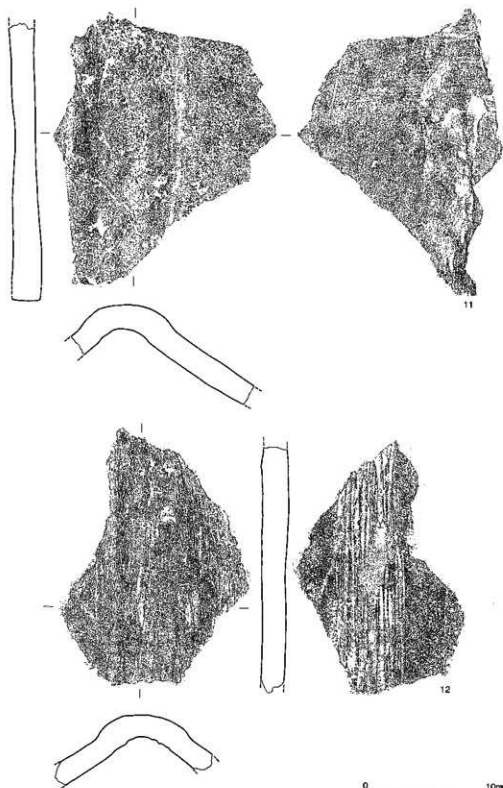
第3-184図 06-SX309出土遺物実測図①(1/3)

06-SX291出土遺物(第3-182図)

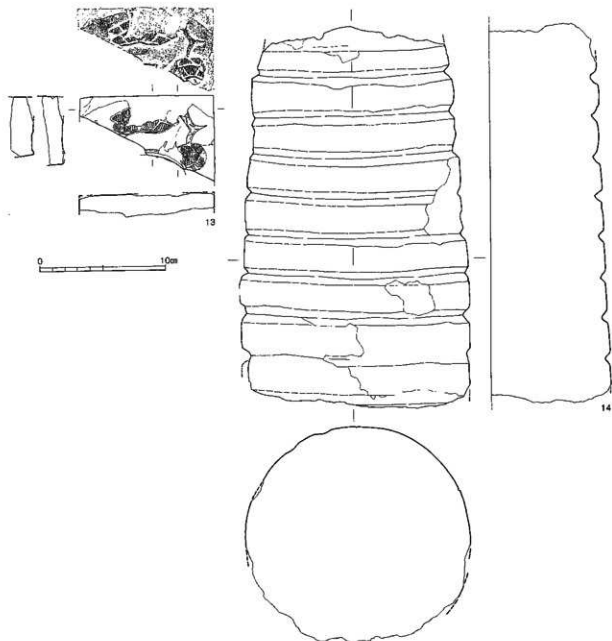
漳州窯の青
花碗
コンテナ容器

二次焼成

1は青磁碗、2は漳州窯の青花碗である。3～5は産地不明の施釉陶器壺で、同一個体と考えられる。中国南部産でコンテナ容器として使用されたものであろう。4は06-SK248と06-SD221、5は06-SK248・06-SK249・06-SK131出土の破片とそれぞれ接合する。6・7は土師器小皿で、7は外面にロクロ整形による段が巡る。7は全体に二次焼成を受けている。8は黄白色を呈する土師器皿、9・10は内面にロクロ整形による多条の沈線をもつ土師器皿である。11は京都系土師器皿で、器壁は厚い。12は瓦質土器の椀である。13は瓦質土器の火鉢の底部で、脚部の先端は強く外反する。14は瓦質土器の風炉で、凸帯内にスタンプ文を施す。06-SK131出土の破片と接合関係が認められる。15は雁振瓦で、二次焼成を受けている。16は埴で、二次焼成を受け、全体に摩滅している。



第3-185図 06-SX309出土遺物実測図② (1/3)



第3-186図 06-SX309出土遺物実測図③(1/3)

06-SX309 (第3-183図)

1区のL62・M62グリッドで検出した集石である。溝06-SD302Bと重複するが、06-SD302B埋没後に形成された遺構である、また、この上には06-SX287が位置している。東西246m、南北約3.0mの範囲に裸や瓦・土器・石塔部材等の遺物が密集して出土した。その周囲を精査したがm掘り込みは確認できなかった。16世紀前半の土師器皿が比較的出土しているが、Ⅵ期（16世紀後半）の溝06-SD302Bより新しい遺構であることから、Ⅵ期～Ⅶ期（16世紀後半～末葉）に位置づける。

石塔部材



第3-187図 06-SX310実測図 (1/30)

06-SX309出土遺物 (第3-184～3-186図)

中国産の天目碗

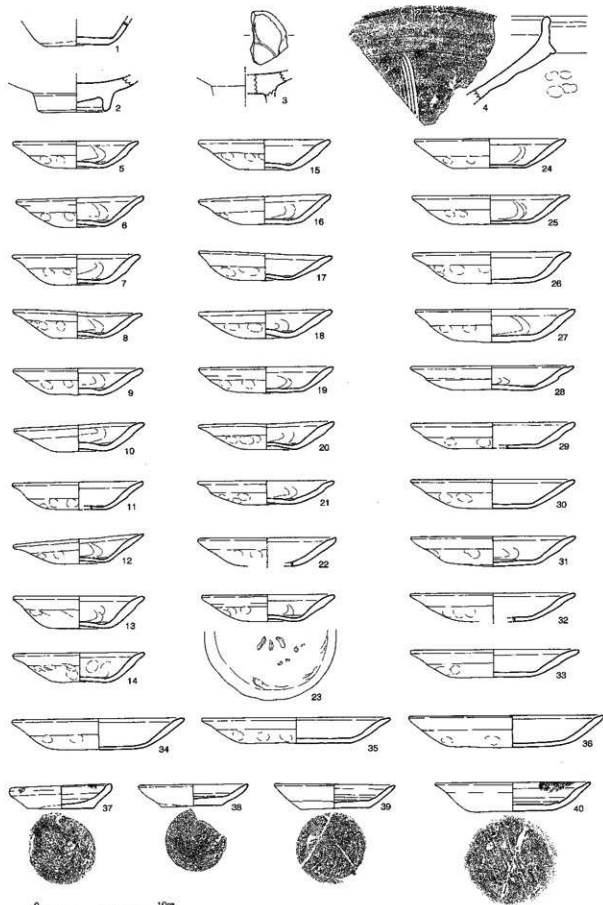
1は中国産の天目碗である。全体に二次焼成を受け、黒くくすんでいる。2～6は在地の土師器皿で、3～6は内面にロクロ整形による多条の沈線が巡る。4・6は二次焼成を受け、5は全体が煤けて黒変する。7は土師器の携台で、見込みに芯棒を入れるための穴を穿つ。8は瓦質土器であるが器種不明である。波状口縁を呈し、口縁に沿って1条の細沈線を施す。頸部に凸帯を貼り付ける。頸部内面には成形の指頭圧痕が見られ、その上に爪痕が残る。同様のものが06-SK248と06-SK268から出土している。9は軒丸瓦で、瓦当中央に右巻きの巴文とその周囲に珠文を施す。10～12は雁振瓦で、10は二次焼成を受ける。13は赤間石製の祝、上部部に松樹文を陽刻する。14は凝灰岩製の石塔部材で、宝塔ないし宝蓋印塔の相輪である。

赤間石製の祝松樹文

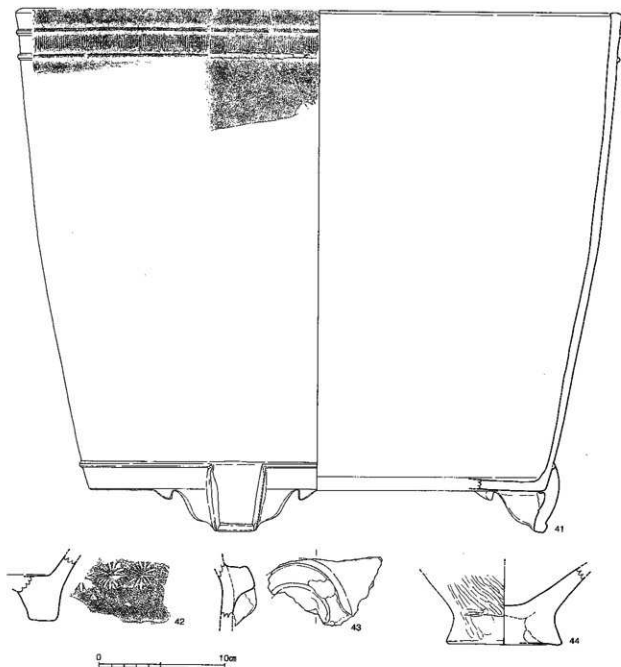
06-SX310 (第3-187図)

1区のM62グリッドで検出した集石及び遺物集中ブロックである。遺物等の分布範囲は東西284m、南北271mで、検出高は4.85mである。周囲を精査したが、掘り込みは確認できない。06-SD302の終端部にほぼ重なるが、それよりも上位に位置する。本遺構の最大の特徴は、中央付近で京都系土師器皿の一括廃棄が認められる点である。出土する京都系土師器皿は薄手で1期に編年されるものが主体を占める。また、瓦質土器や瓦、銭貨等も出土している。遺構の年代はⅦ～Ⅷ期(16世紀後半～末葉)である。

京都系土師器皿の一括廃棄



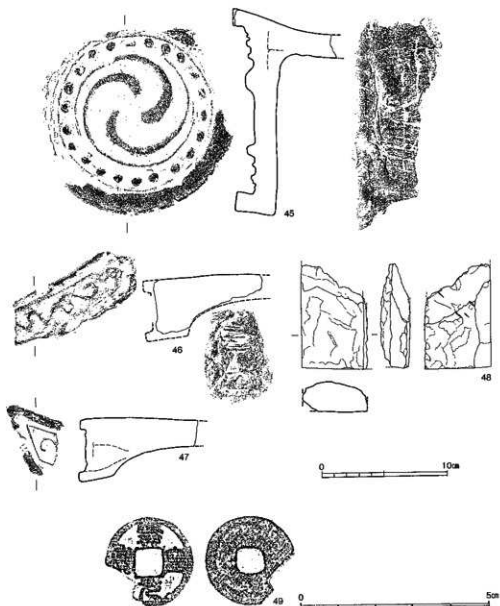
第3-188図 06-SX310出土遺物実測図①(1/3)



第3-189図 06-SX310出土遺物実測図② (1/3)

06-SX310出土遺物 (第3-188～3-190図)

1は白磁皿の底部である。2・3は青磁碗の底部で、3は見込に印花文を施す。4は備前焼摺鉢で、口縁部は上方に長く延びる。5～36は京都系土師器皿である。23は底面に整形時の指頭痕が残る。34～36は口径の大きい一群で、口径13～16cmを測る。37～40は内面にロクロ整形による多条の沈線が巡る土師器皿である。38・40は淡黄白色の胎土で、ロクロ目が少ないことから最終段階のものと考えられる。41は瓦質土器の深鉢形火鉢で、口縁下の凸帯間にスタンプ文を施し、底部には脚が付く。42は瓦質土器火鉢の底部で、外面に菊花状スタンプ文を施す。43は器種不明の土師器ないし瓦質土器で、外面には把手と思われる弧状の突起を持つ。44は弥生土器の壺の底部である。45は軒丸瓦で、瓦当面の圏線内に右巻きの巴文と珠文を配する。46・47は瓦当面に唐草文を施



第3-190図 06-SX310出土遺物実測図③ (1/3・1/1)

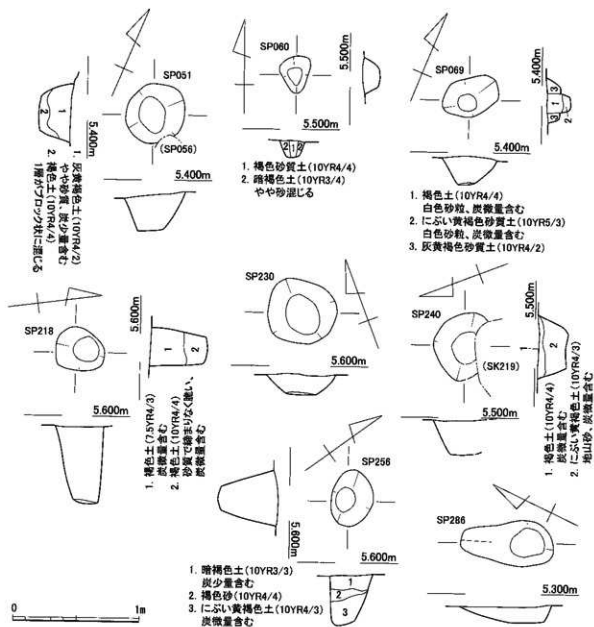
す軒平瓦で、46は摩滅が著しい。48は赤間石で硯の未成品であろう。49は北宋の熙寧元寶（1068年初鑄）である。

7. 柱穴遺構

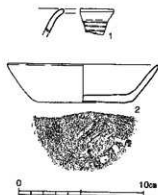
柱穴遺構のうち、図示した遺物が出土したもの、埋土が複数層に分層できるものを中心に第3-191図に掲載した。

柱穴遺構出土遺物（第3-192図）

1は1区の06-SP230から出土した青磁碗の細片である。2は1区の06-SP286から出土した土師器坏で、底面に回転糸切り痕が残る。



第3-191図 06-柱穴遺構実測図 (1/30)



第3-192図 06-柱穴遺構出土遺物実測図 (1/3)

第5節 中世面下層の遺構

中世遺構面の下面としたものは、主に第4層及び第5層を除去した後、地山砂層上面で検出した遺構で、遺構の切り合い関係等から主に14～15世紀代に位置づけられるものを扱う。遺構としては掘立柱建物、欄列、土坑、溝、井戸、土坑墓、遺物集ブロック、柱穴がある。土坑には瓦の一片廃棄土坑や大型の廃棄土坑、溝には区画性の強いものがあり、夥しい量の遺物が出土している。また、土坑墓は主に2区のL61グリッドで密集して構築されている。

1. 掘立柱建物

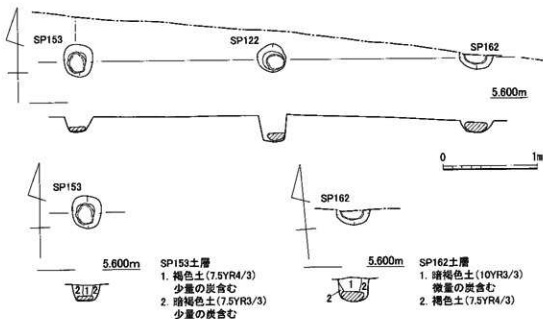
06-SB002 (第3-193図)

掘立柱建物

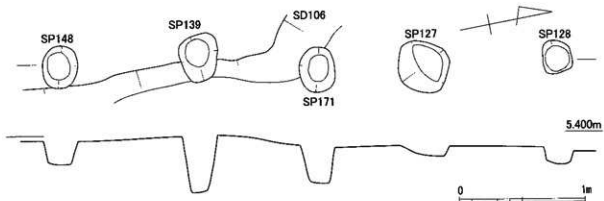
礎盤石

7尺

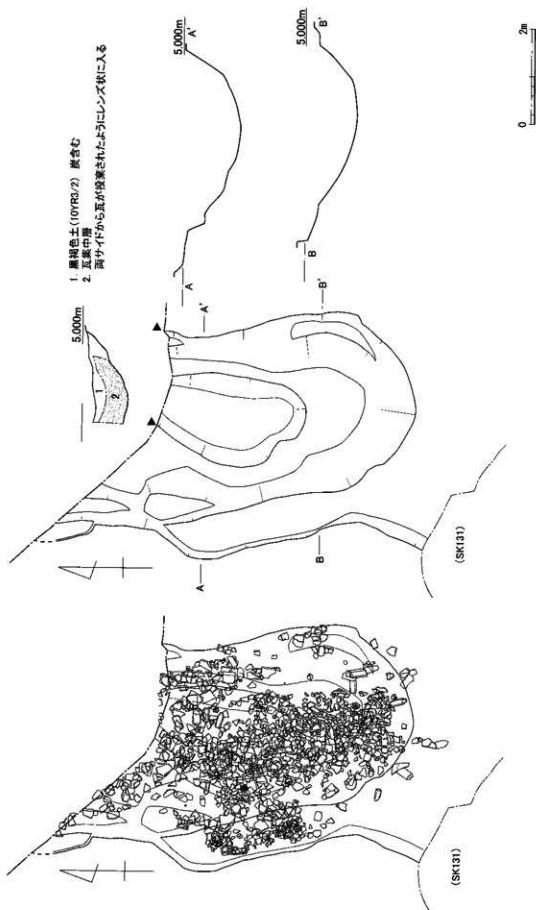
2区の北端、N60・O60グリッドで検出した掘立柱建物で、建物を構成する柱穴は06-SP122・06-SP153・06-SP162である。各柱穴とも内部に礎盤石を据えている。南辺の一部を検出しただけで、大部分は調査区外に続くため全体の規模は明らかにできない。柱穴間の距離は2.12mを測り、7尺と考えられる。この軸線はN-89.5°-Eで、南北軸はほぼ真北にとる。出土遺物がほとんどなく詳細な時期は明らかにできないが、第5層の下で検出された遺構である。第5層は遺物が少ないが、V期(16世紀前半)以降の遺物が見られない。従ってそれ以前の遺構と考えられる。



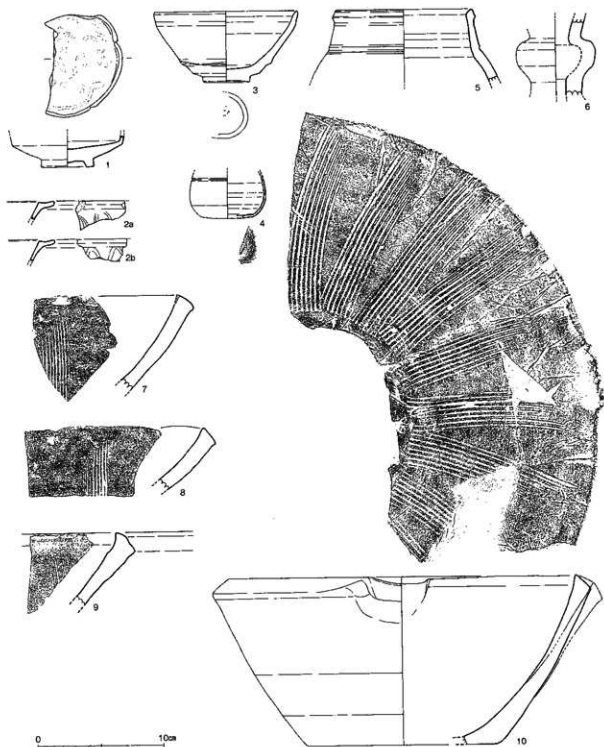
第3-193図 06-SB002実測図(1/40)



第3-194図 06-SA01実測図(1/30)



第3-195図 O6-SK097実測図 (1/80)



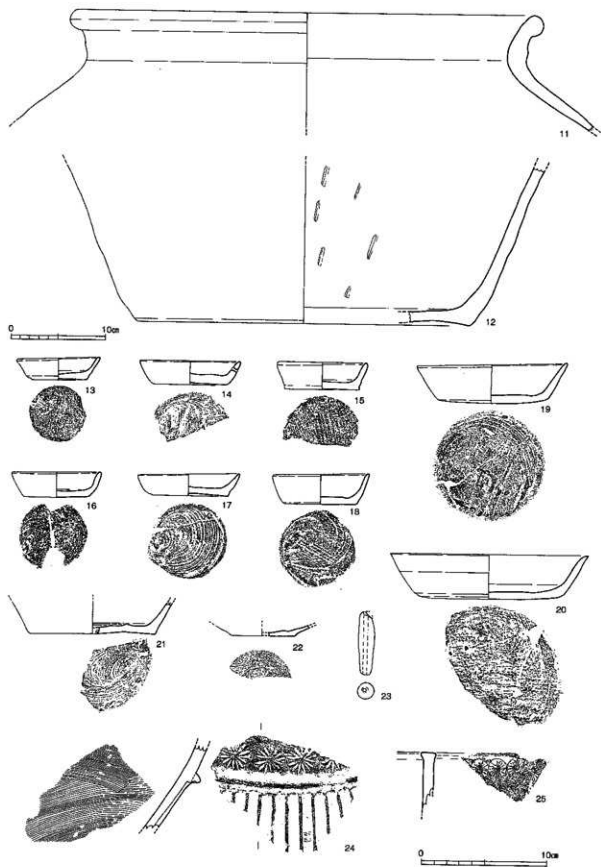
第3-196図 06-SK097出土遺物実測図① (1/3)

2. 櫛列

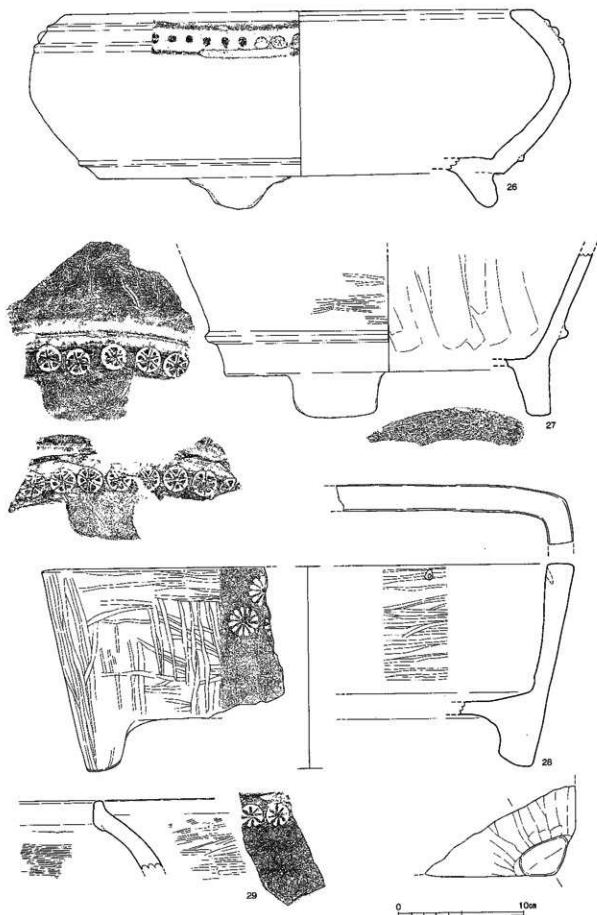
06-SA001 (第3-194図)

櫛列

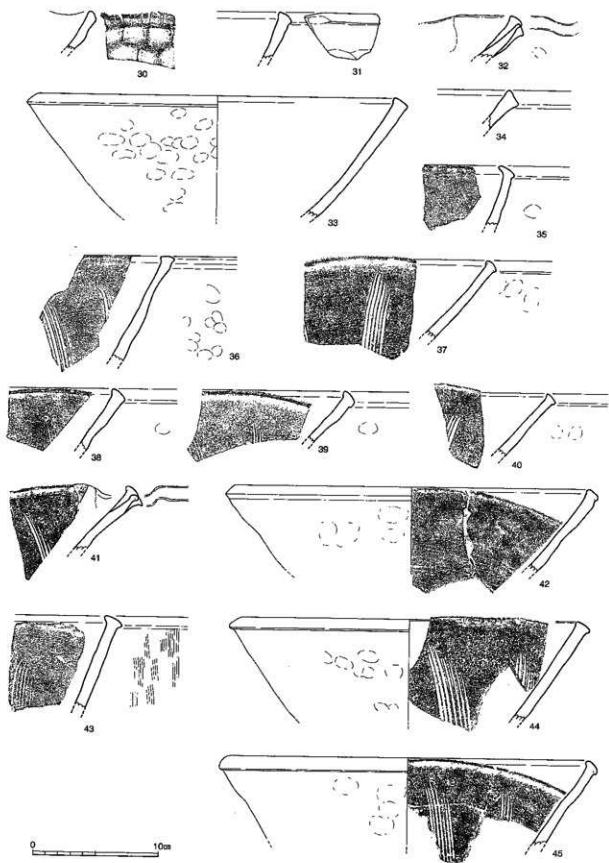
2区のN61グリッドで検出したもので、5基の柱穴の並びがあることから櫛列としたものである。構成する柱穴は06-SP127・06-SP128・06-SP139・06-SP148・06-SP171で、いずれも溝06-SD106に切られている。柱穴間の距離は約0.9～1.1mを測り、軸線はN-11°-Eで東に振れる。遺物の出土がなく詳細な時期は明らかにできないが、06-SD106からは14世紀代の土師器が出土しており、I～II期（14世紀前半～末）の遺構の可能性はある。



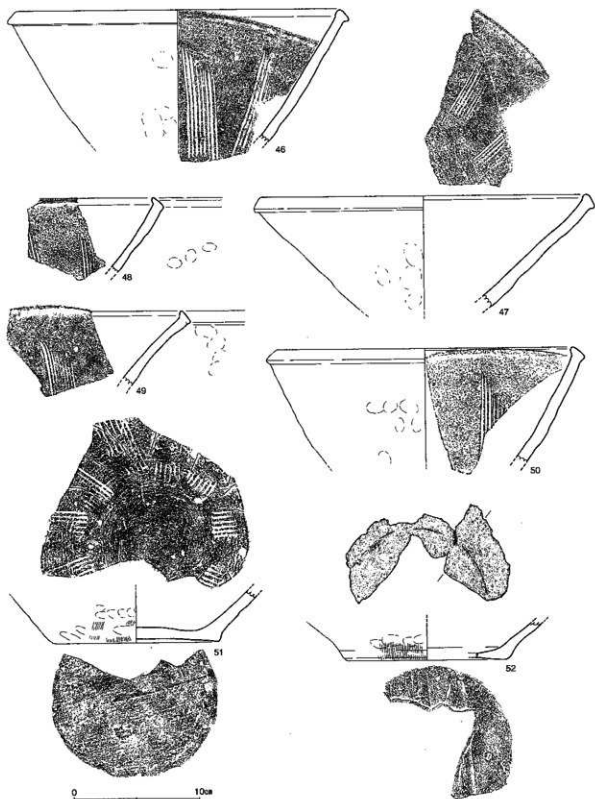
第3-197図 O6-SK097出土遺物実測図② (1/3)



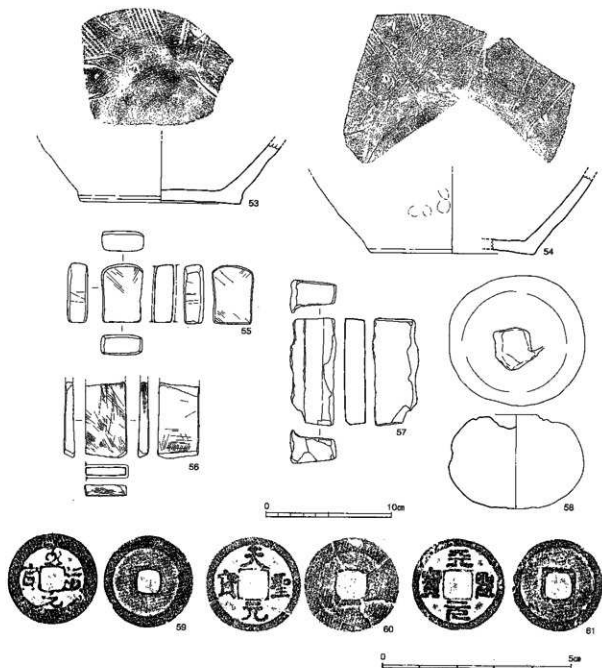
第3-198図 06-SK097出土遺物実測図③ (1/3)



第3-199図 06-SK097出土遺物実測図④ (1/3)



第3-200図 06-SK097出土遺物実測図⑤(1/3)



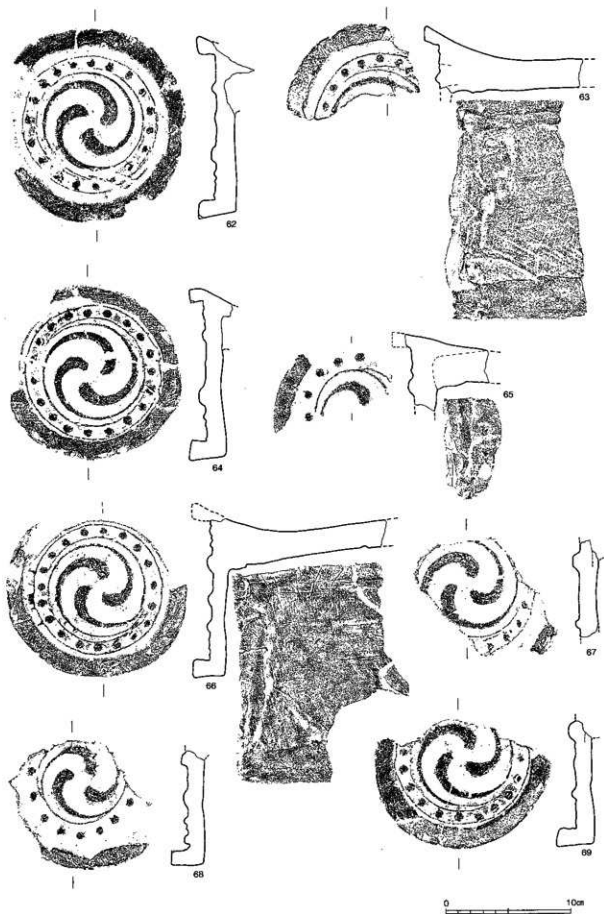
第3-201図 06-SK097出土遺物実測図⑨ (1/3・1/1)

3. 土坑

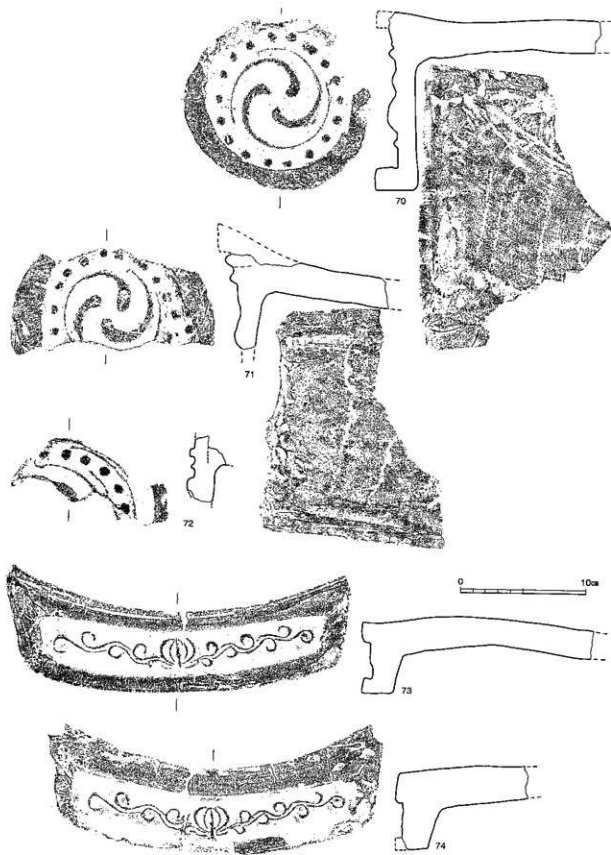
06-SK097 (第3-195図)

2区のM60・M61グリッドで検出した土坑である。北側が調査区外に続くため全体の規模は明らかにできないが、長辺約9.2m以上、短辺約4.7m、深さ約1.5mを測る。溝06-SD117と重複しており、06-SK097が06-SD117を切っている。本遺構の最大の特徴は瓦が大量に出土している点で、土坑の中位から下位にかけてレンズ状に堆積している。中には被熱で赤変した瓦も含むことから、火災により不要となった瓦礫を処分した火災処理土坑と考えられる。瓦の他に陶磁器や土師器、瓦質土器、石製品、銭貨があり、中には枢府系白磁碗や中国産天目碗、茶入、古瀬戸掌瓶等、稀少な遺物も含む。遺構の年代はIV期 (15世紀中頃～後半) に位置づける。

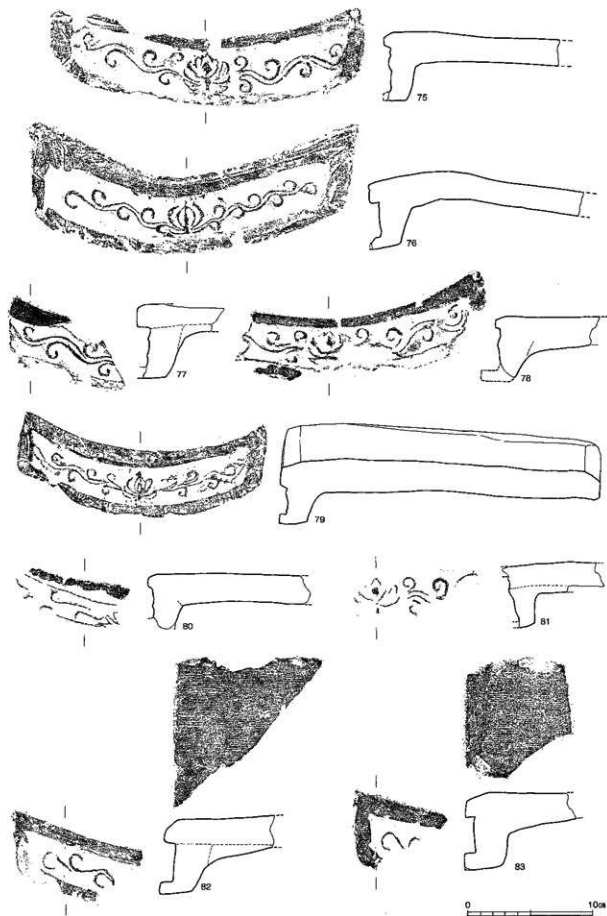
瓦が大量に出土。被熱で赤変した瓦。火災処理土坑



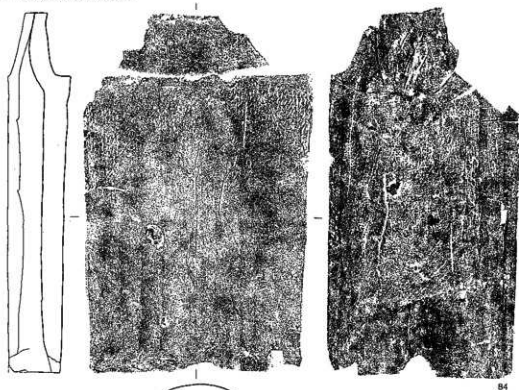
第3-202図 06-SK097出土遺物実測図①(1/3)



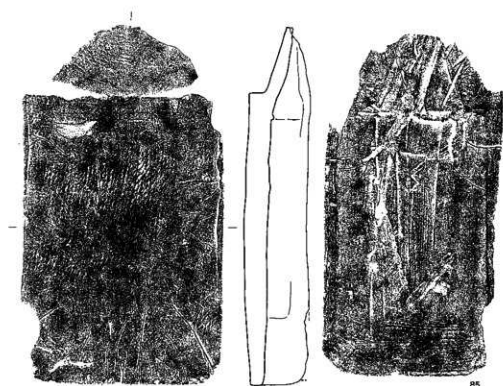
第3-203図 06-SK097出土遺物実測図③ (1/3)



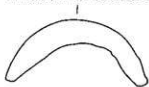
第3-204図 06-SK097出土遺物実測図③(1/3)



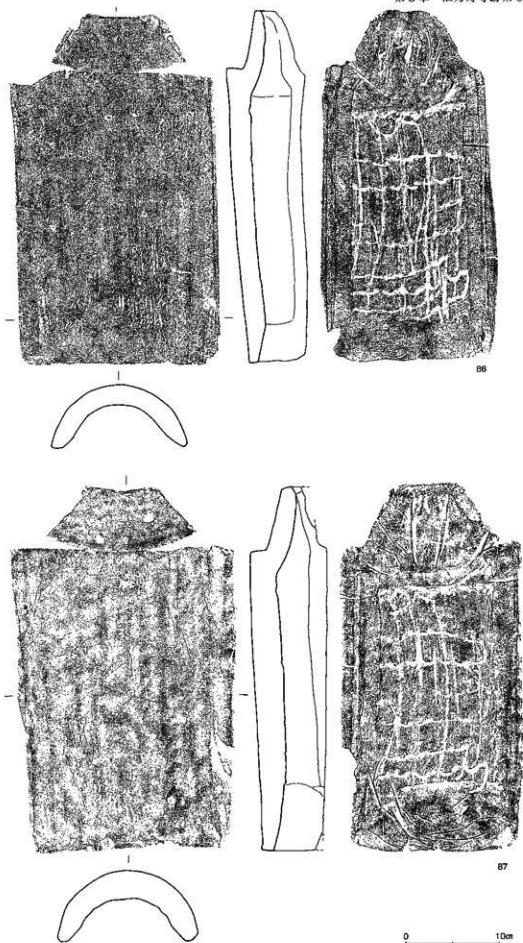
84



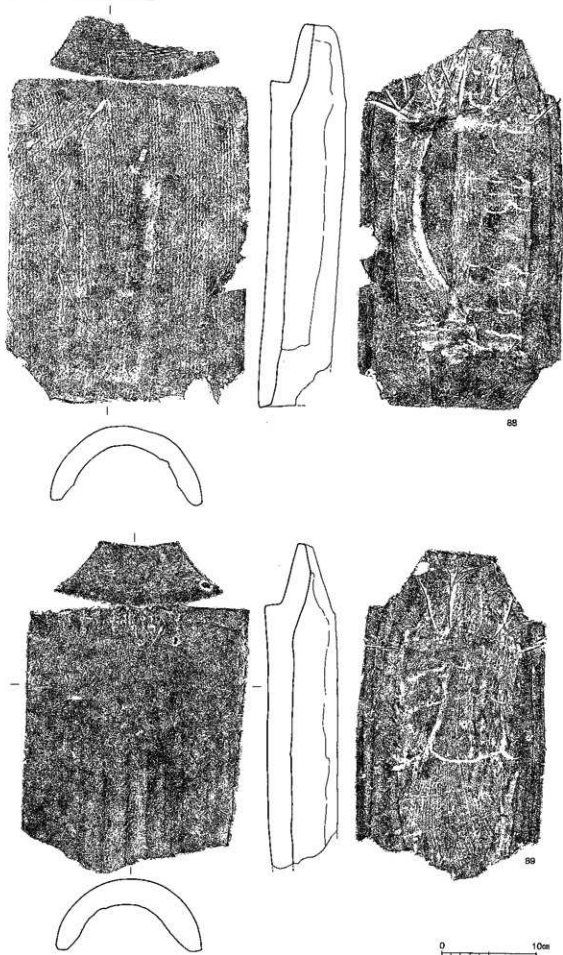
85



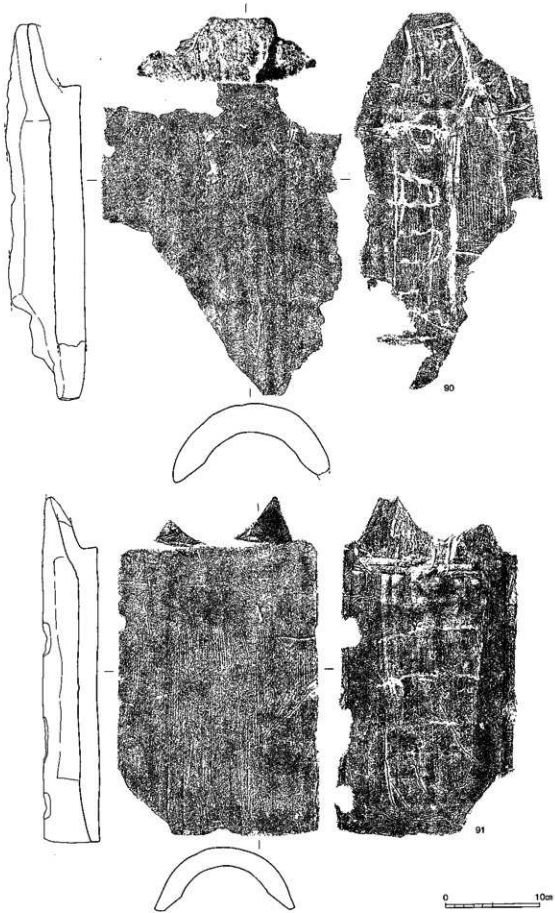
第3-205図 06-SK097出土遺物実測図①(1/4)



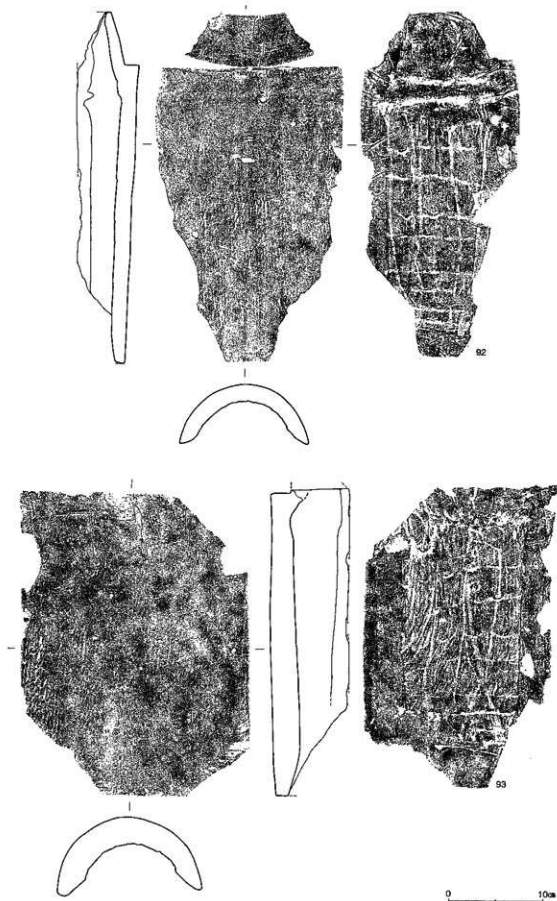
第3-206図 06-SK097出土遺物実測図①(1/4)



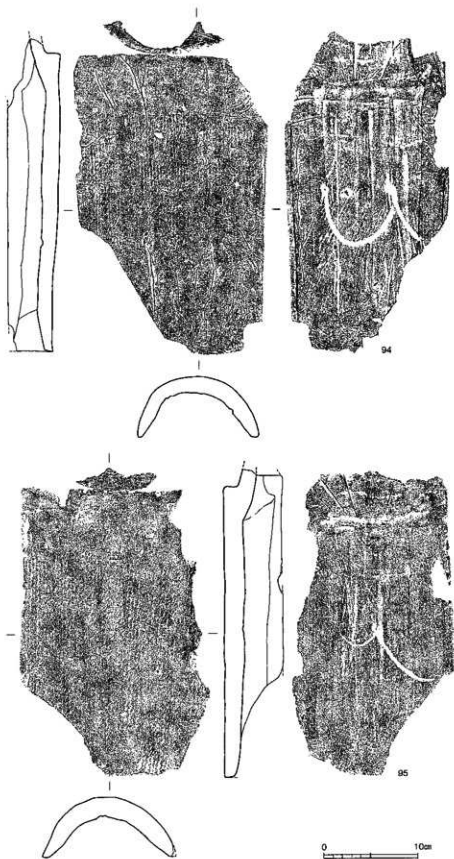
第3-207図 06-SK097出土遺物実測図② (1/4)



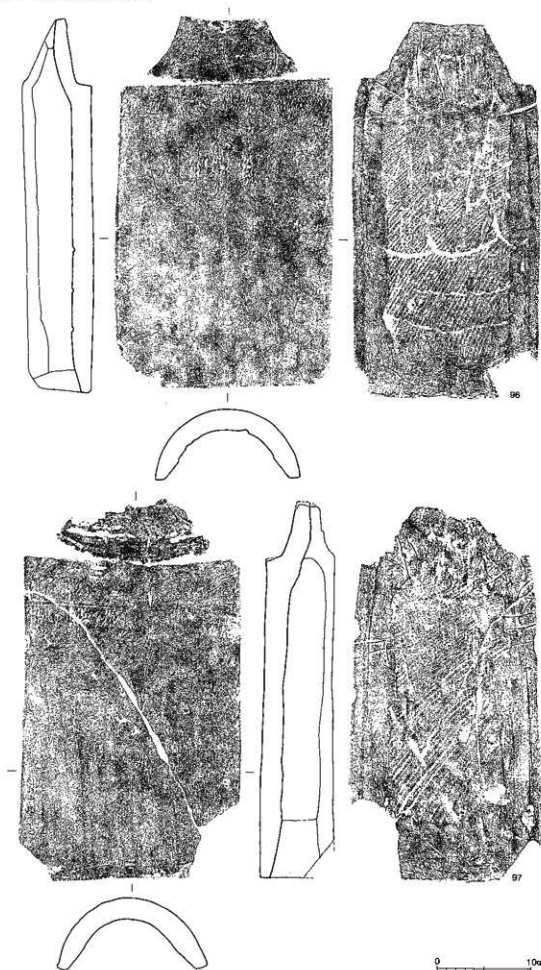
第3-208图 06-SK097出土遺物実測図③ (1/4)



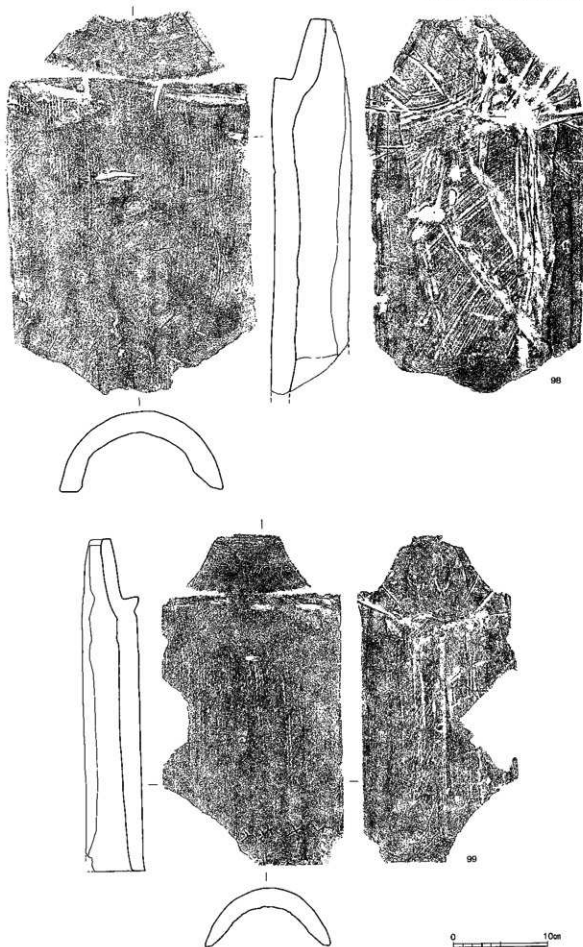
第3-209図 06-SK097出土遺物実測図② (1/4)



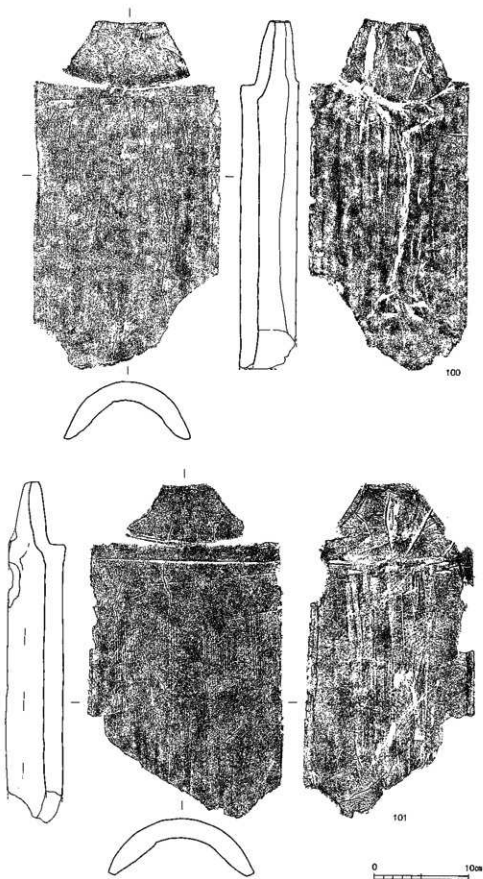
第3-210图 06-SK097出土遺物実測図⑤ (1/4)



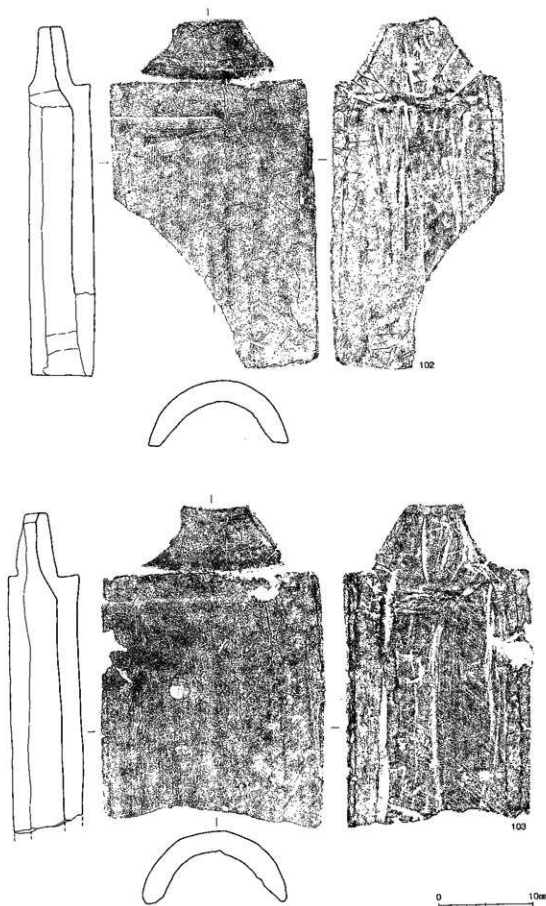
第3-211図 06-SK097出土遺物実測図④ (1/4)



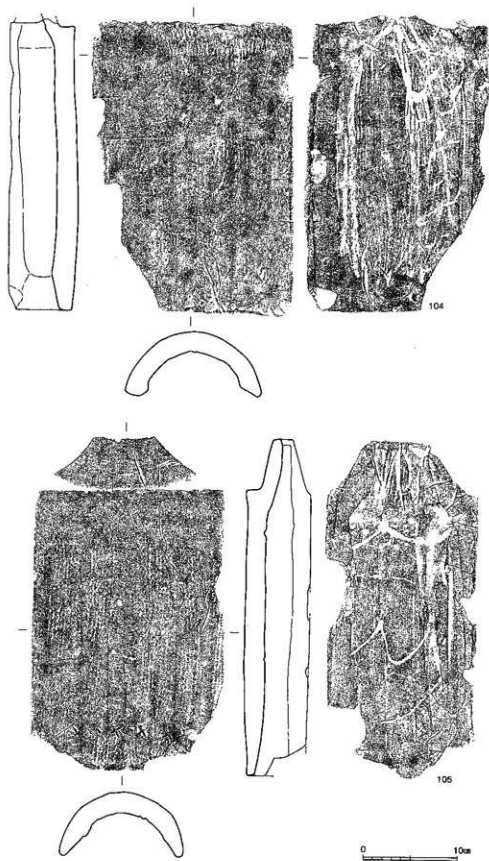
第3-212図 06-SK097出土遺物実測図⑦(1/4)



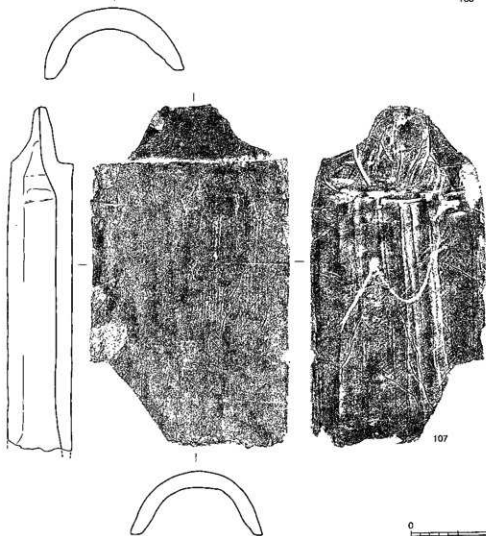
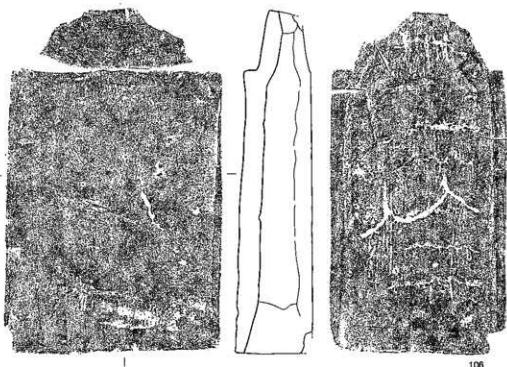
第3-213図 06-SK097出土遺物実測図⑧ (1/4)



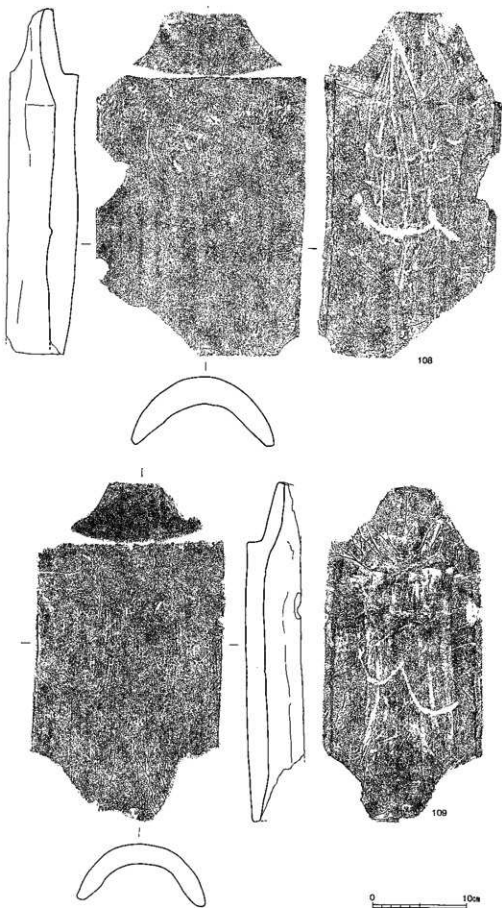
第3-214图 06-SK097出土遺物実測図⑨(1/4)



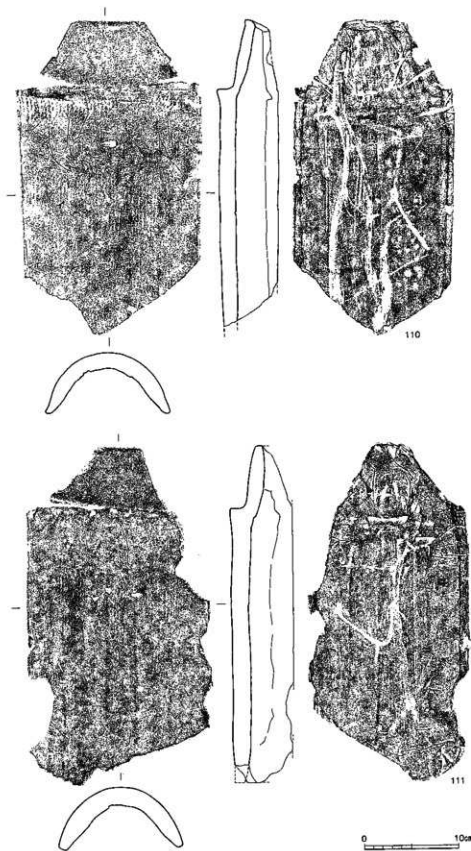
第3-215図 06-SK097出土遺物実測図② (1/4)



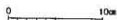
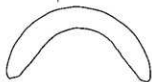
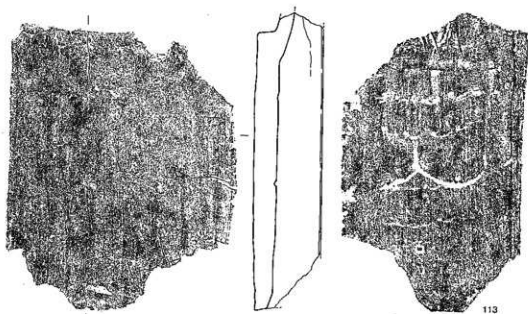
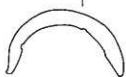
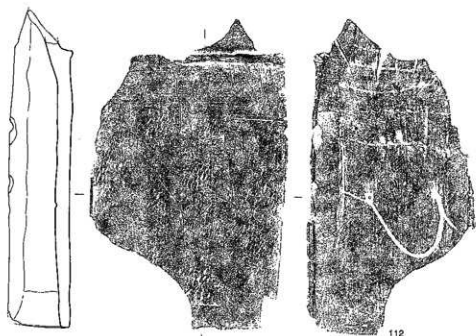
第3-216図 06-SK097出土遺物実測図②(1/4)



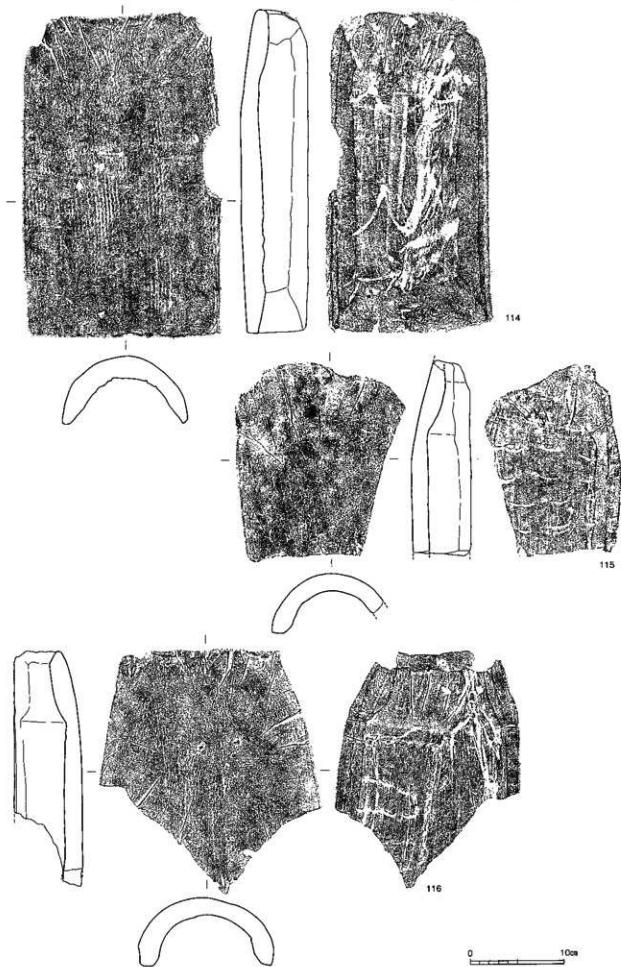
第3-217図 06-SK097出土遺物実測図②(1/4)



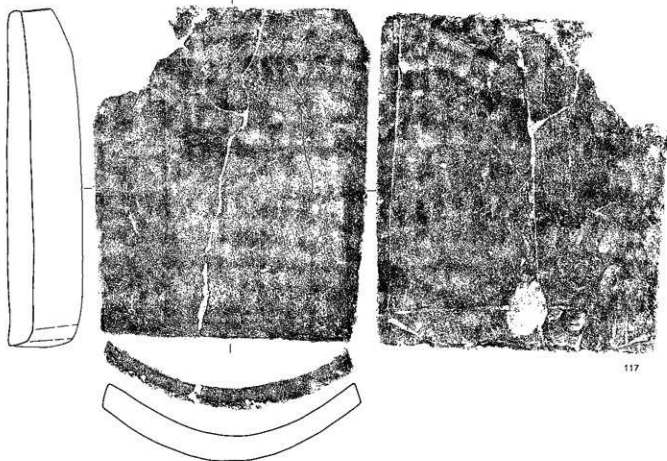
第3-218図 06-SK097出土遺物実測図②(1/4)



第3-219図 06-SK097出土遺物実測図④ (1/4)



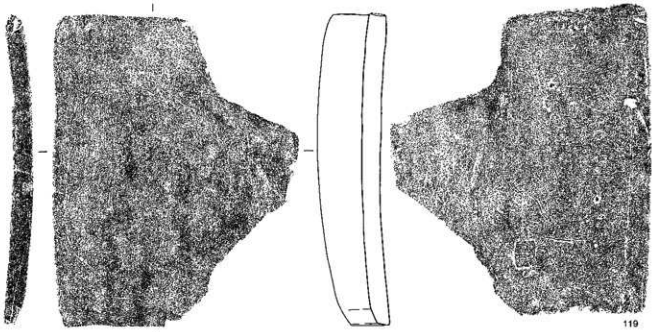
第3-220図 06-SK097出土遺物実測図④(1/4)



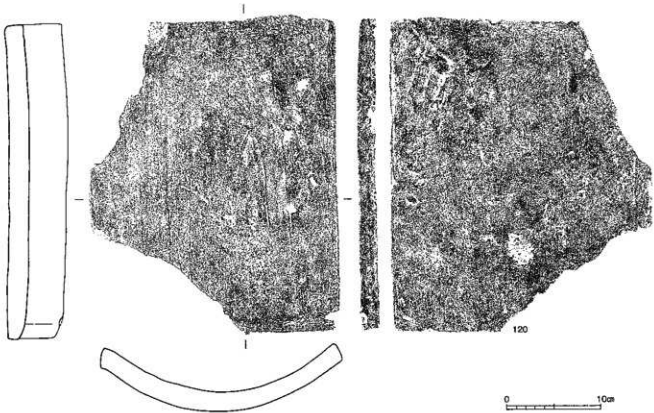
117

118

0 10cm



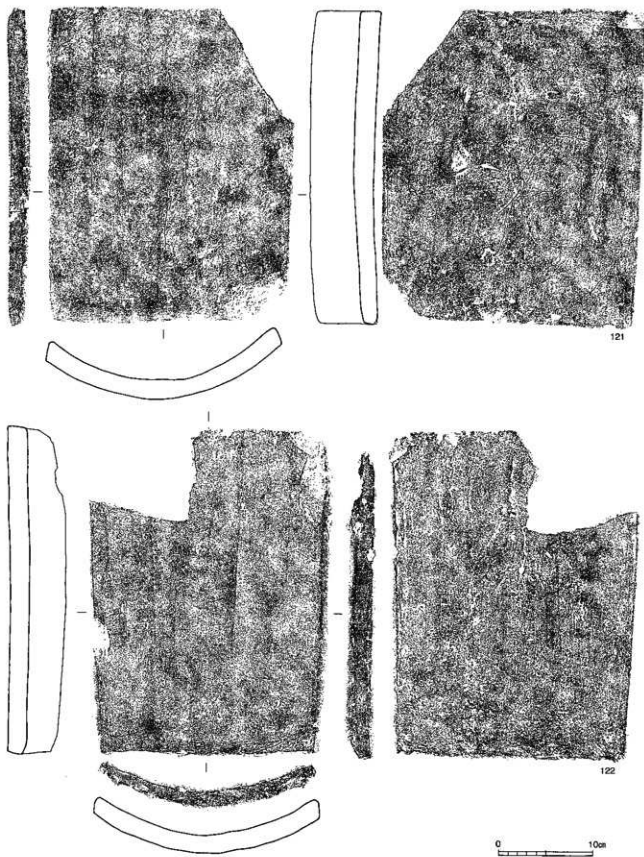
119



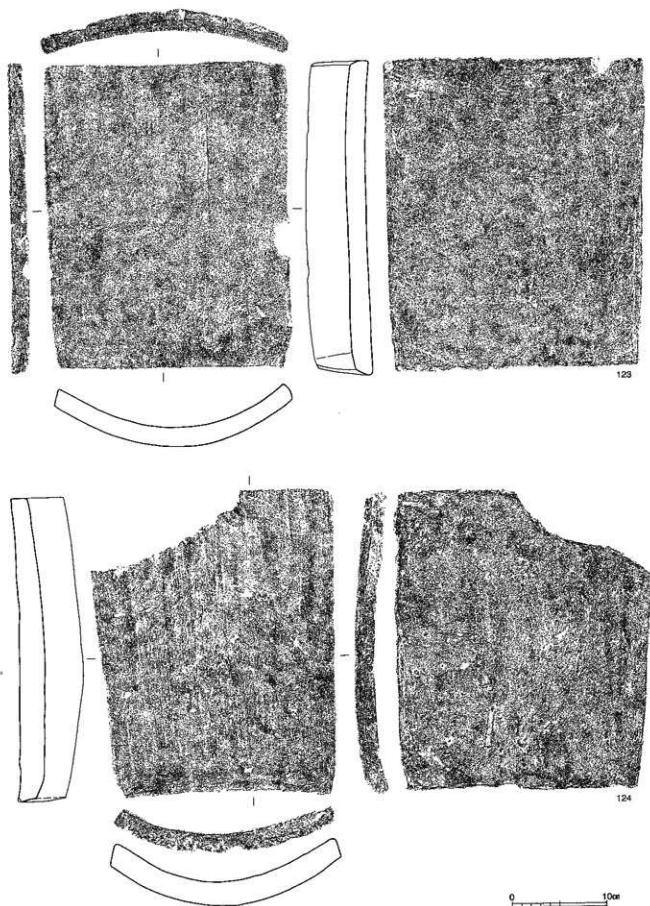
120

0 10cm

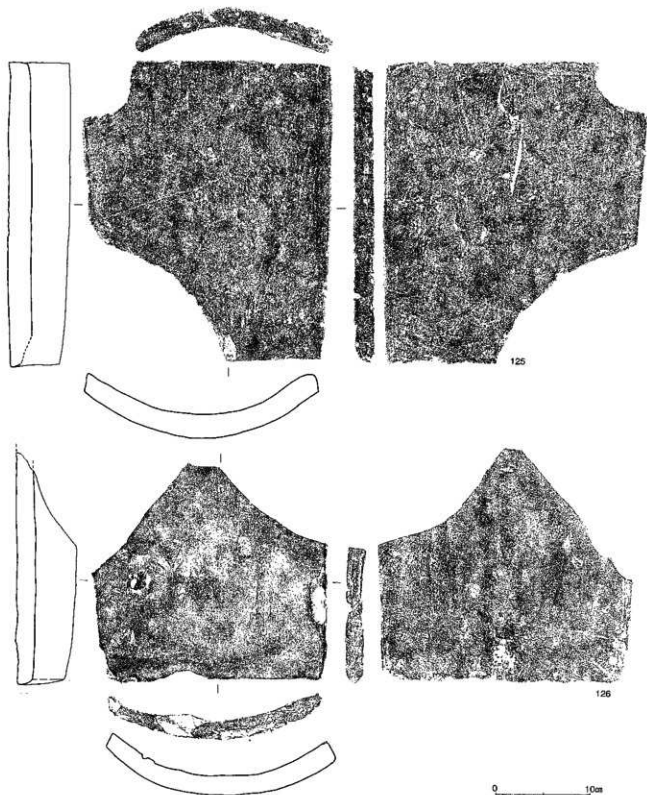
第3-222図 06-SK097出土遺物実測図②(1/4)



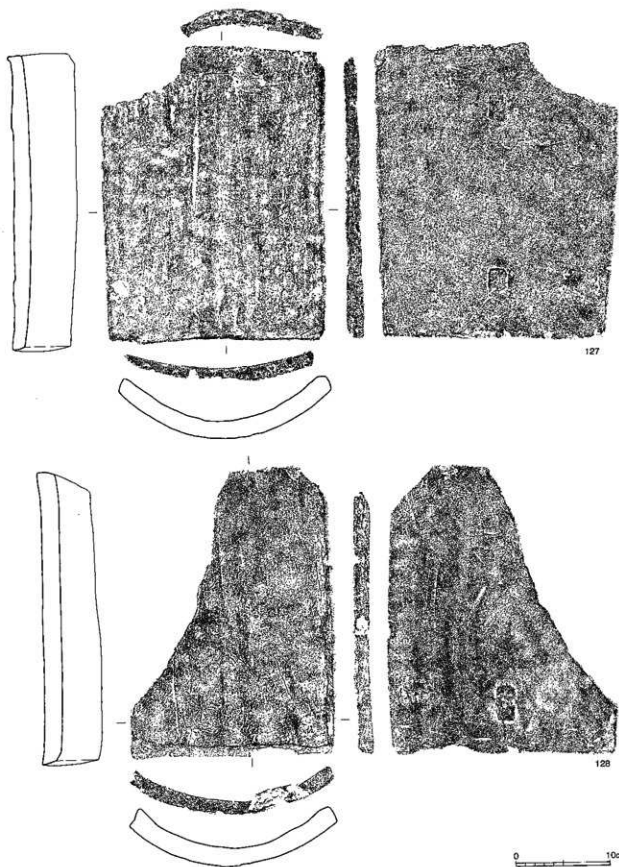
第3-223図 06-SK097出土遺物実測図④ (1/4)



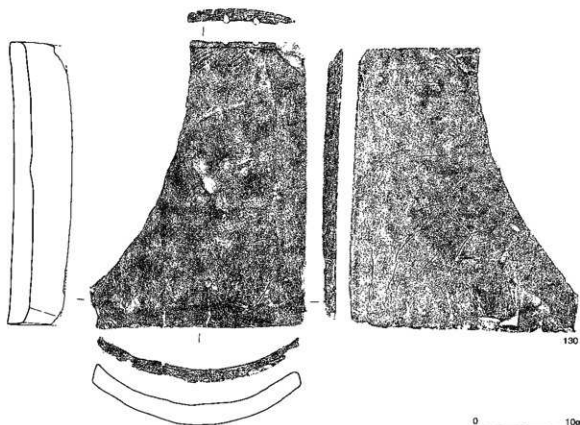
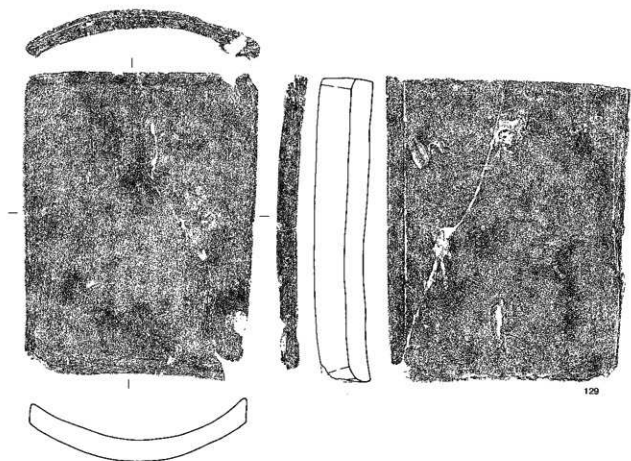
第3-224図 06-SK097出土遺物実測図②(1/4)



第3-225图 06-SK097出土遺物実測図④ (1/4)



第3-226図 06-SK097出土遺物実測図④ (1/4)



0 10cm

第3-227図 06-SK097出土遺物実測図② (1/4)

06-SK097出土遺物 (第3-196~3-247図)

枢府系白磁碗

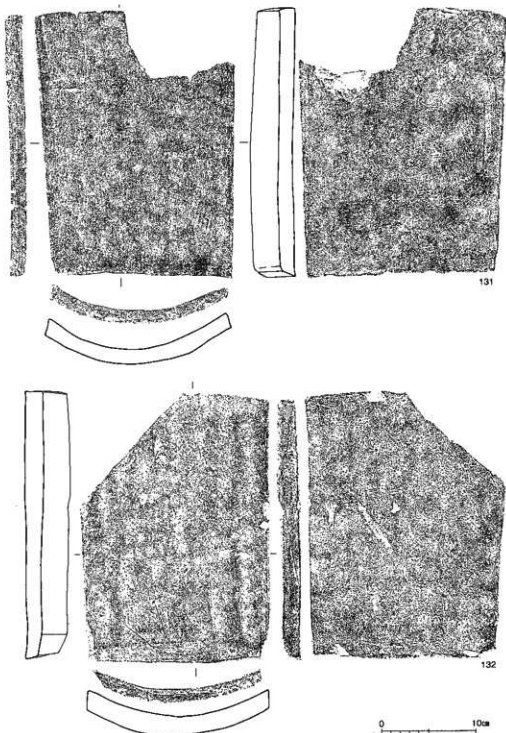
第3-196~3-231図は上層からの出土である。1は枢府系白磁碗で、見込に文様を施すが二次焼成により不鮮明である。2は青磁の盤で、外面に蓮弁文を施す。同一個体2点を図示した。3

中国産天目碗
朱墨書の痕跡
茶入

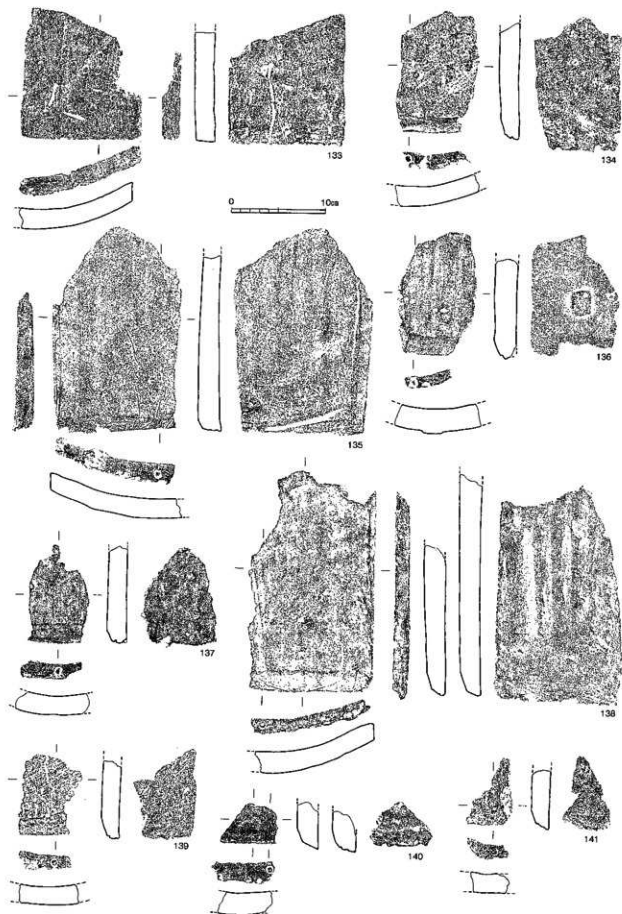
は中国産天目碗である。釉薬は二度掛けし、二度目の釉薬は厚く掛かる。底面には朱墨書の痕跡が残るが字は判読できない。4は施釉陶器の茶入で、器壁は極めて薄く、胴部上位に1条の沈線を施す。5は施釉陶器の壺である。中間南部産であろうか。6は古瀬戸の華瓶である。尊式華瓶とされ

尊式華瓶

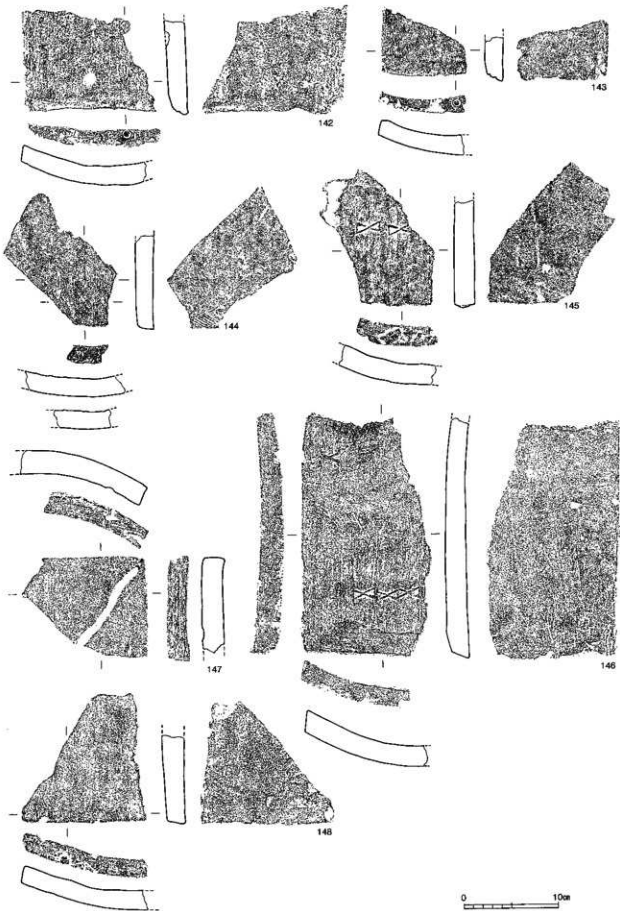
す。5は施釉陶器の壺である。中間南部産であろうか。6は古瀬戸の華瓶である。尊式華瓶とされ



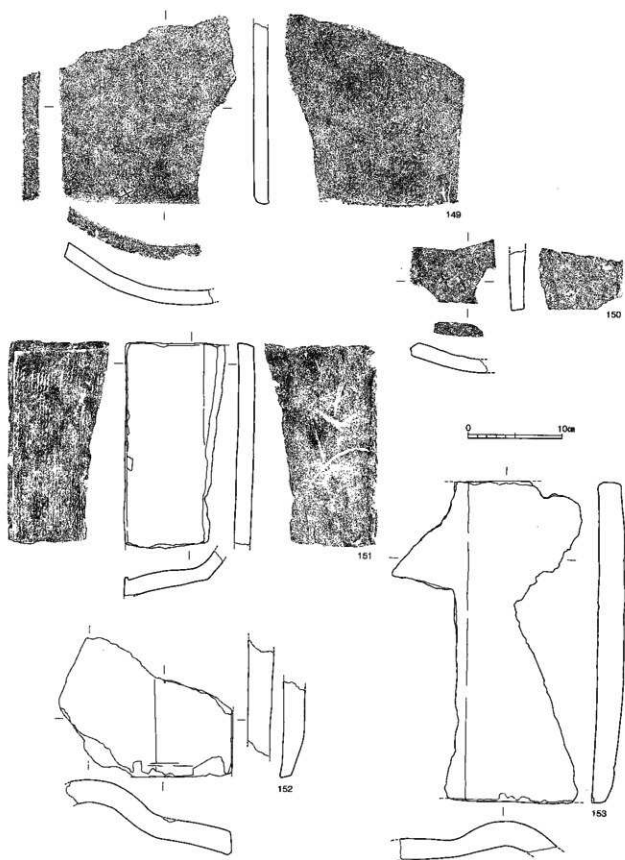
第3-228図 06-SK097出土遺物実測図⑨(1/4)



第3-229図 06-SK097出土遺物実測図⑨ (1/4)



第3-230図 06-SK097出土遺物実測図⑨ (1/4)



第3-231図 06-SK097出土遺物実測図④ (1/4)

- るもので、古瀬戸福年の中期Ⅲ期（14世紀中頃）に位置づけられる。7～10は備前焼の摺鉢である。7・8は中世Ⅲa期（14世紀後半）、9・10は中世Ⅲb期（15世紀前半）に編年される。11・12は備前焼の甕である。13～18は在地の土師器小皿で、いずれも底面に回転糸切り痕が残る。19～21は土師器坏で、21は胎土に多量の金雲母を含むことから、他所からの搬入品と考えられる。22は白色胎土で薄手の大内系土師器皿である。23は土師質焼成の管状土罐である。24～54は瓦質土器で、24は風炉の可能性が高い。25～28は火鉢である。26は口縁が内湾する浅鉢形の器形で、口縁下の凸帯間に連珠文とスタンプ文を施す。28は方形を呈する。28の内面口縁下には1箇所孔がみられる。29は釜であろう。30～35は摺鉢で、30は外面に成形の押圧痕が残る。36～54は摺鉢である。36～47は口縁が肥厚し端部が内外両側に張り出すタイプ、48～50は口縁端部が内側に近びるタイプに分けられる。51～54は底面で、52は内面に赤色顔料が付着しており、顔料の生成に用いられた可能性がある。55・56は砥石である。57は加工痕のある赤間石で、硯の加工で生じた残滓であろう。58は石塔の部材と思われる。59～61は北宋銭で、59は至道元寶（995年初鑄）、60・61は天聖元寶（1023年初鑄）である。
- 62～153は瓦類である。62～72は軒丸瓦で、いずれも瓦当中央に右巻きの巴文を配し、その周りに珠文を施す。65・68は巴文の尾部が繋がりに輪縁状となる。珠文の数は62・64・66は19点、70は18点である。珠文の外側に区画の圏線を持つもの（62～64・66・67・69・72）と、圏線を持たないもの（65・68・70・71）がある。73～83は軒平瓦である。いずれも中心飾りの蓮華文とその両側に唐草文を施す。75・77・79は唐草文の末端が途切れている。75は被熱による赤変が著しい。80は区画線内に唐草文を施す。84～116は丸瓦である。84～98は大型のタイプで、84・85は凸面に縄目タキ痕、凹面に布目痕が残る。86～93は凹面に湾曲の緩い多条の吊紐痕を持つ。94～96は湾曲の大きい大振りの特徴的な吊紐痕が見られ、96はコビキ痕も残る。97・98は凹面に布目とコビキ痕があり、吊紐痕は見られない。99～113はやや小ぶりの丸瓦で、99～101は凹面に布目痕が残る。102～104は凹面に布目痕と湾曲の緩い多条の吊紐痕を持つ。105～113は凹面に布目痕と、湾曲の大きい大振りの吊紐痕が残る。114は被熱により赤く変色している。114～116は玉縁部のない、いわゆる行基瓦である。114はほぼ完形で、凸面に縄目タキ、凹面に布目と湾曲の大きい吊紐痕が残る。115・116は下半部を欠くが、凹面に布目痕と湾曲の緩い多条の吊紐痕が見られる。117～150は平瓦で、117～127は大型のもの、128～132はやや小振りのものである。120は被熱による赤変が著しい。118・119・126・127・128は凸面に成形台の痕跡と思われる方形の突起が見られる。126は1箇所凹面側から穿孔する貫通しない。127は下端側面に円形竹管状刺突を施す。133～150は刻印を持つものの特徴のある平瓦である。133は凹面の9箇所円形竹管状刺突を施す。134～143は下端側面に円形竹管状刺突を施す。144は凹面にわずかに連続する刻印が確認できる。刻印は崩れた「×」状を呈する。145・146は凹面に糸巻形の刻印を施す。147は凹面に1条の沈線を施す。148は平瓦片の破損面に鑿状工具の連続的な整形痕が残る。149・150は凹面に連続する「×」状の刻印を施す。151～153は雁振瓦で、151の凸面には縄目タキが残る。
- 154～202は下層出土の遺物である。154は白磁の壺ないし瓶類であろう。155は中国産天目碗で、釉薬を二度掛けする。156は古瀬戸の水注の蓋である。外面に釉薬を施し、底面には糸切痕が残る。157～164は土師器小皿・小坏である。158・159・160は煤が付着する。165・166は土師器坏で、底面に回転糸切り痕が残る。167は古代の土師器高坏で、脚部はケズリで多角形を呈する。168は瓦質土器の風炉である。胴部に方形の風門を配し、内面には突起を持つ。突起部には貫通する孔を穿つ。169は備前焼摺鉢である。
- 170～202は瓦類である。170～173は軒丸瓦で、右巻きの巴文と珠文を施す。珠文は170・173は

多量の金雲母を含む大内系土師器皿

赤色顔料が付着加工痕のある赤間石

被熱による赤変

「×」状の刻印

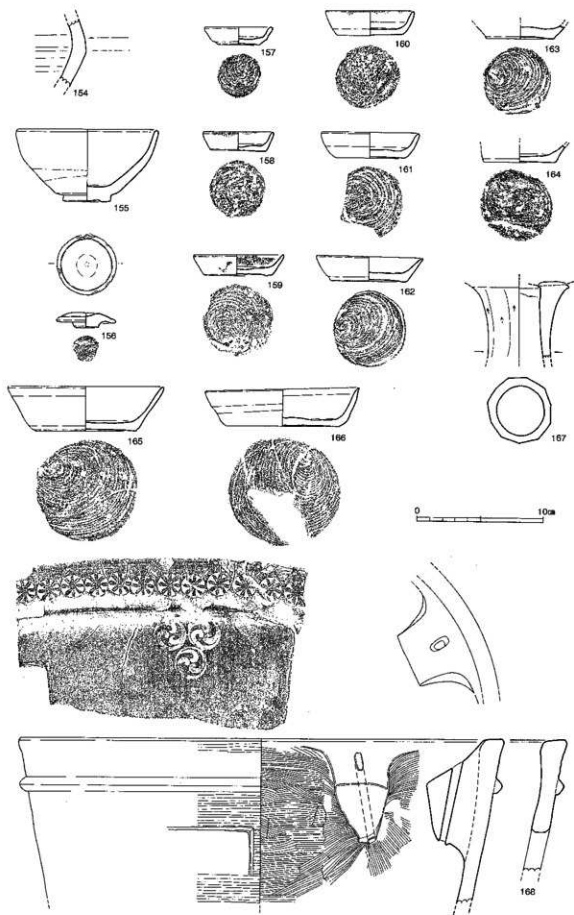
行基瓦

被熱による赤変成形台の痕跡円形竹管状刺突

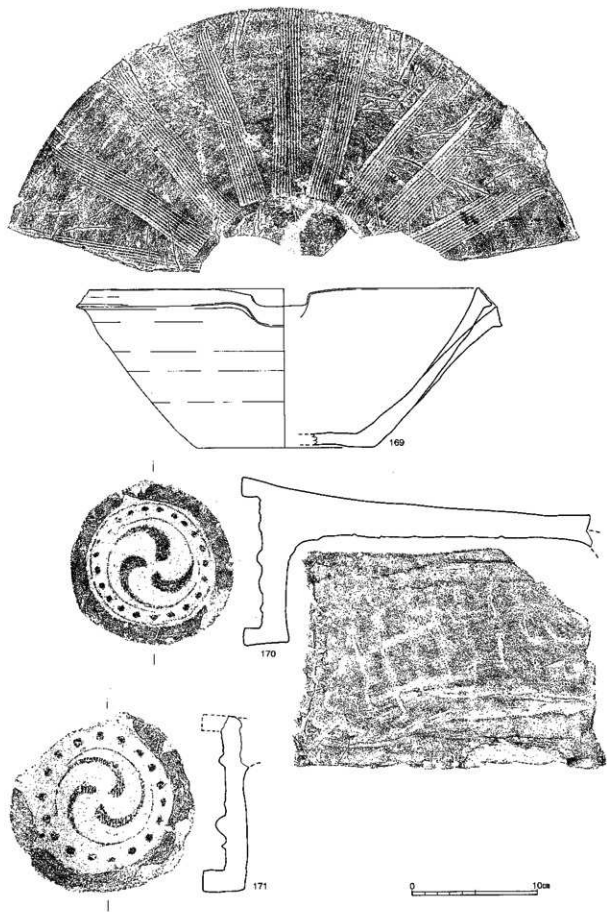
糸巻形の刻印

鑿状工具の連続的な整形痕

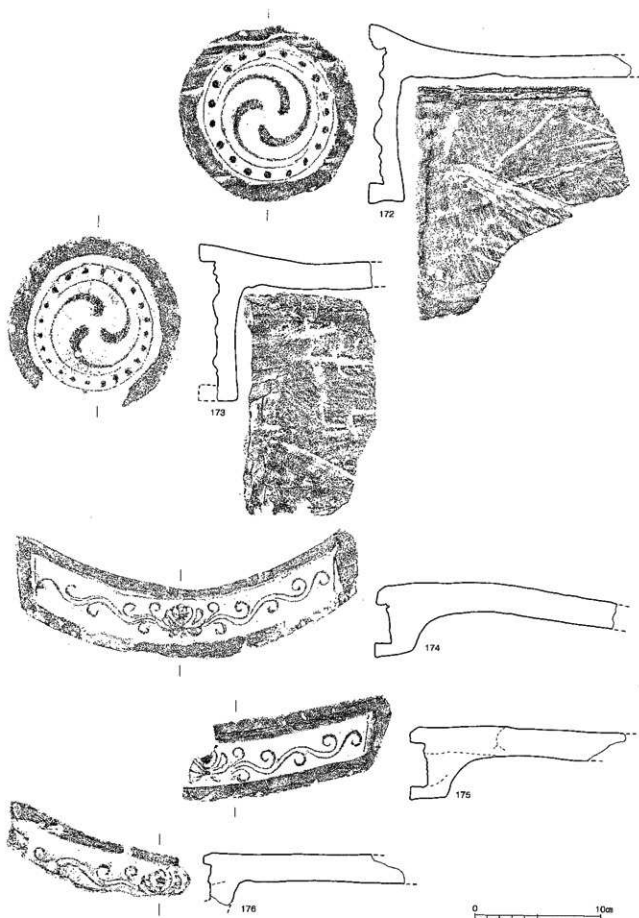
下層出土中国産天目碗



第3-232図 06-SK097下層出土遺物実測図① (1/3)



第3-233図 O6-SK097下層出土遺物実測図② (1/3)

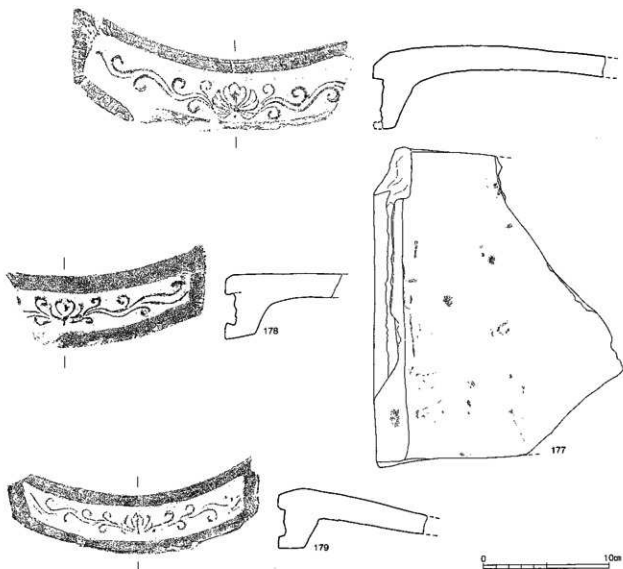


第3-234図 06-SK097下層出土遺物実測図② (1/3)

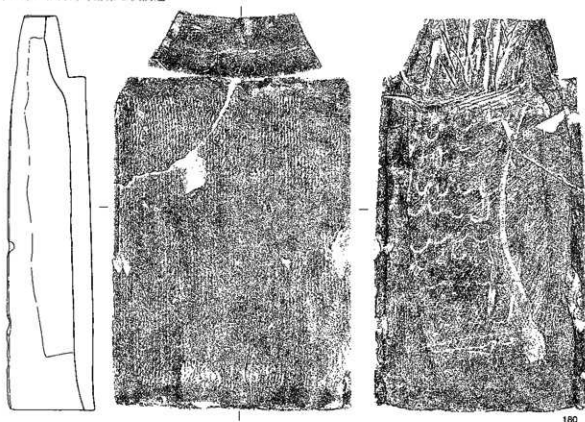
巴部に范傷
瓦当上部に
范傷

赤色顔料の
痕跡

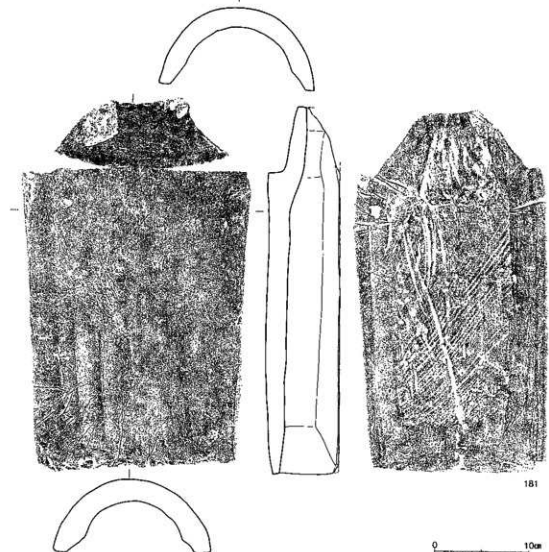
22点、172は19点、171は18点である。171は外区の圏線を持たず、巴部に范傷が残る。172は瓦当上部に范傷が認められる。170・173は被熱による赤変が著しい。174～179は軒平瓦で、瓦当面に蓮華唐草文を施す。174・176は被熱により赤変する。177は凸面に点々と赤色顔料の痕跡が認められる。178・179は唐草文の末端部が途切れている。180～195は丸瓦である。180は大型の丸瓦で、凸面に縄目タタキ、凹面に布目痕とコビキ痕、湾曲の小さい多条の吊紐痕が残る。181～191は180よりやや小さいが大型のもので、181～183は凹面に布目痕とコビキ痕が残る。184は布目痕とコビキ痕とともに湾曲の大きい吊紐痕が残る。185～191はコビキ痕がないもので、185～190は湾曲の小さい多条の吊紐痕、191は湾曲の大きい吊紐痕が残る。186・190・191は色調が赤く変色している。192～195は小振りの丸瓦である。192・193は布目痕とコビキ痕、湾曲の小さい吊紐痕が残る。194・195はコビキ痕がなく、吊紐痕は194は小さく、195は大きいタイプである。196～202は平瓦で、196～200は大型、201・202は小型のタイプである。198は被熱により赤く変色する。200は下端部に円形竹管状刺突を施す。



第3-235図 06-SK097下層出土遺物実測図④(1/3)



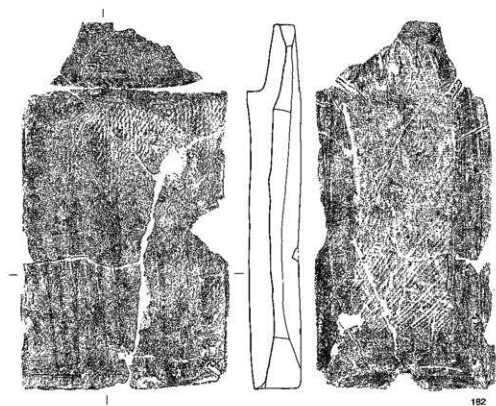
160



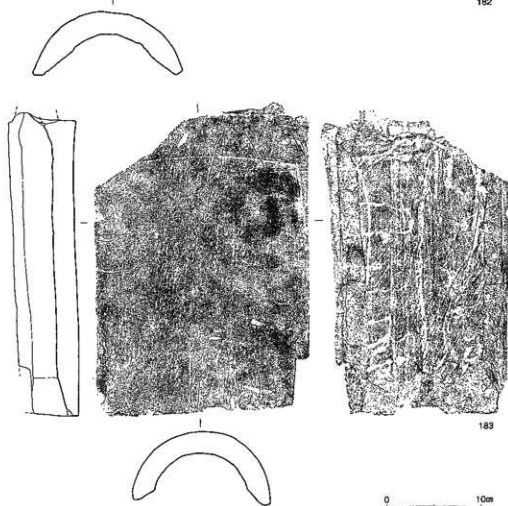
181

第3-236図 06-SK097下層出土遺物実測図⑤(1/4)





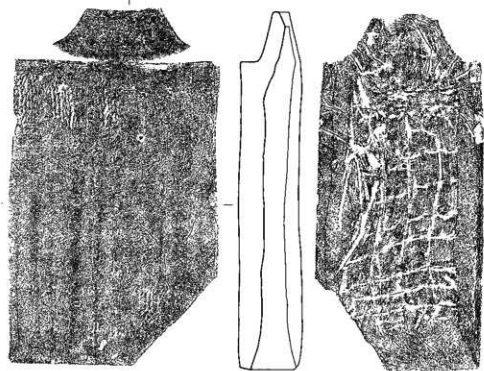
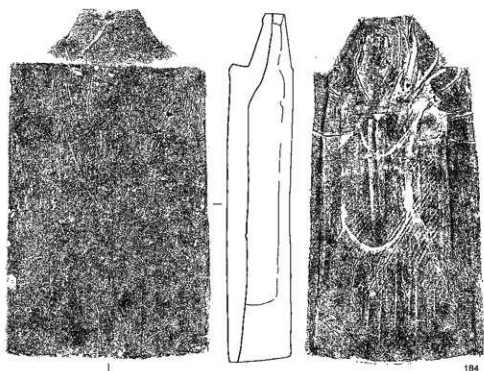
182



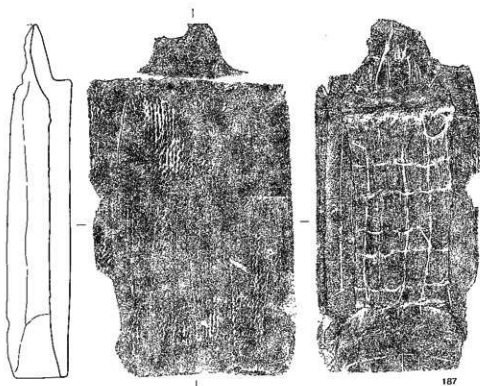
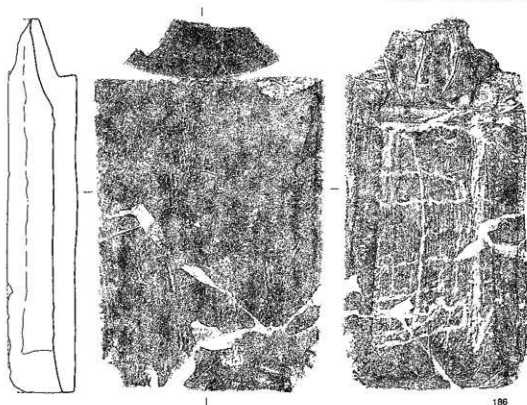
183

0 10cm

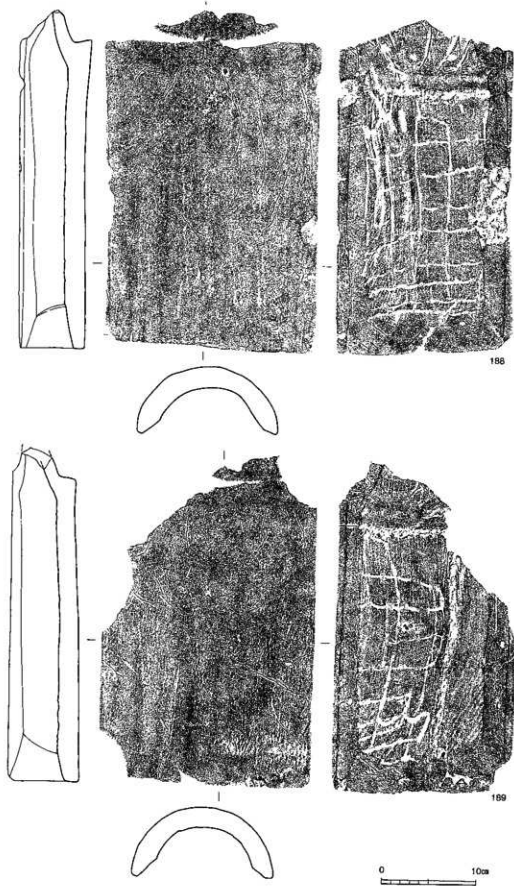
第3-237図 06-SK097下層出土遺物実測図⑧(1/4)



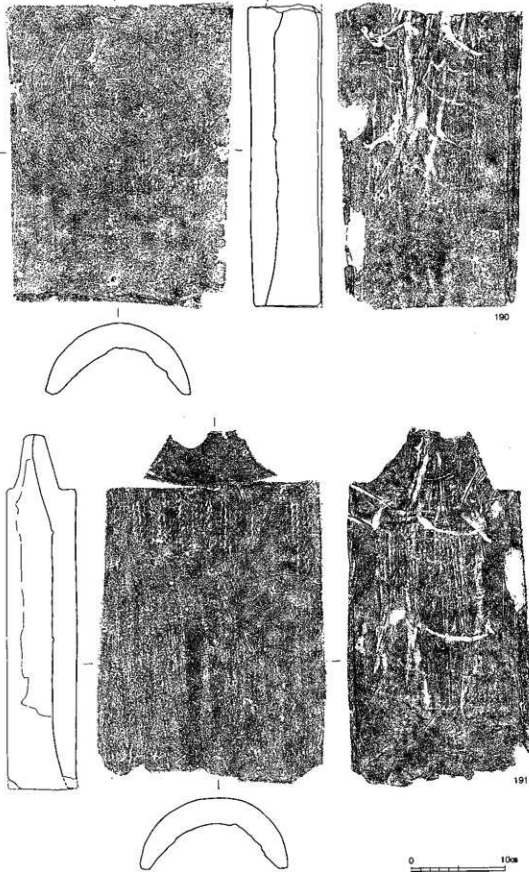
第3-238図 06-SK097下層出土遺物実測図⑦(1/4)



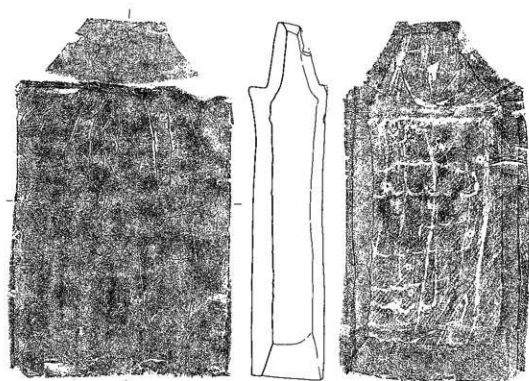
第3-239図 06-SK097下層出土遺物実測図②(1/4)



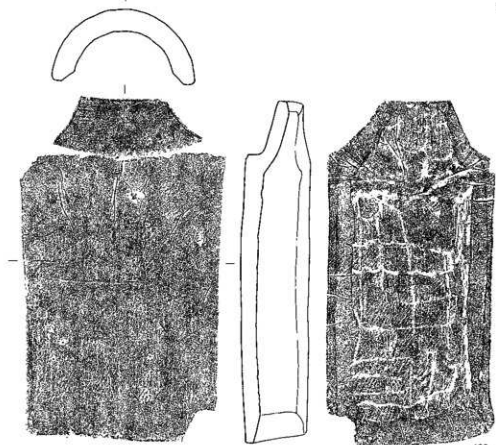
第3-240图 06-SK097下層出土遺物実測図③ (1/4)



第3-241図 O6-SK097下層出土遺物実測図⑥(1/4)



192

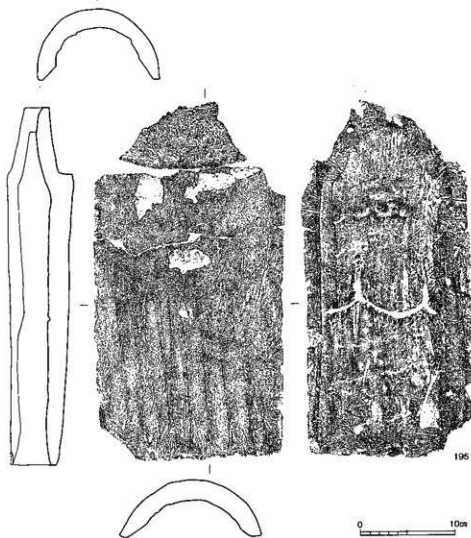
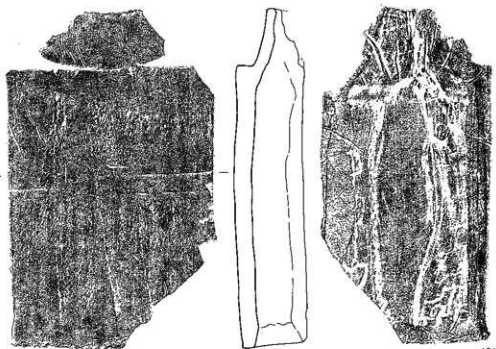


193

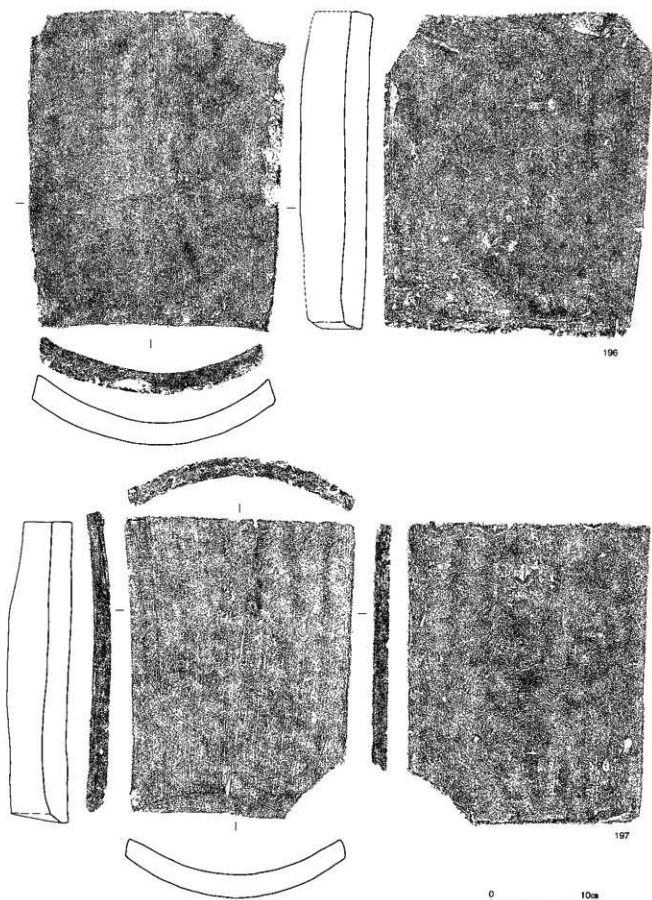


0 10cm

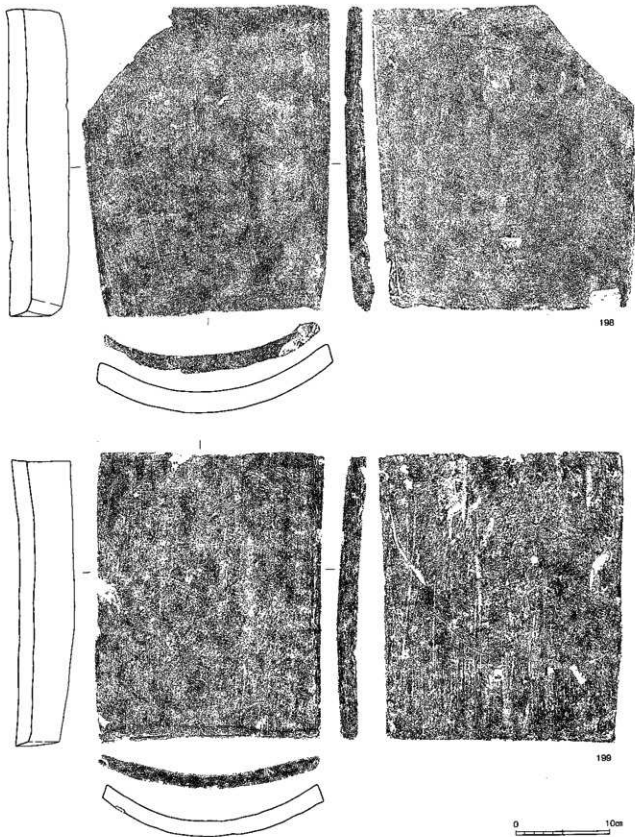
第3-242図 06-SK097下層出土遺物実測図⑩(1/4)



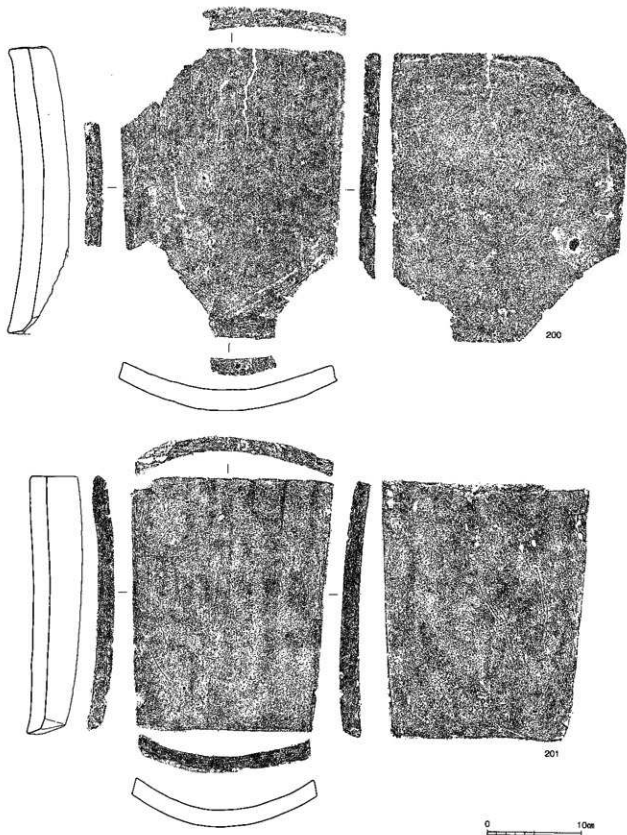
第3-243图 06-SK097下層出土遺物実測図⑬(1/4)



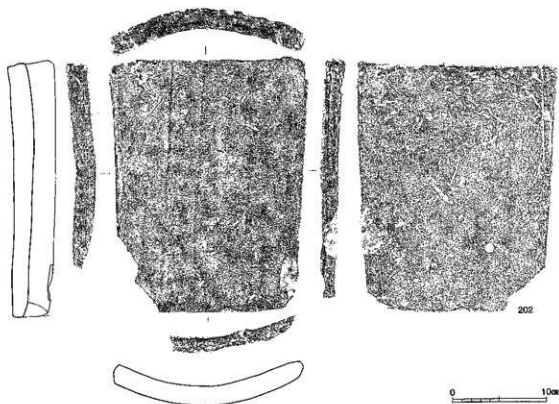
第3-244図 06-SK097下層出土遺物実測図③ (1/4)



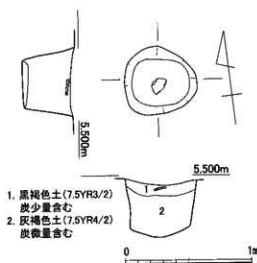
第3-245図 06-SK097下層出土遺物実測図③(1/4)



第3-246図 06-SK097下層出土遺物実測図⑤ (1/4)

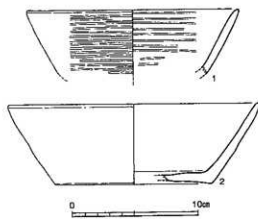


第3-247図 06-SK097下層出土遺物実測図⑧(1/4)



- 1. 黒褐色土(7.5YR3/2)
炭少量含む
- 2. 灰褐色土(7.5YR4/2)
炭微量含む

第3-248図 06-SK120実測図(1/30)



第3-249図 06-SK120出土遺物実測図(1/3)

06-SK120 (第3-248図)

2区のO61グリッドで検出した土坑である。平面形状は略円形で、長径0.58m、短径0.54m、深さ0.40mを測る。瓶土は2層に分層でき、いずれも炭を含む。遺物は古代の土器や中世の瓦質土器等が出土している。遺構の詳細な年代は明らかにできないが、06-SD165堀没後の遺構であり、それよりは後出する。